

---

# 水晶のむこうがわ - 赤銅がもたらすもの -

斎藤一之助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水晶のむこうがわ - 赤銅がもたらすもの -

### 【Nコード】

N9494G

### 【作者名】

斎藤一之助

### 【あらすじ】

多種多様の民族が混在するゴンドランド連邦……。兵部省に所属する諜報工作員のレオンは、贋金の調査を引き受ける。一方、内務省のグードは、組織犯罪である幻惑草の密売組織を追っていた。贋金と幻惑草。全く関係のない二つの事件には、とある共通する手がかりがあつて……。

## 第一章 光と闇の狭間（前書き）

一般に認知されているファンタジーの世界を、リアルに表現してみたいと思って書きました。

## 第一章 光と闇の狭間

### 第一章 光と闇の狭間

断られるのを承知のうえで、レオンは、通りすがりの酔客に施しを乞うた。

救民院にでも行け、と言い放たれた。当然だった。男はまだ、飲み足りない顔をしている。手に爪竿を持ち、籠を背負っているところを見ると、ゴミ拾い屋に違いない。

酒場の灯が落ちるには、まだすこし時間があった。あつかましい物乞いに金をやるぐらいなら、とどめの寝酒を飲むのに使うだろう。夜気で酔いがさめる前に共同小屋に戻り、きつく張られたロープを枕がわりにして、つかの間の仮眠をとりたいと考えているはずだ。明け方には、まっとうな縄張りを持つ顔役が来て、価値のありそうなゴミのすべてを荷馬車に積んでいってしまう。

それでも、食い下がった。金が目的ではない。横向きになれば、自然なかたちで後ろをうかがえる。罵声を聞き流しながら横目を使うと、伸びていた影が視界をよぎった気がした。

用は済んだ。丁寧に頭をさげて詫び、再び杖にすがるようにして歩き始める。

二度、右に曲がった。大通りから路地裏に入る。硫黄と薪の照明も、まばらになった。

正反対へと進む方向を変えても、後ろの気配は消えない。曲がるときに確認してみたが、影を見つけることは出来なかった。どうやら相手は、建物の陰や無造作に置かれた空き樽をうまく使って、見つからず見失うことがない、ほどよい間隔を開けてきているらしい。

雲を柔らかくまとった月が、先ほどまで降っていた雨とともに、石造りの街並みに鈍色の艶を与えている。軒下の魔獣をかたどった

吐水口から落ちてきた水滴が、土に汚れた右手首を穿った。

ふいに、水溜りで滑ったふりをしてみる。胸までの高さがある杖に体を預け、歩調を乱した。足の悪い物乞いならではの所作だった。いま歩いている路地裏はゆるやかな下りになっていて、大通りのように滑り止めの木灰が撒かれていない。

ほんのわずかだけ、足音がずれて聞こえた。やはり追跡者はいた、とレオンは確信した。こちらの足元を見たうえで、歩調をあわせてきている。

全身を見るのは素人のすることだ。簡単には替えられない革のサングダルとは違って、頭から全身を覆うローブは、ただ脱ぐだけで追跡の手がかりを容易に消せる。

たとえ後姿を見られたとしても、心配する必要はなかった。黒髪は特に珍しくもないし、背丈も人並みよりはやや高いぐらいだ。下に着込んでいる麻の服も、色はかすれ、薄汚れてはいるがごく普通のものだった。革鎧でも、鎖鎧でもない。

レオンは咳き込むふりをして、徐々に呼吸を整えた。冷たい夜気が体に入ると、心が落ち着き、頭が冴えてくるような気がする。もつとも、ただの気のせいかもしれない。路地裏独特のすえた空気があたりには漂っていて、新鮮とはとても言いがたい。

相手は、基本を忠実に踏まえながら追跡してきている。いくら物騒な世の中でも、物乞いを追う酔狂な盗賊などいない。こちらの正体もあるていど値踏みしたうえでの行動だろう。

再び引きずるように歩き始めた。足音が、少し大きくなったように聞こえた。

三人の男たちが、行き先を遮っていた。両脇の人間が、意味ありげにうなずきあっている。

蓋のない排水溝からあふれ出した水が、流木を寄せ集めて作った建物が並ぶ通路へと流れ込んでいた。奥には照明が全くなく、量感のありそうな暗闇が張られている。

貧民窟の手前だった。中に入られると、面倒なことになる。だか

ら仕方なく出てきたのだろう、とレオンは察した。

足が悪いと思わせているので、観察する余裕があった。雨水で流されてきた残飯と、拾い屋が選り捨てたボロ布とを避け、足をいたわるようによそおって前へと進んだ。

中央の大男を固めるように、両脇に二人の男が立っていた。顔は逆光となっていて判然としないが、少し前に訪れた酒場にいた吟遊詩人たちに違いなかった。

くるぶしまで覆う外套を着ている大男に、吟遊詩人らしからぬ特徴があった。短く刈った金髪と角ばった輪郭に、獲物を狙う猛禽類のような鋭い目と、高く鼻梁の張った鼻に幅のある唇が重なる。肩幅が広く、胸板が厚い。軍人が傭兵といった印象を受けていた。

比べて両脇の二人は、赤と黄色の服が派手だと感じたぐらいで、大した特徴は見出せなかった。意図的に個性を消していたような気もした。年齢は、大男と同じ三〇代半ばぐらいか。確か左が笛を、右が弦楽器を奏でていたぐらいしか覚えていない。

相手は四人、と聞いていた。これで全員が揃ったことになる。後ろの人間は、何者かわからない。おそらく、客の一人としてまぎれ込んでいたのだろう。

少し離れて、立ち止まった。無理をして、薄く笑ってみる。心が硬く締まると、動きが鈍くなる。どこかに遊びが必要だった。

「それだ、その笑いだ」

左側の男が咎めるように言った。笛を吹き続けてきたらしく、ひそめた声もよく通った。きつと口笛もうまいに違いない。

「お前、酒場でおれたちが歌っている時に笑ったな。なぜだ。ぜひとも理由を聞きたい」

敵意は感じられなかった。多勢を頼んだ優越感か、声に非難より、好奇の響きがある。

「隅に目立たないようにいたはずなのに、どうしてわかる」

「この稼業を長く続けていると、お客さまの表情には敏感になるの  
な」

お客さま、という言葉に、男は力を込めていた。

「さて、正直に答えてもらおうか。おれたちは笑われるほど、明るく楽しい歌を演じたはずはないが」

右側の男が、レオンの背後をのぞき込むようにしながら言葉を継いだ。音楽院を及第できなかった去勢声楽家を思わせる、上に外れた声だった。濁りもある。

指摘されるまでもなく、聴いたのは悲しい歌だった。課された重税のせいで愛する妻を失った一家が、それをきっかけにしてばらばらに散っていく内容だった。しつかりと韻を踏んでいて、古典詩を思わせる格調の高さが感じられたが、内容ゆえに宮廷や迎賓館では決して歌われることはないものだ。

「罪のない歌で笑うほど、おれは無粋な人間じゃない」  
「つまり、こちら側に問題があると言いたいわけだな」

中央に立つ大男の声は、酒場での歌そのままの、重量感のあるものだった。

酒場で悲しい歌を歌う。それはいい。ゴンドランド連邦政府に対して、不当な扱いを訴えるのもまた罪にはならない。今は、専制君主の時代ではない。領主や行政官に不満があれば、元老院が受け付けてくれる。

問題は、彼らのやり方にあった。

内務省国家保衛局の仕事は、街に潜入して、反乱などの組織犯罪者を摘発することにある。流しの吟遊詩人になりすまして酒場に入り込むのは、酔いのせいで口が軽くなった人々から情報を集めるためであって、手柄欲しさに歌で悲憤慷慨した酔客を、反乱予備軍に仕立て上げて処断するものではない。

後ろから近づく足音で、レオンは返事をしそびれた。

「おい、グード。さっさと引っ張って、それからじっくりと事情を聞けよ。貧民窟で連絡員と接触しようとした反政府勢力の構成員。これなら充分、取調べる理由になる」

グードと呼ばれた大男は、鋭い舌打ちで応えただけだった。しか

し、両脇にいた男たちは呼応するかのように、前に出てきた。

「そうだな。こいつは生意気で責めがいがありそうだ。足が悪いよ  
うだから、そこを責めよう。塩を擦りこんだ鞭で足の甲を打って、  
冷水につける。歌のように、緩急をつけてな」

「あるいは、足の裏を棍棒で打つてもいい。衝撃が頭の先まで届い  
て苦しむし、なにより尋問の跡が残らない」

レオンは二人の言葉を聞きつつ、杖の感触を確かめた。長さにも  
重さにも、頼もしさを感じる。それに、硬い。突くだけではなく、  
撃ち払うこともできる。きれいに入れば、首の骨も折れる。

杖は刃物と違って、いくら使っても折られない限り攻撃力は落ち  
ない。多人数を相手にするには手ごろの得物だった。なによりも相  
手を油断させることができる。足が悪いと思わせておけば、なおさ  
らだった。

さりげなく、手首を回してほぐした。囲まれているだけに、手首  
の返しが必要になってきそうだった。

「みんな、ずいぶんと商売熱心なんだな」

「いいや、尋問なんて所詮遊びさ。ただ真面目にやらなければ、  
面白くないだけだ。もっともおれは前の二人と違って笑われていな  
いから、そこにいるジジイでもいいんだがな」

レオンは、左の小路に目をやった。ふさぐかたちで酔いつぶれて  
いる小男の服には、見覚えがある。先ほどいた酒場で、夜盗に襲わ  
れて足を悪くしたと説明すると、しわだらけの顔に悲しみの色を浮  
かべながら、なけなしの銅貨を握らせてくれた老人だった。訊けば、  
歌のように重税のせいで生き別れになった孫に似ているらしい。

拳を包んだ指は鶏の足のよう痩せていたが、熱いぐらいに力が  
こもっていた。手にした酒盃が震えていたのは、酒毒のせいだけで  
はなさそうだった。

憐れまれることは、物乞いを演じるぐらい嫌だった。しかし任務  
とあれば、できるかぎり自分を殺し、淡々と遂行するだけだった。  
向こうも、同じ考えだろう。

不意に踏み出す足音がした。後ろ。振り返らず、そのまま杖で突く。重い手ごたえがあり、うめき声が出た。一瞬遅れて、怒気を含んだうなり声が増える。二人が一斉に間合いを詰めてきた。手首を返して杖を振り、上段に構えなおす。風を切る音が牽制となり、静寂が戻った。

「ほう、杖術を使うか。ならば、隙を作らせて取り押さえようとするのは無駄だったな」

グードは、感心したふうに背を反らせた。まわりを見下しているようにも感じた。

二人の男は視線を交し合って、無言で動きだした。それぞれがこちらの死角を求めるように、すり足で左右に回り込もうとする。

右手で杖の先端を握り、左手を腹に添えた。杖を差し上げ、石突きをグードのみぞおちに重なるように構える。これなら、正面と左右からの襲撃をさばける。後ろには一拍遅れるが、先ほどの手ごたえからして、さほど心配することはないように思えた。

後ろから、唾を吐いて立ち上がる気配がした。

「杖術って、てめえ、魔法使いか！」

「さあてな。それこそ尋問して訊いてみたらどうだ」

「ふん、笑わせる。魔法使いと物乞いと、どこが違うんだ。現にボロボロを身にまとして、杖を片手に街中を徘徊しているだろうが」

レオンは唇を噛んだ。腹立ちまぎれの言葉だろうが、侮辱には違いない。

「お前、兵部省の人間だな。こういった荒っぽい仕事をする魔法使いは、内務省にはいないはずだ。もっとも薄汚いネズミは、どこにでも入り込むだろうが」

「省の縄張りを越えてやってきたってことは、我々が国益を損なうと判断されたのかもな。こいつは困ったことになった」

ささやき交わす言葉とは裏腹に、前の二人は落ち着いたようすで、懐から楽器を取り出した。それぞれほどき始める。

左の男は笛から小刀を抜いた。鼻の下でこする仕草は、塗った薬

の加減を確かめているからだろう。毒か、しびれ薬かまではわからない。

右の男は手琴の弦を両手に握った。張ると高い音がした。一瞬だけ輝いて、闇に消える。細くて丈夫な弦は、首を絞めるだけでなく、挽き切ることもできそうだった。

再び杖の握りを確かめた。指と手のひらに吸い付く滑らかさが心地よい。

後ろからも殺気が這い寄ってくる。砂を噛む靴音と木の音がした。得物はやはり暗器のようだ。間合いを詰めてくるところをみると、飛び道具ではなさそうだ。少し、気が楽になる。

耳は後方に、目は前方に意識を集中させる。正面にいるグードは、動かなかった。両腕を外套の中で組み、見物の構えを示している。ひとまず助かった、とレオンは思った。

杖を構えなおそうとしたとき、重い衝撃があった。左手の親指に疼痛が走る。目を凝らすと杖の先端近くに、鉤が食い込んでいるのがわかった。細い鎖が左から伸びている。目をやると、老いた小男の姿があった。腰を落とし、両手で鎖をしっかりと握りしめている。

「なんだ、ジジイ。余計な手出しをするな！」

「もたついていると、警備隊がやってくるぞえ。いくら役目とて、痛くもない腹を探られるのは嫌じゃろう」

「あんた、こいつらの仲間だったのか？」

レオンの問いに、小男はしゃっくりを混ぜたような乾いた笑いで応えた。抜け落ちた歯の隙間からよだれが流れ、だらしなく開いた唇を濡らしている。路地から出て、月明かりに照らされた顔の半面は、待ちに待った出番を心底喜んでいるふうに見受けられた。

「この齢になって動くことはどうも辛いのだが、こいつらではちと持て余すようじゃったからな。やれ、やれ。最近の若い者は、満足に人を絡めとることもできん。嘆かわしいことじゃて。ま、だからこそわしのようなコボルト族にも、出世の機会ができるわけじゃがな」

意外にも、若い声だった。力もある。レオンは杖を引いたが、鎖が軽く鳴っただけで自由にならなかった。腕は細いが、芯が入っていきそうだった。

「物乞いに化けているだけだと、すでに酒場で見抜いておったよ。変装は見事じゃったが、爪の中まで汚しておかなかったのが痛いところじゃわい。ケチな作業員など、ここの四人にまかせておけばいいとはじめは思ったのじゃがな。こうもあからさまに物乞い稼業を侮られると、さすがに目の前で小言のひとつも言っちゃりたくなつてのう」

「爪以外にも、違うところがあるのか？」

「その目じゃよ」

酔いとは無縁の冷たい口調だった。力は込められたままだ。

「人の情けにすがって、猫の反吐なみの粥をすすって生きてくると、どろんとした痰のような目になってくるものじゃ。ところがお主は違う。黒い瞳が語っておるわ。おれは人間だ、おれは人間だ、おれはお前たちとは違う、とな。わしのやつかみかもしれんが、まあその点は後でとくと語り合おうしよう。夜は長いからのう」

言葉の端からにじみ出てくる優越感、劣等感の反動だろう、とレオンは読んだ。

コボルト族は、連邦議会である元老院に議員を送れないほどの少数民族である。満足に自分たちの主張を訴える術を持たず、ゆえに旅芸人や物乞いとして生計を立てざるをえない存在だった。国家保衛局にいる理由もなんとなくわかった。いじめられ続けた人間が、さらに弱い立場で抵抗できない人間をいたぶる、ねじれた報復心理といったところだろう。

にじり寄る二人を視界に入れつつ、レオンは訊ねた。こういう手合いは、自尊心をくすぐってやるに限る。張りつめた空気からは隙が生じることはない。

「どうやって老人になりおおせたのか、ぜひとも後学のために聞いておきたい」

「思い切り太つてから、痩せ、皮をたるませる。次に髪と歯を抜く。最後に砂漠で血の小便が出るまで水気を抜けば、枯れた老人の出来上がりというわけじゃよ。本当は馬糞を塗って酒毒におかされているように装いたかつたんじゃが、酒場に入れなくなるからのう。それにしても、簡単じゃろう。じゃが、不思議なことになぜか見習う連中がいらないのじゃ」

自分自身をいじめたものだけが他人をなぶる資格がある。そう言っているように聞こえた。血色が悪く、よだれにまみれてうごめく唇は、腹を空かせたヒルそのものだ。

「それでどうするね、お若いの。杖を使えなければこの窮地を切り抜けられまい。それとも得意の魔法とやらを使うかね。少しくらいなら、待ってやってもいいがのう」

たしかに窮地だった。逃げ道はなく、鎖で杖が封じられている。杖を使うには、左の小男を倒さねばならなかった。しかし、笛男がこちらの動きを読んでいるようだった。すでに、間に割り込める位置に寄ってきている。いきなり左に飛んだら、小刀で間違いなく刺される。

打つ手はあったが、少し間が欲しかった。小男の好意に甘える必要がある。

レオンは黙って、懐から革袋を取り出した。右手で二度、三度と空中に放り、大量の貨幣が入っていることを知らせる。固く張りつめていたはずの空気が、緩んだように思えた。

「おいおい、お若いの。なにも芸も見せぬうちから、金を返すことはなかるうに」

「そう言うな。ただの物乞いなら、工作費などいららないだろう。それが自然だ」

「その通り。金を渡しておいて、大声で警備隊を呼ぶわけでもあるまい。物乞いの戯言と思われるだけだからな。だから大人しく杖を捨てな。優しく言っているうちに」

懐を探る手間が省ける、といったたようすで、前の二人は笑った。

金銭に媚びを売る調子ではなく、冷酷な決断を下し続けてきた人間によく見られる、低く轟く、遠雷のような笑声だった。間に拷問が入るだけで、こちらを生かしておくつもりはない、とレオンは悟った。

闇に潜りたがる人間と、光で照らし出そうとする人間との間合いは、必然的に血なまぐさくなる。

グードが、組んだ手をほどいた。軽く後ろを見て、向き直った。

「みんな、袋を見ている。後ろが貧民窟だということを忘れるな。ばら撒かれたら、逃げ出す隙が出来るぞ」

「余計な心配をするなよ、グード。それならそれで楽しみが増えるだけだ。なあ、ジジイ」

「ああ、このあいだの尋問は楽しかったわい。これが痛みを分かち合う喜び、というものなのかのう。人助けでもあったわけじゃ。固焼きのパンさえも買えないのなら、余計な歯などはいらんじやろうからの。ここらで大量の食糧を買い込む人間は、誰かを匿っていると疑われても仕方がなからうて」

レオンは嘆息した。もはや救いようがなかった。ここで悔い改めよとは、死ねと宣告するに等しい。金銭や快樂のために、多くの罪無き人を謀反人に仕立て上げて処断してきている。たとえ正気に戻ったとしても、犯した罪の重さに耐えかねて自ら死を選ぶか、もしくは再びどす黒い狂気の世界に沈んでいくしかない。

互いに、もう戻れないところにいる。

「もう、そのぐらいでよからう。いくぞ！」

奥で、グードが外套を払った。裾から長剣がのぞく。柄に手をやる前に、レオンは、革袋を前に放った。大きな弧を描いて、身構える二人の頭の上を抜ける。視線が、上に集まった。

隙ができた。

逆手で抜く。剣がきらめく。後ろに飛び、剣先を突き立てる。手ごたえ。歯を食いしばる。左腕に力を込めて引き、驚く小男の体勢を崩した。脇の下から左へ剣を刺しこむ。鋭く短い悲鳴。鎖が緩ん

だ。前に飛び、剣をすくい上げる。首筋。右に飛び、手首を返して再び首筋。

短い間のあと、四人は崩れ落ちた。月を孕んだ水溜りが、軽く揺れた。

顔を上げると、グードはまだそこに立っていた。あつけにとられたようすではない。放った革袋をもてあそんでいるところに、見世物を見たといった余裕さえうかがえた。

「最近の魔法使いは、麦や豆だけでなく、刃物まで杖に仕込んでくるらしい。けなされたときの表情からして、この仕事に誇りを持っているようだが、暗器に頼るとはあまり褒められた振る舞いではないな」

レオンは再び剣を構えなおし、新たな標的に狙いを定めた。

「冗談にしか聞こえないのは、あんたの不徳だな」

「むろん、冗談だ。そう怒るな。魔法が使えないのであれば、ああするより仕方がなかるう」

魔法使いが魔法を使えなくなつて、すでに長い年月が経っていた。失つた原因は、いくら調べてもわからない。歴史書を見ても、手がかりはつかめなかつた。欠損した巻物は、連邦が成立するまでの長い戦乱のせいで、焼失したものとされている。

魔法を失う以前の地位がどういったものかはわからないが、相当高い地位を占めていたように思われた。古代での杖は、背もたれのある椅子とともに、権力の象徴だったはずだ。杖を持ち、玉座に座る王の姿が、壁画にも描かれている。

ひとついえることは、今の魔法使いが、こういつた悪徳役人相手の汚れ仕事を引き受けざるを得なくなつていているという事実だけだった。

「なるほど、すべてにおいて理にかなつた行動ではある。標的は変装しているから、挑発しておびき出さねばならなかつた。爪を汚さなかつたのも故意だろう。人目につかず、飛び道具の使いにくい路地裏に誘い出して囲ませる。そして四人を一瞬で屠り去つた」

国家保衛局の人間であれば、正体を知られては困るはずだ。しかし、革袋を弄ぶ手には、闘志が感じられなかった。刺客を返り討ちにする気がないのか、それとも四人と同じように、優越感を抱えての会話を楽しみたいのか。まったく見当がつかなかった。

目の前にいるはずなのに、遠く感じた。石畳に落ちる建物の陰が、間合いに断崖を作っているかのようだ。

「計算どおりに進んでいたはずなのに、誤算が生じた。余計な一人がいて、その構えで立ち向かわざるを得なくなったことだ。違うか？」

問われるまでもなかった。右手の剣は杖に仕込むために打たれたもので、速く振れるが細くて折れやすい。柔らかい腹と首筋を斬つたのは、できるかぎり刃こぼれを防ぐためだが、骨まで断ち割る威力が期待できなかったからでもある。もしそのまま立ち合った場合、剣ごと真つ二つにされるかもしれない。グードの剣と体には、その迫力がある。

また、剣先が肘に向かう逆手の構えでもあった。後ろを片付けるためにやむなく抜いたが、本来は守りの型だった。半分となった杖を鞘の代わりにして、右手の剣と体全体で卵のように構え、敵が踏み込んでくるのを待つのが定法だった。こちらから斬り込むには素早い足捌きが必要になるが、足場が悪い。石畳の上に、広がりつつある水溜りと、障害物がある。

算段がないわけではない。確かに身にまとったローブは敏捷性をそぐだるうが、グードも得物を覆い隠すだけの長い外套を羽織っている。条件はほぼ互角といえた。さらに斬りかかってくるには、邪魔な革袋を捨てる必要があった。隙は、柄に手をかけた瞬間に生まれる。先に手首を狙い、振り抜きつつすくい上げるように首筋を狙えば、勝てるに違いない。

外套を左肘でまくっている。長剣の柄を切った痕跡が認められた。元々は両手剣だったのかもしれない。柄が長ければ斬り合いには有利だが、片手で使うのであれば、少しでも短いほうが振り抜きやす

くなる。抜き打ちに自信があるらしいが、速さではこちらが勝る。柄の位置に意識を集めながら、相手の全身をとらえる。視界の広さには自信があった。くもの巢の中心を日々見つめ続けて得た技だった。

視野を広げたぶんだけ、闇もまた広がった。外套が溶け込んでいく気がする。

覚悟を決めた。左足を滑らせて、間合いを詰める。グードは合わせるように右足を引いた。誘ったか、とレオンは思った。しかし、違った。手にしていた革袋をしまいこみ、身を翻すそぶりを見せた。外套が膨らみ、ゆっくりと萎んだ。

「何の真似だ、グードとやら。闘わずに逃げる気か」

「小用を思い出した。これは歌の代金として貰っていく。物乞いではないのなら、ただで歌を聞かせる理由はない」

一瞬だが、気が抜けた。革袋のように、弄ばれている。ふざけるな、とレオンは怒鳴りたい気持ち、かるうじてこらえた。騒げば、人が集まってくる。

グードは置かれた立場の変化を、巧妙に利用してきている。警備隊の巡回の時間が迫ってきていた。ローブについたはずの染みが、警備隊を敵側に追いやった。

「仲間がやられたのに、見捨てて逃げる気か」

言いつつ、踏み込む。右へ飛んだ。

外套が視界を覆った。風がきて晴れた。青白い輝きがあった。右首に向かってくる。両手剣のはずなのに、速い。回避できない。受けても折られる。

斬られた。そう思って、目を閉じる。しかし、痛みはない。目を開けると、首筋に刃が当てられていた。冷たいはずなのに、感じなかった。なのに、歯が震えた。

格が違いすぎる、とレオンははっきりとわかった。速く抜くだけならまだしも、寸前で止めるには相当な臂力が必要になる。

「相手に攻撃の意図を悟らせないのは、剣術の基本だ。視線を固定

すれば、狙いを読まれ、逆につけ込まれる。よく覚えておけ」

グードはゆっくりと向き直った。闇に、全身が覆われている。剣の根元だけが、青白い光を放っていた。喉が鳴った。

「杖に戻して、地面に置け」

応じると、足で払われた。杖は軽やかな音を立てて、壁際まで滑っていった。

「黙って消えようと思ったが、気が変わった。せつかく剣を抜いたことだし、いくつか質問させてもらおうか」

驚くほど冷たい声だった。好奇心の響きが消え、この場の支配者が持ちつる酷薄さがにじみ出ていた。首筋に、床屋とは違う刃の感触が走る。剣の腹が肩に押し付けられた。促されるままに、ひざまずいた。口が渴く。

剣先でローブの覆いを、剥ぎ取られた。耳に布が触れ、肩に落ちた。

「いい面構えだが、女のような甘さがあるな。齢は二十二、三といったところか」

吟遊詩人として多くの酒場を回っているのだろう。人を鑑別する目はあるようだ。目があった。

名前は正直に答えた。もっともレオンは本名ではない。諜報に携わる人間は、退役するまで本名は実家に置いてくるのがふつうだった。こちらが死んでも実体を明かさないことは、内務省の人間なら当然知っているはずだ。いわば軽い挨拶のようなものだろう。

「なぜ、こんな汚れ仕事をしている？」

「魔法使いだからだ」

「答えになってない。訊きたいのは、志願した動機だ。多くの魔法使いのように、市井の民として平穩に暮らすことも出来たらうに、よりによって兵部省に所属して飛び回っているのはなぜだ？」

レオンは、正直に話すことにした。抵抗ができないのなら、隙ができるのを待つしかない。時間は欲しいが、限られている。

そこそこ揃った足音が、聞こえてきた。周囲が石だらけなので、

距離はよくわからない。

「本当は、歴史学者を目指していた。純粹に、魔法が使えなくなった理由が知りたかったからだ。だが、無駄だった。本はおるか巻物にも粘土板にも、魔法使いの記述はなかった。諜報部に志願したのは、全世界を知るためだ。見る世界を広げて人と交わっていけば、あるいはいつか、失われた魔法を取り戻せるかもしれない」

ふん、とグードは鼻を鳴らした。四人組とは違う意味で、軽蔑しているようだった。

「好奇心で魔法を探すとは、またずいぶんと利己的な言いぶんだな。魔法が失われ、魔法使いの権威が地に堕ちているのは、人が必要としなくなったからじゃないのか。あるいはあまりの威力の強大さゆえに、このままだと世界を滅ぼしかねない、と魔法使い自身が封印したとも考えられる。どのみち、魔法を見つけても、人間の得にはならん。余計なことをするな」

「魔法使いが魔法使いとして生きていつて、なにが悪い」

「悪くはない。ただ、過去にしがみついている人間には、未来を語る資格はないと言っているだけだ。この四人組とて、専制君主の時代ならば能吏と評価されたはずだ。しかし、栄光を取り戻そうとして滅びるはめになった。おれはそう思っている」

背中がしびれてきた。全身の血が、波のように押し寄せ、引いていくのが肌でわかる。

頼みの杖は、はるか遠くにあつた。しかし、戦うしかない。こちらの正体を知ったグードを逃がすわけにはいかない。

いま踏み込めば死ぬ。かといって踏み込まねば、警備隊がくるかもしれない。

首に麻縄をかけられた気持ちだった。心も体も、完全に縛られていた。

落ち着け、とレオンは自分に言い聞かせた。息を深く吸い込んで、ゆっくりと吐いた。体が少し楽になった。

ふと、気がついた。杖がなくても、暗器がある。幸いなことに、

笛から抜かれた小刀は、左側に落ちている。隙を見て転がれば、投げつけられる位置にある。

覚悟を決めたとき、押さえつけていた力が緩んだ。グードは剣を収め、半身を翻していた。薄い目と精力的でたくましい鼻が、一瞬だけ闇にひらめいた。

「なぜ、斬らない」

「金をもらった以上、貴様は客だ、レオン。危害を加える理由は無い」

反論を言う間を、グードは与えてくれなかった。

「逃げ道を教えてやろう。川沿いをゆつくりと歩いていけ。調べたところ警備は手薄だし、匂いもいくぶんかはごまかせる。あくまでもゆつくりだぞ。目撃者を無用に作るな」

自分の命は、革袋の銅貨よりも軽いらしい。大きく息をつくとき、全身の気が抜けた。しかし、助かって嬉しいわけではない。

「おれには殺す価値さえない、ということか」

「すこし違う。今はまだ死ぬ価値はない、といったところだ。貴様はどうやら、頭と努力で問題を克服しようとするたぐいの人間らしい。もう少し苦しめ。甘さがあつて辛辣さが足りないようでは、過去は見られても、未来を探し当てることなどとても無理だぞ」

グードは身を翻して左の小路に消えていった。風が抜けるようだった。

レオンはもう一つ大きな息をついた。逃げられた、と思った。追うのは無駄だった。わざわざ逃げ道を教えるのは、周到な準備をしていたからだろう。こうなったらもはや、警備隊が来る前に黙って歩き去るほかにない。

奥で人の影がゆらめいた。むき出しになった土の上に置かれている、代書屋が机代わりになっていた木箱のあたりだった。目をやるとおびえた感じで頭を沈めた。足音が増えてきたが、襲ってくるようすはない。こちらが逃げるのを待っているかのようだ。目当ては、四人組の持ち物に違いない。少し安心した。警備隊に通報される心

配はなさそうだった。後片付けの心配もしなくてすむ。

ロープを脱ぎ捨てて杖を拾い、グードが消えた小路へと歩き出した。追ったわけではなく、川への近道だからだ。教えられなくても、初めから川沿いに逃げるつもりでいた。

いらぬ恩を着せられた。

闇に翻弄されているように、レオンは感じた。

## 第一章 光と闇の狭間（後書き）

大してうまくもないが捨てるには惜しい、いわゆる「鶏肋小説」ですが、暇があったら読んでみてください。

## 第二章 明日を見抜くもの

### 第二章 明日を見抜くもの

ゴンドランド連邦の首都フォルトファーガは、南大陸の中心部よりやや北に位置する大都市である。街の中央を縦断するかたちで大河が流れ、二つの旧市街を結ぶ大橋を基点とする街道が東西に伸びている交通の要衝でもあった。放射状に街道が伸びていないのは、連合した敵が殺到してこないように工夫されていた動乱時代の名残といえる。

南大陸統一によって、不要になった防壁は取り壊され、水制すいせいに偽装した対水軍防御陣地は埋め立てられて倉庫街となっていた。下流には沃野が広がっているが、水運が発達しているぶんだけ道が少なく、街は横長に発展している。もっとも街の東南に寄っている兵部省の周辺がいまだ閑散としていて、乗合馬車の路線から外れているのは、建物が持つ由来のせいでもあった。

任務を終えて帰還したレオンは、裏門を守る衛視にさりげなく自分の番号を告げ、七宝焼きの首飾りを受け取った。飾り部分の模様が、諜報部員の身分と階級を示している。

これで出入りの料理人の身なりで歩き回っても、余計な誰何を受けずに済んだ。取り囲む外壁は高く、一度入れば外部の人間に正体を見破られるおそれはなかった。

まだ朝方だけあって、演習場から聞こえてくる儀杖兵の点呼の声には張りがあった。薬草園からは、湿っぽく青臭い匂いが漂っている。

兵部省本館は、焼きレンガ造りの堅牢な建物である。王政時代の監獄を改造したものだだったが、地上部分は貴族が収監されていただけあって、部分的には瀟洒な雰囲気すら漂っていた。

行き先の資料部統計調査室は、表玄関から見て一番奥の部屋に置

かかっている。言い換えれば、裏門にもつとも近い場所にあたる。同じような活動をしている戦略情報部や情報分析部は表玄関近くの二階に置かれているので、間借りをしているような錯覚にとらわれることもあった。

「ノックぐらいしたらどうなんだ、レオン？」

ドアを開けるとすぐ、統計調査室長のバルラムから叱責された。近づく足音で判断しているようだった。杖を持っていなくても、足をかすかに引きずってしまう癖がついている。

「誰が来るのかわかっているならいいじゃないか。知らぬ仲でもあるまいし」

レオンは大股で執務机の前まで歩み寄った。部屋は模範囚の独房だったところで、採光は悪くないが、それほど広くはない。もつとも使っているのは一人だし、客をもてなす必要がない部署だから、余計な調度品など邪魔なだけだろう。気難しい陶工が叩き割った皿を思わせる世界地図だけが、くすぶった色合いの壁に貼られている。「ところで内務省の仕事はどうだった？」

「たぶん成功したぞ、親父」

本当はバルラム室長、と呼ばねばならないことになっている。しかし、部外者がいないのに実の父親を仮の名前で呼ぶのも変な気持ちが出た。だからあだ名にもなる親父と呼ぶようにしていた。

頭を剃りあげているので、書類に目を落としていても、眉間にしわが寄るのがわかった。黒い毛虫が動いているようでもある。

「確率で成果を報告するとは、お前らしくないな。いったいどんな賽の投げ方をした？」

バルラムはようやく走らせていた葦のペンを止めた。反応が一呼吸遅れたのは、親父と呼ばれたからではないはずだった。おそらく息子へのねぎらいよりも、職務を優先させようとしたのだろう、とレオンは見てとった。

丸みをおびた顔が上げられた。底光りする黒い瞳が、詳しい説明を促している。普段は陽気で柔和そうな顔をしているぶんだけ、

ふとした拍子に見せる眼光の鋭さがきわだつともいえた。統計資料を探してかび臭い地下を歩く姿は、炎と心の具合によって、酒場の亭主にも悪霊にも見えることだろう。

仕方なく、これまでのいきさつを話した。最後のグードとのやり取りだけは、省いた。とりたてて重要なことでなかったし、気恥ずかしくもあつた。

聞き終えると、バルラムは目をつむつた。太い腕を組んで、頭を前後に振るのは、熟考のしるしだった。しばしの沈黙ののち、厚みのある唇を開く。

「お前が相手を処断するのを監視していたとしか考えられんがな」

「四人と一線を引いていたようだし、それも考えた。しかし、監視するだけなら、陰に隠れて見ていれば済むことだ。わざわざおれの前に出てくることはないだろう。正体を知られて得をすることはないはずだ」

「内務省がわざわざこちらに任務を依頼してきたのは、どうしても自分たちで処断できない微妙な事情があつたからだろうな。もしお前が失敗してことが公になれば、内務省だつて困るに違いない」

「つまり、こういうことか。おれが失敗したとしても、後ろから四人をまとめて斬り捨てることができる。だから流しの吟遊詩人の一味として加わっていたということか。こつちの能力を疑われているのは、はつきりいって心外だが」

レオンは軽く首を振つた。確かに納得できる点はある。全てに余裕ぶつた態度もそうだし、四人を倒したときに感心したのも、手間が省けたからと考えれば変ではない。

グードが新参者だつたから、いきなり名前を明かされたのかもしれない。陰で動く内務省の人間にしては、愚劣きわまりない行動だつたが、悪事に加担させるための狡猾な策略だと考えれば理にかなう。鋭い舌打ちも、逃がさぬとの意図を見抜いてのことかもしれない。

長い外套を着ていたのは、剣を隠すためだと思っていたが、もし

かすると返り血を防ぐためだったとも考えられた。

ただ、違和感があった。杖術を使ったときに初めて魔法使いだと見抜いたところだ。監視するのであれば、刺客の正体ぐらい事前に把握していなければなるまい。

絶対的に優位な体勢にありながら殺して口を封じようとしなかったのは、処断したら自分の不利になると判断したのかもしれない。興味もなさそうな魔法の話題で時間を稼いだのも、警備隊の巡回時間を測り、追跡を断念させるためだったとしか思えない。

グード自身が、何か複雑な事情でも抱えているのだろうか。とにかく、こちらと同じくあまり愉快な立場にいるわけではなさそうだった。

「物乞いとして歩き回っていれば、世の中は水車のようにきれいとだけでは回っていかない、とは嫌でもわかるんだが、それにしても内務省の連中のやりかたはきついな。情のかけらもない」

「人口の半分の道義心は、平均以下に決まっている。役人として例外ではない。それに内務省の方針は、体制の堅持にある。そうだろうか？」

レオンは渋々うなずいた。ゴンドランド連邦は、多くの国が統合されて誕生したものだ。ゆえに、政府の方針は全民族の総意に沿ったものでなければならぬ。効果が薄い最大公約数的な政策であったとしても、決定は常に最善で正しい。少なくとも表向きはそうなっている。間違いがあれば問題ごと消し去り、初めからなかったことにもする。暗殺や粛清も、政治手段の一つと考えているふしがある。

「まあ、この件に関してはひとまず置こう。今度依頼者と会食するときに、それとなく問いただしてみよう」

バルラムはマルマロの葉巻を手に取り、ゆったりした動作で火をつけた。二、三度ふかすと、甘ったるい香りがあたりに漂う。芳香とは言いがたいが、地下で灯される獣脂蠟燭の匂いよりはましだった。

諜報工作員として密林で作戦行動していた時代に、ヒルを焼き落としたり、虫を追い払うために吸っていた習慣が常習化したわけだ。水出した葉の汁は、匂いがきついただけに蛇除けにも使える。

「さて、より大切なもう一つの任務について、報告を聞こうか」

問われたレオンは、一枚の銅貨を机の上に投げた。軽やかな音を立てて統計書類の上を踊り、月桂樹の葉がある面を見せて止まった。眠たげな初代執政官ヴェルデーの横顔が中央にある。

贋金だった。

ゴンドランド連邦の硬貨は、偽造を防ぐために重ね打ち、すなわち二度打刻されている。一枚の金型だけでは決して出せない、独特の文様が浮き上がる貨幣は、良質なうえに信用が高いので、北の大陸でも通用するほどである。

机の上の銅貨は、全体的にぼやけた印象があった。使い込まれているせいだろうか、すでに銅本来の輝きはなく、表面はくすんだ色をしている。しかし、月桂樹の葉と茎をつなぐ線が切れていたり、執政官の瞳が消えかかったりするほど、腐食や磨耗による劣化は起らないはずだった。

縁には削った痕跡があった。悪徳商人が利ざやを抜くためにするごくありふれた手口だが、金貨や銀貨ならともかく、価値の劣る銅貨で重罪をこらむるような危険を冒すとは思えない。何らかの理由でいびつになり、便宜的に丸く形を整えたためと考えるのが自然だろう。

つまり、打刻ではなく程度の低い鑄造によって偽造されたものだと、専門家ではないレオンにもすぐに見抜けた。

「大陸東側の街で手に入れてきた。ようやく一枚だけだけど」

物乞いに成りきったもう一つの理由が、贋金の収集だった。贋金を使うことにためらいがある人間でも、物乞いになら与えられる。

これほど密かに収集するのに適した職業はない。

「物乞いでもなかなか手に入らないとなれば、正貨に比べてそれほど市場に出回ってないと考えられるな。それならまだ、手は打てる

というわけだ」

「しかし贖金の調査は、財務省の贖金対策課の領分だろう。上層部の指示を受けずに僭越な行動をとると、あとで不利な立場に立たされるんじゃないか」

「贖金対策課の出番はない。財務省が黙認すると決めたからだ。変だと思つて、私が独自に統計を念入りに調べてみたところ、おかしな点が見つかった」

「こつちは命を掛けているのに、ずいぶんと暇で、結構なことだ」  
「嫌味を言つな。いくら欺瞞のためとはいえ、統計調査室長は決して閑職などではないぞ。統計表の数字は、いわば占星術師の水晶やカードであり、医者にとつての脈と同じだ。金銭の流れを見れば、連邦全体が抱えている問題がわかる。これを見てみる」

バルラムは引き出しから出した書類を机の上に撒いた。一番上の書類には、商工連盟が発行している商品市場相場が書かれていた。上昇している銅材の値が目に入った。

「そついえば、中央海に出没する海賊を完全に掃討するまで、海域を航行する軍艦と商船の船体を銅板張りとする枢密院勧告が出たばかりだったな。価格の上昇は、元老院で可決されるのを見越しての駆け込み需要の影響だろう。それがどうしたんだ？」

思えば、妙な決定ではあった。船体に銅板を用いるのは、火矢による延焼と、体当たりによる破損を防ぐためだ。しかし、北方大陸では軍事的な緊張が続いていて、どの国も私掠船を差し向けてくる余裕はない。襲撃してくるのは純粋な海賊だけだ。

海賊は、積荷を狙う。粗暴な襲撃をして船を沈めても、利益にならない。

銅板張りにすれば船足が遅くなり、かえつて連中に捕捉されやすくなる。火矢を防ぐだけなら、水で濡らした厚手の布や、獣皮で船体を覆えばすむ。

それに商品の回転が悪くなって経費がかさむ。櫂を使って進むガレー船は軍艦に用いられるほど速度が出るが、船底が浅くて大量の

荷物を運べない。

人件費の問題もある。漕ぎ手は最下層の船員といえども、奴隷のように口にコルクを詰めたうえに、鞭打たせてオールを漕がせるわけにはいかない。といって、軽くてかさばらず値段が高い染料、香料、香味料、毛皮に絹織物のような商品に特化はできない。食料や生活必需品の安定供給は、統治の絶対条件でもある。

枢密院の勧告に従うと、北の大陸の商船には対抗できなくなる。商戦で負ければ税収も落ち込み、不景気を拡大させるだけだった。

どう解釈しても不利は否めない決定を、よくも下したものだと思ひを感じていた。

「歴史の年表ばかりでなく、もう少し数字に敬意を払え、レオン。先物市場の相場を見てみる」

「敬意はともかく、注意は払っているつもりだよ。諜報活動の九割は、公開されている情報の収集だろうし」

歴史も統計も、過去の蓄積に他ならない。過去を知ることにより未来を予測でき、今日から明日への道のりが見えてくる。極論かもしれないが、占星術も統計の一形態に違いない。

あらためて下にあつた先物相場表に目を通した。短期決済ものは急騰していたが、長期ものは値を戻していた。需要と供給の関係で決まる商品相場と違い、先物市場は思惑で動くこともある。市場は冷徹に、世間知らずの元王族や自治領主たちの社交場である枢密院の無能ぶりを非難していた。

「わかつたよ。つまり、元老院で否決される公算が大きいと判断して、先物を売っている人間が多いわけだな」

「そうだ。しかし真の問題は、工芸省が出している鉱山統計と民政省の通信運輸費予算書、それに商工連盟が発行した地域別の食肉価格表にある。一見すると全然関係ないように見える。だが、二十二年もわたしの息子として生きていれば、なにを言いたいかぐらいはわかるだろう？」

レオンは赤線が引かれている部分にさっと目を通し、軽くうなず

いた。通信運輸費予算書に書かれた飼料の数量は、どう解釈しても鉱山局が保有している牛が消費する量より少ない。さらに、農村近くの都市の食肉価格は平均値を明らかに下回っていた。

去勢牛は馬よりも歩みが遅いが、さほど手間がかからないうえに、一度に大量の貨物を運べる。武器や兵糧、それに鉱石などの運搬には欠かせない生き物だった。本来なら躍起になって農村から調達しなければならぬはずの去勢牛が、食肉用に回されていると数字が示していた。

銅の産出量が水増しされているようだった。銅山の廃坑が続いているとは聞いていた。いくら私有化を認めて鉱業を育成する方針を打ち出そうとしても、鉱脈そのものが枯れていたのでは意味がない。銅は戦略物資でもある。割拠する国家が火花を散らしあっている北方大陸からの輸入は、無理な相談だった。

鉱脈が枯れてしまえば、鉱山局の必要はなくなる。だからあらゆる手を使って産出量を保っているかのように見せたかったのだろう。一定量の穀物が必要な馬車馬と違い、牛であれば街道の草を食べさせて経費を削減したと言い逃れられる。産出量の減少を突かれれば、銅鉱石の質の低下が原因と主張すると容易に予想できた。

民間の商工連盟はともかくとして、政府統計を作成する役人たちは、保身のために数字の整合性と連続性を重視する傾向にある。誤謬に対する抗弁が容易になるからだった。だいいち鉱山局の連中が、自分の部署の予算が削減されるような数値を進んで公表するわけがない。

部分を見ると誤る。だから全体的な視野で物事を判断しろ、と見据えてくる瞳は語っていた。

「わかったよ、親父。いずれ銅は供給不足とわかって、価格が暴騰するわけだな。そのとき、先に安値で売っていて、高値で買い戻さなければならぬ投機家たちは大損というわけか」

「数字を軽蔑するような人間が、首に何を巻きつけようとも知ったことではない、と断言できれば、少しは気が晴れるのだがな。投機

家たちが、大なり小なり市場の安定化に貢献しているのは動かしたい事実だ。彼らがいなくなれば、思惑によって相場が動かされかねん。そうなると潤うのは、利益のためなら敵と手を結ぶことを厭わない人間どもだけだ」

紫色のたゆたう煙の向こうに、バルラムの苦々しげな顔があった。どうやら、元老院と枢密院の間に、暗黙の了解があると言いたいようだった。大勢の資産家が手を組めば、相場を操作できる。

「不愉快な話はこれぐらいにして、贖金に話を戻そう」

「財務省が反対するのはこういうことかい。銅材が供給不足で高騰すると、銅貨は造れば造るほど赤字になる。それなら、市中から贖金を強制的に没収して銅貨を造り直したほうが財政的には助かる。掘り出す手間が省ければ、少なくとも赤字にはならない」

論点がずれているような気がしたが、それ以上財務省が捜査に反対する理由が思いつかない。

葉巻が灰皿に置かれた。見上げる眼光が、少し和らいだように思えた。

「思惑があるのは、財務省だけではなさそうだ。工芸省が影で動いているとの噂がある」

「工芸省？　すると舎密（せうみつ化学）開発局の連中かな。どうして、錬金術師の連中がしゃばってくるんだ。鉛から金を生み出せないからって、贖金に手を染めるわけでもないだろうに。まあ、魚くさい人造バターをつくったぐらいの功績では、財務省の機嫌はとれないだろうが」

「黒幕と呼ばれるとは、錬金術師たちもかわいそうなことだ。しかしまあ、工芸省といえば商工組合を統括する立場でもある。そこらへんに問題の本質が潜んでいるのかもしれない。とにかく不介入は、執政官府での最高行政会議で正式に決定したことだ。われらに異論を挟む余地はない」

連邦行政の最高責任者は、元老院議員から選出される執政官である。地位は安定しているものの、大昔の皇帝や国王と違って、絶対

的なものではなかった。

建国の祖ヴェルデーの時代は、すでに歴史の領分になっていた。選出する元老院の掣肘を受ける立場に置かれているうえに、連邦国家ゆえに枢密院の顔色をうかがわねばならない事情もあって、政策はどうしても妥協の産物となりやすかった。連邦議會を構成する両者が牽制しあっているために、柔軟性に欠けるのも問題だ。

それでも暴政よりはましだ、とレオンは思っている。

「しかしな、親父。どうしておれたちが動かなければならないんだ。ただでさえ人員不足で忙しいんだぞ。おれとしては財務省と工芸省さまのご好意に甘えたいぐらいだね。対外活動は若いうちにしかつとまらないとは、よくも言ったものだ」

魔法特別機動捜査隊、通称魔法特機隊には、現在三十名ほどの隊員がいる。しかし全員が揃うことはまずない。

ゴンドランド連邦は寄合国家ゆえの複雑な政治事情によって、通常の軍事行動は制限されることが多い。そこで諜報と特殊工作に長じた魔法特機隊が活躍する余地が生まれていたわけだった。場合によっては、北大陸の動静を調べる任務も受けるかもしれない。並の兵士たちとは違い、紛争中でも平和時でも酷使される。おまけに誰にも感謝をされず、腕のいいこそ泥なみの評判しか得られない。選良とは名ばかりの待遇だった。

名利を求めているわけではないから、別に苦にはならない。しかし、諜報工作員ならではの特徵で、成功した任務は決して表面に出ず、逆に失敗した任務は過大に評価されてしまう。欲を言えば、もう少し認めてもらいたいという気持ちが常にあった。

バルラムは皮肉そうに唇をゆがめてから、あらためて口を開いた。「実は司法省が極秘裏に接触してきたのだ」

「なるほどね。贖金を造るまでは財務省の管轄だが、使用するとなると司法省の領分に入らなければならない。団結した行動がとれないのは、縦割り行政の弊害ってところかな。だからといって、持ちまえの正義感とやらではないだろう？」

「政治力学の世界は、平行四辺形では測れないものだ。この間の財政改革で、連邦司法院の予算が大幅に削減されたことを根に持つてのことかもしれない。連邦の地域司法権は各自治領に与えられているが、贖金造りの実態がわかれば、重大な犯罪として中央政府が堂々と介入できる。財政的な事情があるとはいえ、犯罪を黙認しようとした財務省の失点が自分たち司法省の得点になる、と信じている可能性は否定できまい。ともあれ、わたしは引き受けることにした。われわれに大いなる利益が生まれたわけだからな」

バルラムは、厚みのあるあごを撫でていた。指にはこれでもか、というように金の指輪がはめ込まれている。金の価値は永遠に不変であり、いつまでたっても鉛を金に変えられない錬金術師の無能ぶりを示しているのだ、と悪態をついたためのものだ。

幼稚さを演ずる気持ちはよくわかる。低く見られている立場ゆえに、汚れ仕事を受けざるを得ないわけだが、依頼者には逆に弱みを握られているとも思われている。極秘任務を成功させていくたびに、魔法使いの立場が強まっていくが、それと同時に警戒される原因にもなりえる。

たとえ表面上だけであっても、作らなくてもよい敵をわざわざ作るのは、軍の実権を握るつもりがないことを、単純で嫉妬深い軍や政府上層部に理解させるためだった。

「司法省に貸しを作るのは、確かに大きな利点になるな。それで、兵部省の上層部はどう言っているんだ。勝手に動くのはさすがにまずいだろう」

「やはり黙認だ。手柄を立てれば兵部省の発言力が増す。それに、失敗でもすればこちらを排斥する絶好の機会となるとの思惑があるのだろうな」

兵部省の上層部は、諜報部員全体に対して冷淡だった。ゴンドランド連邦は、南大陸唯一の超大国になっている。小賢しい工作活動などしなくても、実力でねじ伏せられる自信があるからに違いない。連邦政府が掲げる正義には、小細工など似合わないと考えているふ

しもあつた。たとえ助けられたとしても逆に屈辱と受けとる小人は、どこの世界にもいる。

保守的になりがちな軍人たちは、魔法使いに悪意を抱いてさえた。新しい兵器や戦術を導入した場合、改革者に主導権をとられてしまうのを恐れているせいもあるだろう。発見された魔法が、軍事的に有用であるとなれば、軍の抜本的な再編成をする必要に迫られる。

ゴンドランド連邦は数多くの兵士の犠牲によって建国された。だから自分たちだけが平和を維持する資格がある。上層部はそう確信しているらしかった。誇りを持つのは悪いことではないと思うが、別の誇りを抱いている人間もいることぐらいはわかってもらいたい気持ちがある。

「お互いがお互いが必要としているくせに、用済みになれば切り捨てる。実に麗しい人間関係じゃないか。親父も大変だな。いつそのこと、全てを捨てて修道士にでもなつたらどうだい。頭髪に未練がないようにさ」

バルラムは、もう一度だけふかしてから、葉巻をもみ消した。紫色の煙が一筋、まっすぐ天井にのびていく。

「わたしは先祖の活躍を寝物語にして育つた。断じて、魔法使いの血をわたしの代で終わらせるわけにはいかん」

黒い瞳に、先ほどよりも強い光が宿っていた。

ゴンドランド大陸が政治的に統一されるまでの魔法使いの行動は、レオンもよく聞かされていた。何度も繰り返されたので、細部に至るまで覚えている。枕元で聞くにはふさわしくない、諜報と謀略にまみれた話が多かった。

護身用の杖や水晶玉を手に、物乞いや占い師として情報を集めていた男たちはまだいい。

権勢を誇る貴族の館に召使として潜入した女の魔法使いたちは悲惨だった。ホウキを持って広大な庭を掃除したり、大鍋でまかない料理を作ったりして信用を積み重ねていく。政府からのさまざま

指令を遂行するために、何年でもじつと機をうかがい続けることになる。

ときおり「魔女狩り」と称した防諜作戦が行われ、もとより逃げ場のない彼女たちは、凄惨な拷問の末に命を落としていったこともあった、と繰り返し聞かされた。死ぬまで生き続け、情報を収集しなければならぬ諜報部員特有の悲劇といえた。

先祖たちの苦しみは、しっかりと刻み込まれている。せつかく築き上げた地位と信用を手放したくない気持ちは痛いほどわかった。だからといって、髪の毛が抜けるほど苦しまなければならぬことはないはずだ。

親父は業も責務も、なんでもかんでも背負い込みすぎる、とレオンは思った。

もう一つ懸念があった。諜報部員としての魔法使いは、宣教師たちとともに連邦政府が成立する以前から、この政治体制を全力で支えてきた。しかし、連邦政府が完全に正しいという確証はない。いかなる支配制度も必ず腐敗する。歴史は一貫して証明していた。

「なあ、親父。時々思うんだが、おれたちは怪物を創りだそうとしているんじゃないのか」

レオンは、国立古文書図書館で復元された粘土板を読んでいたときのことを思い出していた。怪物は頭、胴、尻尾とも違う動物であり、人を襲うと書かれていた。名前の個所が丹念に削り取られていて判読不可能だったのは、よほど忌まわしい生き物だったのではないかと推察したのを覚えている。絶対権力に対する暗喩とも解釈できる。

軍人、役人、そして枢密院に元老院などの議会。それらは執政官府の下でお互い牽制しあってこそ、均衡が保たれる。それが一つになって絶大な権力を得たとき、世の人々に対してどう振舞うか。絶対的な権威が下す判断が、常に正しいと証明できる手段はない。

自分たちがやろうとしているのは、異なる勢力をつなげ、連邦政府を肥大化させることではないのか。土台の強度も考えずに、重い

石を積み上げているだけではないのか。負荷がかかりすぎれば、無残に崩壊するだけだ。

バルラムは、厚い唇の端をかすかに持ち上げた。続いて眉間にしわを寄せ、目頭を押さえる。

「かもしれないが、気にすることはない。その怪物とやらが力を得ないように、せいぜい血を吸ってやるうじやないか。寄生虫なりにな」  
レオンは小さくため息をついた。どうやら、辞める気はまったくないらしい。

やはり、魔法を探し出す必要があった。魔法の力を得れば、肉体的にはさらに激務になるだろうが、威信の回復によって心は楽になるに違いない。

それに、いずれ腐敗するであろう権力を牽制できる、唯一の存在になるかもしれない。

「ところでレオン。現在動員できる隊員は何人いる？」

「今は、おれと偵察担当のマーク、工作担当のジェーガンの三人かな。あと、翼竜使いのセラが機密文書を運び終えて戻ってくる予定だが」

バルラムは満足げにうなずいた。書類をまとめ、引き出しに納めはじめ。

「ちようどいい。活動的なマークと、金属の専門家でもあるジェーガン。それに、機動力のあるセラなら、今回の任務にうってつけだろう。それから、念を押さなくてもわかっているだろうが」

「ああ。独自の判断で動くよ。オヤジには迷惑を掛けない」

自分のせいで、諜報部員全体の立場が不利になる場合があったら、容赦なく切り捨ててくれ。

歴史学者を目指すことをやめ、隊員として志願してきたときにはつきりと宣言した。痛いほどの鋭い視線が返ってきたのは、必ず生還しなければならぬ諜報活動への軽視と見たのか、あるいは公職のけじめとして宣告する前に、実の息子に言われてしまった不快感のどちらなのか、それとも両方なのか、いまでもよくわからない。

「じきに司法省から、都市巡察官の身分証明書がくる。うまい具合に使い」

「では、レオン特機隊長以下三名。任務を拝命し、早急に行動に移ります」

踵を返しかけたレオンは、ドアの前で呼び止められた。

「任務が終わったら、母さんと三人で食事でもどうだ。会合に使っているいい店がある。落ち着いた雰囲気、店員の対応もいい。それに、お前の料理の参考にもなるだろうし」

諜報部員は、最低二つの顔を持つ。職人や商人、それに旅芸人や遊牧民など、街と街とをさりげなく移動できる職業か、あるいは学者や占い師など、人と異なる価値観を持っていても怪しまれない職業などから特技に応じて選択する。レオンは、遊学中の歴史学者と修行中の料理人とを状況の応じて使い分けていた。

「肝心の味はどうなんだい？」

「わからん。だからあらためて確かめに行くのだ」

レオンは、うすら寒い会食の内容を思った。心を許さない相手が正面にいるのなら、例え豪華な食事であっても、砂を噛むようなものに決まっている。

「そうしよう。母さんの煮込み料理は絶品だけど、大鍋で作るくせが抜けないからな。大量に作るからこそ美味しいんだろうけど、親父だけじゃあ持て余すよな」

軽口を言ったつもりだったが、笑いは返ってこなかった。

### 第三章 作戦会議室にて

#### 第三章 作戦会議室にて

作戦会議室は、本館裏口の近くに置かれている。こじんまりとした山小屋といった造りだが、魔法特機隊全員が会合を持てるぐらいの広さはあった。たった三人だと、閑散とした感じがする。

レオンは、手持ちぶさたなようすの二人に、任務のあらましを説明した。

「守銭奴と釜焚き屋と頭でっかちとを手玉にとつていこうとは、バルラムのとつとつあんも苦勞が絶えないよなあ。あれじゃあ剃つてごまかすほど頭髪も寂しくなるといふもんだ。髪を切らされずにすむから、こつちは楽でいいけどさ」

椅子にそっくり返つたままで、副隊長兼地上偵察班長のマークが軽口を叩いた。口を動かすたびに、セルムの葉の清涼感あふれる香りが、レオンのところにまで漂ってくる。

生意気な態度でありながら、どこことなく滑稽な印象を与えているのは、少年のような体格と顔立ちのせいだった。兵部省専属の床屋には見えないほど赤髪は収まりが悪く、白い肌でも浮き上がらないほどひげが薄い。さらに光の具合によつて深紅にも見えるごく薄い枯葉色の瞳が、子供らしさをさらに強めている。二十歳のわりには若い、という皮肉にも似た評価に、無邪気に抗っているかのようだ。もつとも元気がいいぐらいでないと、とても軽業師はつとまらないだろう。煙突掃除人から旅芸人まで、マークが変装する職業は多い。

「しかしまあ、楽しそうな任務じゃねえかよ、マーク。今度は山だと聞けば、生粋のドワーフ族であるこのジェーガンさまの血が騒ぐつてもものだ」

左隣に座っていた副隊長兼工作班長のジェーガンが、贗銅貨を弄

びながら応じた。仮の名であるジェーガンという言葉にも慣れてきたらしく、ごく自然な響きになっている。

同期のマークと同じくらいの背丈だが、テーブルの前に並んで座っている一回り大きく見える。盛り上がった肩を突き破って伸びている太い首と、洗いざらしでしわの寄った麻服の袖からのぞく日焼けしたきつい赤褐色の肌は、なめし革の前掛けをつけなくても、武器の修繕にやって来た熟練の鍛冶職人という身分に信憑性を与えている。

自ら鍛え上げた斧と槌とを合わせた斧槌で、器用に何でも作り出すことができるジェーガンは、冶金技術を要する贖金の調査に必要不可欠な存在といえた。

「まずこれを見てくれ」

レオンは大テーブルの上に、ゴンドランド大陸東南の地図を広げた。

土色の弓とでも例えるべきコロンブエ山脈が、地図のやや東側を走っている。西側は山脈に張り付く程度に森と沼地があるだけで、ほとんど平原と砂漠によって構成されていた。逆に東側はほとんど森林地帯であり、主な街は海岸に沿って点在していた。

隣接する街どうしを結ぶただ一本の街道は、戦乱が終結してから商業用として造られたものに違いなかった。

軍用道路であれば、都市と都市とを直接つなげない。太く舗装された幹線を引いたあとで、葉脈を連想させる砂利道の支線の先に各都市を結びつけていく。要衝となる都市を敵によって占領され、鈍重な輜重隊が通行不能に陥るのを防ぐためだ。軍団が進出して、補給が続かなければどうにもならない。

山脈をまたいだ内陸側は、統一戦役時代に、最後まで抵抗していた場所だった。境界線が細かく入り乱れているのは、政略結婚や養子縁組などで領主どうしの結束を強化して連邦軍に対抗しようとした名残である。共有地だった森や山ではあいまいな破線となっており、飛び地も散見された。二本の横線で消された地名

は、連邦軍に抵抗したために見せしめとして焼き払われた集落だった。多大な犠牲を払ったせいも、地図の端に近い砂漠近辺はともかく、草原にも地名はあまり書き込まれていなかった。

ここなら、手つかずの銅鉱山が残っている可能性がありそうだった。しかも、根強い反連邦感情が存在している。贖金はともかく、政府に揺さぶりをかけてくるぐらいはしかなない。

マークは椅子を戻して、地図を覗き込んだ。

「領土がごちゃごちゃしてうるせえ土地だなあ。いつそのこと、山脈の真ん中に連邦政府の城でも造って、四方を睨み倒したほうが良くなえか。山が並んでいるから投石器も攻城塔も破城槌も使えねえ、難攻不落の大城塞がつくれるぜ。常時監視されているとわかれば、領主どもも不届きな考えをたくらむこともなくなるってわけだ」

ジェーガンは太く節くれだった指で山脈を叩いた。

「おとぎ話じゃあるまいし、こんな山に城なんか建てられるわけがないだろうがよ」

山岳地帯に住むドワーフ族は、工作兵として特に優秀な民族だと評価されている。薄い空気と大きな岩に囲まれた生活は、持久力に優れた肉体を作りあげ、石材および金属加工から派生した高度な工作技能を生み出した。

「いちいち言われなくてもわかってらあ。勾配がきついと飛び道具の死角ができるうえに、木が多いから火攻めに遭いやすいつてんだろ。斜面だと火の回りも早いしな。だが木を伐り出したうえに、稜線を切って空掘を造ればいいだけの話じゃねえか。近くに木がなければ攻城兵器も作れないし、運び込むのも苦労するぜ」

「全然わかってねえ。一番大事なことは、ここが城の建築限界を超えるほど高い山だってことだ」

「なんで地図を見ただけで高いつてわかるんだよ。訪ねたわけでもないくせに」

ふふん、とジェーガンは丸みのある小鼻をさらにふくらませた。

「いいか、マーク。東側に比べて西側に森が格段に少ないのは、く

びれはあるものの、山脈が雨雲を通さないぐらい高い山の連なりだからだ。たしかに西へと流れ出る川がないのに、木があつて沼が多いのは地下に水脈がある証拠だから、井戸を掘れば水を確保はできるだろう。だが、山頂付近に城を築く場合には、井戸は深く掘らねばならぬ。山肌を掘り崩されて水脈を切られたらおしまいだからな。まあ、おれたちドワーフ族の立場から言わせてもらえば、せいぜい千分の八百くらいの傾斜角で、底辺六千歩の高さが城砦建築の高度限界じゃねえかな。おめえも、直感だけに頼らずに、もう少し頭を使ったほうがいいぜ」

なにを、とマークは軽く口をとがらせた。

「お前が生粋のドワーフ族なら、こつちはアニキと同じく生粋の魔法使いの家柄なんだよ。おれなんかおまけに孤児だが、胸を張って生きてきたんだぜ。胸を張れば、心が頭より先に出るのが当たり前じゃないか。だいたい汚れ仕事なんてのは、真つ当な人間しかできないんだよ」

「おめえのは単純じゃなかったのかい？」

「うるせえぞ、ジエーガン。専門用語を並べて頭を押さえようとするんじゃない。そういつたことは、バルラムのとつたあんにでも言えよ。なあ、アニキ。なにせしよつちゆう地面に丸や三角を細かく描いては、ぶつぶつとひとりごとを言っているんだらう？」

「へんな言い方をするな。初等幾何学の計算が親父の唯一の趣味なんだから仕方がないだろう。仕事であれほどしているのにまだ計算したりないのか、と訊いたことがあつたんだがな。統計分析と違って答えが一つしか出ないから、いい気分転換になるそうさ。そう言われたら、おれとしては後ろ足で退散するしかない」

数学が苦手なわけではなかった。論理的な思考には、必要不可欠なものである。逃げ出したのは、遠まわしに説教をされている気がしたからだつた。

魔法特機隊は少数精鋭主義をとっている。不足しがちな人員で同時に任務をこなす続けなければならぬが、一人の作業員で複数の

任務を受けない不文律がある。身分が露見する危険が高まるし、依頼者間の利害が対立する恐れもある。工作活動は必然的に、効率を重視せざるを得なくなるわけだった。

理にかなった行動が、常に正しいとは限らない。相手となる人間は完璧ではないから、過ちを含めた不測の行動を取られると、肩透かしを食らうおそれがある。また、問題解明に向かう動きが単調になりやすく、行動を読まれて裏をかがれるかもしれない。ある程度の柔軟性は必要なものだ。丸めた背中、遠回しに諭されているような気がしていた。

レオンは軽く頭を振った。勘ぐりすぎだとは思うが、仕方がないことだとも思う。死線を潜ってきた人間の、一種の業病と言えるかもしれない。

二人の笑いが収まるのを見届けて、自分なりの見解を述べた。

「まあ、大局的に見れば、辺境に城砦など建てないほうがいいだろうな。防衛予算もかさむし、領主たちの団結心を再度刺激しかねない。ならば政治力を駆使してお互い睨み合う状態を作り出したほうが望ましいだろう。枢密院が分裂すれば、相対的に政府の力が増すことになるわけだからな」

二人が納得したようなので、レオンは、地図をジェーガンに押しやった。

「いつものを頼む」

「わかりやした。ではさっそく」

すかさずジェーガンは地図を凝視し始めた。指で鼻の下を掻いているのは、地図を頭に入れたうえで、新たな地図を頭に描き入れるお決まりの儀式だった。高い山から地表を見下ろし続けてきた経験からか、どこにどういったものがあるのかがわかるようだ。

複数の道が見えていけば、作戦の自由度が増す。細いつる草が生えている崖、木がせり出している急流、割れやすい岩が点在している沢など、普通の人間が移動できない地点でも、地形を知りつくしたドワーフ族にとっては立派な通り道となる。

世の中に不要なものなどない、とはジェーガンの口癖だった。山で不足しがちな物資を創意と工夫で間に合わせてきた経験が言わせなのか、あるいは歴史から疎外され続けてきたドワーフ族の総意なのかは、わからない。

邪魔にならないように、レオンはマークにささやいた。

「今のうちに、おおまかに敵の正体を考えてみるとしよう」

「そういえば領主がらみで思い出したぜ。たしか大陸統一を達成したときに、銅貨の私鑄権が各領主に対して与えられたよな」

「歴史嫌いのお前にしては、よく知ってるな。過去を振り返るのは性分じゃねえ、といつも偉そうに言っているくせに」

あのねえアニキ、とマークはすねたような視線を向け、わざとらしく首飾りを見せつけた。

「これでも副隊長なんだぜ。学校で習ったことぐらいは覚えているさ。武装解除と商業振興を同時に図った偉大なる市民ヴェルデーの政策だって、そこいらの子供でも知っているぜ。ましてやおれは武器商人にもなるんだぜ。知らなきゃそれだけで怪しまれる」

マークの言うことはたしかに真実だった。だから、学校でも習う。しかしそれは、光の部分のみをとらえているに過ぎない。

枕元では、違う一面を聞いた。親父は、謀略だと言った。鍵は、銅貨のみの私鑄を認めた点にある。

不要になった青銅製の武器がそのまま通貨に変わるのだから、領主たちは喜んで銅貨に鑄直す。そこにヴェルデーの真の狙いがあった。

銅貨が良質なうえに、保有する全国の金銀鉱山で価値を担保できる連邦政府とは違って、領主たちは粗悪で薄い銅貨を大量に鑄造して、巨額になっていた戦債の支払いに充てた。

結果として物価高騰を招き、領主への不満がつのっていった。相对的に連邦政府の威信を向上させ、中央集権化につながった。

封建君主制を高利息の柱で支えていた特権商人たちは一気に凋落した。領主たちに対抗するために結成された商工連盟は、民主共和

政体である連邦政府の公正な通商政策を熱烈に支持した。すなわち武装解除と商業振興は、副次的に達成されたわけだ。

悪貨を鑄る、とは言っていないので、連邦政府に責任はない。しかし、結果的にそうなることを見越したうえで各地に通達したのだ。領主たちも謀略と知りながら、提案に乗らざるを得なかった。借金さえ完済できれば、定期的な税収が見込める領土と枢密院の議席を手放す理由はない。

ゴンドランドが連邦制をとっているのも、領地を死守したい領主たちと、辺境地域を主権の内部に取り込むことでの余分な支出を抑えたい連邦政府の思惑が完全に一致していたからでもある。

真の謀略には、ある種の誠実さが必要だ、とバルラム以前の親父は言った。相互の利益を図ったうえで策を仕掛けなければ、決して成功するものではない、と。

謀略は必ず気づかれる。賢愚の差は、時間の問題にすぎない。損を取り戻すための時間のぶんだけ怨恨がつのり、決して消えることのない溝をつくる。多くの策略家が凋落への道を歩んだのは知恵に溺れたためだけではない、と諭された。

価値観の異なる多種多様の民族が混在するゴンドランド連邦を一つにまとめ上げていくには、巧緻な政略が求められる。多様な偽善は絶対の正義に勝る。この世界に、完全なる正義など存在しないのだから、とどこか冷めた口調で親父は締めくくり、ドアから出て行った。木のきしむ音と、流れ込んできた冷たい空気の感触は、今でも覚えていいる。

「過去の話はひとまず置いて、他の角度から見よう。人手が必要になるはずだから、大規模な組織によるものには違いないだろう。一番考えられるのは犯罪組織だが」

マークは、天井を見上げた。椅子のきしむ音が、しばらくのあいだ続いた。

「いやあ、それはないだろうぜ、アニキ。ああいった寄生虫つてのは、自分たちの縄張りを守ることを優先するだろうからなあ。協定

を結んで連邦政府に刃向かうほどの信頼関係を築き上げているとも思えないぜ。それならまだ傭兵組合の可能性のほうが高いだろう。私兵なら行動の自由があるし」

統一国家であるが連邦制をとっているので、傭兵の需要はある。ただ、今現在には必要とされていないだけだった。

正規軍の兵士と違って、情報工作員とは利害が一致することもある。外地では、情報と嗜好品の交換をしたりもする。

「傭兵の可能性も低いな。余計な騒乱を起こして、連邦政府の不興をかうのは得策ではあるまい。それに北方大陸で緊張が高まっているそうだから、貧乏領主の格式を維持するためだけに雇われるよりも、そちらに稼ぎに行つたほうが実入りは多いだろう。耕作を嫌つた退役兵士たちならなおさらだ」

作戦会議では、わかりきつた、どんなつまらない意見でも言い合うことになっている。どこに発想のもとが潜んでいるかわからないからだつた。

ジェーガンは、まだ地図を見つめていた。毛深い手の甲からのぞく唇が、かすかに動いている。

「各都市にある商工組合はどうだろう。市場を押さえてさえいれば、贖金を流通させるのは容易だが」

「その線はないんじゃないかな。腕のいい職人がいるのに、すぐに見抜かれるような贖金を造る理由がわからない。とても利に聡いやつらのやることじゃないぜ」

「そうだな。品物の代金を信用のない贖金で払おうとすれば、必ず闇市ができるはずだ。しかし、色々な街を探索してみたが、その痕跡はなかったからな」

「あとは農村の連中ぐらいかな。村の鍛冶屋なら、その程度の贖金ぐらいさつと造れるだろうぜ。高温になる鉄と違って、銅の鑄物はそれほど大きな工房を必要ともしないらしいからさ。なあ、ジェーガン。そう言つてたよな」

「うるせえ、黙つてろ」

ジーガンにすげなく相づちを拒絶され、マークは軽く頭をかけた。

「山脈周辺には、農村らしきものはなさそうだ。それに、畑を捨ててまで鉱山に関わろうとするだろうか。農産物の下落で生活が苦しいといっても、豊作の影響であつて、べつに飢饉がおきているわけではない。農地さえあれば、とりあえず食うに困ることはないだろう」

都市を渡り歩く職人や旅芸人と違い、定住する農民は議会に対して圧力行使しやすい。生活できないとなれば団結して議員に詰め寄ればいい。わざわざ贖金を鑄る利が見当たらない。

うつん、とマークは唸った。椅子をきしませながら、再び天井を見上げる。

ジーガンがようやく頭を上げた。髪と同じ黒褐色の瞳には、自信に満ちた光があつた。どうやらそれなりの地図が描けたらしい。

「いいぜ、隊長。なんでも聞いてくたせえよ」

「まずは採鉱しているはずの銅山の特定だ。ひとまず気になる場所を言ってみてくれ。贖金が出回り始めた地域がわからない以上、そこからまず手がかりを求めていこう。政府の造幣廠と違って、贖金造りの工房は銅山の近くにあるはずだから、それが一番早い方策だろう」

「そもそも有望な銅鉱脈は、乾燥している土地か、あるいは険しい山のあたりに見つかるんでさあ」

「ともに水気のなさそうなところだな。排水に手間がかかつては採算が取れないからだろう。盗掘ならなおさらだ」

「ええ。ひとまず地図には砂漠も山脈もありますから、それなりに有望じゃねえかと思えます。それで隠れて贖金を造っているってえと、国境が複雑に入り乱れている地が適しているはずでさあ。領有権も司法権もあいまいで監視が届かないから、いざというときに素早く逃げ出せる」

「具体的な場所はどうか？」

そうですねえ、とジェーガンは節くれだった指を山脈西側に置いた。

「山脈の西側は全滅でさあ。ありえねえ」

「根拠の説明をしてくれ、ジェーガン」

「ここいら辺にはろくな道も街もねえですから、商いは隊商が取り仕切っているでしょう。隊商つてのは、動き回らにゃあいけねえから、かさばるものは嫌うんでさあ。銅貨だって嫌がるのに、贖金を受取るはずがねえ。槌で丹念に潰した砂金をちらつかせつつ商品価値切るのが、ドワーフ流の交渉術でさあね」

たしかに、隊商が動き回る大陸中東部から西へは、贖金が出回っているようすはなかった。

道を作るにしても維持するにしても、多くの費用がかかる。小領主たちがひしめきあっている土地では、迷わないだけまし、といった程度の悪路で、大量の贖金を運び出せる経路があるとはとても思えなかった。

反抗的な土地柄からして、中央政府からの通達を無視するため、予算不足を理由にわざと郵便馬車が難渋するような道にしているのかもしれない。

「お前らにしては、ずいぶんとしよっぱい真似をするじゃねえか。

岩塩の舐めすぎじゃないのか」

「なにを言ってやがんだ、マーク。だいたい隊商のヤツらほどひでえ連中はいねえんだぜ。砂漠に逃げ込めるのをいいことに、税金は払わねえ。借金は踏み倒す。油断をすると贖物をつかませたり、砂金の形を手がかりに採掘現場を荒そうとまでしやがる。おれたちはいわば気の優しい徴税官のようなものさ」

ジェーガンは皮肉そうな笑いをおさめて続けた。

「それからもうひとつ、気になる点がありますぜ。こっちは沼があちこちに散らばってるでしょう。こういった湿りっ気の多いところの石炭は、泥状になっちまうんでさあ」

「銅鉱石を焼くほどの火力は得られないのか」

「さあて、おれたちはそんなので焼かないですからねえ。いつまでたつても泡が抜けねえ、とガラス工房にいつてる連中が言ってますんで。腕が悪いせいだろうよ、とそんなときは笑い話になっちまいましたか」

「森の木で炭を焼くわけにもいかんか。派手にやると、周囲の領主が黙ってはいないだろうし」

「そういつこつて。候補は東側の森に絞り込めませう。採鉱するには大量の樹木がいります。炭はともかく、坑木を組むのに必要ですんでね。だから広い森が近くになればならねえ。おれたちも石炭を使う前までは、木を伐採しまくって、それで森に住むエルフ族と戦争になったりしたこともあるぐれえでさあ」

レオンは軽い空咳をした。動揺を悟られなくなかった。

エルフ族とドワーフ族との戦争には、魔法使いが関与していたからだった。

森の民であるエルフ族のところに、レオンたちの先祖が鉄器を持って入っていった。石斧では難しかった処女林の伐採が容易になり、部族どうしが焼畑をしやすい二次林をめぐる争うことがなくなつた。焼畑の欠点である除草の手間も、処女林ならばそれほど困難な仕事ではない。

跡地には成長の早い樹木を植えさせ、休耕期間を縮めることもした。林業も教えた。朽ち果てるだけだった間伐材を売却することで、交易の手段を拓いた。狩猟で得た獣皮や獣骨、窯から出した炭などがいい収入となった。

豊かになったエルフ族は、魔法使いに感謝をしてくれた。娘を差し出す親もいて、血の交わりが進んだ。

しばらくして、今度は宣教師たちがドワーフ族の集落を訪れた。布教は失敗したが、信頼は得た。説教を終えた後の雑談で、エルフ族が森を独占しようとしている、とほのめかした。木を切つて森を焼いているのは事実だから、あっさり信じ込ませることができたわけだ。

族長たちは搬出していた岩塩を止めた。いくら豊かになっても森では塩は採れない。湿気が多い土地では、保存のための塩は必要不可欠だった。人口が増えればなおさら食糧を貯蔵する必要にかられる。芋などの根菜は、とくに腐りやすい。

エルフ族は、ドワーフ族がこちらの弱みにつけこんで値をつり上げようとしていると思った。獣皮などを買い取りにきた隊商たちがドワーフ族の汚いやり口をこぼしたのも影響したらしい。

互いが不信感を持ってしまったので、和解は不可能だった。威嚇が小競り合いにつながり、戦闘から長い戦争になった。両部族が衰えたところを見計らって、連邦になる前の軍隊が広大な地を占拠したというわけだった。

レオンは、昔の魔法使いたちが撤退命令を無視してともに戦ったりしたのもいた、と寝物語で聞いたことがあった。宣教師たちの暗躍を知らなかったせいもあるだろう。しかし、個人個人が誠実さを追求したからだとも思えた。

確かに先祖たちがやったことは、部分的には卑劣極まりない行為だったろう。しかし、ゴンドランド連邦成立のきっかけとなったのは事実だった。ヴェルデーの悲願とされる民族の融和も、夢幻世界の話ではなくなりつつある。いずれ国と民族が完全に一体化するときがくれば、少数民族の象徴である「族」の呼称もなくなるだろう。歴史を学んでいると、なにが善でなにが悪なのかわからなくなることもある。

そのときは、誇りを行動の基準に選ぶことにした。昔の魔法使いが、なにを名譽にして生きていたかはわからない。しかし同じ心を持つ人間なら、いつの時代でも価値観は変わらないはずだ。

できる限り、見苦しい真似はしない。人に迷惑をかけない。傷つけない。これなら親父の言う誠実さにつながるはずだった。

それにこちらの活躍が周囲に認知されていけば、魔法を得ようとするときに、邪魔が入る可能性も少なくなるはずだった。

レオンは気を取りなおして地図を見返した。

「ならばここはどうだ。森もあるし、川も流れているから、大量に贖金を輸送できる。中流から下流にかけて街道が沿うように敷かれているのは、流れが緩やかな証拠だろう。ここからなら平底船を使わなくても、筏で大量に運べるぞ」

レオンは、コロンブエ山脈の南端近くの山脈を指差した。麓から東に向かって川が流れている。途中に都市があり、出ている街道が川に沿って河口の港町ポーミラまで伸びていた。

「それはありえねえですけど。鉱山を掘ると、悪い水が出るんでさあ。足が黄色くなつて、皺になつちまうぐれえです。ここには地形的に遊水池を造る余裕がねえから、そのまま川に流れ込むでしょう。中流に大きな街があるのに、騒ぎが起こつてねえのはちいとばかりおかしい」

川の中流には、自治都市フィルスがあつた。製紙と紡績とで知られた街で、どちらの産業もきれいな水が必要とするはずだつた。水が汚れば真つ先に騒ぎ出すだろう。しかし、連邦政府にそのような情報はもたらされていなかった。

「では、どこだと思つて？」

「銅鉱石が埋まっていそうなところは、たいがいおれたちが掘り返しちまつたんで。となると、鉱脈が地中深くに隠れていて目をつけなかつたからか、あるいは、戦乱で立ち入ることができなかったところじゃねえかと。今は銅材が高騰してますから、手間がかかつても元はとれるでしょうがね」

ジェーガンの指が、山脈中央辺りで上下に動いている。たしかに銅の鉱脈は山脈にある可能性は高い。しかし、輸送には不便な場所だつた。海沿いの街からはかなり離れていて、通じる間道も見当たらない。

レオンは腕を組んだ。ついでにもう一つの懸念も訊ねる。

「目をつけなかつた、か。すると、ドワーフ族はここに住んでいないわけだな」

突然、机が強く叩かれた。ジェーガンの顔が険しくなっていた。

「隊長。それは少しばかりひどいんじゃないですかい。おれたちがこんなちやちな贖金を造っているなんて、ひでえ侮辱ですぜ」

「おいおい、とマークが椅子を戻して割り込んできた。」

「なにをとんがっているんだ、ジェーガン。アニキはただ、ドワーフ族の協力を得られないのかと聞いたただけだろうが」

短慮を恥じて詫びようとするジェーガンを、レオンは手で制した。訊ねかたが悪かったようだ。ドワーフ族の気位の高さは、いまだ他族と交わらずに純血を保っていることからでもわかる。己の技量を信じる職人気質とでもいうべきだろうか、自分と同じく、誇りを傷つけられることには耐えられないのだろう。

マークが、地図をのぞき込んだ。赤みをおびてきた瞳が、好奇心に満ちた光を放っている。しかし、指摘したあたりを見るとすぐ、再び椅子を傾けた。

「なんだよ、ここにだってまったく道がないじゃないか。どうやって贖金を街まで運び出すんだ」

「知るもんか。だから可能性が高そうなところだってあらかじめ言っておいたじゃねえか。もっともここらは暑くも寒くもない地方だから、森を抜けるのにはそれほど苦労はしねえだろうがな」

新しいセルムの生葉を口に放り込みながら、マークが訊ねた。

「暑いと密林になるし、寒いと倒木が腐らずに増えまくるってわけか。しかしジェーガン、運ぶのはともかく、どうやって採鉱場所のありかを探るんだ？」

「それは地上偵察の仕事だろう。地図の大きさからして、おめえの健脚なら二十日もあれば山脈を一周できるだろうさ。そのときは食料を減らせ。腹は減るが、距離は稼げる」

「淡々と言っなよ。斜面を走り回るなんて、大変な強行軍じゃねえか」

「情けねえなあ。おめえ、それでも魔法使いか？ おれたちドワーフ族の言い伝えでは、大昔の魔法使いは杖一本だけで、水脈や鉱脈を探り当てたというぜ」

「知るかい、そんなこと。ほじくるのは、鼻と鉦脈だけにしとけよ」  
「わからないのなら、やはり足で稼ぐこつた。大丈夫だ、そのぐらいじゃあ死なねえ。おれたちの成人の儀式に比べれば、散歩みたいなものだ。生き抜いてきた人間が言うんだから、間違いはないぜ」  
ジエーガンがおおげさに肩をすくめると、分厚い手のひらが目に入った。

皮が厚くなっているのは、ドワーフ族に代々伝わる成人の儀式のひとつだった。赤く焼けた炭をわらでくるんで強く握ると、わらに含まれる脂と炭の熱とで皮が鍛えられ、手にマメができないようになる。職人としても戦士としても活躍した、先人の叡智らしい。

場の空気がほぐれたのを見計らって、レオンはまともに入った。

「よしわかった。手始めに、ファイルスに拠点を置いて調査を行うとしよう。ここなら山脈にも近いし、物品の流れから贖金への手がかりをつかめるかもしれない。ちょうどセラが戻ってくるころだし、翼竜を使っていこう。あれなら大陸東側まで三日で移動できる」

マークはむせて、セルムの葉を吹き出しそうになった。大きな咳が何度か続き、レオンにしかめた顔を向けた。

「それこそ冗談じゃねえよ、アニキ。おれが凶悪な翼竜と相性が悪いのを知っててそんな提案をするなんてさあ。だいたい翼竜使いどもが甘やかすからあいづらはつけあがるんだよ。あんな鋭い歯を持つているくせに、柔らかく煮た肉しか食べないなんてよ」

ジエーガンがマークの肩を二、三度つついた。

「おめえは思いつきり嫌われていやがるからな。火を吐くのは神話の世界だけだというのに、気づけ用の強い酒なんか飲ませるからだ。それにしても酒癖が悪いよなあ、翼竜はよ」

「やかましい。元はといえば、お前が敵に囲まれたからだろうが。そこいらの子供より走るのが遅いじゃねえか。その太い足は飾り物かよ」

「空気が薄い岩だらけの山で走りまわるほど、おれたちは野蛮じゃねえんだよ」

そのぐらいにしておけ、とレオンは不毛な会話をさえぎった。

極秘任務だけに、できる限り人目に触れなくなかった。空高く上がれば、発見されずにすむ。鉱山を特定するためにも、上空からの偵察も必要だった。翼竜は絶対に外せない。

どのみちフォルトファীগからの移動手段は限られていた。大河を北に下って、中央海からの東回り航路を使っていたら、それこそ何十日かかるかわかったものではない。大砂漠を迂回する陸路はさらに遅い。

「いいな、二人とも。セラが戻ってくる前に出撃の準備をしておけ」  
レオンは地図を丸めながら二人に宣言した。

紙のこすれる音に混ざって、愉快そうに笑う声と、鋭い舌打ちの音が聞こえた。

## 第四章 道化を伝う潮

### 第四章 道化を伝う潮

助けたのか、助けられたのか。

港町ポーミラに向かう道すがら、グードは考えつづけた。南下する道中、ほとんど睡眠をとっていないが、それでも考えずにはいられなかった。出来事の裏側に、許容しがたい事情があった。

最初に四人組と、襲撃者を始末せよとの指令がきた。内務省の極秘指令は、第三者の手に落ちることのないよう、合言葉のあと伝達者が符丁で伝える決まりになっている。

上層部の誰かが、任務における匿名性を狡猾に利用してきた。誰が指令を出したのかは、伝達者以外知ることはない。もし追及されても、命じた者は知らぬ存ぜぬで通せる。

四人組を処断するのに、不自然さはなかった。たとえ隠滅工作であつても、国益につながる行為に違いない。自分の歌を利用されるのは嫌なことだったが、目的があれば耐えられる。

問題は襲撃者だった。伝達者は、反政府主義者でこちらを恨みに思うもの、とだけ伝えてきた。いつの時代でも不満は底辺から湧き上がる。積み上げた堆肥の下から、熱を持つてくると同じだ。だから、物乞いに成りすましていたとしても不思議には思わなかった。

レオンが杖術を使ったとき、初めて畏と悟った。誰かが自分を、兵部省との私闘に持ち込もうとしていた。調べたところ、統計調査室長の息子だった。統計の調査が表向きの仕事になっているが、魔法使いがいるなら諜報工作の拠点に決まっている。斬ったり、警備隊の手で処刑されたら、復讐に燃える父親からの報復を覚悟しなければならぬ。連中は、ただの兵士の集まりではない。それなりの練達者が揃っているはずだった。

かといって、与えられた任務を放擲するわけにもいかない。標的

は内務省の同僚だった。失敗して逃げられましたと報告できるわけがない。嘘はすぐに見抜かれて、今度は抗命罪を着せられるおそれもあった。事情を知った四人組に、逆に始末される可能性もある。どうすべきか考える余裕はなかった。しかし、レオンが四人を倒してくれた。

助かった、と安堵する暇はなかった。自分も一味だと思われていた。自衛のために、勝手に体が動いた。結果として自分の身を守り、レオンを逃がした。強く印象づけもした。

これなら、いちおう任務を果たしたことになる。まさか兵部省の人間を片付けろ、とは言えまい。

レオンには、恩も仇もない。ただ、借りはあった。懐に銅貨の詰まった革袋がある。この重さのぶんだけ、足運びが重くなる。いつか返さねばなるまい。

借りがあると、動きが鈍くなる。

「よお、グード。あいかわらず無愛想なことだな」

名前を呼ばれ、グードは、ポーミラに到着したことに気づいた。

視界のやや下に、こちらを見上げる男がいた。つり上がり気味の眉に、薄い若葉色の瞳。整えられた亜麻色の口ひげと薄めながらも引き締まった唇。それぞれが三十代半ばの年齢相応に、精悍さを示している。

同僚のフリーデルだった。久しぶりの再会となる。

二人で肩を並べて、ポーミラに入った。白塗りの建物に寄り添って、大通りを進む。

しおれた街、といった印象を受けた。自由貿易港に見られる、水際に沿った横への広がりがない。街道も舗装されておらず、荷車が通るたびに轍わだちを埋めた貝殻が、きしんだ音を立てている。

通りをねり歩く順風待ちの船員たちの顔にも覇気がなかった。どうも交易所で買い叩かれたようだ。船員は、報酬の他に地位に応じた分量の交易が認められている。少ない分量ならば、付加価値の高い商品を積み込むはずだ。そういったものに限って、景気の変動に

弱い。酒場のドアの隙間からもれてくる歌声も、どことなく寂しげに聞こえる。

威勢の良さが売り物のはずの牡蠣売り女の声も、どことなく湿っていた。干した魚網のそばに吊るされている魚も、売れ残りを仕方なく加工している印象を受けた。

活気が感じられるのは、大して儲けにならない巡礼者を奪い合う客引きの声と、河口近くの国営造船所から聞こえてくる槌の響きぐらいのものだった。

「元気そうだな、フリーデル」

「あえてのんきと言ってくれよ。密輸船の連中が出ないかぎり、おれの出番はきやしない。ここに沿岸巡視官さまがいらっしやるぞ、と宣伝してやっているのにな」

フリーデルは皮肉そうに唇をゆがめ、羽根のついた銀縁の黒い三角帽をかぶり直した。

グードはあらためて服装を見やった。沿岸巡視官らしく、実用的な服装をしている。ひざ丈まで長さのある毛織物の外套は、よく水をはじく。足に密着する白いタイツは、敏捷な動きを妨げることはない。亜麻布のシャツは、汗をよく吸い取る。革のベルトに下げられた長剣は反りが入っていて、馬上でも振りやすいつくりになっていた。

ここまでは地味といえた。しかし、紐でボタン掛けした絹服は、鮮やかな赤に染められていて、襟には精緻な模様のレース編みが縫いつけられている。さらに右肩にある外套留めの金具の表面には、エナメル細工が施されていて、夕陽を浴びるたびに紅玉のような輝きを放っていた。

高価な服は、辺境の港町にふさわしいとはいえない。まさしくここに巡視官がいるぞ、と知らせているようなものだ。

「密輸船を取り締まる仕事は、軽く振舞えるほど楽ではないだろう」

「まあな。昔は港に張り付いて、安くてかさばる積荷を運んでくる船だけを見ていればよかつたらしいがね」

「あざとさを見極めるわけだな」

「それだけじゃない。貨物が安いと、向こうで品物を売って得た金  
が、仕入れに使われずに帰りの船内で寝ることになる。そんなこと  
はまっとうな商人なら誰も歓迎しない。必ず、高価でかさばらない  
品物をどこかに隠しているってわけさ。両替商がなかった、いかに  
ものどかな時代の話だが」

「こちら側にとっては、のどかな時代でもなかっただろうがな」

連邦政府の職員も、密輸に手を染めていた時代があった。銅貨  
の私鑄によって、調達が難しくなった現地での活動資金を捻出する  
ためだ。

領主たちが質の悪い銅貨を鑄たのは、高利息の戦債を償還するた  
めだけではない。防諜という側面もある。怪しそうな人物を漫然と  
追跡するよりも、外地から金貨や銀貨を大量に持ち込んでくる分不  
相応な人間を、徹底的に見張るほうが効率がいい。

牽制効果もあった。連邦政府の人間ならば多少の遠慮があるが、  
密輸犯ならば堂々と処刑できる。明白な証拠を突きつけられては、  
政府は見捨てるより他にない。

だから、職員は主に塩を扱った。いざとなれば、海に投げ入れ  
るだけで証拠を消せる。現地で銅貨を得るためだから、別に損  
をしても構わなかったわけだ。専売制で苦しめられていた地域では、  
さらに安く提供することで住民の協力も期待できた。

「だが、今の密輸商人はもっと巧妙な策を弄してきているはずだ。  
ならば危険でもあるぞ」

「そうらしい。しかし、おれは並の人間とは違う」

連邦政府により関税が撤廃され、密輸船は激減した。しかし、気  
楽な閑職ではない。密輸は禁制品に限られるようになったため、よ  
り危険な任務になっている。普通なら目立つ上着を着て挑発しなが  
ら歩き回るよりも、連中から金をもらいながら、海岸沿いをのんび  
りと散歩していたほうがいいはずだ。

「中途半端に着飾るのは止めたほうがいいぞ。賄賂を貰っていると

勘ぐられかねん」

「よしてくれよ。首都では首切りのフリーデルと呼ばれてきたんだ。そう簡単に生きざまを変えられるのなら、こんな辺境にまで飛ばされるわけがないだろう。ま、首の皮一枚つながっているだけまし、といったところさ」

監察局から事実上の左遷となったのは、危険を承知で同僚の不正を暴き、多くの上役を辞職に追い込んできたからだだった。ていのいい厄介払い、もしくは緩やかな流刑といったところだ。

派手な服装は以前から変わらないが、うらぶれた辺境の地で見ると、謹厳実直を装い、その実腐敗しつつある上層部へのあてつけとも見てとれる。

「危険な立場はお互いさまか」

「だが、おれは少なくとも命は狙われていないらしい。ということ、は、幻惑草の捜査の焦点からは外れている。そうじゃないか？」

幻惑草は、文字通り幻覚をもたらす作用のある植物だった。本来は疲れを癒したり、眠気を覚ましたりする薬草だった。しかし、精製された白い粉が首都に出回るようになり、名称と連邦政府の対応とが一変した。悪魔の粉と呼ばれ、毒に犯される人間が出てきたからだだった。

絶妙な表現だといえる。金銭のためなら、人を殺すことを厭わないあの四人組などは、悪魔といわれても仕方があるまい。

「海岸線は平和そのものときている。ならば、幻惑草は陸路で運ばれているに違いない。そう踏んで、街道沿いの港町を重点的に捜査しているところだ」

「成果は出たのか？」

「いいや、まだだ。密輸船も見つかっていない。ところで、グード。幻惑草の捜査中止命令が出たってのは本当か？」

「そうらしいな」

「らしいとはおまえらしいことだ。いったいどんな事情が隠れているんだ？」

「知らんよ」

上層部の誰かが幻惑草の密売に関与しているのは、四人組を処断したときに確信した。しかし、フリーデルに話すわけにはいかない。相手の力量は、いまだ測りかねている。話しても、危険が分散できるわけでもない。

おいおい、とフリーデルは肩をすくめた。こちらの心を見透かそうとするかのように、目を細めている。

「中止命令が出ているのに、のこのこと辺境の港町までやってきたんだ。手がかりを知らんとは言わせないぞ。これからどこに行こうとしているんだ？」

「おれは休暇中だから、連絡は入ってこない。それだけのことだ」  
「休暇中ね。ならば、ますますお前の行き先を聞かねばならんな。」

内務省の行動規範に、休暇を取る場合、常に行き先を知らせておくこと、とある。お前も役人なら、規則は守らないとな」

「派手な服を着ている人間に、規則うんぬんを言われるとは思わなかったが」

グードは大きなため息をついた。十年以上も同僚としてつきあっている、手柄を立てるためではなく、こちらの身を案じて言ってくれているのがよくわかる。

「自治都市のファイルスだ。南下しながら酒場を回って、幻惑草の相場を調べてみたが、あの街を中心として、ほぼ同心円状に価格が上がっていくのがわかった。逆に言えばあの街に元締めがいることになる」

「同心円状か。すると、敵さんも違った意味で、かなりのきれい好きと見えるな」

フリーデルは、価格が均等に上昇している理由を気にしたようだった。末端の価格は、流通経路によって決まるから、密売は単一の組織の犯行だと推察できる。

それなりの組織力を持つていなければ、他者を排除するような芸当はできない。手ごわい相手だろうが、逆にその組織さえ叩ければ

幻惑草の密売を根絶できるともいえる。

「なるほど、森の街フィルスね。このところ海岸ばかり歩いていたから、気づかなかつたな。そいつは面白くなってきた」

「別に面白くはないだろう。貴様が危険を冒してまで幻惑草を追う必要はあるまい」

フリーデルは、舞台俳優さながらの仕草で、両手を大げさに一周させた。

「輝く夕陽。紺碧の海。白い砂浜にみずみずしい緑。可憐な花に、麗しき乙女たち。世の中は美しいものがたくさんある。それを穢そうとする醜い化け物連中の首を一人残らず跳ね飛ばしてやるのさ。美しいものを愛でないのは、もはや人間とはいえますまい」

大声だったが、まわりの反応はなかった。大通りには酒場が密集している。なけなしの金でヤケ酒をあおる酔っ払いは珍しくない。

フリーデルは気にしたようすはなく、視線が合つて笑顔をこぼした妙齢の女性に、三角帽をとって、わざとらしく片目をつぶってみせている。

うまくはぐらかされた気もするが、こいつらしいとも思う。報酬を貰いながら正義を振りかざして回る男より、何かを貰って生きようとする男のほうが信用できる。

だから、長い付き合いになった。

「おまえはどうなんだ、グード。報酬や名誉が目当てなら、他に色々な仕事があるぞ。正義のためとしか思えないぐらいの執念深さじゃないか」

「フリーデル。おれの前で、軽々しく正義など言わないでくれ」「なぜだい？」

相棒となつてから、幾度となく問われ続けてきた質問だった。いい機会だ、とグードは思った。過去を話しても、ここなら酒気と喧騒によつて、打ち消してくれる気がした。

「おれの母は、領主に税金の軽減を頼みにいって、貞操を守るためにのどを突いた。耐えかねた父は、義憤によつて暴動を起こしたが、

敗れて処刑された。あるうことか母の墓前で、反乱罪の汚名を着させられてな。多民族の集合体であるゴンドランド連邦からしてみれば、暴動はいかなる理由があっても悪として断罪せざるを得ない。つまり、父は盗賊や殺人者と同じ犯罪者として処遇されたわけだ」「ほう、それは初耳だな。それで、その領主さまはどうなったんだい？」

軽い口調だったが、深くかぶり直した三角帽の下からのぞくフリーデルの目は鋭い。

「暴政の責任を取らされて、追放された。さすがの枢密院もかばいきれなかったようだ。結果的に広大な土地が連邦の直轄地になったのだから、計り知れない国益をもたらしたはずだ。わざと暴政を放置して、反乱を誘導したのかと邪推したこともあったが、今は考えないようにしている。連邦政府が両親の仇をうつてくれたのは事実だし、育ててくれた恩もある」

「ふむ、それで？」

「もし、正義が存在したのであれば、母は死なずに済んだ。悪が存在したとすれば、父は死なずにすんだかもしれない。しかし結局、正義も悪も消え去り、おれだけが残った。はつきりとわかったよ。この世には正義も悪も無く、混沌だけが存在していると。ないものがあるとと思うのは、狂信者のすることだ」

国家も法律も、家族を守ってくれなかった。混沌の対極は、秩序では断じてない。虚無だ、と童心ながらに痛感した。だから故郷を捨てた。何もかも、過去の全てを捨てた。それでこそ、現状に対抗できる。そんな気がした。正しい決断だったと思う。混沌とした世界に秩序をもたらさすはすの内務省も、自浄作用が働かずに腐敗してきている。

一息ついて、あたりを見た。聴かれたようすはなかった。石畳を転がす車輪の音も余韻を残すかのように遠ざかり、人もそれぞれ建物に吸い込まれつつあった。

ややあって、フリーデルは口を開いた。下がり気味のつばが、端

正な顔に陰を落としている。

「正義のためではなかったら、なぜ幻惑草を追っているんだ？」

「さつきも言ったが、ゴンドランド連邦には借りがある。返しがないのある借りがな。大物の影がちらつく幻惑草の捜査が、一番借りを返せそうな手柄だと思っている。借りを返せば、いつでも死ぬ。そんな生き方がおれには一番ふさわしい気がしてな」

「おい、グード。お前らしいぞ」

「むろん、冗談だ」

本当のところ、冗談などではなかった。おそらく、死ぬまで連邦政府に借りを返し続けねばならないだろう。反乱者の息子として生まれ育った代償は大きい。

しかし、苦ではなかった。生き方を割り切れれば、余計な悩みなどなくなる。

「で、あつちでどうやって手がかりを見つけるんだ？」

「すでに行きつけの酒場から、フィルス宛の紹介状をもらってある。しばらく酒場にもぐりこんでようすを見るさ。そう心配するな、フリーデル。核心に迫っているんだ。それほど時間はかからない」

フリーデルは、大きく息を吐いた。

「心配はしていない。ただ、美味しいものを一人で食べるな、と言っているだけだ。わかるだろう？」

「ああ、連絡はする」

「必ずだぞ。お前の約束はあてにならないから、念押ししておくが」  
街外れまで、無言で歩き続けた。

中央広場前の交差点で、騒ぎがあった。十人ほどが何かを取り巻き、罵声を浴びせていた。殴る音も聞こえる。

人だかりはなかった。通行人も、少し目をやっただけで、足早に去っていく。関わりあいたくないたいぐいの人間が、いさかいを起こしているようだ。

「皆々さまの鼻のつまみ具合からして、古漬け魚の叩き売りってところかな」

「するとおれたちは蠅か」

「違うといつても、あつちはそう思っているだろうさ。やだねえ、審美眼のない連中は」

二人で駆け寄った。

少年が囲まれていた。十二、三歳ぐらいか。殴られ続けていたらしく、顔が腫れ、服が破られていた。すぐそばには口を押さえられ、羽交い絞めにされた少女があがいている。

奥には荷車が二つあった。荷物が申しわけいどに載っているほうは、おそらく非力そうな少年と少女のものと想われた。もう一つの荷車には、樽と袋が満載されていた。こちらは他の都市に荷物を運ぶ途中に違いない。

出合いがしらにお互いが衝突し、騒動になったといったところだろう、とグードは読んだ。荷物の少ないほうが道を譲る街道の掟を、少年はまだ知らなかったらしい。

立ち去ろうとした男の一人に、少年が殴りかかった。すかさず反撃を食らって倒れこむ。囁き声がまわりから起こった。余裕からか、少年が立ち上がるのを待っていた。

周りを囲んでいる男たちは、小柄だががっしりとした体格をしていた。赤銅色の肌色は、陽光と潮風とに身をさらしてきたせいだろう。一見すると山の民であるドワーフ族に似てないこともないが、きれいに髭を剃っているうえに、上半身裸でさらに墨を入れている点が異なっている。

どこからどう見ても、生粋のゴブリン族に違いなかった。

グードは、素早く視線を走らせた。輪から一歩引いた場所で、偉そうにふんぞり返っている親方らしき男には見覚えがあった。取り巻き連中よりも一回り大きい背丈の持ち主で、突き出さんばかりに大きい顎と、ときおりひきつったような唇からのぞく乱杭歯は、忘れ去るにはあまりにも印象が強すぎる。

昔、面倒を見た男だった。相手は、もっと鮮明にその時のことを覚えていないに違いない。首筋につけられた傷のように。

少年は立ち上がった。まだ闘うつもりらしい。

割って入ろうとするフリーデルを、グードは手で制して、そのまま前に進み出た。

「ずいぶんと出世したな、ゼニーロ」

「おや、これはグードのダンナ。お久しぶりでございますね」

驚愕の表情から、すぐに卑屈そうな笑顔に変わった。

呼び捨てにしたからか、殴打を加えていた手下たちの手が止まった。首をかしげ、肘で突きあいながら、いつせいに視線を向けてきた。

友好的な表情ではないが、嫌われるのは慣れてるので気にならない。腐臭が漂う人間を相手にしていると、埋葬人夫や処刑人よりも忌み嫌われるようになるものだ。

「グードの細目野郎じゃないのか。取調べで机を蹴飛ばした頃のように」

「もう十年も前の話じゃありませんかい。いいかげん大人になりましたよ」

「いたいけな少年を皆で殴りつけるのが、大人のやることとは思えないがな」

「ちよつとしたいさかいごとですよ。たった今、止めようと思っていたところですよ」

ゼニーロが、おい、と顎をしゃくると、すぐに輪が崩れた。強い安酒と潮風とでのどをやられているのか、手下たちがこぼす不満まじりの声は低く濁っていた。姉らしき少女も解き放たれ、少年の元に走り寄った。手にしたハンカチで、少年の口を拭った。

グードは少年に、今のうちに行け、と目配せをした。しかし、少年は口元にハンカチを当てられながらも、まだ動こうとはしなかった。細い肩が大きく上下していて、息遣いが荒い。膝が笑っていたが、足は動いていなかった。腹の底から湧き出してくる怒りが、恐怖を克服しているように見える。

やむを得ずゼニーロに視線を戻す。この愛想良く振舞う男に、訊

いておくことがあった。

「ずいぶんと出世したようだな」

「男の価値は口の堅さと忍耐強さ、それに腕っ節で決まると言いますからねえ。それさえ持つていけば、地位のほうが放っておきませんよ。ほら、これがその証拠でさあ」

ゼーローは、誇らしげに自分の胸を叩いた。

胸の部分には、色あざやかな海獣の模様が彫り込まれている。体の前に墨が入っているのは、荷役夫の中で相当な地位にいる証だった。新入りは荷車の後ろで押す。だから、背中にしか模様は入れない。出世するにつれ、肩、胸、腹などに模様を入れていく。

痛みに耐えることで、男の価値があがる。そう言いたいようだった。

潮流と風との関係で、船は決まった期間に集中して寄港してくる。積み上げられた荷物の中から負担が軽く、なおかつ利益の出る荷役を受けられる人物の元に、より多くの人夫たちが集まるのは当然といえた。

荷役夫にとって、親方の権威は絶対的なものがあった。腰に巻いている革紐は、担い帯としてよりも、罰を与える鞭として使うほうが多い。

フリーデルが、少年たちをかばうように進み出た。

「忍耐力があるというなら、幻惑草には手を出していないな？」

「もちろんでさあ。こいつらにもきつく言っておりませぬ」

そんなはずはなかった。ゴブリン族が幻惑草を噛む習慣を捨てるわけがない。幻惑草の鎮静効果は、重労働の労務者にひと時ではあるが安らぎを与える。一度その習慣に染まったものが、やすやすと手放せるわけがない。

不信に満ちた視線を察したのか、ゼーローは挑戦的な口調で付け加えた。

「だいいちおれたちは愛国団体ですぞ。国益に反するような真似は一切しやしませんよ。ゴンドランド連邦が続く限り、永久に通関

税を支払わなくて済むんですからね。ねえ、グードのダンナ。そうでしょう？」

「ものはいよいよだな」

連邦政府が通関税を全面廃止したのは、商業振興のためだけではない。反抗的な領主たちが、通関税を担保として戦費を調達するのを予防するためでもあった。これはうまくいった。商人たちは歓迎したから、儲け損なった両替商も渋々ながら従うよりほかになかったわけだ。

関所が廃止され、領主たちの工作員が蠢動する余地ができたが、強力な防諜組織が抑えこんだ。ドワーフ族などが持っていた金銀鉱山を保有して、財政に余裕ができたことも寄与している。

しかし、政治的な圧力をかけた以上、どこかに歪みが出てくるのは必然だった。現に、状況を最大限に利用しようとする輩がここにもいる。

「愛国団体たるもの、積荷をごまかしたり、さらってきた花売り娘を無理やり好色な客にあてがったり、禁制品を二重にした樽の底に隠すようなことはしないだろうに」

斬り込むようなフリーデルの視線を横目に、ゼニー口は胸を反らせて答えた。

「あの上きは飯が食えなかったからですよ、ダンナ。それともなんですかい。食屍鬼のグール族のように、墓を暴いて食えとでもおっしゃるんです？」

「勘違いするな。グール族が先祖の柩を開けたのは、埋葬品を売って飢えをしのぐためだ。おれは、凶作で泣く泣く墓を掘り返した彼らと、卑劣な手段でドワーフ族の荷役を横取りするような下種たちとを一緒にするつもりはない」

「それこそ誤解ですよ。ただおれたちがヤツらより安い賃金で荷役を引き受けただけです。馬車馬を飼うよりも安くあがるって、みんな喜んでいますよ。おれたちの活躍で荷主も店主も喜んでますし、結果的に物の値段も安くなりますから、買い物客も大喜びです。で

きる限り多くの人々を幸せにしていくのが、連邦政府の方針でもありますからねえ。われわれが悪いというのなら、政府が悪いということになるんじゃない？」

きれいごとの裏面に、企みが浮かんで見えた。安く引き受けて商売敵を消し去り、それから賃金を引き上げていく。独占すれば、手数料決定の主導権を握るのはたやすい。

「口数が多いせいかな。まっとうなことを言っているはずなのに、全然感銘を受けないのは」

ゼニー口は横を向いて、唇の端で笑った。

「気にしなくてもよござんすよ。世の中、民族と同じ数だけの見方がありませんからねえ。それにしてもダンナ。ずいぶんとグール族をかばいますねえ。まるでダンナがグール族みたいですぜ」

「だったらどうした？」

グードは冷然とゼニー口を見据えた。

別に隠しているわけではなかった。それに、隠しても無駄だとも思っている。過去は捨てられても、消すことはできない。一度押された反乱者と食屍鬼の烙印は、一生ついて回る。

ならば、食屍鬼として生きていくだけだった。この世にはびこる腐りきった人間どもを、一人残らず喰らい尽くし、無に返す。それが一番自分にふさわしい生き方のような気がしていた。

フリーデルがさらに一步踏み出した。三角帽をさらに深くかぶり直している。

「いよお、赤の他人の兄弟。ずいぶんと威勢と景気が良さそうじゃないか。さあて、かつこよくて果てしなく強いこの沿岸巡視官のフリーデルさまに、さっさと金儲けの秘訣をお教えしないか」

目つきは見えない。ただ口元には、虚勢ではない不敵な笑いをひらめかせていた。右手はわざとらしく遊ばせているが、いざとなれば取り囲むゴブリン族たちをひるませる隙も与えずに首を跳ね飛ばせるだろう。あだ名の由来は、廉潔さによるものだけではない。

「早く樽の中身を見せろ。おれは醜男の減らず口ほど嫌いなものは

ないんだ」

グードはゴブリン族の荷車に目をやった。大小二種類の樽がぎっしりと積み重ねられている。大きい樽が荷台の大部分を占めていて、小さい樽は後側に申しわけ程度に置かれていた。樽どうしの隙間を埋めるように、野菜や小麦が詰まった黄麻袋わしちまが載せられている。

新入りらしい手下の一人が、荷車から大きな樽下ろそうとした。しかし、きつちり詰められているので、なかなかうまくいかなかった。悪態をつきつつ、小さい樽を邪険にのけ、小麦の袋をいまいましげに蹴り落とした。

ようやく樽を下ろして、ふてくされた顔を向けてきた。張り出した額としゃくれた顎とで、顔全体が縮んでいるような印象を与える。くりくりとした目は愛嬌にもなるが、荷役夫でのしていくには不向きだろう。

白目が赤くなっているのは、小麦の袋詰めに酷使されたからだろう、とグードは察した。細かくなった籾殻が目に入ると、しばらくのあいだ痛みが治まらなくなる。皆が嫌がる仕事は、新入りに押し付けられるものだ。街道の優先通行権をとるためには、かさばるばかりで大して利益の出ない小麦でも、とりあえず積み込まねばなるまい。

蓋が開けられた。中には、赤と緑の海藻がぎっしりと詰まっている。真水で洗っていないらしく、強い磯の香りが漂ってくる。

「ご覧のとおり、海藻ですよ。このあいだの洪水で、流木とともに浜辺に打ち寄せられたものです」

「ファイルスは森の街だぞ。海藻など何に使うんだ。お前たちの顔にでもなすりつけるのか？」

「潤滑材ですよ。あつちで伐り出される巨木は、車軸が折れるほど重いものですから、荷車ではなく下に丸太を敷いて運びます。そのとき、海藻のぬめりを丸太に塗るわけです。昔は海獣の脂を使っていたんですが、匂いがひどうございましたからね。あと、水車小屋の歯車にも塗ったりもしますけど。海藻の利点は使い終わったら、

焼けば塩まで採れるところにもありますんで。とにかく高く売れるんです」

ゼニー口の顔色をうかがいつつ、手下は答えた。

「元手はただで、儲け放題か。世の中不景気なのに、向こうの連中はずいぶんと金払いがいいんだな」

「なにしろフィルスから街に伸びる道はこの一本だけで、こちら側からしか送れませんからねえ。人間、塩がなくては生きてはいけませんから、値段はつけ放題ですよ。なにしろ専売みたいなものですからね」

「それが、ゴブリン族のやり方がい。ずいぶんと麗しい行動じゃないか？」

「きれいごとを言っても、商売は略奪と同じです。あるところからしか取れません。それだけのことですよ」

いきなり、ゼニー口が手下の頬を張り飛ばした。手下はよろめき、腰から落ちた。

「おめえ、余計な口数が多くねえか。そんなことじゃあ、長生きできねえぜ」

「すみません」

グードは目を細めた。安っぽい喜劇であっても、ここまでわざとらしく演じはしない。見せつけるように殴るゼニー口もゼニー口だが、咎められながらも悪びれたようすがない手下も手下だった。

説明には間違いはなさそうだが、多弁なのが気になった。何かから目を反らさせようとしている感じがした。盗んだ香木を、森に隠すような小賢しさがある。

「おれたちは貴様らの商道德には興味がない。で、こっちのは何だ？」

グードは荷車の隅に置かれていた小さめの樽を指し示した。何か白い粉状のものが表面にこびりついていて、黒葡萄酒と押された焼印を覆い隠そうとしていた。塩ではなさそうだった。虫が湧くのを防ぐためなら、もっと全体を覆うように塗る。

別の手下が、一面倒くさげに樽の中身を見せた。牡蠣の殻が、ぎっしりと詰められている。

「見ての通り石灰の原料です。焼いて砕いた貝殻を、さっきの海藻と混ぜて外壁を塗ったり、石の隙間を埋めたりするのに使います。洪水で石垣が崩れましてね。復旧作業のせいで、いくらでも需要があるのです」

見え透いた嘘だ、とグードは思った。いくらでも需要があるのであれば、こちらを多く積むはずだった。工事用の建材ならば潤滑財としての海藻より、はるかに高く売れる。塩が必要不可欠で値段をつけ放題だというなら、海藻を焼いて塩だけを運んだほうが利潤は大きいはずだ。

自らの強欲さを主張しておきながら、みすみす儲け話を見逃すのは論理の整合性に欠ける。推察すると、貝殻の量はそれほど必要としないものの、どうしても運ばなければならぬ理由があることになる。

それは、狙い定めた獲物につながっていた。

「そうか。おれははてつきり、幻惑草と一緒に噛むために使うのかと思っただけだな」

石灰を幻惑草で包んで噛むと、効果が倍増する。最近流行し始めた方法だった。安上がりながら、それなりの多幸感が得られる。

それに石灰そのものが、幻惑草の精製に用いられているはずだった。

ゼーローの目つきが変わった。反抗的だった頃の鋭さが戻っている。

「ダンナ、ご冗談がすぎるんじゃないやありませんかい？」

フリーデルが、肉食獣のしなやかな動きで間に入った。

「それならもつと愉快そうに笑ったらどうだ、赤の他人の兄弟。こちの強そうな兄弟はな、首都ではなぜか、道化のグードと呼ばれているんだ。おかしいだろう。別に面白いことをしているわけでもないのにな」

かつて上層部の命令で、領主の護衛をしていたことがある。無駄口を利かず、常に傍らに寄り添っていたのを見た同僚が、意図的に広めたのだろう。

「笑いにも色々ありますからねえ。冷笑、憫笑、嘲笑とね。ただ、道化つてのは言えてまずせ。権力者を笑いものにしようとするところなんかとくに。だからいまだに出世もできないんでしょうがね。どうやらダンナもその口でしようねえ」

ゆがんだ唇から、黄色い乱杭歯がのぞいていた。

幻惑草を噛んでいると、石灰の何かが影響するのか、やがてだんだんと歯が朽ちていく。快樂の代償にしては、あまりにも大きい。だから、荷役夫のような仕事をする人間しか多用しない。

これ以上訊ねても効果はなさそうだった。それに末端の連中を捕まえてもまったく意味がない。泳ぎ疲れるまで、泳がせたほうがいい。

釣り針を刺しておくか、とグードは思った。荷役をつかさどる人間は、商人に対抗するために独自の情報網を持つ。餌の活きがよければ、大魚がかかるはずだ。

「よく聞け、ゼニー口。あのおきおれの前から逃れられたのは、口が堅かったからではないぞ。泳がしたほうがいいぐらいの小物だったからこそ、釈放したのだ」

憤怒の表情に変わったゼニー口に、顔を近づけた。口元から、かすかに生魚の匂いがした。香料の匂いも混ざっている。幻惑草の青臭い匂いをごまかすのによく使われる手段の一つだった。ニンニクよりも安い。

グードはまわりを見回して、念を押した。

「幻惑草を追っているのが、おれ一人だと思ちなよ。こちら側のやり方は熟知しているだろう。敵を困い込むように味方を作るのもいいれば、敵の中に味方を作るのもいる。だから、お前の手下の中にも潜り込んでいるかも知れんぞ。それからもう一つ。心にやましさを感じたら、首筋の傷を思い出せ。そうすれば、笑って死んでいける

はずだ」

鉄の統制力を誇る団体ほど、忠実な手下と、制裁を恐れる内通者との区別はつきにくい。疑心を植えつけるのには格好の条件が揃っている。揺さぶれば、どこかで必ず隙を見せるに違いない。

「ようくわかりましたぜ。ダンナもお気をつけて。森の夜道は暗いですからね」

ゼニーロは吐き捨てるように言った。

「よし、さっさと行け。儲けの機会を逃すのは、まっとうな荷役夫のやることじゃないだろう」

グードは、去り行く背中を眺めながら考えをめぐらせた。

やはり、ファイルスに何かがある。金回りの良さといい、積荷を運ぶ連中の行動といい、怪しすぎる。商品が集まるのは市場だが、金が集まるのは商工組合だ。ならば、まずそこから攻めるべきだろう。ちよつど組合長が経営する酒場があつた。潜りこめば、なにか手がかりがつかめるかもしれない。

不意に、フリーデルに肩を叩かれた。見上げる顔には、困惑の表情があつた。

「おい、グード。どうするよ？」

指し示す方向に目をやると、まだ立っている少年の姿があつた。膝の笑いは消えていた。いつの間にか、こちらに怒りの視線を向けてきていた。

こついつた展開は、苦手だった。悪人や同僚たちに対しては、いくらでも言葉が出てくる。しかし、純真無垢そうな少年が相手では、なんとやっていいかわからない。

気持ちを汲んでくれたのか、そばにいたフリーデルが少年の肩に手を伸ばした。

「少年、大丈夫か？」

「うるせえ、子ども扱いするな」

手が、邪険に払いのけられた。驚く姉を後ろに回し、今度は、こちらを交互に睨みつけてきた。殴られて腫れている頬よりも、顔全

体の赤みが勝っている。

目の輝きは失せていなかった。むしろ逆に強い光がこもっていた。まっすぐな男に育つに違いない、とグードは思った。未来をつかもうとする目とは、こういったものかもしれない。

「お前ら、役人だな。おれは、ゴブリンどもより、お前たちが大嫌いだ」

「理由を、聞かせろ」

突き出された指の前に、グードは進み出た。一人前の男として、聞いてやる気になった。

「おれの出身地は、はるかフィルスの先の山を越えたところだった。おれの爺さんと親父たちが、懸命に毒虫と戦い、沼を埋め立ててこしらえた土地だ。家も畑も作った。水つばいけど、石の炭も出た。実り豊かな土地になるはずだったんだ」

振り返るような話し方が、気になった。

「だった、とは？」

「ある日突然、何ヶ所かの領主の騎士たちが揃ってやってきて、ここは緩衝地域となったからさっさと出て行け、と言った。こちらの言い分は完全に無視されて、そのまま追い出された。たったの一言でだ。家は壊され、畑は焼かれた。謝罪の言葉も、一枚の銅貨もよこさなかった」

領主たちの言いぶんは理解できた。不毛の土地だからこそ、領有権がいまいとなり、結果として均衡が保たれているわけだった。土地に価値ができれば、争いが生まれ、お互いに傷つくことになる。生存圏に軍事的空白は存在しえないと、法科大学でならったことを思い出した。

ならば初めから、問題は存在しなかったことにする。内務省のやり方と同じだった。

フリーデルが、三角帽のつばを上げた。細めた目が、少年に向けられた。

「連邦政府に訴えなかったのか。居住権の認定は、元老院の護民委

員会が持っているはずだが？」

「もちろん、訴えたさ」

声が、潤んできていた。無力さからくる悔しさのせいだと、痛いほどわかった。

「なけなしの金を集めて、おれの親父と爺さんが代表として、フォルトファーガまで陳情に行った。けど、けど、元老院は審議してみるの一言で、そのまま放置された。旅費が尽きれば、あきらめるだろうと思っただに違いないんだ」

元老院にも、複雑な利害関係がある。領土問題を下手にいじると、元王族や領主で構成されている枢密院の機嫌を損ねて、政治が混乱するおそれがある。あるいは、面倒を嫌う領主たちが出した多額の贈賄に揺さぶられたのかもしれない。

あるいは、騙し取られたのかもしれない。誰でも入ることができる元老院議員会館の大広間は、詐欺師の巢窟そうくつでもある。議員を紹介するといつて、大広間で待たせ、金が尽きるまで面会を引き伸ばす。よくある手口だった。市民に開かれた議会政治を利用して、利益を貪る輩は少なくない。

フリーデルはうつむいた。帽子の陰が、顔を覆った。続きを聞きたいようでもあり、聞きたくなさそうでもあった。意を決して少年に訊ねるまで、少し時間がかかった。

「それで、爺さんと親父さんはどうしたんだ？」

「いねえよ。とつくの昔に死んじまった。酒場でヤケ酒あおって、ケンカに巻き込まれちまってな。けっ、ざまあねえよな。酒などに逃げやがって。おかげで、おれたちは皆から白い目で見られてこのざまさ」

少年は、破れた服の袖で目を何度もこすった。

違う、とグードは悟った。なんとか生きようとした意志があるのに、つまらぬいさかいで死ぬ理由がない。もしかすると、内務省が密かに処断したのかもしれない。あの四人組のように、金目当てで動く連中は他にもいるはずだ。

それとも、自分か。覚えはないとは言えない。伝達者から命令を受けるままに、処断したこともある。

不意に、何かがかみ上げてきた。しかし、すぐに消えた。一瞬だったので、嫌悪感か、それとも怒りなのか、まったくわからなかった。

何かの感情があつたとしたら、対象は、少年に向けられたものなのか、領主たちに対するものなのか。あるいは内務省、それとも元老院なのか。もしくは、自分自身へのものか。それも、まったくわからない。

借りを返すために、自分を殺してきた。そのツケが回ってきている。

心が、魂を喰らっているような気がした。

「こいつらに言っても仕方がない。行こう、姉ちゃん」

気がつくと、少年はさつさと荷車を引いて、海沿いの街道へ出ようとしていた。

グードは、何度も何度も頭を下げる少女の前に、フリーデルを押しやった。

「ちようどいい、こいつの帰り道だ。送らせよう。腕前は、そこいらのゴブリン族が束になっても負けないくらいはあるから、安心してくれていい」

「負けないくらいじゃないが、まあよしとするか。か弱き乙女を守るのは、騎士の役目でもあり、おれの生きがいでもあるからな」

少女は、嬉しそうな顔になっていた。よほど、心細かったに違いなかった。

「道すがら、詳しい事情を聞いてやれ、フリーデル。柔軟性のある貴様なら、なんか手段を講じてやれるだろう。ああ、それから」

グードは、懐から銅貨が入った革袋を取り出した。押し付けるように、フリーデルに渡す。

「これを渡しておいてくれ。商売の元手には足りないが、少しは楽になるだろう」

「怒鳴ってつき返すほうに、金貨百二十枚賭けるね」

「誰が恵んでやると言った。手がかりを教えてくれた報酬だ。ゴ布林族が幻惑草に絡んでいるとすれば、商工組合にだけ注目すればよくなった。手間を考えれば、安い買い物だ」

「お前はどつするんだよ。世の中、金がないのは首がないのと同じだぞ」

「フィルスまでは一日しかない。あとは、歌がある。歌っている限り、日銭が入る」

「じゃあな、とグードは身を翻した。

「やれやれ、といった声を聞き流しながら、フィルスへと続く西の街道に向かう。革袋がなくなったぶんだけ、足どりが軽くなった気がした。それでもまだ、借りは残っている。

「時はずれの海風が、外套を煽るように吹き付けてきた。

「任務を全うしろ、と背中を押されているようでもあり、さっさと出て行け、と言っているようでもあった。

「どのみち似合いの風だ、とグードは思った。

## 第五章 蒼茫の標

### 第五章 蒼茫そうぼうの標

グードは、折られた小枝から葉を取った。

内通者との連絡は、できるだけ目立たない手段を用いる。

木の根元には、小便の跡があつた。小用をするふりをして列から抜け出て、慌てて付け文をしたためたようだ。手のひらに当てて爪で書いたらしく、暗がりでは読めそうにない。

とりあえず懐に入れて、フィルスに向かう街道へと戻った。

満ちつつある月が、踏み固められた土を青白く照らしている。人為的に置かれた小枝と小石が、ごく小さな目印となつて浮かび上がっていた。

川のせせらぎの合間に、フクロウの鳴き声が遠くに聞こえた。風は凧いでおり、青い草の湿った香りだけが鼻に届いていた。

ふいに、道の奥から金属音が聞こえてきた。修道院で小間使いの男が鳴らす、修道女除けのベルに似ているが、余韻を残さない点で異なる。

目を凝らすと、一人の男が見えた。細い半身をうつむきかげんに丸め、長い足を引きずるようにしてこちらに進んでくる。

大きめの麦わら帽子を深めにかぶり、貫頭衣に似た麻の服を身にまとっている。腰のベルトには鎌と砥石が下げられていて、歩を進めるたびにぶつかり合い、音のもとを作り出していた。刃が薄いせいで、ベルのように聞こえたのだろう。

フィルスは森の街だから、良質の牧草は採れないはずだ。だから牧童は、遠くまで草を刈りに行かねばならない。日没まで懸命に働いて帰路に着くところと考えるのが、いちばん素直な見方といえる。街道沿いには、家と船宿が点在していた。

大股で五歩、といったところで男は足を止めた。

「お寒うございます」

「ゼニー口に行けと言われたのか？」

グードが声をかぶせると、下げかかった頭が、途中で止まった。麦わら帽子のつばがわずかに上がった。とがり気味のあごが、ぼんやりと見えた。口元は、よく見えない。

「なぜ、おれが刺客だとわかった？」

二十歳前後の若い声だが、上ずった調子はない。否定をせず、すぐさま認めるところなど、それなりの覚悟がうかがえた。油断するな、と言い含められたかのようなうた。

「その鎌だ」

「くふつうの草刈鎌だろう？」

「いいや、違うな。おれは農村出身だからよく知っている。草刈鎌は、すぐに刃の切れ味が悪くなる。だから砥石を携帯するのは常識だ。そこまではいい。問題は、その薄い鎌の刃だ。ふつうは湾曲しているから、研いでいくうちに、月が欠けるように刃が痩せていくところが貴様のは、真っ直ぐで薄い。まるで、首を狩るためだけに打たれた得物のようだ」

グードは少しだけ安堵した。内務省から放たれた刺客なら、このようにすぐばれるような失態は犯さない。やはりゴブリン族の連中が差し向けたと考えられた。

男は、腰に下げていた鎌を右手に取った。柄をいじると、軽やかな音を立てて鎖が垂れ下がった。左の膝あたりに分銅が揺れている。「さすがに見事なものだな。察しの通り、おれは首狩りのデュラハン族さ。あんた、グール族なんだってな。夜は長い。神に嫌われた者どうし、とくと語りあうってのはどうだい？」

どうやら足止めする心積もりのようだった。フィルスに逃げ込んで、市場で積荷をさばいたら足がかりが切れる、と連中は踏んだらしい。

すぐに戦いたいのが、気がかりな点があった。刺客を放つからには、首尾を見届ける連中もぬかりなく寄越しているだろう。場合によっ

ては、加勢のかたちで背後からの襲撃を企てるかもしれない。あたりは茂みが多く、隠れる場所には事欠かない。厚手の外套は、飛び道具に対してそこその備えにはなるが、完全に防ぎきるほどではない。毒を使われたら、浅手でも危なくなる。

まずは、第三者の存在を調べることだ。

グードが考えをまとめたとき、ほんの短い悲鳴が上がった。茂みが騒ぎ、半裸の二人が街道に崩れ落ちた。その上を見慣れた男が、跨いで出てきた。フリーデルだった。反りの入った剣を、優雅な身振りで鞘に収めている。

「やあ、諸君。もう邪魔は入らないから、安心して続けてくれたまえよ」

「あの二人を、きちんと送り届けたのだろうか？」

「もちろんだとも。騎士に二言はない。お前と違って約束も守るってわけさ。妖艶な美人ばかりを相手にしていると、可憐な少女との会話がやけに新鮮に感じるな」

どうやら途中まで、馬で駆けつけてきたようだった。着衣が乱れているのに、息が荒くないのはそのせいだろう。

襟元を正したフリーデルは、脇に立つ男を舐めまわすように見やっただ。

「若いくせに古いなあ、お前さんは。格好も考え方も。まったくもって麗しくないぞ」

麦わら帽が真横をうかがうように動いた。

「なんだ、あんた？ おれをあざ笑うつもりか」

「いやいや、むしろ同情しているのさ。この大男は強いぞ。それ以上、形容できないくらいに。とりあえず尻尾を出したんだから、さつさと丸めて逃げることだ」

「デュラハン族は、敵に背を向けない。たとえ、どんな巨大な敵であつてもな」

事実だった。連邦政府の軍隊がゴンドランド大陸を征服していく際の先陣は、常にデュラハン族がつとめていた。宣教師たちに導か

れて死を恐れずに戦ったために、狂戦士とまで呼ばれ、敵から恐れられていた時代もある。

味方の死体を踏み越えて前進し、死ぬまで武器を振り回す。首を刎ねられても突撃してきた、との言い伝えも存在していた。宣伝のために誇張されたのだろうが、性向をよく表している。

勇敢さと粘り強さはドワーフ族も持っているが、神に盲従はしない。兵士として利用しやすかったのは、デュラハン族だったろう。死んだとしても、神のお導きで済ませられる。報酬は首狩りの免罪と、天国への招待だけだ。国庫は少しも痛まない。

フリーデルは、わずかに肩をすくめた。

「そいつは、よくわかる。お前さんは個人でおれは集団を相手にしている。違いはそれだけだ」

「どういう意味だ？」

「要するに、おれたちは同族だつてことさ。まあ、好きにしなよ。こっちはこつちで好きにするから。食屍鬼と首狩り族との戦いとは、素晴らしい見世物ではある」

グードは、横目を使った。木の幹に体を預けるフリーデルの姿が目に入る。軽口を叩く余裕のありそうな口調に、疲労感とは違った気だるさが混ざっているようだった。

デュラハン族とは、初耳だった。日頃から首狩りのフリーデルと言っていたのは、別に自嘲ではなく、出自のデュラハン族としての生き方を貫こうとしていたのかもしれない。

過去を引きずってはいるが、決してすがりついてはいない。自分と同じだ、とグードは思った。軽薄そうに見えながらも、嫌悪感を持ってなかった理由がわかった気がした。

嘘だ、と男はきっぱりと首を振った。しかし、分銅が心の動揺を表しているかのように大きく振れた。打ち消すかのように、分銅を回し始める。速度が上がり、巨大な盾となった。足元から、かすかに砂埃が舞い上がってくる。

「騎士になつたデュラハン族など、いるわけがない」

「至極ごもつとも。父親が死ぬときまで、おれも信じてなかつたらな。しかしまあ、世間は世界と同じぐらい広いのさ。さつさと麦わら帽を脱いだらどうだい。自分がいかに視野が狭かったかよくわかるぞ」

「笑わせるな。政府に媚を売っただけだろうが」

「そう言いなさんな。だから、先祖が売ったものをせつせと買い戻しているんだ。まあ、美しいものに限るがね」

二人の会話の隙に、グードは、外套の下から柄に手をやった。すぐに、男が飛び出た。左手が伸びる。分銅。剣に飛んだ。右にかわす。風を切り、外套が激しく叩かれた。左の耳朶が熱くなった。逆に、首筋は冷たく感じた。

細く息をついた。

男は、こちらよりも少し背が低い。麦わら帽子のつばは大きく、視線の先にある狙いを読むことができない。

分銅をわざと外したと考えられた。こちらの得物を見て、剣先が届かない位置で間合いをとろうとしたつもりだろう。得物を叩き落とせば、ぞんぶんに鎌を振るえる。

予想通り、鎖が伸びた。今度は頭上で回し始める。目の前で、左から右へと分銅が飛んでいく。右手の鎌は、刃先をこちらに向けていた。

「寂しがる気持ちはよくわかるぞ。お前さんは左利き、いわゆる悪魔の手だものな。その手で鎌を使っているのなら、村で仲間はずれにされても当然だ」

グードは、男の右手に目をやった。たしかに刃の位置が逆の、左手用の鎌だった。

左利きは散開して戦う前衛の戦士としては希少価値があるだろうが、農村では忌避される。一列に並んで穂を刈り取っていくとき、一人だけ左利きがいれば、隣の間が危なくなる。だから、仲間はずれにされる。農村はおしなべて排他的だ。頑迷な人間は疎外され、追い出される。

男の上半は、微妙に左右に揺れている。踏み出す癖を悟られまいとしているようだ。

牽制のために、足元の小石を蹴った。男は動かなかった。膝に当たって、草むらに跳ねていった。

二歩、下がってみた。男は両足で軽く小刻みに飛び、間合いを詰めてきた。あごが少し動いた気がした。狙いを読んで、笑っているのかもしれない。

剣が使える間合いも、抜かせてくれる隙も与えてくれそうにない。頭上で光る楯円の光輪から、殺意のこもった闘志が読み取れた。

「左利きは、直そうと思えば、直せたはずだ。生き方が素直じゃないねえ。こう、ねじくれているっていうか、まったく美しくないぞ。お日様に当たってないせいじゃないか？」

「黙れ、と言ったはずだぞ」

「同族のよしみで忠告をしているだけだ。せつかく、大きな麦わら帽子を持っているんだから、昼間に汗を流して真面目に働けよ。お前さんは健闘した。だから引き分けでいいじゃないか。ゼー口に告げ口するのはいなくなった。利き手とともに、人生をやり直す最後の機会だぞ」

男は、聞くそぶりを見せなかった。空気を切る音で消し去ろうとするかのように、分銅をさらに速く回し始めた。

グードは半歩だけ左足を引いた。フリーデルの長広舌が、助言に聞こえた。

鎖つきの武器は、当てるまでいいが、当てた後の制御ができない。重い鉄球なら惰性で動くだろうが、小型の分銅ならそうもいかない。しかも、鎖が長い。だから、利き手で扱う利はないと読んでいた。

しかし、分銅が主な攻撃だと仮定するとどうなるか。

大きめの麦わら帽は、顔を隠すためではなく、分銅から頭を守るためのものではないのか。ボロ布を詰めるのにはちょうどいい。あるいは鉄の鉢かもしれない。

軌道を、剣で変えることはできない。抜く前に踏み込んでくるだろう。もし当てたとしても、身が折れるか、手が痺れて使えなくなるに違いなかった。

しかし、ひとつ手はある。

グードは決めた。湿った手のひらを外套の内側でぬぐい、息を整える。

無言で、前へ跳んだ。

男は声を出した。気合が漲っている。右から横薙ぎに分銅が迫る。首を下げ、右手で外套を跳ね上げた。舞って、当たった。軌道は狂わないはずだ。しかし、隙は出来る。右にまくれた外套も、剣を抜く邪魔をしない。

柄を握り、剣を抜きはなつ。地に左ひざをつけて、横撃を入れた。胴体に手ごたえ。振り抜いた。外套が眼前にかぶさった。視界が暗転する。何も見えない。

分銅が肉に当たる音が聞こえた。か細いうめき声があり、倒れる音が続く。

外套が落ち、視界が晴れた。見ると、分銅が男の体にある。鎖が巻き付いていた。

細身の体が小刻みに痙攣をし、すぐに治まった。

勝った、という気はしなかった。ただ、済んだ、としか思えない。大きく息をついてから、ゆっくりと立ち上がった。剣を収めた鞘が、重く感じる。

フリーデルは無言で屈みこみ、男の右袖をまくった。

裏側に、刺青が入っていた。中央に輝く太陽らしき模様があり、お互いの尾を噛むようにして、二匹の蛇が周りを囲んでいる。片方が白く、もう片方は黒い。

「これは？」

「蛇はデュラハン族にとっての神様さ。宣教師が広める前のな。この男は、どうやら呪術師の家柄だったらしい」

蛇は草が枯れる冬に眠り、種をまく春に出てくる。だから、大体

の農村で、今でも水と農耕の神として祭られている。

それだけではない。蛇は脱皮をし、そのたびに成長していく。死と再生の象徴として、デュラハン族が敬うのもうなずけた。首を狩られることで被害者は人として死に、その首を祭ることで、神として生まれ変わって彼らに恵みをもたらすわけだ。

太陽が大地の恵みを、そして白蛇が生、黒蛇が死を表しているのかもしれない。尾を噛み合っているのは、死と再生の絶え間ない繰り返しを表現しているのだろう。

フリーデルは、次に左腕を見せた。

こちらにも、刺青が入っていた。乱れた黒髪の間人が彫られている。男でも女でもなく、中性的な顔だった。よく見ると、髪は蛇になっっていた。無数の黒蛇が頭から伸びていて、さまざまな姿勢をとっている。

「ひい爺さんの遺品だった盾にも、この紋章が彫られていた。もつとおつかない表情だったし、嫌いな蛇がいつぱいいるしで、身がすくむ思いがしたがね」

「呪術師なのに盾を持つのか？」

「いや、勇者の証だ。彼の家は、おそらく呪術師から鞍替えしたのだろうな。なるほどね、デュラハン族の勇者なら、政府の間人を嫌って当然だな。彼から見れば、こっちは許しがたい裏切り者だ」

「蛇の髪をもつ生首が、勇者の紋章となったのか」

「そうさ。蛇の数は、狩った首の数を示している。生首は呪術用で神様になるから、公のもので私有はできない。だから髪を少し切り取って勲章代わりに家に持ち帰って飾ったのさ。その名残で、聖獣の蛇となって生首とともに紋章となった。これだけ蛇が彫られていれば、勇者の家柄に決まっている。呪術師と勇者。まさにデュラハン族の選良だな」

グードはうなずいた。

左利きは直そうとしなかったのではない。左腕に勇者の証を彫るほどの家柄では、おいそれと直せなかったわけだ。直せば、先祖を

否定することになる。たとえ同族に追い出されることになったとしても、デュラハン族の誇りを貫いたわけだ。あるいは貫かざるを得なかったのか。

平和になれば、勇者は必要なくなる。といって、先祖から受け継がれたものを容易に捨てられるわけがなかった。選良の家柄となればなおさらだ。小さい頃の教えが、そのまま心に焼き付いているのかもしれなかった。

フリーデルは、麦わら帽を取って、男の目を閉じさせた。

「こいつの行き先がどこかは知らんが、顔を見る限りいいところらしい。せつかく眠りについたんだ。叩き起こされるのは不本意だろう。丁重に葬ってから、ファイルスに向かっても遅くはないだろう」男の顔には、苦悶の痕跡はない。積もり積もった業を清算したような、安らかな表情をのぞかせている。ようやく死ねた、といった感じだった。

顔立ちは整っていた。勇者となれば、それなりの女性と一緒にいる。連綿と続いた家柄に見られる、血の尊さが感じられた。捨てられない誇りのもとでもあっただろう。歯も整っていて、幻惑草を嚙んでいた痕跡はなかった。薬に逃避せず、苦難を正面から受けきってきたようだ。

民家から調達した農具で穴を掘り、男たちを寝かせた。始末の悪そうな土だ、とグードは思った。赤い粘土のようで、水はけが悪そうなうえに肥えていない。周辺の水を抜いて焼畑をしようとしても苦勞しそうだった。乾けば乾いたで土ぼこりが舞い、吸い込めば胸を病む。防ぐには牧草を植えるのが一番だが、それなら木を伐採して金に換えたほうがよほど利益が出るだろう。

麦わら男が一介の農夫としてやり直す機会は、ここにはなかったわけだ。

河原から持ってきた石で、全身を覆った。これなら野犬に掘り返されることはない。

フリーデルが、盛り土に白い花を植えた。手をはたき終えたところ

るで、グードは尋ねた。

「ところで、馬はどうした？」

「途中の宿屋につないでおいた。あとで部下たちが連れてくるさ。それまでゆっくりと散歩でもしながら行こうや」

「非常呼集をかけたのか？」

「いやいや、とフリーデルはとがり気味のあごを振り、さつとフィールズに足を向けた。

「面白そうな捕り物が見れそうだな、と言っただけさ。暇を持て余しているのは、おれだけじゃないからな」

しばらく無言で街道を歩いた。前後に人の気配がないのを見計らって、グードは訊ねた。胸の奥に、麦わら男へのわだかまりがあった。

「なぜデュラハン族は、宣教師を受け入れたのだ？ あの男のように、誇り高くて頑迷そうだが」

フリーデルは、さりげない所作で三角帽のつばを触った。

「首を狩れば狩るほど貧しくなったからだ、とひい爺さんが言っていたそうだな。凶作のたびに首を狩り、神として祭る。神だから、粗略には扱えない。霊験があればあるほど、祟りもより大きくなるからな。もちろん捨てるわけにもいかない。だから供物が際限なく増えていく。しかし、開拓する土地にも限度がある」

「収穫を圧迫したわけか。それでも、首狩りの風習を止められなかった。デュラハン族そのものの否定につながる。加えて周囲に畏怖されなくなれば、首を狩られていた他の部族たちからの報復もある。相手にしてみれば、意味もなく殺されたのだ。憎悪は、骨の髄まで染みているだろう」

「そういうこと。たまたま疫病が流行ったときに、聞きつけた宣教師たちがやってきて、病気を治していった。農業指導のおかげで、収穫も格段に増えた」

「諜報組織の常套手段だな」

宣教師たちは、滞在地で医者や教師の役割を果たすことが多い。

布教のためだけではなく、実利もある。腕のいい医者ならば、噂を聞いてはるばる遠くからやってくる患者から、現地の動向を探りだせる。教師であれば、両親の動静を子供に尋ねても怪しまれずにすむ。

「しかし彼らがきてくれて助かったのも事実。ここにきてようやくデュラハン族は、呪術師の呪縛から解放されたってわけだからな。ただの物語なら、めでたしめでたしで終わるんだろうが」

そこで終わるわけがなかった。フリーデルの曾祖父の時代には、まだ戦乱が続いていた。

共和政治と専制政治とは、水と油の関係にある。政治的な妥協は成立し得ない。当然のことながら戦闘は苛烈をきわめることになる。巧妙な機動で優勢を確保し、より有利な講和条件を結ぼうとする馴れ合いの戦術は、過去のものになった。

当初、政府の財政基盤は脆弱だった。高価なうえに信義に薄く、肝心なときに粘りがない傭兵を雇うわけにはいかない。市民軍は必然の産物といえる。

市民兵は防衛戦闘に効力を発揮する。補充が容易で、郷土愛が強い。数を頼りに押し寄せる王国連合軍の波に寡兵で立ち向かえたのは、城塞都市だったフォルトファーガの防衛力もさることながら、どこよりも高い建国理念を掲げていたからだろう。

敵を退け、攻勢に転じる段階になって、共和政体ならではの問題が生じた。

市民たちだけで外征を続けるわけにはいかない。拡張期にはどうしても人材が不足しがちになるし、戦闘による損耗が続けば、統帥に悪影響を及ぼしかねない。

諜報活動や外交にも限度がある。割拠していた領主たちに、利害を調整して団結する余裕を与えるわけにはいかなかった。大陸中部近くに位置するフォルトファーガは、地理的に包囲網を形成されやすい。

宣教師たちの活動を知って、執政官府は膠着状態を打開する決断

をしたのだろう。政府は、ときとして冷酷な決断をせざるをえないときがある。

「徴兵して、最前線で戦わせた。首狩りの罪を血で償え、と諭したわけだ」

「ご明察、とフリーデルはわざとらしく明るい声で答えた。微かだが、口元に歪みがある。

「実に巧妙だよ。宣教師の連中はこちらに来る前に、周辺の村全てを支配下に置いていたんだ。完全に包囲したうえで、棘だらけの逃げ道を用意したってことだな」

グードは違和感を覚えた。ただそれだけの理由で、死に物狂いで戦うわけがない。やはり、神に救いを求めていたと考えるべきだろう。贖罪の後の繁栄を夢見たに違いない。

そうなると、麦わら男の先祖が取った行動が見えてくる。呪術師としての威信が失墜したら、勇者となる以外に、部族の長として君臨する術はなかったのだ。左利きも、窮余の策だったのかもしれない。

「多大な犠牲を払って、戦乱は終結した」

「同時に、用済みとなった。利用するだけして、後は知らん顔だったらしい。ひい爺さんはかろうじて出仕がなくなったが、大部分の間は農村に戻らされた。教義に敬服して聖職者になろうとしたのも大勢いたらしいが、これもまたごく少数の人間だけだったそうだ」

「だろうな、とグードは口の中でつぶやいた。聖職者は、厳しい修練の末に、神との契約を交わして生まれる。得体の知れない、ましてや先祖が首狩り族だった人間と神とが容易に契約を結べるのであれば、修道院など必要なくなる。

もし仮に在俗の宣教師として生きようとしても、一般の信徒がいい顔をするまい。元首狩り族となれば、それなりの視線にさらされることになる。聖職者になれたのは、それなりの技能を身につけていた連中だけだろう。

「ちょうど、魔法使いの連中のように。」

グードはふと、レオンとのやり取りを思い出した。魔法使いの生き方に似ている。

宣教師も魔法使いも同じようなものだった。堂々と他人の土地に乗り込み、教導して味方を増やしていく宣教師が陽とすれば、敵地で人知れず動く魔法使いは陰といえる。白蛇と黒蛇のように、お互いがゴンドランド連邦政府のために尽力している。

双方とも、この世界を支えようとする強い意志を持っている。だからこそ、命を賭けられる。殉教者として、あるいは魔女狩りの犠牲者として死んでいける。

逆に過去にすぎらうとしている人間は、弱い。捨てられない脆さであり、己を持つとうとしない柔弱さだ。そう思えた。

麦わら男も、エルフ族のように確固たる己を持っていれば、世間と妥協しても生き抜けただろう。あるいはドワーフ族のように、孤高を貫く集団に身を置いてもいい。

グードは、心に問いかけた。自分こそ、どちらも持っていない。なのに、生きている。もしかすると、妄執によって生かされているのかもしれない。

「己を貫こうとすればするほど、住む場所がなくなっていくようだな」

つぶやきに似た声を、フリーデルは聞きとがめたようだった。

「おれはむしろはぐれ者でいい、と思っっているがね」

普段なら、女は陰のある男を好むからな、といった軽口が続く。

しかし、三角帽を深くかぶり直した仕草は、やけに錆びついていた。「監察局から沿岸巡視官に飛ばされて、初めて部下を持った。部下にも色々な人間がいることを知った。正義感に燃える男から、出世のために働く連中までな」

淡々とした口調には、出世主義者を排撃しようとするどげとげしさはなかった。

世の中には、何も無いところから這い上がるうとする人間もいる。階層化社会であっても、流動性があれば、連邦全体の活性化につながる

がる。万人が平等という連邦の基本理念は、ただの飾りではなかった。

建国の父と称された初代執政官のヴェルデーは、平等の精神をゴンドランド連邦政府の主軸に据えた。怨嗟渦巻く乱世の余韻が残っている中で、信仰心に訴えるわけにはいかなかった。過剰になると異教徒、すなわち被征服者への迫害へとつながる。

ヴェルデーの志のもとに、征服された領主たちは枢密院議員として名誉を保全され、体制に組み込まれていった。それぞれの民族も、居住人口比によって元老院の議席が与えられる選挙制度によって国政に参加させた。

平和が維持され続けたという点で、統治は成功と見なすべきだろう。問題は、ヴェルデーが善政による公共心や愛国心を醸成する間もなく、逝去したことだった。後継者たちは、自分たちには民族統合を推し進めるだけの求心力がないと悟り、力を担保に平等政策を推し進めなければならないと実感したに違いない。

格差を極力なくすためには、公平な税制と再分配政策が必要だが、実行するには強大な力がある。既得権益を自ら手放す人間は少ない。統制力を維持するために、内務省と兵部省の権限が強化された。

ゴンドランド連邦全体の国益となるならば、狡猾な政策であっても実行する。それはまるで、苦労を重ねて切り開いた道を、徹底的に舗装する行為に似ていた。反乱者という雑草を芽のうちに引き抜き、不平という穴を埋め、平らに踏み固めながら一步一步進んでいく。

平穩無事に過ぎていったのだから、結果的には正しい選択だったろう。ただ、隙間なく並べられた丈夫な敷石も、年月を経れば風化して丸みを帯びるし、轍のような溝もできる。定期的な手入れが必要だろう。

無言の歩みを同意と受け取ったのか、フリーデルが言葉をつなげた。

「連中は密輸犯を捕まえるという目的では一致団結している。ひと

つひとつはバラバラだが、まとまって共同体になっている。そう考えたとき、まるでモザイク画のようじゃないかと悟ったね。内務省の中にいて、せっせと悪を暴いていたときには思わなかったことさ」「どこにもはめ込めないかけらとして距離を置いて見れば、モザイク画の欠陥がわかると言いたいのだな？」

フリーデルはうなずいた。三角帽の羽根が、主人の意を示すかのように大きく揺れる。

「神になるかどうかは知らんが、人がいずれ死ぬのはたしかだ。だったらそれまで色違いの破片をせっせと取り除いて、美しいモザイク画を完成させてやりたくつてな。お前もそう思うだろう？」

「そうかもしれないな。完璧な世界は、ずいぶんと息苦しくなるだろうが」

秩序だった世界には、やはり違和感を覚える。安らぎに満ちた世界になるだろうが、それでは冥界と変わるところはないような気がする。活力のなくなった廃墟のような世界を望むのは、俗世を外れた宗教家ぐらいのものだろう。

もっとも、食屍鬼にはふさわしい世界なのかもしれないが。

グードは、軽く頭を振った。全てを捨ててきた人間の思考ではなかった。連邦からの借りを返していくだけでいい。

「なあに、この世界は広い。死ぬまでは生きられるさ。お月さまもそう言っているようだし」

中天にある月が、水晶玉のような冷たく冴えた光を放っていた。

グードは、懐から先ほどの葉を取り出した。月にかざして見ると、はつきりと文字が浮かび上がった。ただ一言「花」とだけ書かれていた。

せびり取った葉を、フリーデルは興味深げに眺めやった。

「ずいぶんとゼーロってのは恐れられているようだな。汗臭い男どもに、こんな乙女のような言葉を残させるなんて」

「意味は通じた。問題はない」

「こちらへの罖という可能性はなさそうだな。罖であれば、もっと

具体的に書くだろうか。つまり、内通者はあちらさんにはまだ特定されてはいない、か」

フリーデルは葉をちぎって、草むらに撒いた。

「だが逆に、疑心だらけの集団から逃げ出して逢引をする余裕はなくなつたな」

「別に構わん。犯罪組織の一掃は、おれのつとめだ」

おれたちの、な、とフリーデルは三角帽のつばを上げて、天を見上げた。月明かりを帯びた薄緑色の瞳が、不敵に輝いているように見える。

「とにかく、お前は宿で休むことだ。どうせ酒場が開くのは夕方からだろう。おれはそのあいだ、付近の散策でもするさ。呼び寄せた部下たちも、おっつけ来るだろうし」

お互いのんびりとやるうや、とフリーデルは意味ありげにグードの肩を叩いた。

浮遊感が消えた。

上昇気流に乗ったせいで、むしろ逆に吸い付くような感覚をレオンは覚えていた。緩やかに旋回しながら昇っているので、外側に振られる感じもあった。綿のような雲の中に入り、顔に吹きかかる風は冷たく湿つたものになつたが、鞍を通して伝わってくる翼竜の背中中は温かい。

出発してから五日が過ぎていた。大陸中央に広がる高原と砂漠とを東南に向かつて越え、コロンブエ山脈南端から北上するため迂回していた。予定より二日遅れたのは、極秘任務ということもあって、遊牧民や隊商たちの目をかわす必要があつたからだつた。

好天だが、油断はできなかつた。上空の風は平穏そのものだが、コロンブエ山脈から吹き降ろされる乾いた風と、東域海側からの湿つた風がぶつかる場所であり、気流が不安定になりやすかつた。と

くに山麓では突風に気をつける必要がある。

そう教えてくれたセラは、右前方にいた。雲を抜けて太陽の下に出ると、艶のある灰色の髪が白く波打ち、レオンの顎をくすぐるように波をうった。

首都に帰還してすぐ出立となったはずなのに、翼竜を操る声は鋭かった。声だけを聞いていれば、華奢な体から発せられたとはとても思えない。

「こら、早く降ろせ。吐くぞ、漏らすぞ。うわ、こええ。助けてくれ、死ぬ。てめえら、死んだら化けて出てやるからな。いや、死んでたまるか、ちくしょうめ」

先ほどから、後方にいるマークがかすれた声をあげていた。翼竜の背中に渡した鞍の端を、必死の形相でつかんでいる。長い首と鋭い歯との死角を求めた結果だった。安定している上体とは違い、舵の役目を果たす尻尾の揺れは大きかった。酔って蒼ざめた顔のぶんだけ、赤くなつた瞳が目立っている。

うるせえ、と隣にいたジェーガンが怒鳴った。顔は、広げた翼の先端部分に向いていた。

「おめえも魔法特機隊の副隊長なら、効きもしねえ呪詛じゃなくて、ちったあ前向きに酔い止めのまじないでも唱えてやがれ。地形が頭に入らねえだろうがよ」

「こ、このヒゲ野郎。ま、魔法使いを侮辱するんじゃないやねえ。お、覚えてろ。魔法が使えるようになったら、じ、自慢のヒゲを真つ先になんとかかしてやるからな」

「ぜひ、そうしてくれ。手入れの手間が省ける」

へこまされたマークは、押し黙った。しばらくすると風を捉えたのか、翼竜は滑空を始めた。セラも一息ついたようだった。

体勢が安定したところで、レオンは再び前方を見た。吸い込まれるように広がる青空の下に、広大な森が見える。木々が密生しているせいで緑が濃い。目をこらすと、地平線近くに川らしき線が鈍く光っているのが見えた。その上を、鳥らしき黒点が動いている。

「隊長。ファイルスが見えてきました」

セラが振り向いた。なびく髪から、細面の顔がのぞいた。狩猟民族であるエルフ族の血を引いているせいか、他の誰よりも早く目標を見つけられる。遠くを見るだけなら、マークの能力を凌駕していた。

ただ、全ての偵察を任せるわけにはいかなかった。残念ながら夜目が利かない。おそらく青い瞳の色のせいに違いなかった。

セラは、絵の具を使う肖像画家よりも、無彩色の石材を用いる彫刻家が興味を持ちそうな容姿だった。

涼しげな目元に据わる瞳は、白砂を敷いた中央海のように青く澄んでいる。肌は浅黒いながらもなめらかで張りがあり、陽光にきらめく髪とともに、存在を浮き立たせている。会話で控えめに動く唇は、まるで風にそよぐ赤い花びらのようだった。

整った顔立ちながら彩色がちぐはぐなのは、夜目と同じで血の気まぐれとしか言いようがない。しかしながら、神秘性が求められる占い師としてはたぐい希なる素質といえた。

四分の一しか血が入っていないせいだろう。エルフ族の面影は、やや大きめの耳にしか見られない。魔法使いの血も、同じく四分の一だけ入っている。

僻地に住み、排他的な行動をとりがちなドワーフ族と違って、大家族主義をとっていないながら、交易などで積極的に多民族と交わってきたエルフ族ゆえに、混血は多い。

「様子はどうだ？」

「街の周囲に、洪水の痕跡が見られます。そのせいでしょうか、西と南の二ヶ所で橋が落ちています」

「最近か？」

「いいえ、水が澄んでいますので、少し前あたりかと。川面にさざ波が立っているのは、水が引いたせいでしょう。普段は浅いようです」

「山までさほど距離はねえのに橋が落ちるほどの出水があるってこ

とは、上流は傾斜がきついつてこつたるうな。いつも水がきれいだったのなら、地盤が固くて岩も多いつてことになるし。上流から筏で贖金を運ぶのはきつそうだ」

ジェーガンが、自分に言い聞かせているようにつぶやいた。鼻の下を掻いて集中している姿を認めたとよすのセラが、レオンに向き直つて言葉を添えた。

「それから上流にあたる西側で、崩れた外壁の修復工事をしているようです。詳細はよくわかりませんが」

「街の中はどうだ？」

「中央部に灯台が見えます。それほど新しいものではなさそうですが」

レオンは唇を引き結んだ。海に面していない都市に灯台があるのは、治安が悪い証拠かもしれないなかつた。街の内外で、夜間に騒動が起こつたとき、すぐさまその場所を照らす。威嚇の効果もあるし、場合によつては、伸びる光の先に警備隊が出動することもある。真下はおそらく監獄になっているはずだつた。

不景氣の影響が及んでいるとすれば、治安が悪くなるのも無理はない。賃金を削られ、仕事にあぶれた職工たちが、酔いまぎれの憂さ晴らしに暴れ出すことはよくある。周囲が見晴らしの悪い森なので、盗賊団の存在も考えられた。

翼竜は、大きく東に回りこんだ。数度羽ばたき、高度を上げる。道が見えてきた。木々の緑で、赤土色の線が浮かび上がつて見える。川に沿うかたちで東の港町ポーミラに伸びていくものと、北の森に向かう直線道路の二本だけがフィルスから出ている。山脈に伸びて行く西の道は細く、途中の空地で途切れているようだつた。

レオンも街の場所を確認した。上流には水車小屋らしき建物が密集している。粉挽き小屋にしては数が多すぎるので、紙料を潰すためのものだろう。

東の街道以外は、私道に違いなかつた。直線に引かれているのは軍用道路の特徴だが、木々がせり出している点で異なる。軍用道路

では奇襲を避けるために、道路脇の木は伐採して視界を確保しなければならぬ。

「西の空地は伐採所らしいな」

「北にもあるようです」

性分なのか、セラは一言一言考えながら、求められた答えだけを率直に述べようとす。占い師として振舞うには少しもの足りなく感じられるときもあるが、作業員の資質としては優れたものかもしれない。

「非常時の用材確保のために周辺での伐採が法律で禁じられているとはいえ、わざわざ遠くから運んでくるようだな。西の道から伐り出したほうが楽だろうに」

「木材は重くてかさばるので、輸送にそれなりの人員と経費が必要になります。ですから、街の近くでは成長が早くて需要の多い薪材を植え、価値が高い建築材と船材で周辺を囲んだほうが効率よく伐採できます。丸太は一度乾燥させて目方を減らし、まとめて一度に街まで運びます。余計な水分があると、市場にいる製材業者がいい顔をしません」

「しかし街までいちいち運ばせるとなると、言い値で買わされるだけ経費がかさむだろう。不景気ならば伐採所で直接取引したほうが、業者も安く買えて助かるだろうに」

「盗伐による横領と、真つすぐな良材ばかりを購入されるのを防ぐためです。曲がった材木ばかりだと、運搬に手間取ってしまいますから。残念な話ですが、利益を第一に考えてしまう人がいる限り、この習慣はなくならないかと思えます」

レオンはうなずいて、話題を変えた。  
「たしか密生して植えることで、より硬い木ができると以前に言っていたな」

「はい。縦に伸びるのは土の養分で、横に太るのは日光の量で決まりますので。固く締まった木にするために、計画的な植林は不可欠です」

目をこらして見ると、西と北とでは木の葉の形が違っている。北の地平線近くの森は、樹木が密生して植えられているらしく、緑がより濃く見えた。

「なるほど。となると西で新材を、北が建築材と船材を伐採しているわけか」

「はい。北の伐採所付近に群生しているポポリの老木ですと、樹皮は染料や紙の材料になりますし、固く締まった木材は、耐波性が求められる外洋航路の帆船などに使われています。製紙と紡績の街フイルスにふさわしい木材といえます」

材木商の娘だけあって、セラは植物全般に詳しくかった。森の民であるエルフ族には、木材の取引で財を成した人間が多い。露天の薬草売りから身を起こして、元老院議員にまで登りつめた男の出世譚はつとに有名だった。

相場の動きが激しく、取引で大金が動く職業では、なにより信用が重要視される。血族のつながりが強いエルフ族にとって、まさに天職といえた。

隣を見ると、いつの間にかジェーガンが目を閉じていた。頭の中で、地図の修正をしているらしい。しばらくしてから、レオンは訊ねた。

「上からなら銅山の場所が一目でわかると会議室で言っていたが、どうだ？」

「変ですねえ。鉱石を焼く時に、毒気が出るんですがね。それが木の葉の色を変え、時には枯らしちまうことがあるんです。だから目を凝らすまでもなくすぐに見つかるとはさすがなんです。ちやちな贖金を造る連中には、おれたちのように毒気を抜く芸当ができるわけがねえと思うんですが」

「ほかに手がかりはないのか？」

ジェーガンは処置なし、といったふうには首を振った。

「国営鉱山ならすぐにわかるんですが、調子が狂っちゃいましたぜ。野郎どもはこそこそと掘ってやがるから、豎坑が見つからねえんで

すよ。通気と排水のために必ずこしらえにやあならねえと、上がやかましく言っている穴なんですがねえ。あいつらは法律なんかどうせお構いなしでしょうから」

「お、おまえらドワーフ族なら、あ、穴ぐらいごまかせるだろうよ」「うるせえぞ、マーク。おめえまだ、会議室での話を根に持ってやがるのか。だいたいおれたちの豎坑は、雄牛の骨で掘ってた時代から、噴火口のように盛り上げて作るしきたりなんだよ。風が通るたびに、中の空気が抜けやすくなるからな」

「この辺りには銅山がない、と?」

「いいや、隊長。山深く掘らねばならねえ水銀鉱山や炭鉱じゃねえんで、普通の坑道だけで十分じゃねえかと思いませんぜ。なにより手っ取り早くて安上がりですからねえ。それより木が枯れていねえほうが変ですぜ」

道理だった。ジェーガンの考えをまとめると、銅山はここにはないということになる。しかし、精錬もされていない贋金が大陸東側に出回っているのも事実だった。山脈に近いこの街で、より詳しく調べてみる必要があるそうだ。治安が悪そうなどころも気にかかる。「わかった。ひとまずフィルスに拠点を作って行動しよう。おれはひとまず責任者を訪問してみる。セラは製材所と市場の調査。ジェーガンは商工連盟の取引所で金属のほうを当たってみてくれ」

了解、と二人の声を聞き、レオンは後ろを振り返った。

「おい、マーク。ようやくお前の出番がきたぞ。街全体をくまなく回って、怪しい点を見つuckerんだ。治安が悪いかもしいから、気を引き締めていけよ」

マークは蒼ざめた顔をあげた。唇の端に、ひきつった笑いが浮かんでいる。

「なあに、心配してくれなくても、ここより危険なところはないぜ」強がりではなく、心の底から言っているように、レオンには思えた。

## 第六章 炎が熾るとき

### 第六章 炎が熾るとき

到着早々レオンは、フィルスの最高責任者に面会を求めた。極秘任務だが、それなりの筋を通しておくためだった。場合によっては言質をとって、調査を有利に進めることもできる。

市議会は閉鎖されていた。不景気の影響で、本業に身を入れなければならなくなったようだった。最高責任者は市長ではなく、警備隊長が兼ねている。

警備隊司令部は、街の中心にあった。灯台の近くにある石造りの三階建ての建物である。司法省からの身分証明書を見せると、丁重に警備隊長室へと案内された。

出迎えた警備隊長はベックラーと名乗る、六十を少し越えたぐらいの老軍人だった。やや股を広げて歩く仕草を見ると、瘦身は生来の体型ではないのだろう。頬の肉が削げ落ちてるように見えるが、血色はそれなりによく、枯れた印象は感じない。目は鋭いとまではいえないが力がこもっているようであり、武人特有の隙のなさを形づくっていた。

年齢と与えられた役職から比較すると、中央高等文官試験を通過したわけではなく、地道に努力を積んで、この地位を得たのだろう。「賈金調査ということでしたな、レオンさん」

都市巡察官の突然の訪問にも、嫌なそぶりを見せなかった。椅子を勧めながら話す口調は柔らかく、目を細めて微笑んでいる表情には、孫と話しているかのような優しさが垣間見えた。

来訪の目的はわかっているのだろう。席につくとすぐ、ベックラーは話を切り出した。

「まず、フィルスの現状を説明しましょう。ここの実態を知っていただければ、あなたがたの調査にも役立つと思います」

「と、いいいますと？」

「ここフィルスでは、農作物を自作できません。豊かな森があっても、生えているのは材木用の木です。人を養うだけの実りはありません。なんとか自活しようと土地をこつこつと手に入れようとはしているのですが、不景気なうえに、みんな開拓には消極的でした。水は豊富なのですが、土が痩せているとのことでした」

レオンは、エルフ族のことを思い出した。

「焼畑はどうです。試みましたか？」

「いいえ。焼畑ならエルフ族が詳しくかろうと、呼んで相談したのですが。どうやらこの一帯には、石炭が泥状の層を成している場所があるので難しいと。いったんそこに火が入ると、森全体に広がるおそれがあると。もっとも彼は材木商人でしたから、巨木を少しでも失いたくないと思っているのかもしれない。ここは木そのものが財産ですからね」

ベックラーは鼻で長い息をした。しばらくして、再び口を開く。

「不景気の影響は、大陸全体に及んでいるそうですね。ここフィルスも例外ではありません。来る途中見ていただけとは思いますが、工房はほとんど閉鎖されてしまいました。再開の見込みは、まったく立っておりません。商工組合が動かなくなれば、税金が入ってこなくなりません。しかも交易は赤字つづきで、いままでの蓄えを取り崩しての生活です」

レオンはうなずいた。フィルスは交易で栄えた都市だが、それが皮肉にも苦しむ原因になっている。しかも、街道は港町に続く一本しかない。だから、言い値で塩や食糧などの必需品を買わざるを得ない事情がある。

同じ消耗品であつても、常に一定量が消費される食料品と、景気に左右されやすい繊維や紙製品とでは打撃の度合いが違う。金銭の流出はなんとしても防ぎたいところだろう。

「わかります。そこにきて洪水騒ぎです。連邦政府の威信を保つためにも、外壁の修理は急務だと思います。予算がいくらあつても足

りないところでしよう」

「連邦政府に相談しても返ってくる返事は、自活せよ、との一言だけです。予算がないのはお互いさまでしょうが、困った問題になりました。財務省から査察にくる会計官に訴えるつもりではあるのですが、まだ先の話になるでしょう」

「街を見たかぎり、それなりの対策を施されたようですが？」

「城壁と橋の修復は、商工組合が無償で請け負ってくれることになりました。夜盗を防ぐためだそうです。ここは、木が茂っていて、盗賊どもが隠れる場所には事欠きませんからね。警備隊長のわたしにとって、誠に不名誉な話ですが」

「組合長の名前はなんと？」

「元市議会議長のヨルク氏です。赴任してきたときから、親身にしてもらいました」

下心が透けて見える気がした。不景気だから、盗賊が増えるのもよくわかる。しかし、無償とはやりすぎのような気がする。修復は都市の義務なのだから、無利子の借金で十分のはずだった。

そう指摘すると、ベックラーの顔がゆがんだ。そんな考えなど、思いもよらなかつたらしい。

「その手がありましたな。わたしの世間知らずにもほどがある」

「恩を着せられたようにも思えますが、なにか代償を支払われませんか？」

「いいえ、直接的にはなにも」

ベックラーは、水の入った木杯で口を湿らせた。勧められ、レオンも付き合った。冷たいわりに口当たりが良かった。ほのかな甘みさえあった。これなら茶葉もいらなだろう。

「実は、修復が始まってすぐ、贖金が出回り始めました。水が引いたのちに、北東角の市場で取引が再開されてからです」

ついに、本題に入った。言葉を選んで、慎重に訊ねる必要があった。警備隊長の立場では、言えないこともあるに違いない。

「一度にですか？」

「以前から周到に準備されていたのかどうかまでは、よくわかりません。ですが、徐々に広まっていったようです。商品の支払いにほんのわずかつつ紛れ込ませるようにしていったのでは、と思っ  
ています」

レオンは、バルラムの机に置いた一枚の銅貨を思い出した。贖金を手に入れるのに苦労していた。つまり、問題になるほどの量を出回っていないことになる。

「そのわりに他の都市まで広がりませんでしたね」

「これは推測ですが、商人には不満が出ないようになってきているからでしょう。両替商が真正の貨幣で引き換えてくれているよう  
です。等価交換とまではいかないでしょうが、取引上の問題にしか  
ならないわけです。ここは辺境の地で、領主たちが鑄た質の悪い貨幣を扱ってきた実績がありますから、それなりの信用を築き上げて  
いるでしょう。商工連盟成立の経緯はご存知ですか？」

「ええ。学校で習いました」

バルラムから聞いた真の事情も知っているが、ここでは必要のない話だった。

「それに、ここフィルスは通商都市ですから。商品売って別な商品をもそのまま購入すれば、貨幣など必要ありませんからね。物々交換なら不満も出ません」

いまにも唾を吐き捨てんばかりに、ベックラーは顔をそむけた。床は細かい模様の絨毯ではなく、刈り取られたばかりのイグサが敷き詰められ、青臭くも清涼な香りを放っている。

なるほど、とレオンは心の中でうなずいた。話を聞く限り、すべて理にかなっている。

「ところで、何の取引から贖金が出回り始めたと思いますか？」

「わかりません。商取引は、専門外ですので」

率直だが何かを避けたがっている、そんな言い方だった。レオンは核心を突いてみた。

「警備隊長どの。贖金造りの犯人は、商工組合ではありませんか。」

両替商も一味でしょう?」

「私の口からは、決して、言えません」

ベックラーの引き結ばれた口元が、かすかに歪んでいた。青緑色の瞳が、まっすぐこちらに向けられている。レオンも黙って見つめ返した。

しばらく視線を交し合った後、ベックラーは意を決したように立ち上り、隅の金庫に歩いていった。革袋が一つ、机に置かれる。中は、真正の銀貨だった。連邦政府の刻印が二度、しっかりと打ち込まれている。

「これが、連邦政府から与えられた、警備隊の全財産です。解散してしまつた市議会のぶんを含めて、これから費用をまかなつていかなければなりません。査察が入るときに少しでも無くなつていたら、厳しい責任問題となります。会計官は事情を斟酌しませんし、こちらの訴えも変に勘ぐられかねませんからね。予算は少ない。しかし、我らは住民を守りつつ、生活を支えていかなければなりません。歳入がほとんどない、この街で。その意味、おわかりですね」

警備隊は志願選抜制をとっている。つまり、予算がないとどうにもならない。

念を押しているのは、深い事情を察して欲しいとの現われだろう。賄賂。それしか考えられなかった。

商工組合の機嫌を損じれば、橋や城壁の修復は進まない。そうなれば盗賊の跳梁を許すことになりかねないし、連邦政府からの叱責も覚悟しなければならない。気高さと治安を維持するためには、賄賂を受取らねばならない。謹直さが求められる武人にとって、辛い決断だつただろう。

「事情はよくわかります。わたしも政府の役人ですから」

連邦政府には各省ごとに機密費があつて、不測の事態に対する柔軟性が保たれている。しかし、辺境の都市にまでは及ばない。地理的には重要な場所にあるが、差し迫つた事態がなければできる限り予算を抑え込みたい、というのが首都の本音だろう。

ベックラーは、窓際までゆっくりと歩いた。窓から身を乗り出して、外を眺める。しばらくして、おもむろに口を開いた。背中が、かすかに丸まっていた。

「本当に軍隊とは、世間知らずの集まりですな。わたしは四十年、武人として真面目に働き、今の地位を得ました。ですが、人間には分相応があるようです。世の中はきれいごとでは動いていかない。知ったのは、警備隊長に任命されて、交渉と妥協が主な仕事になってからですよ」

一言一言が、はつきりと聞こえた。何らかの決意が、老警備隊長の背中を押しているようだ。

直接賄賂を認めてはいないが、行政官の立場では仕方がないことだった。腹の内は嫌というほどわかる。

「ずいぶんと正直に話してくれますね」

「あなたが司法省の人間ではない、とわかっているからですよ。これでも警備隊長です。犯罪者の取調べをしていれば、人を見る目は養われます。もっとも書類は、年々見づらくなってきていますけどね」

レオンの背筋に冷たいものが走った。つたない冗談が、かえって凄みを増して聞こえた。

警備隊長室での行動には、何も怪しいところはなかったはずだ。だとすれば、どうしてこちらの正体を見抜けたのだろうか。

ベックラーの横顔に微笑が浮かんだ。

「司法省からの都市巡察官なら、もっと事務的で血の通わない話をします。財務省の会計官も同様です。焼畑がどうだのと、鷹金と関係のない話はしないでしょ。取調べだったら、雑談から不意に切り込む手も有効ですが、それでもなさそう。事件の全体像をつかもうとするのであれば、どこかの省庁の諜報工員といったところでしょう」

ベックラーは、はじめからレオンの返答を期待していないようだった。目は、そのまま森を見据えていた。唇が開いたり閉じたりし

ているのは、どう言ったらいいか考えているようでもあった。やがて唇を軽く舐めた後、話し始めた。

「森の中には、多くの生き物がいます。森そのものが生きているからでしょう。多くの人が住む連邦も同じく生きているはず。例えば悪いですが、腐った木に生えるキノコやコケ、巣くっている芋虫も生き物ではありませんか。彼らがいるからこそ、森がきれいになり、新しい木が生えてくる。だれかが汚れ役をやらねばならない。それを悪くいう人間は、嫌な仕事を押し付けている卑怯者に過ぎません。そうではないですか、レオンさん」

振り返った顔には、甘さがまっただくなかった。視線が痛いぐらいに突き刺さってきている。

「お願いです。贖金を造っているのであれば、近くに銅山があるはず。それを探してもらえませんか。商売のことはよく知りませんが、銅を精錬して隣のポーミラまで持って行くだけでも高く売れるはず。銅山さえあれば、収入と仕事ができる、ファイルスは息を吹き返せます」

「つまり、調査への障害は、排除してもいい、ということですね。責任はとってくださいと？」

つとめて冷静さを保ったレオンの問いに、ベックラーはしっかりとうなずいて応じた。しかし、細めた目からは強い光が消えていた。「老いて、汚れてしまったこの身です。もはや失うものなど、ありません。この街は、もつと豊かになるはず。お願いします、レオンさん」

「最善を尽くします」  
レオンははつきりと答えた。しっかりと調査協力の言質をとったが、かえって責任は重くなった。気を引き締めなければならなかった。

「ただ、商工組合を不用意に、刺激することだけは無用に願います。城壁の修復は成し遂げてもらわねばなりませんから」

「不用意に、ですね。わかりました」

商工組合が疑わしいからといって、変に動き回るわけにも行かない。血の管に巻きつく腫れ物のように、下手に切り取るうとするの大怪我をしかねない。実情を話してくれたベックラーの立場が弱くなる。信頼してくれた相手を裏切るわけにはいかなかった。

勧められた晚餐を固辞し、司令部を後にした。門まで付き従ってきた部下は、行きと同じく機敏で礼儀正しかった。ベックラーの威令が、隅々まで行き渡っているようだった。

嬉しかった。腹の底が熱くなってきた。作業員として動いてきて初めて持った感情だった。汚れ仕事などではない。人の役に立てる仕事だった。

ともあれ、状況分析が不可欠だった。三人の偵察結果を聞いて、入念に対策を練る。商工組合に気づかれずに動ける、贖金調査の突破口を見つけねばならない。

レオンは表情を引き締めつつ、宿屋に向かった。

マークは小石を蹴ろうとして、かろうじて思いとどまった。

蹴っても、気が晴れるわけではない。前を歩いている母子に、ぶつけるおそれもある。買い物帰りのはずんだ会話を邪魔するのは、下種のやることだ。いくら退屈だといっても、いっぱしの男がやることじゃない。

フィルスは、偵察しやすい街だった。新設された都市によく見られる正方形をした外周を持ち、路は東西と南北を貫く大通りに準じて、整然と格子状に引かれている。歴史のある交易都市によく見られる迷路状ではないのは、今まで外敵の侵入を防ぐ必要がなかったせいだろう。

表通りの道は、外壁修復のために石畳が転用されていて、土がむき出しになっている。荷車は街の隅に集まるので、土ぼこりが立つ心配はなかった。それに、豊かな水量を誇るかのように、水が撒か

れている。赤レンガで埋めようとした箇所があるが、まだ全体にまでは行き渡っていない。

地上偵察の常として、主要な建物を頭に入れる必要があった。しかし、製紙や製材工房はほとんど閉鎖されているので、重要なものはそれほどない。警備司令部と市場、それに商工組合直営の商品市場ぐらいのものだった。それも中央、北東角、東南角にあるので、そこに向かう細かい標を見つける必要さえなかった。

森の街だけあって、道具屋が軒を並べている。一軒の店に目をやると、陳列された伐採道具がしまいこまれ、奥から鋸が運ばれてきたところだった。売るためのものではなく、残光を使って歪を探すためだろう、とマークは見定めた。試し切りの丸太も、持ち出されてきた。

武器や防具の目利きも、光の柔らかくなる暮れ方に行く。目線の高さに掲げると、陽光や灯火の下では隠れている歪や傷も、はつきりと見抜ける。具合によっては、どんな使われ方をしたのかまで読める。

鋸を今のうちに直しておくのは、近いうちに再び伐採量が増えるのを見越しているからで、住民はそれほど悲観的に考えていない、と推測できた。武器商人になりすまして得た知識が、こういったところで役に立つ。

そのまま大通りを西に向かって歩いた。

洪水で西側と南側の橋が落ちていたが、修復するつもりはないようだ。おそらく、盗賊団対策に違いなかった。自然の川は、天然の堀になる。優れた盗賊は、侵入より退出を考えて計画を立てるものだ。盗品を搬出しにくい所から襲撃してくる可能性は少ない。

歩き回っているうちに、翼竜での酔いは、少しずつだが収まってきた。近くの森にいつて少し深呼吸をすれば、のどまで出かかった酸っぱいものも腹へと落ちる。あとは川で口をゆすげば、なんでもないことだ。

ただ、気分の悪さは消えなかった。愛用しているセルムの葉っぱ

を噛めないせいに違いない。流行の幻惑草に間違えられると思い、外では我慢していた。別にやましいことはしていないが、後ろ指を指されるのは不快だったし、蛇のようにしつこい密偵どもに、嗅ぎ回られるのも癪にさわる。

街の空気も、うす気味悪く感じられた。

フィルスは治安が悪いと思っていたが、そうでもなかった。目の前で騒ぎはあったが、すぐに仲裁が入って収まった。大仰に肩をすくめて立ち去ったのは、三角帽の男のきざったらしい言葉に、毒気を抜かれたせいではなさそうだった。護身用の短剣を持っている人間はちらほらといたが、使う素振りはまだなくなかった。街そのものに活気があるせいだろう、とマークは思った。

金回りがよくなれば、女と博打が流行る。どれもいさかいのもとだが、金さえあれば問題にはならない。どっちに負けても、よそにいけばいいだけのことだ。

大通りに面したパン屋の主人が角笛を鳴らし、蒸し風呂の用意が整ったことを知らせていた。パンを焼く竈の余熱を二階に引き込んだもので、葡萄の灰を溶かした水で体を洗い、白樺の枝で垢をこすり落とす仕組みになっている。さっぱりとした後は、階下で軽めの食事ができる。

吹き終わるとすぐ、人が集まってきた。みんな、待ちかねたような顔をしている。

不景気なわりに、贅沢といえた。川の水がきれいなら、水浴びですませればいい。それなら金がかかることはない。湯を沸かして、体を拭くだけでもいい。

通り過ぎつつ、さりげなく目を流した。客は新しい銅貨を主人に渡していた。マークはセルムの葉を買ったお釣りを取り出して見た。やはり贋金で新しいものだった。悪びれもせずに渡してきたし、主人もいぶかしながらに受取ってもいた。贋金が一般に認知されている証拠だった。闇の両替商がないのも、そのせいだろう。商品取引なら物々交換という便宜があるが、どうやらそれ以上に贋金は受

け入れられているようだった。金として使えればそれでいい、といった短絡的な雰囲気を読み取れる。

それにしても警備隊はなにをしてやがる、とマークは口の中で毒づいた。威張るだけ威張っておきながら、肝心なときに役に立たないのはどこも同じだった。

いくら歩き回っても、警備隊を見かけることはなかった。治安の良し悪しにかかわらず、市中を定時巡検するはずなのに、姿がまったく見当たらない。さらに東西南北、それぞれの門にいるはずの当番兵の姿もない。

たるんでいる、というわけでもなさそうだった。街の中心にある警備隊司令部だけは張りつめた空気があり、正門からさりげなくのぞきこむことさえはばかられるほどだった。

怪しまれないうちに、東西に伸びる大通りを西へと歩いて行く。

日が山の頂上にかかっていたが、西側の城門付近では、まだ修復作業が続いていた。日の出から日没まで働くのが決まりらしい。

全体的に活気があった。張り巡らされた板塀の中で、土を根気良くつき固めている姿が目立っている。敷石だった石を張り、石灰を目地として詰めている場所を見ると、修復は順調に進んでいるようだった。火を起こし、なにかの金属を溶かしている部署もある。

大鍋で炊き出しをしている婦人のそばで、日払い賃金を数えている老人がいた。小山と積まれた賃金は、他の都市の相場と同じくらいだった。贖金かどうか見ようとしたが、よくわからない。新しいものだとわかったただけだった。

腹が鳴った。そういえば、翼竜を降りてから何も食べていなかった。体のほうは、元に戻っているようだ。それならさっさと宿屋に戻って夕食をとろう、とマークは手を打った。それから蒸し風呂にでも繰り出しつつ、夜の偵察に出かければいい。

宿屋に戻る途中、ふと、裏通りに目をやった。

娘が、巨漢につきまとわれていた。手に持っているのは、花籠だった。どうやら、酒場をまわって花を売る娘のようだ。

巨漢は両手で娘を押さえつけるようにして、顔を寄せていた。こちらから表情は読めないが、娘が嫌がつているのであれば、逢引といたたわけでもなさそうだ。せいぜい売上を掠め取る小悪党といったところだろう、とマークは見てとった。

背後に忍び寄った。改めて見ると、自分よりもふたまわりぐらい大きい。しかし、別に気にしなかった。死んだ親父も小柄ながら、よくこういった無頼漢どもに説教をしていたものだ。

勢いよく尻を蹴り上げようとして、サンダル履きであるのを思い出した。尻の肉が異常なほど盛り上がっていて、奇襲があまり好きそうにない。鉄のブーツなら効果があるだろうが、履く趣味はなかった。音が出るうえにたった半日で足が臭くなるし、砂と酢とで磨くのも面倒だ。

あらためて巨漢を見てみた。

尻の肉が発達しているのは、兵隊として猛訓練を受け続けてきた証拠といえた。かかとかがひび割れているのは、槍隊出身者によく見られる特徴だった。それで巨漢となると、男子皆兵主義政策をとっているオーク族だと見当がつく。勇敢な重装歩兵で鳴らした部族だった。密集陣形での槍遣いには定評がある。

一般の兵士、とくに騎兵を相手にする槍隊の訓練は、徹底した走り込みから始まる。戦闘での持久力をつける目的もあるが、対抗兵種である騎兵の動きに応じて隊列を維持しつつ部隊を展開するためだった。要衝を素早く確保するために、坂道を駆け上がる訓練もする。

足の皮が厚くなっているのは、裸足で駆け回らされた名残だろう。途中でサンダルが脱げても大丈夫なようにとの配慮だと聞いたことがあった。少しでも落伍者が出れば、槍の間隙を突くかたちで重騎兵が殺到してくる。

正規兵が領地を離れるはずがない。脱走兵に決まっている。体をよく見ると、腹がふくらんでいた。尻の肉は落ちにくい、腹は落ちやすい。つまり、訓練を止めてから時間が経っていることがわか

る。丸腰でもあり、どのみちたいした相手ではなさそうだった。

さてやるか、とマークはつぶやいた。

両膝を見て、軸足を確認する。左膝を蹴った。鈍い音がして、うめき声があがった。巨漢は片膝をついた。顔がこちらに向く。驚愕の表情があつた。すかさず顎を蹴って仰向けに転がし、素早く腹を踏みつけた。体が折れ、頭が上がった。後頭部を打って、気絶されては困る。

「てめえ、彼女に何をしていたやがった」

こういつたとき、自分でも驚くほど低い声が出る。死んだ親父が言わせているのだらうと、思うことにしていた。たぶん瞳の色も、赤っぽくなっているに違いない。

情報を送り続けたあげくに魔女狩りで死に、味方の脱出を助けるために犠牲になった二人の血の証だった。妹と同じ薄い枯葉色の瞳は、形見の一つであり、己の誇りでもある。

「まだ、何もしてねえよ」

体型とはまったく逆の、弱々しい声だった。

「あたりまえだ。やってやがったら、あばら骨を踏み砕いてやるどころぜ。世の中にはな、やっていいことと、悪いことがあるんだぜ。違つかい、豚野郎」

「お、おれたちを侮辱する気か」

オーク族も少数民族の一つだが、そこそこの人口と兵の精強さのおかげで、小さいながらも自分たちの土地を持っている。領地と軍制を維持するために多産が奨励され、粗食に耐える頑健な体を常に求められていた。それゆえか、口の悪い他の少数民族たちからは、やっかみも手伝って、豚と呼ばれている。

マークは巨漢を睨みつけた。

粗衣粗食であつても別に構わない。むしろ美德であるともいえる。多産だつて大したものだ。ただ、オーク族が盗みを奨励している点が気に入らないだけだった。生活のためならまだしも、戦闘における機敏さと狡猾さを磨くためとはなにごとだ。詭弁にもほどがある。

「か弱い花売り娘の上前をムシツて肥え太ろうとする、てめえのよ  
うな下種が、豚野郎でなくてなんなんだ、ああん？」

巨漢の顔から血の気が引いた。足の裏に、荒い息遣いが伝わって  
くる。

「確かてめえんところの男は、全員兵隊に入るはずだよな。なんで  
ここにいて、女子供をいびって暮らしてやがるんだ。おおかた脱走  
して、食うに困って流れ着いたってところだろう。違うか？」

巨漢は、首を激しく振った。

「今は、休暇中なんだよう。それで、ここまで出稼ぎに来ているん  
だよ。商工組合で働こうとして。コ、コロンブエ山脈にある集落  
の警備の仕事があるって。それで傭兵を募集していて。あ、あの銀  
貨をたくさんくれるって言うし」

マークはせせら笑った。つく嘘も嘘だし、聞く話も話だった。世  
の中にそんな甘い話などあるわけがなかった。それに、いまだ専制  
が続くオーク族の領主が、威信を失墜させた連中を放っておく訳も  
ない。匿ったとあれば商工組合とて、ただでは済まない。

「何を言っやがる。地図を見りゃあ嘘だってことぐらいわかるだ  
ろうが。あそこは国境が複雑なせいで、たたき出された連中がいる  
ってぐらいなのに、集落なんかあるもんか。おおかた石切人夫かな  
んかで、一生ただ働きってところだな。なあるほど、ここの欲深連  
中も考えやがったな。石なんかろくな価値はないから切り出し放題  
だし、脱走兵なら後腐れもない」

「う、嘘だ」

でっちあげた話だったが、ちょっと脅してみたくなっていた。周  
りを見ると、花売り娘は逃げ去っていた。謝らせられないのであれ  
ば、脅かしたぶんだけの報いは受けさせるべきだった。親父でも、  
たぶんそうしただろう。

「オーク族は世間知らずで騙されやすいとは聞いていたが、これほ  
どとは思わなかったぜ。たしかに食事はたらふく食わせてくれるし、  
賃金もいい。ただし、待遇が最悪だ。親方に高利で金を借りないと、

きつくて危険な仕事を割り当てられちまう。なにしろ相手は、金を持たせると働かなくなるってことを知ってやがるからな。それでわずかな蓄えも、イカサマ博打につき込まれるってわけだ。寝床はわらで、ろくに換えないから虫に食われまくる。病気にでもかかれば、はい、それまでよで叩き出される。待っているのは、おっと、こいつは言うまでもないか」

巨漢の顔が固まっていた。赤かった顔が白くなり、すぐに蒼くなつた。

不意に、気がついた。これほど気が弱いのに、花売り娘を脅かす勇気があるわけがない。誰かに酒代でも稼いでこいと命令されて、仕方なくやったのかもしれない。

「まあ、いいか。おれの知ったことじゃねえし。ところで、おい、豚」

「おれは、豚じゃねえ」

答える声が潤んでいた。足をどかしても、そのまま動かなかった。ただ、嗚咽が漏れてくるだけだ。目に涙がたまっていた。よく見ると、顔が若い。

人が泣くのを見ると、心が湿った。年下だとよけいに昔を思い出す。

いつも泣き腫らしていると間違われて、いじめられていた頃があった。気が高ぶるほど瞳が赤っぽく見えるから、ますますいじめがひどくなったものだ。

ある日、妹がいじめられた。思い切つて、一番強いものに当たつていった。殴られたら、引つ掻き返した。蹴られたら、噛みつき返した。やられても、やられても、繰り返した。やがて、いじめっ子たちは逃げていった。強さとは何かを、つかんだ気がした。

夜、ベッドの中で怒声を聞いた。今考えれば、いじめっ子は、有力者の子供だったのかもしれない。親父は、確か何も言い返さなかつたはずだ。朝、起きたとき、黙って頭を撫でてくれた。ぎこちなく、節くれだった手で、どう生きるべきか教えてくれた。

そして今、何をすべきか、はっきりとわかっている。

「おい、でかつ尻」

「ふざけんなよう。おれにはピグって、れっきとした名前があるんだよう」

「じゃあ、ピグとやら。てめえ、気が弱ええくせに、なんで脱走なんてくわだてやがったんだ。おおかた訓練に嫌気がさしたってところじゃねえのか。それなら古釘でも踏んで、泥水に足でも突っ込めばよかつたじゃねえか。足を一本失うだけですむ話だ」

「違うよう。脱走は連帯責任だから、おれだけが隊に残ると、一人で脱走兵狩りに行かなければいけないんだよ。おれたちに勝てるのか、って囲まれて凄まじければ、一緒に逃げるしかないじゃないかよう。みんなに捨てられたら、一人ではすぐに捕まるしよう。もう、どうしたらいいか、わからなくなったよう」

「なあるほどな。要するに、世の中多数決が正しいってわけじゃねえってことだな。ゴンドランド連邦だって、同じこと。正しいとは限らねえ。やっぱり、心の信じるままに生きていくのが一番だってことだな」

うん、うん、とマークはうなずきつつひとりごちた。

運命だの宿命だのと理屈をこねて突き放してやるのはたやすい。

しかし、口にはしたくなかった。口にすると、自らの意思で死んでいった両親の決意を穢したような気になる。

マークは歯の隙間から声を出した。

「ところで酒代をカスってこい、と命じた連中がいるだろう。そいつらがたむろする酒場を教えな。なあに心配すんな。名前は出さねえからよ」

「まだなにも言っていないのに、なんで酒場にいるってわかるんだよう」

本当に世間を知らないらしい、とマークは顔をしかめた。人を雇う場合、雇い主は自分の息のかかった酒場に留めおくのは常識だった。すぐに呼びだせるし、支払う酒代で賃金の回収ができる。オー

ク族は図体がでかいぶんだけ、酒代もかかるに違いなかった。手持ちが少なくなつたからこそ、一番弱い立場の人間に調達を命じたのだらう。

そもそも花売り娘に狙いを定めているのが、世間知らずの証拠だった。場合によっては酒場への客引きもする花売り娘は、必然的に街全体を巡り歩く。脅し取られたのが広まれば、警備隊に突き出されるに決まっている。その先で待っているのは、監獄か絞首台だ。それにしてもいらだたせる態度と言葉遣いだった。

「ごちゃごちゃとつるせえぞ。てめえはただ教えればいいだけだ」「なんだよう、なにするんだよう」

「決まつてる。尻が重てえてめえらのてっぺんと、腰が抜けてる警備隊の連中に、足捌きの大切さを教えてやるのよ」

酒場の場所を聞き出すと、マークはハンカチを放った。柔らかく舞つて、ピグの盛り上がった腹に落ちた。

「とりあえず顔を拭け。おい、ピグ。てめえも男なら、女を泣かせるような真似はやめて、胸を張って生きていく算段をしやがれ。はぐれ者に向かい風は強えが、お日さまは暖かいぜ」

ピグと別れてしばらく歩くと、ちゃんと教えられた場所に酒場はあった。

マークは、建物を仰ぎ見た。漆喰の白壁とポポリの木らしい材木が組み合わされた三階建ての建物で、ヨルクの店と彫り込まれた看板が目についた。

庇の下にある小窓は、荷を上げる滑車が置かれていた名残に違いない。商館を改造したものだとする、一階が酒場、二階が物置、三階が店主の部屋になっているはずだ。

殴り込むには都合が良かった。おそらく用心棒は、三階で悪徳店主の護衛をしているはずだ。下りてくるまでにカタをつけて、さつさと立ち去ればいい。警告ならそれで十分だ。

持っていたなめし革の手袋をはめる。拳を守るだけではない。滑らなくなるので、打撃の威力が増す。

最強の武器は、己の肉体。そう信じていた。武器や兵器に精通したのは、偵察担当として、敵の意図を測るために学んだ成果にすぎない。柔軟で強靱な肉体には、隙も死角も存在しないはずだ。弱くなるための武器など、武器ではない。

もし、魔法が見つかったとしても、使うことはないだろう。頼るものがあれば、己の心も体も弱くなる。そう思うに至ったのであれば、孤児になったのも悪いことばかりではない。

下腹に力を入れた。弟をいじめた連中に仕返しをする気分で、ドアを蹴破る。

暇を潰していたであろうオーク族の視線が、いつせいに集まった。なにもかも、気に入らなかった。よどんだ空気も、しけた面も、安酒の鼻につく酸っぱい匂いも。おまけに上から聞こえてくる歌も、なんだか辛気臭かった。

「ずいぶんと酒臭え豚小屋だよなあ。飲んでもいないのに反吐が出そうだぜ。しょうがねえ。おい、店員。ミルクだミルク。ミルクをくれよ。井戸で冷やしたヤツをな。断っておくが、ミルクってのは牛の乳のことで、豚じゃないぜ」

「ずいぶんと威勢がいいお子さまじゃねえか」  
入口近くのテーブルにいたオーク族の一人が、ゆっくりと立ち上がった。放られたカードは、図柄も数字もばらばらで、役はなさそうだった。闖入者の登場に、掛け金を失わずに済んだ、といった顔をしている。

「おれたちを誰だか知っていて言ってるのか？ ずいぶんと安く見られたもんだぜ」

マークは片頬で笑った。たとえ体を鍛えていようと、頭の先から股間まで、体の中心線に弱点は集中するし、急所に当たれば悶絶する。全ての人間は平等である、とのゴンドランド連邦の基本理念を、わかりやすく叩き込んでやらねばなるまい。

「へええ。てめえらは責任をとれるほどの大物だったのかい。牝豚の価値は乳首の数で決まるらしいが、てめえらは何で決まるのかな

？」

「なんだと、この赤目野郎」

店内の気だるい雰囲気、殺伐としたものに変わりつつあった。暇を持て余しているぶんだけ、気が立つてくると猛然と暴れ出しそうだった。

望むところだった。マークはわざとらしく首を回した。軽く、骨が鳴る。

「よくも赤目とぬかしやがったな。この瞳はな、味方を守りぬいて死んでいった親父の形見なんだ。それを笑う資格は、てめえら脱走兵などにあるものか」

うるせえ、と男がつかみかかってきた。

飛んできた右拳をひねってかわし、膨らんだ腹に肘を入れる。命中した瞬間に手首をひねると威力が増す。亡き父親直伝の必殺技だった。体勢が崩れたところで、右の回し蹴りを入れた。巨体が壁までふっ飛び、完全に動かなくなった。

天井から下げられている燭台が小刻みに揺れ、床に獣脂蠟燭の染みを振り撒いた。

「ただの豚のくせに、いつちよまえに酒飲んで、くだなんか巻いてんじゃねえ。腸詰めに悪いと思わねえのか」

「野郎、ふざけやがって！」

男たちが一斉に立ち上がった。椅子が飛び、テーブルが倒れる。

止めに入ろうとした店員が、邪険に突き飛ばされた。床を踏み鳴らしてくる。突進しているようだが、暴れ馬よりも遅い。

走れば体が宙に浮く。どうか投げ技を教えてください、とすり寄ってくるようなものだ。

「けっ、ウスノ口めが」

腕を取った。腰をひねり、巻き込むようにして投げる。壁に背中がめり込んだ。

二人目。腕が太くて長い。体の一步半後ろを見る。残像がある。とらえた。拳を頭だけでかわし、みぞおちを実像ごと打ち抜く。□

から泡を吹き散らし、膝から崩れた。

三人目。やや細身。足蹴りがくる。屈む。髪に風を感じた。跳ね上がる。肩で体当たりをかまし、仰向きに倒した。テーブルが壊れ、酒杯が転がった。

連中が一瞬ひるんだ。隙。逆に飛び込む。

殴って、蹴る。狙いをつける必要もなかった。必ず拳と足に、顔と体が当たった。股間にも入った。五人、六人と打撃を与えて昏倒させた。中には、泡を吹いているのもいた。

まだ十人はいる。あと二、三人倒したら逃げよう、とマークは思った。胸が晴れてきたし、剣でも抜かれるとうるさくなる。

ドアから、声が出た。

「何をやってるんだ！」

開け放たれたドアの前に、レオンが立っていた。つかえ棒を手にしている。立ち向かってくる男二人に速い打撃を与えた。棒が腹に入り、すねを捉えた。

「逃げるぞ！」

あいよ、と答え、二人で宿屋に向かって走った。場所は頭に叩き込んであるが、わざと遠回りして、何度も角を曲がった。動きに幻惑されて、相手はこちらを見失ったようだった。怒声と足音が、近くなったり、遠くなったりしている。

宿屋に飛び込み、ドアを閉めた。足音は、聞こえてこない。

息を整える必要はなかった。軽い散歩を終えた気分だった。えもいわれぬ爽快感もある。

不審がる主人に、銀貨を握らせた。こういった騒ぎは、何度もあろう。主人は愛想良くうなずいて、厨房に消えていった。スープと酢漬けの匂いがこちらに流れてきて、自分が空腹であることを思い出した。

大きな息を一つ吐いて、レオンが口を開いた。

「お前は、どうしてそう落ち着きがないんだ」

「とんでもない。おれは冷静だったぜ。自分でも驚くぐらいにさ。」

ちやあんと把握したじゃないの。こんなかつちりと区切られた迷いにくい土地でも、オーク族はおれたちを捕まえられなかつたわけだろう。つまり、土地勘がまだ働いてないってことだぜ」

見据えていた目が、かすかに上にぶれた。オーク族の連中は贖金造りに加担していない、とすぐに理解してくれたようだった。

「それは後知恵だろう。どうして騒ぎを起こすんだ」

「騒いでいたのは、オーク族のほうだ。おれはただ念入りに教えただけだぜ。世の中にはやっていいことと、悪いことがあるってさ」

「それは、おれが言いたいことだ。お前も街を歩いたのならわかるだろう。贖金の一件は、思ったより複雑な事情があるようだ。わざわざ警戒をされるような真似をするな」

突き出された細くしなやかな指の先に、渋くしかめた顔があつた。眉間にしわが寄るところは父親似だろう、とマークは思った。卵型の顔つきは、母親似だった。やはり魔法使いである両親の血を引いている。

「アニキは物事を難しく考えすぎるぜ。どんな複雑な図形も単純な三角形の集まりに過ぎない、とバルラムのとつつあんも言ってるじゃないか」

「誰が積分法の講義を聞きたいと言った」

「あのねえ、アニキ。銀貨を握らせているからいいようなものの、一介の商人が積分法はないだろう？ 怪しまれたのはお互いさまだぜ」

マークは、わずかに遠のいた黒い瞳を正面から見返した。傍から見れば、尊大な態度とつつたに違いない。背が低いぶんだけ、目を見て話すときに胸が反り、顎が突き出されるかたちになる。

外側から、小生意気なヤツだと思われているのはわかっている。しかし、間違つてもいないのに卑屈な振る舞いをすることもあるまい。

「とつつあんがいつも言っている誠実さとは、自分の心に正直になることだ、とおれは解釈しているぜ。自然に振舞うからこそ、怪し

まれずに堂々と敵地に潜入できるんじゃないか。花売り娘さんが困っているのを助けるのも、弱いものいじめをするオーク族の野郎どもを懲らしめるのも、おれにとっては自然な振る舞いなんだぜ」

体が先に動くのは、生まれ持った性に違いない。しかしそれで構わないはずだ。いいものはいい、悪いものは悪い。その点では、銅貨も人間も同じだろう。

レオンは、肩で大きな息をついた。目の光はすこし和らいだが、白い歯をのぞかせた唇に口論の余韻を残している。どうやら振り上げた拳の降ろし場所を考えているようだ、とマークは察した。

「まあまあ、アニキ。過ぎたことはしょうがないじゃないか。歴史学者ならともかくさ、常に前向きに生きていかないと。セラとジェーガンのお話を聞いて、これからの対策を考えようぜ」

「それは、おれが言いたいことだったんだがな。それにしても、おれはお前がときどきわからなくなることがある」

「何がさ？」

「性格がだ。短絡的な行動をとるようできて、意外にしたたかでもある。剛直なようできて、どことなく柔軟さがある。どうにも不可解だ」

「アニキはね、きつちりかつちりと考えすぎなの。いいかい、こう考えてみなよ。嘘をつかずに真つすぐに振舞っていれば、間違えるのはどうしたって心にやましいところがある相手側だろう。おれは生じた隙を逆手にとって、死線をかいくぐってきたってわけさ。アニキほどの腕力があれば、もう少し頭も回せる余裕ができるんだらうけど」

「ふん、ものは言いようだな」

「それよりさっさと二階に上がろうぜ。おれの機転を利用しない手はないだろう？」

レオンは苦い顔をして、階段に足を乗せた。

「偵察担当だったら、もっと的確な表現をしる。お前のは、悪知恵だ」

どうやら渋々とはいえ、納得してくれたようだった。当然だろう。こちらの立場に置かれたのなら、同じ行動を取ったに違いない。誇りを持つ人間なら、絶対に譲れないものがあるはずだった。

どうも鼻の中がむずむずした。嫌な空気が流れている気がする。

これほどまでにムキになるのは警備隊長に頼られたからに違いない、とマークは読んだ。誇りを持っている人間は、総じて頼られると弱いものだ。とすると警備隊長とやらは、こちらに本音、もしくは理が通った話を語ったことになる。いくら公式な訪問とはいえ、初対面の人間にそこまで弱みをさらけ出すだろうか。

すべては二人の話を聞いてからだな、と先に行くレオンの背中を見上げつつ、マークも階段を上がった。

グードは、三階の事務室にいた。目の前の机には主人のヨルクが座っていて、蒸留酒をあおるように飲んでは、熟れた果実のような息を吐き出している。

商工組合の組合長が酒場を経営するのは、とりたてて珍しいことではない。旅人や商人の世話を焼くことで、誰も知らない諸国の情勢を、いち早く手にすることができる。採算を度外視しても、商売で十分に元が取れるはずだ。

階下から、用心棒の怒鳴る声が聞こえてきた。弁解するオーク族の連中を叱責しているところを見ると、同族に違いなかった。巨漢で臂力に優れたオーク族は、用心棒こそふさわしい。

皆が苛立つ気持ちはよくわかった。街一番の有力者と自負する人間が、自分の経営する酒場に殴り込みを掛けられ、なおかつ逃げられたとあらば、面子が丸つぶれになったと考えて当然だった。

採用試験を邪魔されたが、店主をじっくりと眺める機会が生まれた。観察眼には自信があった。酒場でも取調べでも鍛えられている。興味深い容姿だった。背が丸まっているのは、室内での仕事が長

かつたからと思われた。太いながらも、節くれだつていない指が根拠を補強している。寄り目がちで眉間に力を入れているような表情をしているのは、机仕事で細かい数字を追って目を悪くしたからに違いない。唇の端に、いまにも破れそうなかさぶたがあるのは、不摂生のつけが回ってきたといったところだろうか。

グラスを叩きつけるように置いたヨルクに、話しかけてみた。

「もう一度歌いましょうか？」

「いや、いい。そんな辛気臭い歌は一度聴けばたくさんだ。もっと明るい歌は歌えんのか。他の街ならともかく、ここは職工の街なんだぞ。酒場を湿っぽくしてどうする。二階の漬物樽まで腐ってしまいいそうな歌ではないか」

「確かにここにはそぐわなかったかもしれないね」

グードは率直に詫びつつ、にぎやかに飾られた室内を見回した。

白塗りの壁に掛けられている風景画は、どれも素晴らしいものだった。ただ、統一感がまったくない。緑の山々の隣に、雪に覆われた教会があり、さらにその横には枯葉が舞い散る林道の絵が掛けられている。だったらまだ、西向きの窓を作ったほうがよさそうだった。夕陽で赤く染まった山脈をフリーデルが見れば、口笛を吹き鳴らして賞賛することだろう。

四隅に置かれている壺もそうだった。大きさも色合いも装飾の派手さも違っている。まるで、金を持って余した人間が、仕方なく購入したといったような感じだった。

だとすると、少しおかしい。本業に精を出さず、体を壊すほど酒を飲んでいる人間が、なぜこのような高価な品物に囲まれているのだろうか。どれをとっても、辺境の商工組合の組合長が持てる品物ではないはずだ。

少し追求してみる気になった。幸いなことに、邪魔者は一人もいない。

「このようすと、採用は無理なようですね。でしたら、用心棒などうかでしよう？」

ヨルクはグラスを干し、再び蒸留酒を注いだ。酒瓶の底で、芋虫が踊っている。蒸留された酒精が上質のものである証拠だった。水で薄めてあれば、膨らんで、腐る。

「いくら紹介状を持っていても、それだけでは雇うわけにはいかん。路銀が尽きたというのなら、城壁修復の人員が不足しているから、そっちに行ってくれ。親方は日の出には西門に来ているし、夜なら建築小屋で打ち合わせをしているはずだからな」

紹介状があっても、得体の知れない人間を雇うつもりはない、と濁った藍玉のような瞳に書いてあった。ひどく酔っていても、そのぐらいの知恵は回るらしい。

内部に潜って証拠を固めていく手は、使えなさそうだった。ならば、この騒動を利用して、一気に片付けたほうが良さそうだった。正攻法で核心をつくほうが、性にも合っている。

「実は、本当は酒場で歌うよりも、幻惑草の取引をしたかった」

「な、なんだと！」

ヨルクは、激しく咳き込んだ。グラスから蒸留酒がこぼれ、絹服に染みを作った。

「値段はいくらだ？ 値切るのはあまり好きじゃないから、一度で決めよう」

グードは机の上に両手を乗せて睨みつけた。口調も変えた。動揺しているのであれば機を逃さず、一気に押し込んだほうがいい。丸腰は、相手も同じだった。ならば、気迫で決まる。

「何をぬかすか！」

「隠さなくてもいい。おれは知っているからこそ、最初にこの酒場にやってきたんだ。紹介状でも効果がないなら、直接頼み込むしかないだろう」

ヨルクはいまいましたげに口を拭った。使ったハンカチが、叩きつけた拍子に机の上から滑り落ちる。

「何を根拠にそんな戯言を！」

怒声をあげてはいるが、空虚な響きがあった。頼れる人間がいな

いせいか、顔が蒼ざめている。他人がふるう暴力で、己の力を維持し続けてきた人間が、取調室でよく見せる反応に似ている。

「貴様は幻惑草を取り扱っているんだろう。やましいことがあるから、身元のはつきりとした人間しか信用しない。いや、できない。官憲に追われるから、外にも出られない。ここは、贅沢な牢獄、といったところだな」

赤黒くなった顔が一瞬だけ引きつった。しかしすぐに消え、余裕の笑みが浮かんだ。

「ふん、そうか。内務省の人間だったのか。道理で幻惑草に執心しているわけだ。だが残念だったな。幻惑草の捜査は打ち切られたはずだ。なぜかは知らんがな」

「うちの内部事情に詳しいようだな。知る必要があった、と膨らんだ顔に書いてあるぞ」

「仮にわしが幻惑草を扱っていたとしても、拘束はできないはずだ。内務省から許可をもらって来い」

「あいにくだが、おれは休暇中でな。内務省の命令に、従う理由はない」

机を回り込もうとしたときに、背後から野太い声が掛けられた。

「おい、なにをやつていやがるんだ、てめえ」

戸口に用心棒が立っていた。巨漢で、目が鋭い。腹も引き締まっている。体格もこちらと同じくらいだった。丸腰なのは、自信の現れかもしれない。下の連中とは格が違う、とグードは計った。ただ、鼻のつぶれ具合からして、技巧よりも腕力に敬意を払うたぐいの人間だと思われた。

訓練の一環として、お互いを殴り合わせる訓練がオーク族にはある、と聞いていた。互い違いに殴らせることで、打たれ強さと闘争心を鍛える目的があるようだ。

「代わりの用心棒だ」

「本当かい、ヨルクさん」

疑わしそうな視線を受けたヨルクは、真っ赤になって叫んだ。

「そんなわけあるか！ さつさと叩き出せ！」

「了解。賢明な選択だ」

用心棒は身構えつつ迫ってきた。グードも構えて迎え撃った。左が二発きた。体重が乗っていない。牽制か。右にかわして、左を放つ。顔に入った。

しかし、左から腹にくらった。顔は凹らしい。もう一発右からくらう。息が止まった。

崩れそうになるのを懸命にこらえた。手が組まれ、振り下ろされた。後頭部。目がくらんだ。胸倉をつかまれた。右に拳。顔がしびれる。壁際に飛ばされた。

近づいてきた。あたりに目をやる。壺。手にして足元に投げる。澄んだ音がして、砕けた。うなり声が追う。脛に入っていた。前のめりになり、隙ができた。

突進した。左から顔を殴る。もう一度左。唇から歯が飛んだ。体をひねって体重を掛ける。右を打ち込む。巨体が転がった。踵で思いきり腹を蹴った。一回跳ねて、動きが止まった。

勝った。そう思った。長い息を吐いて、呼吸を整えた。

「ヨルクよ。もう守ってくれる人間はいないぞ」

グードは机を回り込み、襟首をつかんで持ち上げた。腕に力を込め、首を締め上げる。赤かった顔から、またたくまに血の気が失せていった。

「さつさと言え」

「わしは、取り扱ってない。なんなら、店じゅう調べてみる」

「いいや、取り扱っているはずだ。貴様の店から出てくる花売り娘の籠の中に、幻惑草の花が混ざっていたぞ。可憐な花だから売れると思っただらうが、その強欲さが仇となったな」

顔がより青白くなったのは、締め上げたからではないはずだった。この男は何か知っている。

「げ、幻惑草の花だけならば、持っていて罪にならない」

「花盗人のようなことを言うな。幻惑草は、どこで栽培されている

「？」

胸倉を掴んで揺さぶった。グラスが倒れ、酒が机からこぼれ落ちていく。

「知らん。知るものか」

「では、死ね。ここの警備隊には、酔っ払って窓から落ちたと報告しておく。ここは三階だから、頭から落ちれば、貴様の太い首であっても骨は折れるぞ」

「わ、わかった。話す。西門を出て、まっすぐ行ったところだ！」

「西というと、山脈に向かう道だな？」

「そうだ、早く放せ！」

ヨルクを椅子に放った。はずみで腰を打つたらしく、顔が苦悶でゆがんだ。

「今のうちに、助かる算段でもしておくことだな」

部屋を出ようとしたところで、下にいたオーク族の一人が戸口に姿を見せた。用心棒の変わり果てた姿に目をやりながら、口を開けたままで固まっている。

「こいつは丸腰だ、殺せ！」

かすれた叫び声を受けて、目が見開かれた。右手が、剣の柄に伸びる。

グードは、すばやく股間を蹴った。うめき声があり、体が折れ曲がる。逆に柄をつかんで剣を抜く。振り上げ、肩に下ろす。剣の腹が当たった。枝のような感触が伝わる。骨が折れたようだ。さらに体勢が低くなる。顔面を左から蹴る。右に飛んで、頭から壁に当たった。ひび割れた板を見つめるように、ゆっくりとずり落ちていく。気を失ったのを見届けてから、おもむろに振り返った。震えるヨルクが視界に入る。金箔のように薄い虚勢がはがれ、小心さがむき出しになっているようだ。グードは上層部の人間たちを思い浮かべた。連邦に巣くう木食い虫とは、こういった輩のことだ。

「ま、待て。落ち着け」

「貴様が勝手に取り乱しているだけだ。確かに内務省の内部規定に

は、被疑者の虐待を禁止する項目がある。だがそれは、あくまでも通常の場合だ。いわれなき攻撃に反撃してはいけない、という規則ではない。意味はわかっているな？」

ヨルクは武器になりそうなものを探しているようだった。無駄な行為だ、とグードは思った。絵画は役に立たないし、磁器製の壺や彫像は重過ぎる。

すぐに、顔をこちらに向けた。とっさに何か妙案を思いついたのだろうか。おびえた表情は消え、むしろ逆に厚い唇の端は吊り上ってさえた。かさぶたが切れ、血がにじんでいる。

「わしを殺すと、お前も困ることになるぞ」

「どういう意味だ？」

「お前は一人でここに来ている。ならば、わしが幻惑草のありかについて嘘を言っていたとしても、裏を取ることは出来まい。どうだ？」

言った意味がわかった。単独で追跡をしていれば、栽培場所の確認をしに人をやるわけにはいかない。またたとえ本当だったとしても、こちらが立ち去った後に、大急ぎで自分たちが関与した証拠の隠滅を図るおそれも考えられた。

グードは足を進めた。気にいらん、と思った。置かれた立場をわきまえず、主導権を奪い取るうとする小賢しさが鼻につく。

「貴様に人質の価値があるとでも思っているのか？」

「一体、なにを聞いているんだ。わしを殺すと幻惑草のありがわからなくなると言っているだろうが！」

「いいや、とグードは軽く首を振った。

「おれはすでに栽培地のおおよその位置はつかんでいる。女に優しく、口がうまい男が同僚にしてくれたのが大きい」

単独で来ているわけではない、とヨルクは理解したようだった。

唇の端から小さな泡が飛んだ。

「花売り娘の言うことなど、あてになるものか！」

「それだけではない。幻惑草は日当たりのいい乾燥した斜面に生え

るものだ。だから、おまえの言う西側が一見正しいように思える。

しかし、西門から山脈の稜線まで、フィルスの統治権が及ぶ地域だ。そんなところで幻惑草を栽培したら、貴様らの関与が真つ先に疑われるだろう。大掛かりな犯罪を行うのであれば、複雑な領土問題を抱えていて、司法権が及びにくい場所が最適となる。となれば、コロンブエ山脈の中央部近辺に絞り込める。正解は、伐採所に続く北門だ」

「わかっているのならなぜ、わしのもとに来たんだ。そのまま向かえばよからう！」

「貴様はわかっているいな。いや、わかろうとしたくないといったところかな。おれは幻惑草の調査に来ているわけじゃない。犯罪組織の撲滅に来ているのだ。いくら場所をつきとめて焼き払ったとしても、腐りきった人間がいる限り、被害はなくならない」

剣を握りなおしながら、ゆっくりと歩を進めて行く。外では騒動が続いている。人がくることはなさそうだった。

寄り目がちの目が、大きく見開かれていた。こちらのやることを理解したらしい。椅子から立ち上がるうとして、崩れ落ちた。腰に手を当て、顔をしかめている。

「貴様は大罪を犯した。罪深い過去は、絶対に拭い去ることはできない。変えたければ、生まれ変わるしかない。おれに剣を渡したのは、愚拳の結果ではなく、贖罪ゆえと思つてやろう。それなら少しは気が楽になるだろう。もうすぐ、本当に楽になれる」

ヨルクは、のどを鳴らした。慌てた豚がいる。グラスが飛んできた。頭だけでよける。壁に当たって割れた。酒瓶も割れた。ペン立ては、よけるまでもない。

「く、来るな！」

「貴様を見ていると、昔の領主を思い出すよ。やむなく棺を開けようとする父を、馬上から食屍鬼と嘲った男だ。贅沢と酒が好きなところも、肥え太っているところもそっくりだ。やつはそこそこ大物だったから追放だけですが、貴様をかばう人間はもうここには

いない」

グードは剣を首筋に当てた。震えが柄を通して伝わってくる。腹の底が熱くなった。しかし、また一瞬で消えた。感情を殺して任務を遂行し続けてきた見返りだった。いかなるときも冷静でいられるのは、悪いことばかりではない。考えたことを、ためらわずに実行できる。

「ま、待て。やめろ！」

「ふくれにふくれて、腐ったとしても、率直に真実を伝えるぶんだけ芋虫のほづがましたな。今度生まれ変わるときに、よく神さまとやらにお願いをしておけ。おびえることもなく、好きなだけ酒が飲めるぞ」

グードは柄をしっかりと握り直した。

ゆっくりと、剣で挽くために。

レオンたちが部屋に戻ると、すでにセラとジエーガンがテーブルについていた。二人は商人として、別の宿をとっている。商談を装っていれば、第三者に気づかれることなく調査の打ち合わせができる。

ひとまずレオンは、警備隊司令室での会話を三人に話した。

「なるほどなあ、ヨルクつてのが黒幕か。それならよくわかるぜ。賈金を流通させるには、それなりの力がある。警備隊長の弱みを握っているなら、やりたい放題できるだろう。気に入らない連中は灯台下の牢獄に放り込めばいい。脱走兵のオーク族どもが、見張りも立てずに油断しきっていたのもわかるぜ。警備隊がかくまえば、捜索隊も手が出せないだろうし」

マークが囁むセルムの葉の匂いが、隣から漂ってきた。

「もつとも、ベックラーの言葉も引っ掛かるぜ。腹の底で考えているような会話が、気に入らない」

「ああ、言いたいことはよくわかる。しかしな、マーク。現実に合わせて問題に対処しようとしているとは考えられないか？」

調査の基本は、疑うことから始まるといってもいい。しかし信頼してくれて、率直に実情を話してくれた人間を疑うのは気が引けた。こういったときに、諜報部員を志願したのを後悔する。

隊長の言う通りだぜ、とジェーガンが口を挟んだ。

「贖金造りつてのは、そこに利があつてこそ実行するはずだ。退役近くの老兵がたくらむことじゃねえ」

そうですね、とセラは相づちを打った。

「無事に退役すれば、警備隊長の地位からいって、各地の傭兵組合の組合長にはなれるでしょうから。あるいはその上にも」

レオンはうなずいた。セラの見解が一番妥当な読みだった。さらに、銅山を発見して連邦政府に報告すれば、貢献度大と判断されてより高い地位にのぼれるかもしれない。失敗してもともと、成功すれば見返りは大きい。ただの俗物だったとしても、こちらをそそのかして調べさせる価値はある。

しかし、考えたくはなかった。考えること自体、信頼に対する裏切りのように思えた。

まず、贖金の真相を解明するのが先決だ、とレオンは頭を切り替えた。

外はまだ、騒がしかった。二階の窓から見ると、体格のいい男たちが走つていくのが見える。顔つき合わせて話し合い、また散つて行く。こちらの場所は突き止められていないようだった。

仮に突き止められたとしても、宿屋の主人がうまくあしらってくれるはずだった。荷役夫や酔っ払いには迷惑しているところぼして、たし、告げ口しても銅貨一枚の儲けにもならない。

「しかし、ずいぶんとしつこい野郎もだなあ。なあ、マーク」

「おれはオーク族の連中に、痛みを分かち合え、つて友愛と平等の精神を教えてやっただけだぜ。そもそも警備隊は何をやってやがるんだ。商工組合の顔色ばかりうかがつて、花売り娘一人守れねえと

はよお」

「過ぎたことはもういい。ではセラから聞こう。市場と木材取引所の調査だったが」

「はい、隊長。市場では小麦、大麦、バター、乳製品、果物など、不足なく置かれています。食料品は首都の三倍近い値段になっていました。ですが、東門から荷車が頻繁に入ってきていましたから、いくら値を吊り上げようとしても、これ以上物価が上がるとは思えません」

「銅貨はどうだ。贋金だったか？」

「取引の決済は、ほとんどが贋金でした。ですから、他の都市と比べて一概に物価が高いとはいえません。念のため両替商の店に行ってみましたが、お客はほとんどいないようで閑散していました。店の中にいた人たちも両替をしているようすではなかったので、正貨との比較ができませんでしたし」

「贋金と真正銅貨との両替はしていないのか？」

セラはしっかりとうなずいた。

「業務は預け入れと引き出しだけでした。わたしが見たかぎりでは「工房を閉鎖された職工たちは、やむなく出稼ぎに出ている。こちらの家族に仕送る金銭は、両替商を経由して振り出されているはずだ。すると、やはり両替商が贋金に参与しているのか」

レオンは顎をつまんだ。両替商は、富裕で信用力のある商人しか経営できない。それほど大きくないフィルスの街で、力を持っている人間は限られてくる。商工組合の組合長。それしか考えられなかった。確か、ヨルクとか言う名前だった。

「木材取引所はどうだった？」

「製紙と染料に使う樹皮は山積みになっていましたが、木材そのものの取引は盛んに行われていました」

「支払いは贋金かな？」

「よくわかりませんが、商工組合が犯人だとすれば可能性はありません。筏に積まれた材木のようにすから見て、大型帆船の船体用だと思

われます。ですから、送り先のポーミラには、官営造船所があるはずです。そこに今回の事件の鍵があるのではないでしようか？」

全ての大型船は官営造船所で建造されて、それから民間に貸し出される格好になる。国有財産にするのは、造船技術の漏洩を防ぐためと、非常時における船舶の徴発を容易にするためだった。

木材供給地の下流に造船所があるのは理にかなっている。そもそも船乗りたちは、危険の多い海洋での木材運搬をひどく嫌う。隙間に潜り込んでくる蛇やサソリに対する恐怖心もあるが、船が転覆したらまず助からないという絶望感のほうがはるかに強い。大きくうねる波に浮かぶ材木は救命具にならず、むしろ巨人が振り回す棍棒と化して遭難者に襲いかかってくる。

「なるほど。建造計画を中止するわけにはいかない、か。そして枢密院からは、銅板張りにしろとの勧告が出ている。銅材はいくらあっても足りないだろうな」

「官営ですと、木材の納入価格は政府が決めますから、ほとんど利益が出ません。そのぶんを銅で補填しようと考えてもおかしくはないかと」

レオンは得心した。あふれるほどの贖金が出回っているのに、他の都市に流れていけない理由がまた一つわかった。掘り出した銅で贖金を造っているのであれば、いずれ両替商の金庫は満杯になるはずだ。人知れず消費するには、どこかに持ち出さねばならない。

銅であれば何でも、下流の港町であるポーミラで高く売れるに違いない。正貨ならともかく、贖金を溶かして使うぶんには罪にはならない。

しかし、ひとつ疑問が残る。ならばなぜ、銅材そのものではなく、贖金を流通させているのだろうか。

ヨルクの立場ならば、そのまま銅を送り出したほうがいいはずだ。手間がかからないぶんだけ利益になり、貨幣となって戻ってくる。わざわざ贖金を鋳て、ファイルスで回らせる意味がわからない。

三人に話すと、皆一様にうなずいた。どうやら贖金には、まだ奥

がありそうだった。

レオンはひとまず話題を変えた。

「ジエーガン、お前はどうか？ 商工組合の取引所だったが」

「土台の修復に使うんでしようが、古釘が値上がりしてしまいました。それと大量の鉛が持ち込まれてました。大型の桶の中に、製本工房で使われていた鉛版活字が入ってました。不景気で工房が閉鎖されちまったから、売り払ったんじゃないですかね。あれなら、ここらへんで採れる泥状の石炭でも溶かすことができますからね」

「古釘はわかるが、鉛はなんのために使うんだ？」

「外壁の補修のためでしょうね。石畳を引っぺがして当てれば、石を組み合わせる手間が省けますが、構造的にどうしても弱くなりますからねえ。知ってのとおり石垣の強さってのは、積む石の重さで決まるでしょう。ああ見えても、単純にはいかねえんですから」

石や金属のことになると、ジエーガンは得意げに説明する。

「ここは川に囲まれているでしょう。石畳のように間に隙間があると、上からの重みと下からの湿気のせいで、石垣の裾が妊婦の腹のように膨らんできて、ときには崩れちまうことがあるんです。それを防ぐために、隙間に溶かした鉛を流し込んで埋めるとわけて。重さも増して安定するし、いいことづくめです。瀝青れきせいを塗りたくれば水にも強くなるんですが、急ごしらえでは仕方がねえかと。まあ、石灰でも詰めとけば、しばらくの間は鉛が溶け出すことはないでしょう。任務が終わったら、ひとつ口を挟んでやりますよ」

ちよつと待て、とレオンは慌ててさえぎった。まとも聞いていと、夜が更けてしまうおそれがある。

「おかしいな。木に囲まれた街なのに、どうして鉛を印刷に使うんだ？ ポポリのような固い木もあるし、版木印刷で十分じゃないのか？」

セラがためらいがちに口を挟んだ。

「版木印刷は原版の保存もききますし、宗教書のような大量の需要には応じられる利点があります。ですが、この地方にそれほどの人

口はありません。そうなりますと、大学や図書館に収める書籍を扱っているはずで。僅かずつ用途に応じて刷るのであれば、活字のほうに適しているのではないのでしょうか？」

「そういうことで、隊長。専門書であれば注文を受けてから、いちいち彫っていらねえ。黄蠟で固めた活字のほうが好きです。少ない部数を刷るだけなら、活字がずれずすみすみからね。鉛は安いし、加工が容易でインクのなじみもいいんです」

「しかし、鉛は柔らかすぎるだろう」

「ですんで、青銅をつくるように錫を混ぜて硬くするんでさあ。それと精製した吐酒石アンチモンを忘れちゃいけません。こいつは固まると氷のようにふくれますんで、かちつとした活字ができますぜ。おつと、おれとしたことが口を滑らせちまった。こいつはここだけの秘密にしておいてください。野郎ども、技法を漏らすとうるせえんですよ」

レオンは納得した。ドワーフ族は、仲間内で頻繁に技術交換を行っている。ジェーガンの説明に、なんら不明な点はない。

「なるほどな。それで、贖金はどうかだ。流通していたか？」

「そうそう、それぞれ、とジェーガンは姿勢を正した。

「金属や鉱石は、戦略物資でしょう。不法な投機を防いで、安定した供給量を確保しなければならねえ。だから、流通量の少ない金貨で決済するのが常識だったのをすっかり忘れてましたぜ。こっちに贖金があるわけがねえ」

「なんだよ、ジェーガン。抜けてるなんて、お前らしくもないぜ」

「仕方がねえだろうよ、マーク。おれの専門は工作なんだ。契約したときもきちんと言ったはずだぜ。おれの担当は工作と地形探索だつて」

「器用だつて言い張るのなら、もう少し融通を利かせろよ」

二人のやり取りを聞きながら、レオンは考えをめぐらせた。

調査は順調に進んでいるはずなのに、実態がまったくつかめなかった。鉱物の決済に金貨が使われているとなると、商工組合が贖金

を流通させる理由がわからなくなる。銅貨の価値を故意に下げれば、反動で食料品の値段は上がる。現にそうなっている。金貨の価値も相対的に上がるが、それは街の中だけの話だった。別にポーミラで売りさばいた銅の値段が上がるわけではない。

霧がたちこめた森の中にいるような気分だった。歩いて進んではいるものの、外へか奥なのか、どこに向かっているのか見当がつかない。

「なんだ、なにことだ？」

マークの声で、レオンは我に返った。

周囲がより、騒がしくなっていた。足音はより慌しいものになり、あちこちで掛け声が聞こえている。

窓から外を見ると、警備兵たちが駆け回っていた。鎖の鳴る音が、波打って聞こえる。

宿屋の軒下に、兵士が入り込んだ。下で主人とやりあう声が聞こえる。激しているようだが、内容まではわからない。

しばらくすると、兵士が出てきた。なにやら首を振って、ここにいないと仲間に伝えていっらしかった。やがて、集団で走り去っていった。

「おいマーク。お前、よっぽど相手に好かれていようだぜ」

「まったくだ。今度会ったら唇を奪ってやるぜ。この短剣でな」

「おっ、なんだおめえ。おれが打った短剣には、そのぐらいの価値しかねえってのか。そいつには隊長の剣と同じぐれえの鋼を使っているんだぞ。まったく資材課の連中に嫌味を言われながら打ったつてのによお」

「だから使ってるじゃねえか。罨を解除したり、鍵を壊したりしてよ。けど、おれはやっぱり素手のほうがいい。鉋や剃刀よりも重いものは性に合わないな」

「そりゃあそうだ。いい道具は人を選ぶらしいからな」

「最高の道具は、結局自分の身体だと思うけどな。後世の人間はきつとこう言っぜ。偉大なる魔法使いのマーク様は、剣も鎧も身につ

けず、攻めかかってくる敵を端からなぎ倒しました、とな」

「偵察担当の作業員のくせに、有名になってどうすんだ？」

「だから後世の話だと言ってるだろうが」

「本名じゃねえマークが有名になるってのは、最後は敵に捕らわれるってこつたな。それはそれは見事な散り際だろうな」

マークが言い返そうとしたとき、店主に聞きにいったセラが困惑した表情を浮かべて戻ってきた。

「なにが起こったんだ？」

「はい、隊長。どうやら、商工組合の組合長であるヨルク氏が、何者かによって襲撃され、傷つけられたとのことでした」

レオンは息を呑んだ。なにか冷たいものが、背中に滑り落ちてきた。襲撃されたのが組合長とは、あまりにも唐突な出来事といえた。「ほづれ、見る。騒動は、おれのせいじゃなかったじゃねえか。やつぱり、正しいものは正しいんだよ」

ふんぞり返るマークを無視して、レオンは訊ねた。

「殺されたわけではないんだな？」

「はい。ですが、表情に切迫したものがあつたと主人は言っていました。まるで、人殺しを追っているような感じだったと」

「もしかすると、暗殺かもしれないな」

ジーガンが、太い首を鳴らさんばかりに傾けた。

「隊長。そりゃあどういうことですかい？」

「暗殺とは、完全に成し遂げてはじめて成功となる。負傷しただけと言ひ回れば、死亡を確認しなければならぬ犯人を足止めする効果期待できる」

もっともそれは、周到に用意された計画にのみあてはまる。怨恨などの衝動的な原因によるものならば、犯人はすでに逃亡しているかもしれないかった。

「ちいとばかりうるせえことになりそうだが、アニキ。組合長が襲撃されたのなら、取引所での調査は難しくなる。用心して守りが固くなるだろうし。もしかすると贖金の証拠も消されるかも知れない」

待てよ、とマークが言葉を添えた。

「もしかすると、ベックラーの仕業じゃねえだろうな。おれたちを銅山の調査に出している隙に、証拠を消そうとしているとかさ」

「物事を穏便に済ませようとしている人間が、そんなことをするのは思えないが」

「でもさあ、警備隊はあいつの手下だろう。いくらでも理屈をつけられるじゃねえか。アニキが会ったそのすぐ後に、ヨルクが襲われたのもおかしい。不意の巡察で、相当焦っているのかもしれないぜ」

レオンは軽く頭を振った。マークの意見は不自然な気もするが、理にかなっているとも思える。疑問が多すぎて、混乱しそうだった。ふたたび考えをめぐらそうとしたとき、外から大声が上がった。

「酒場で火事だ！ 三階から火が出ているぞ！」

はつきりと聞こえた。さっきマークが暴れた酒場の方角からだった。どうやら犯人は、証拠を隠滅しようとしたらしい。そしてそれは、ヨルク殺害を意味した。本人が生きていれば、火が大きくなるまで放置するわけがない。

窓際に寄ったときに、さらなる怒声が重なってきた。

「北門から逃げた奴がいるぞ、追え！」

「いや、東門だ！ 味方が倒されているぞ！」

声と同時に上がったのは、複数の犯人がいるからに違いない。だとすると、襲撃は組織的なものだろうか。指令の詳細を聞き取ったが、怒号に打ち消されてしまった。

慌しい外の空気に反して、室内は重苦しく感じられた。

霧囲気に抗うように、ジェーガンが切り出した。

「組合長は殺され、犯人はどこかに逃げた。どうやら追っていた糸は切れたようですぞ、隊長。これからどうします？」

「違った角度からファイルスを見てみるとしよう。なにか市街で変わった動きはなかったか？」

そういえば、とセラが手を上げた。切れ長の眼が、微かに丸みを帯びている。

「材木市場に行く途中でしたが、ゴブリン族の皆さんが北門近くの茂みで、樽から袋に牡蠣の貝殻を移しているのを見ました。なんだか慌てたようすでしたので、頭の片隅にとどめておいたのですが、役に立つでしょうか」

「ゴブリン族の皆さんときたか。お前は優しいな、あんなヤツらにさん付けするとはよ」

光のこもった青い瞳が、マークに向けられた。

「その言いかたはひどいと思います。荷役は危険な仕事ですから、どうしても言動は乱暴になります。普段は皆さんいい人たちですよ。店番をしていたときに頭を撫でてくれたり、手のひら一杯に干した果物を頂いたりしたこともあります」

育ちの良さのせい、セラは決して人の悪口や陰口を言わない。赤みが映えた唇から出る言葉には、客観的な視点に立って考えるきっかけを与えてくれることもある。

「おれが枕元で聞いたのとはちょっと違うけどな。まあ、こつちを例外にしておくぜ」

レオンは軽く首を振った。マークが聞いた内容ならば、同じ魔法使いを親に持つ人間なら容易に想像できる。

ゴンドランド連邦軍が長期間遠征を続けられたのは、専門の輜重隊を編成できたためだった。連合して殺到してくる敵の外線作戦に對抗していくためには、行動範囲が制限されてしまう固定倉庫に、物資補給を依存するわけにはいかない事情があった。また、戦果を拡大するための追撃を徹底させるためにも、敵よりも優勢な機動力が求められてもいた。

ゴブリン族が輜重兵にもっとも適していた。農奴出身で読み書きが不自由だったものの、駄獣の扱いに慣れているうえに足腰が強く、さらに安い賃金で雇える点が決め手になった。

連邦政府が、農奴ゆえに専制君主を心底憎悪していたゴブリン族をうまく利用したとも解釈できる。拷問にかけられても敵に情報を漏らす心配がないので、伝令としても重宝したらしい。

ゴブリン族が乱暴者として嫌われたのは、陰で敗残兵狩りをしていたためだった。傷ついて抵抗する気の無い敵兵を集団で攻撃し、戦利品を奪いつくしたのは、真つすぐな気性のマークには許しがたい卑怯な行為と映ったに違いない。

当時の政府は黙許した。敵の戦力回復を防ぎ、迅速に戦役を終結させるための方便といえた。あるいは故意に目こぼしたのかもしれない。いざとなれば罪を蒸し返し、厳正な軍規によつて、処断することもできる。そうなれば一般兵士のように、当時は限られていた開拓地を退役時に払い下げてやる必要もない。

戦役が終わると、当然ながら輜重隊は削減された。しかしゴブリン族は困らなかつた。兵士としては冷遇されたが、荷役夫としては重宝された。口の堅さが信用となり、高級品や政府の物資を運ぶには欠かせない存在となつたからだ。

レオンは再び話題を戻した。

「荷物が貝殻ということとは、そのゴブリン族は東のポーミラから来ていたわけだな。わざわざフィルスまで荷物を持ってきながら、市場に一番近い場所でこそそと移し変えるというのも変な話だ。まるで誰かに追跡でもされているかのようだな」

うんうん、とマークが相づちを打った。

「荷車で運ぶのなら据わりのいい樽が便利だが、担いで運ぶとなると袋のほうが軽いだろうぜ。となるとだ、市場に持っていかずにとこかにこつそりと運ぶという線が浮かんでくるぜ、アニキ。荷車の場所から考えると、北の伐採場になるけどな」

「ありえるな。木々が密生していたから、上からでは見つけれなかったのかもしれない。翼竜の上でセラが言ったように、伐採場に仲買人が行かないとなると、道を使う連中は限られてくるから、隠して運ぶのには好都合だな。しかし貝殻に、隠すほど大事なものがあるとは思えんが。いったい何に使うのだろうか？」

「野ネズミの食害から若い木を守るために、焼いた牡蠣殻を石炭と一緒に使うと聞いていましたが、態度からいってそれはなさそうで

すね。不正といえば、パンやミルクを水増しするために、貝殻を焼いた石灰を混ぜることくらいしか思いつきません」

ジーガンがヒゲで埋もれた顎を振った。

「それはないぜ、セラ。いくら犯罪でも、こそこそとは運ぶほどじやねえ」

「石灰には、それほど多様な使い道があるのか？」

「ええ、隊長。焼けば乾燥剤にもなるし、土の質も変えられるし、確か染物の色落ちを防ぐのにも使える優れものでさあ。どれもこれもフィルスには必要なものだろうが、それだけに引っ掛ってきまずぜ。さあて、他の使い道は、と」

しばらく物思いにふけていたジーガンの顔が、憤怒の形相に一変した。茶褐色の目に、強い光が宿っている。

「おい、みんな。贖金を見せる。古いのじゃなくて、できるだけ新しいやつだ」

セラが差し出したのをひったくるように奪い、持ってきた古い贖金と比べ始める。

大きさは、どちらも同じだった。しかし、厚さが微妙に違っている。何枚も比べたが、同じだった。新しい贖銅貨のほうに厚みがある。

念のため、借りた天秤で重さを量ってみると、ほぼつり合った。大きさも重さも同じで、厚みに差があるのは、贖金そのものの質が異なっていることになる。

ちくしょう、とジーガンが咆えた。テーブルを叩き壊さんばかりに、殴りつける。

「いつの間にか銀が抜かれていやがる。てっきり、新しいから質が良く見えただけだと思っていたぜ。焼いた貝殻と鉛とで銅から銀を抜く技術は、ドワーフ族の秘法だぞ。ゴブリン族の野郎どもめ、よくも盗みやがったな！」

「落ち着けよ、ジーガン」

マークが肩に置いた手を、ジーガンは邪険に振り払った。

「まだ犯人がゴ布林族とは限らない。舎密開発局が裏で動いている噂があると、局長室でおれの親父が漏らしていた」

「なんですって？ あの錬金屋どもが関係してやがるとでも？」

「断言はしていなかったがな。しかし、考えてもみる。贖金がこの近くで造られていることは、すでにわかっている。ところが周辺の石炭の質は悪く、鉛はともかく、銅を溶かす火力は得られないはずだ。冶金技術に長じたドワーフ族でも不可能なのに、ゴ布林族にできるわけがないだろう、違うか？」

ジエーガンの目から、強い光が失せた。長い吐息の後で、怒らせていた肩がすつと落ちた。体がしぼんだようにも見える。

「隊長。銀が抜かれていたのであれば、逆にその行方から考えてみたらどうでしょうか？」

「どういうことだ、セラ？」

「抜いた銀を良質な炭と交換すれば、わざわざ商工組合を通さなくても済みます」

「今回の件には隊商が関わっていると今言いたいわけだな。そうなる」と、逆に山脈西側が怪しくなる」

その通りかもしれない、とレオンは思った。準備室でジエーガンが指摘したように、隊商はかさばる荷物を嫌うというのは道理だ。しかし、銀塊を見せれば取引に応ずるかもしれない。なにより支払いが銀塊ならば、大陸中央部以西に贖金が出回らない理由が説明できる。

持ってきた地図をテーブルに広げ、指をフィルスに置いた。

「セラの指摘した線で動いてみよう。北門から逃亡した犯人を追って警備兵が動いているだろうから、いまゴ布林族を追うわけにはいかない。ベックラー警備隊長が犯行に関与しているかどうかに関わらずだ。行けば我々にとって好ましからざる状況に陥るおそれがある」

「警備隊長が贖金造りに関与していれば、口封じのために我々を背後から襲撃してくるおそれがありますし、関与していないとしても

見つければ、襲撃の犯人と間違えられる可能性があります。結果的に警備隊長と私たちの関係が悪くなるだけですな」

「その通りだ、セラ。いまはいらぬ刺激をしたくない。だから、お前の言った策について考えていこう。ひとくちに山脈西側といっても広すぎる。まずどこに向かうかだが」

「そういえばオーク族の一人が、集落の警備がある、ってぽろっと言ってたぜ。コロンプエ山脈の中央部ってことはこのあたりだろう」マークが勢いよく山脈の中央部を指し示した。連なる山々が砂時計のようにくびれている箇所に、集落らしき地名が書き込まれた跡があった。漏斗のように水が集まるためか、近辺は深い森になっている。ところどころ小さな沼もある。

ジーガンが、掴みかからんばかりに怒鳴った。

「それを何で早く言わねえんだよ！」

「こんな状況じゃあ、すぐには動けねえだろう。それに、関係ねえ連中の、裏も取れねえヨタ話でもあったことだしな」

レオンは、果てしなく続きそうな二人の口論をさえぎった。

「わかった、もういい。今度は外側から贖金を調べてみようじゃないか。搜索対象は、コロンプエ山脈中央部西側だ。今夜半、街の混乱に乗じて、ひとまずフィルスを抜け出すことにしよう。警備隊長の承諾は取ったが、事態が事態だけに隠密に行動しなければな」

「ここに残りたいが、どのみち外出禁止で人ごみにまぎれて動くわけにもいかないし、しかたねえか。おれたちは直々に依頼されているんだから、堂々と門から出てやればいいさ」

「そうですね。これ以上ここで情報を集められないのであれば、ひとまず離れたほうがいいかと思えます。では、わたしたちも宿屋に戻ります」

セラに出発準備を促がされ、ジーガンは嫌々といったふうになり上がった。

「錬金屋どもに、銀が抜けてたまるか」

髭に覆われた口から、ぼつりと言葉が漏れた。

レオンには、出自のドワーフ族を誇っているようにも、犯行を疑っているようにも聞こえた。

## 第七章 鎖と絆と

### 第七章 鎖と絆と

血の匂いを、消す必要があった。

セラは肉塊に刺していた串を抜き、先端を下唇に当てた。熱を帯びていれば、中まで火が通っている証拠だった。しっかりと煮込まれたのを確認してから、翼竜に与える。

翼竜使いを志願したときに、初めて教わったことだった。

大草原に住む野生の翼竜は、狩猟を行う。肉食獣が取った獲物を横から奪うこともあるし、腐肉をあさることもある。孵化したときから、よく火を通した肉を与えることで、食べ物は血の味がしないことを覚えさせる。今では、生肉など見向きもしない。

肉を持ち、翼竜がいる場所までゆっくりと歩いた。たどり着くまでには、食べごろの温かさになるはずだった。震えるほどではないが、夜気は冷たい。

月明かりせいで、木々や草が、ぼんやりと見えている。つまりいて転ぶ心配はない。

夜目がまったく利かないわけではなかった。ただ四分の一とはいえ、エルフ族の血が混ざっている人間の視界ではない、と思えた。暗闇でも楽に移動できる純血のエルフ族と比べられると困る。一般人と同じぐらい見えるはずだと思いたいが、普通とはどういうものなのかがわからない。

着任したときにそう説明すると、室長はひとしきり頭を揺らした後で、しっかりとうなずいてくれた。

むしろ見えないように振舞え、と言われた。偵察担当の人間はすでにいるから、見えなくても不自由はない。こちら側の世界では、全体の利益を守るために、あえて味方を欺かねばならないときもある、と諭された。

心苦しかったが、言われたとおりにした。眼光に押し切られたわけではなく、真意がわかったからだだった。隠しておくことで、味方が窮地に陥ったときの切り札になるかもしれない。

やがて、開けた場所に出た。もともとは畑を造ろうとしたのだろう。ところどころ木の根を掘り返したような穴があり、腰の丈ほどの草が生えている。

巨鳥と同じく、翼竜が飛ぶためには、滑空するための断崖か、長い滑走路が必要になる。集落からは遠からず、近からずといったところに、ほどよく広い場所があるのはありがたかった。

切り株が並ぶ畑の隅で、じつと翼竜は待っていた。名前がないので、労わる声を掛けられない。道具に名前がないのと同じだ、と教わっていた。便宜的に番号が振られているが、そんなもので呼ぶ気にはとてもなれない。

ただ黙って、首を叩いた。ゆっくりとうなずき返してくれるのが、嬉しかった。

肉を与えた。丸呑みはせず、ゆっくりと味わうように、翼竜は肉を噛み続けた。少量で満腹感を得るためだった。体重を減らして浮力を得るために、任務中は食事を極端に減らす。習慣づけるために、まだ小さいときに、わざと硬いすじ肉を与えたこともあった。のどを詰まらせたので、背中を叩いたこともある。

口を動かしているうちに、下から全身を見ていく。翼竜の爪は鋭いが、乾燥に弱い。乾燥すると、馬の蹄のようにひびが入り、巨体を支えきれなくなる。そういったときは、爪に油を塗って水分が逃げるのを防ぐ。ここは空気が湿っているので、その心配はなかった。それでも、足元に視線が行った。足首を巻くように、古い擦り傷がある。足かせの痕だった。何度も飛び立って逃げようとするときに、ついたものだ。

曲芸を仕込む蚕の上に板を当てるのと同じく、自分の力では飛び立てないことを頑丈な鎖によって辛抱強く教え込まねばならなかったからだ。甲高く悲しげな鳴き声が、まだ耳に残っている。

教官は、縛り付けられたほうが幸せだ、と断言した。痛いほどわかる。親に間引かれるはずだった命だった。たとえ戻ったとしても、生きていけるだけの縄張りはない。

それでも、自由に大空を飛べたはずの生き様を思わずにはいられない。

鞍ずれがないか確かめたあと、全身を手のひらで撫でていく。翼の付け根の鱗を優しくめくり、中にいた虫をつまんで捨てた。

何をされているのかわかっているらしく、翼竜は目を細めていた。どの周囲など、急所に触られることを嫌がった時もあったが、今では大人しくされるがままになっている。

心を通わせれば、命令に逆らわずそのまま死地に飛び込んでいく。そういう信頼関係を築いていくよう、教官に厳しく教えられた。

与えられた愛情に、懸命に応えようとする翼竜が、正直うらやましかった。応えようと務めるだけでも、自分には到底達することができない境地だと思えた。

翼竜がのどを鳴らした。食事が終わった合図だった。

セラは毛布を取り出し、翼竜に掛けた。鱗が冷たかったので、温めなくてはならなかった。体温が下がり過ぎると、動けなくなる。とっさに飛び立てないと、遅れを取り、場合によっては隊員の全滅につながりかねない。

毛布が全身を覆うまで、翼竜は身動き一つしなかった。まるで邪魔をしないことが、翼竜自身にできる唯一の信頼の証であるかのようだった。掛け終わると、翼竜は首を地面につけて目を閉じた。ここに居なくていいよ、と言われてるように思えた。

思わず、ごめんね、と言いそうになった。なぜそう言おうとしたのかはわからない。

鍋のあったところに戻ると、罌の点検を終えたレオンが座っていた。肉を取り出したスープの中に乾燥野菜と塩を加えて、丁寧にかき混ぜている。宮廷料理人さながらの険しい目つきをしているのは、周囲からの気配を読み取るうとしていいるせいだと思われた。

「量も質も、母さんの煮込み料理には到底及ばないが、体を温めるぐらいなら、これで十分だろう」

レオンはひそめた声で語りかけてきた。警戒線が張られている可能性があり、大きな物音を立てるわけにはいかない。小枝の爆ぜる音でさえ気にしなければならぬほど、周囲は静まり返っている。

「そうですね。食べ過ぎると動きが鈍くなりますし、お腹に打撃を受けると危険ですから」

差し出された木の椀を、セラは礼を言って受取った。言われたとおり具材は少ないが、気になるほどの量でもない。むしろ自分には多いぐらいだった。

「虫がいないな、セラ。寒さのせいかな。それとも、鉾山から出る毒水だろうか。とにかく、獣脂に草の汁を混ぜたものを塗らずにすんでよかった。虫除けになって、体が温まるかもしれないが、あの家畜小屋のような匂いはいただけくない」

「湿気があまりないのも助かります。合成弓には大敵ですから」  
「ところで、髪を黒く染めたな」

「はい。月明かりの下では、灰色の髪が浮き上がるおそれがありますから。市場で黒葡萄酒が売られていましたので、持っていたニワトコの種を漬け込みました」

仲間らは皆、夜目が利かれないと思い込んでいる。今できることといえば、せいぜい敵に見つかからないように振舞うぐらいだった。消極的にしか動けない自分が、恥ずかしくもある。

「マークのやり方とは違うようだが」  
「占い師として動いていたときに、お客さまから教わりました。隣が娼館でしたので」

「傭兵の動きを探っていたときだな」  
「はい。肌の色を白くする方法の後で教わりました。鉛を使うと体には良くないですよ、との忠告を、気に入ってもらえたようでした。余計なお世話だ、と怒られるのかと思ったのですが」

「どうやら神秘的な容姿ではなく、その優しさで彼女たちの心を開

かせたようだ。欺瞞と打算の世界に住んでいる人間にとって、正直で率直な言葉が新鮮に思えるのだろう」

その後、関係ないことを延々と語りかけてきた。軽口も混ざったが、どこか上滑りしていた。話題に脈絡がないのは、気を紛らわせるためだろう、とセラは察した。

偵察と地理の専門家であるマークとジェーガンについては、それほど心配する必要はなかった。ただ、二人がもたらす情報によって今後の対策を決めなければならない。ただ待つだけでも、少なからぬ努力がいる。

沈黙の間を埋めるように、木の椀に口をつけた。肉の旨味と、野菜の甘さが出ている。ただ、もう少し塩気が欲しかった。薄味には慣らされてきた舌でも、もの足りなさを感じるのは疲れているせいかもしれない、とセラは思った。

口に出すつもりはなかった。皆も同じ条件だし、翼竜はもつと疲れている。

水筒の水を一口含んだ。甘みのあるつる草の葉を漬け込んでおいたものに、漿果の絞り汁を混ぜたものだった。フィルムでは染料として使われているが、強い酸味のある汁は、わずかながら体を癒す働きもあった。染料となる植物には、薬になるものが多い。

かすかに遠吠えが聞こえた。何の動物かはわからなかった。純血のエルフ族だった祖母なら聞き分けられたに違いない。獣の種類によつては、身を守らねばならない。鳥であれば、おおよその時間が読める。暗い森で暮らしている人間にとって、聴覚は視覚と同じくらい大事なものだ。エルフ族は、耳でも見る。

ふいに、小枝を踏み折る音が聞こえた。耳をそばだててみる。何やら小声で言い争っているようだった。仕掛けた罠が作動していないのなら、偵察に出ている二人かもしれない。しかし、不用心すぎた。立ち去る動きを悟られて、逆に襲撃を受けかねない。

「どうした、セラ？」

不審そうな顔をしたレオンが訊ねた。誰かが迫っている、と説明

すると、顔がより引き締まった。杖を持って立ち上がり、指さしたほうに向き直る。

「火はどうします？」

「そのままでもいい。少人数ならば、偵察だろう。だとすれば、相手はまずこちらの正体を知ろうとするはずだ。逆手に取ってやるう」

セラはうなずき、短弓を手に取った。吹き矢もあつたが、置き捨てた。奇襲攻撃には向いていても、反撃には不向きだった。連射が利かないので、敵に接近を許してしまう。護身用の短剣も、身につけた。

レオンとともに、音がした反対側の茂みに隠れる。向かってくる相手から一番遠い位置で、速やかに反撃に移れる場所でもあつた。荷物はそのまま焚き火の前に置いてある。調べようと敵が茂みから出てきたときが、奇襲の好機になりえた。

何回か茂みをかき分ける音がして、ささやき声はつきりと聞こえ始めた。低いうなり声は、間違いなくジェーガンの声色だった。間を挟むように、マークの声がする。鋭くて短い声だったが、必死になってなだめているように聞こえた。

性格が逆転したようだった。いきり立ったマークをジェーガンが止めるのが日常だった。となれば、二人にとって異常な、望ましからぬ事態が起こっていることは容易に想像がつく。

やがて、草むらから二人の姿が現れた。セラたちも姿を見せた。

「なにをやってるんだ、お前たちは」

短く鋭いレオンの詰問に、マークは赤髪を無造作に掻いて応じた。張りつめていた気持ちが緩んだのか、大きくて長い吐息をつく。

「むしろ褒めてもらいたいぐらいだぜ、アニキ。こいつが今にも飛び込んでいきそうなのを必死で止めて連れ戻したんだからさ」

「いったいどうしたというんだ、ジェーガン？」

「理由は、マークから聞いてくだせえよ。こいつが偵察担当なんですから」

ジェーガンは、頭についた木の葉を乱暴に払いながら答えた。食

いしばった歯から漏れ出る言い方には、なんらかの当惑があるように思えた。

「隊長。罨の点検をしに、ちょっとそこらを見回りに行ってきませえ。とても聞けたもんじゃねえ」

斧槌を手にしたジーガンが茂みに消えると、それぞれ焚き火を囲むように座った。柔らかい泡を立てている鍋から、香気をまとった湯気がのぼっている。

「なんだい、アニキ。これはどこの泥水だい？」

「このあいだお前が作った、野ネズミのスープよりはましだと思っかな」

「文句は香辛料を目潰しに使わせた、聞き分けの無い門番にいつてくれよ。ネズミ以下の連中に使うのは、たしかにもつたいなかつたけどさ」

「肉の削ぎ落としだけで投げ出さずに、もっと料理を学べばよかつたんだ。効率のいい手順の立て方も、習慣となつて身につくぞ」

「骨格さえ頭に入ればいいよ。そっちは素早さで補うさ」

木の椀を受取ったマークが軽口を叩いた。しかし、視線はスープの中身ではなく、中空に向けられていた。おそらく何から話しているか整理しているのだろう。

二口ほどすすつたのを見て、レオンが訊ねた。

「お前が言いよどむとはよほどの出来事があつたんだろうな。とにかく、順序だてて話せ」

「おれたちは集落跡地に向かつた。地図で見当をつけていた場所だ。苦労したぜ。木に張り巡らしたロープをくぐるのに少し手間取つちまつてさ。暗くてどこにつながっているかわからなくて、危なかつたからな」

「なにか罨でも仕掛けられていたのか？」

マークはうなずいた。炎のせいか、瞳が赤く見える。

「古釘が一面に撒かれていた。尖った部分が必ず先端に向くように、組み合わせてあつたぜ。なにが塗つてあるかわからないから、短剣

で地面をほじくりながら慎重に進んだんだ。見回りが歩いていたら。上半身裸で墨が入っていたから、おそらくゴブリン族だろう」  
「見回るゴブリン族たちの視線は、内側と外側のどちらに向かっていた？」

「外側。おれたちのほうだ。だから、気配を消すのに苦労したぜ」  
セラにも、レオンの問いかけた意味が理解できた。もしも、内側を警戒していたとしたら、ゴブリン族に対して非協力的な人間が住んでいるといえた。逆に外側ならば、集落にいるのは同族か協力的な人間であり、警戒する必要がないからだと容易に推察できる。

「土気はどうだった？」

「正直言つて、高いとも低いとも言えなかったぜ。暗くて表情はいま一つわからなかったが、歩き方はしつかりとしていた。ただ、なんだか草を噛んでいたようだった。こつちが懸命にセルムの葉を我慢しているつてのにさ。しかもときたま唾まで吐き捨てていやがった。汚ねえつたらありやあしねえ」

セラがおずおずと口を挟んだ。

「もしかすると、幻惑草かもしれません。疲労や空腹感を忘れさせるだけでなく、覚醒効果もありますから。もつともどちらも一時的なものですので、常習性が問題になっていますが」

「なあるほど、あれが噂の幻惑草ってヤツか。しかし、やけに詳しいな」

マークが感心したふうに言った。

「義母が、教えてくれたんです。あなたもエルフ族の一員なら、植物の知識が必要だつて」

「へえ、そりゃあ珍しいことじゃないのか？ エルフ族は強固な母系社会だから、後妻が財産欲しさに前妻の子供を追い出すって話はよく聞かぜ。お前がここに入隊してきたのも、そのたぐいだろうと思っていたんだがな」

エルフ族は狩猟民族だけに、集団で森の中を常に移動している。

当然、他部族の縄張りに入るときもあるし、焼畑の適地や獲物の配

分でいさかいが起こることもある。流血を回避できたのは、相手側に嫁いでいた血縁女性の働きによるところが大きく、時代を経るにつれて発言力を増していく要因になった。

女性が獲物なみの扱いを受けていたのは、乏しい食料の代わりに身体で来客をもてなしたのと同じぐらい、はるか昔の話に過ぎない。二分の一でも、四分の一でも、エルフ族の娘はエルフ族だった。血を繋げ、広げていくことで、部族全体の安全を保障してきたといえる。当時はよそ者だった魔法使いも、友軍として闘ってくれたドワーフ族と違って、故郷の森を追い出されずにすんでもいる。

セラは思いつきり首を振った。

「とんでもありません。義母はとても優しくしてくださいました」  
しかし、その優しさが、家を出た原因でもあった。

義母は純血のエルフ族だった。動植物の知識だけでなく、弓術にも秀でていた。出自に誇りをもっていたが、尖ったところがなく優しかった。だからこそ、父は母を迎え入れたのだと、いまでも思っている。決して材木商を営むエルフ族の人脈欲しさに一緒になったわけではないはずだ。再婚者どうしの結婚でも、家庭には温かさがあつた。

ただ、義母の親戚とは合わなかった。何をしても、疎外されているように思えた。エルフ族なら、当然身につけられるはずの技能が、親戚の子供より劣っていたからに違いない。家の中が温かいぶんだけ、外の冷たさが逆に堪えた。幼ない心だからこそ感じ取れたのかもしれない。

流れている血のせいにはしたくなかった。努力が足りないに違いない、と懸命に頑張った。しかし、植物の知識と弓術は身につけたが、その他の技能はどうしても及ばなかった。夜目ははっきりと劣っていたし、耳はよく聞こえても動物の鳴き声までは聞き分けられない。

ある日、庭の片隅で義母が口論しているのが見えた。やっぱり、とだけ聞こえてきた。声の調子で親戚の一人だとわかった。熱気を

帯びた声で言い返す義母の声が、空しく聞こえた。

優しさが、苦しかった。いま思えば、報われない努力に対する苦しきだったかもしれない。

仕事一筋だった父が死んだとき、家を出る決心をした。財産に未練はなかった。だから、身の回りの品だけを持って出た。親戚に対するあてつけではなく、一からやり直したいと思ったからだ。

魔法特機隊を志願したのは、魔法使いの血が入っていたからではない。ここなら自分の技能が役に立つと思ったからだ。弓術と植物の知識があれば、特殊な任務にもつくことができる。与えられたセラという名前も気に入った。

とくに翼竜使いは、適職に思えた。静寂に覆われた上空では、それほど耳を使わずにすむ。

たとえ汚れた仕事であったとしても、生きていると実感できた。

豪華な食事やきれいな着物よりも、喜びを感じられた。今の生活には、不満はない。

「ん？ どうした、セラ」

マークの戸惑ったような表情が目に入った。

「言いたいことがあるなら、遠慮するなよ。おれたちは同僚である前に、仲間なんだからよ。嫌なことをいつまでも心にとどめておく、沼の水みたいに腐っちまうぜ。なあ、アニキ」

「お前は逆にもう少し自重することを覚える。口も慎め。誰だって家庭の悩みぐらにはあるだろうが」

「無口な床屋なんて、客が来ないぜ」

「お前はしゃべりながら煙突掃除をするのか？」

マークをたしなめた後で、レオンは視線をセラに向けた。穏やかそうな黒目の奥に、焚き火を孕んだ光が宿っている。どこことなく、義母の目に似ていた。

「相談に乗る用意はあるが、今は任務を優先したい。わかってくれ」  
「もちろんです。すみません」

口数が少ないせいなのだろうか。どうしても心配を掛けてしまう。

それがまた心苦しかった。

食事をそこそこに切り上げ、セラは矢の手入れを始めた。焼き固めて貫通力を高めた矢柄を、鮫皮でこすって滑らかにし、狐の皮で一本ずつ丹念に仕上げていく。

毒草も見つけたし、練り固めるためのイチジクの樹液も持っている。しかし、毒矢は使えない。暗闇では同士討ちの危険がある。敵をひるませ、お互いの犠牲を抑えるには、どうしても弓そのものの威力に頼るしかない。

幸いにも、使っているのは合成弓だった。内側に翼竜の骨の薄片、外側に腱をそれぞれ膠で張り合わせたつくりになっている。翼竜の胸と翼をつなぐ腱は、細くても強い腰があり、飛距離を稼ぐのに適しているが、一頭でわずか二本しか取れない。使えるのは、翼竜使いのささやかな特権だった。

翼竜は死んでも人の役に立つ。自分はどうなのか、セラは自問した。

役に立ちたい、と考えるのは傲慢だと思っている。必要とされたい、と願うのは甘えかもしれない。どちらも自分には似つかわしい生き方ではないような気がした。

自分がいてくれて良かった、と思われること。これが理想的な関係に違いない。そよ風のように吹き抜けて、余韻を残さないような存在がいい。

詰め終えた矢筒を脇に置いて二人を見ると、無言のまま視線を地面に向けていた。小枝を持ったマークが地面に集落の見取り図を描いている。

山脈を取り囲むような半円状の警戒線があり、その円周上に見張り台が四ヶ所置かれている。警戒線の中には、大きさの違う建物がいくつか並んでいた。中心にほど近い一番大きな長方形の中に、集会所の文字があった。

「集会所の鐘楼に見張りがいたから、ジェーガンを茂みの中に置いて、おれだけが集落に接近した。ひとまず一番手前の建物に壁伝い

に忍んで、木窓をそつと開けてのぞいたわけだ」

マークはいったん言葉を切つて、スープをすすつた。顔をしかめたのは、熱さのせいに違いない。体を温めるより口を湿らせたかったらしい。

「まさかというか、やっぱりというか。建物の中にいたのは、ドワーフ族だったよ。ジェーガンのような小さいながらも肉がついた体格に、ひげを生やしていたんだから見間違ひようがない。上半身裸だったが、墨が入ってなかったし」

聞いていたレオンの目が鋭くなった。

「裸でいるのは暑いからだな。つまり、強い火を使つていた」

「その通りだぜ、アニキ。木窓の隙間から、何かを溶かしたものを鑄型に注いでいるのが見えた。中身はよくわからないが、とにかくガンガンと石炭を燃やしていたぜ。ああも溶けるとなると、やはり良質の石炭なんだろうな」

「昼間採鉱して、夜は贖金造りというわけか」

たぶん、とマークはうなずいた。

セラは弦をしごきながら、二人のやり取りを聞いていた。話を総合すると、ゴ布林族とドワーフ族が共謀して贖金造りに手を染めていることになる。それなら出自を誇るジェーガンが腹を立てる理由も説明がつく。

「さて、本当の問題はここからだ。少しして、見回りの人間が建物に入ってきた。そこでおれは見た。中でドワーフ族と親しげに話している相手の姿をさ。小柄で革鎧の上からでもわかるほど肉がついていて斧を持っていた。つまり、ドワーフ族がいた建物を見回っているのは、やはりドワーフ族だったってわけさ。まったく、おれにはなにがなにやらさっぱりわからないぜ」

セラは手を止め、考えをめぐらせた。意外な事実だった。この集落には、三通りの役割を果たす人間がいることになる。外側を見回るゴ布林族と、内側を見回るドワーフ族。それに贖金を作っているもう一つのドワーフ族。

仲の悪いはずのドワーフ族とゴブリン族が同居しているのも不思議だが、ドワーフ族を同族のドワーフ族が監視するのも妙な話だった。

「どうしてドワーフ族が、内側を見張るのだろうか？　ゴブリン族を内側に置いて、ドワーフ族を外側に配置するほうが自然だと思うがな」

黒い眉をひそめるレオンに、セラは自分の見解を述べた。

「同感です、隊長。ゴブリン族の人たちが犯罪者で、ドワーフ族の人たちに犯罪を強要しているとしますと、いつでも人質に取れる小屋の近くに味方を配置するはずですよ。ですが今の位置関係から考えますと、お互いに信頼しあっているということになるのでは？」

「いやあ、仲がいいとは考えられないぜ。聞けば、ドワーフ族は荷役の仕事を野郎どもに奪われていたそうじゃないか。食えなくなっただから、贖金造りをしていると考えるのが当然だろう。ドワーフ族にとって、ゴブリン族はいわゆる仇だぜ」

「マークの言うとおりだが、そうなるかわからなくなるぞ。ドワーフ族の見張りが、親しげに話しかけていたのであれば、味方の安全が確保されているからだろう。だとすると共犯という線しかない。なるほど、ジエーガンが惑乱するのも無理はない、か」

くべていた小枝が爆ぜた。湯の沸き立つ音があたりに広がっていき。

マークが沈黙を破った。

「まあ、とにかく続きを聞いてくれ。再び警戒線を越えて茂みに戻ろうとしたとき、ゴブリン族たちが騒がしくなったようなので、引き返して見にいった。すると、馬が一頭、集落から出てきた。西に向かっていたから、おそらく隊商だと思うぜ」

「荷車はあったか？」

「いや。でも轍はあったから、何かかさばるものを運び込んでいるのは確かだぜ。空馬だが、鞍のところは袋がつけられていた。それほど重さがない何かを運び出しているのはわかるんだが、正体は

全くわからない。セラの言ったとおり、考えられるとすれば銀塊だが、確証は得られなかった」

マークは申しわけなさそうに肩をすくめた。

「ひとまず偵察を終えて、茂みに戻って待ちわびていたジーガンに教えたってわけさ。おれだってここに戻るまで教えたくなかったんだが、なにしろヤツはいきり立っていて、今にも飛び出していきかねない状況だったからな。で、結局半ば強引に連れ戻してきたのさ。本当に疲れたぜ」

セラは、耳をそばだてた。遠くで、何かの音がした。葉が触れ合うような音だった。気のせいではない。ささやき声も聞こえた。

敵だった。単独行動のジーガンが話すはずがない。

「どうした、セラ？ また考えごとか？」

「いえ、隊長。敵です。しかも複数」

二人は素早く立ち上がり、セラの指差す方向を向いた。それぞれ得物を手にしている。

木に何かを打ち込んだ音がした。鋭く、よく響いた。ジーガンの斧槌に違いない。枝と岩とで作られた罟が落ちる音がして、ざわめく声が悲鳴に変わった。

「てめえら、許せねえ！」

ジーガンの声だった。はっきりと聞こえた。二人も聞こえたようだった。

「人を斬るのは本意じゃないが、攻められたのでは応戦するしかない」

「わかってるぜ、アニキ。さっさと助けに行こうぜ！」

マークはスーブの残りで火を消した。石の焼ける音がして、灰と煙が舞った。

セラは、一瞬目をつむって開けた。ぼんやりとだが、見える。たとえ見えなかったとしても、翼竜の場所は覚えていた。ぶつからずに走り抜けるぐらいはできる。ここで足手まといになるわけにはいかない。

「セラ、脱出する準備をしてくれ」

「頼むぜ」

セラの返事を聞く前に、二人は茂みに消えていった。荷物をまとめ、焚き火の始末にかかった。痕跡を消すのが、最初の役目だった。敵に手がかりを与えてはならない。河原なら石の煤まで洗い流さねばならないが、ここは全てを埋めるだけで終わる。

土をかけようとしたとき、ふいに戸惑いを覚えた。

焚き火をしたときは、すぐに土をかけてはだめ。完全に火が消えたのを確認してからにすること。さもないと余熱が木の根を痛めて、土を殺すことになるからね。

優しくかった義母が教えてくれた、エルフ族の掟だった。

教えは守りたいが、急がねばならない。仲間の危機が迫っている。セラは慌てて頭を振り、記憶を追い払った。

「ごめんなさい、とつぶやいて土をかけ、落ち葉を撒いた。

ためらったのは、ほんの半瞬のことだったろう。二人の足音が近い。

長短二本の合成弓を持って、地面を蹴った。

足を止めた。まとめた荷物を忘れるところだった。急いで戻った。自分は何をしているのだろう、とセラは思った。頑張ろうとすればするほど、結果的に足を引張っている。情けなくなった。

二人の足音が消えた。何があったのか。立ち止まって、耳を澄ませた。

「セラ。足元に気をつける。目が慣れるまでの辛抱だ」

「なあに、ゆつくりでいいぞ。どうせあいつは鈍足だ、手探り歩きでもいいくらいだぜ」

はい、と小声で返事をしながら、懸命に駆けた。暗闇で戸惑っていると思われたようだった。

胸に、堪えた。

優しくしてくれるだけに、かえって胸に、堪えた。

木々の間から、いくつかの人影が見えた。月の光で、淡く浮かび上がっている。

地面はほとんど草で覆われているが、平坦で開けていた。おそろく畑として切り拓いた跡なのだろう。

聞き慣れた雄たけびだった。レオンは中央に、ジェーガンの姿を認めた。足に傷を負っている。手負いのぶんだけ、気合を込めて斧槌を振り回しているが、当たったようすはない。重い風切り音だけが、空しく伝わってくる。

敵は気圧されているように見えるが、実際は遠巻きにして、疲れるのを待っているようだった。重い斧槌はあくまでも工作用で、戦闘には不向きだった。

茂みに身を伏せたまま、息を殺して数をかぞえる。二十人と見当をつけた。

目を凝らして、相手を見た。敵の背は低く、がっしりとした体格だった。ドワーフ族の同士討ち、と一瞬思ったが違うようだ。上半身裸で、墨を入れているのはゴブリン族に違いない。困んでいる連中は、手に剣を持っていて、青白い光を放っている。

レオンは少し安堵した。こちらは共に革鎧を着込んでいるし、刃は鞘に納まっている。茂みならいざ知らず、広い場所での夜間戦闘では、光を反射するものは全て仇となる。味方の同士討ちを考慮する必要は全くない。細長く光るものは、全て敵だと判断していけばよかった。

手で右に回りこむように、指示を出す。うなずいたマークが音もなく闇に消えると、レオンは改めて前方を見やった。同時に、杖の感触を確かめておく。

視界の右端にひときわ大きい男が立っているのが見えた。胸のところに、なにかの模様が見える。

「焦ることはねえ。そのまま足を狙っていけ。血が流れ出していけ

ば、じきに大人しくなる。蹴転がして生け捕りにして、それからじっくりと問いただしてやるうぜ。おれたちのやり方でな」

「てめえ、ふざけんじゃねえ！」

塩からい声が途切れると同時に、マークが男の背後から飛び出した。そのまま短剣を首筋に差し込む。絶叫があり、男が倒れこんだ。結果的に奇襲となった。どよめきが起こり、困んだ輪が弾ける。

レオンも杖から剣を抜き、茂みを飛び出した。ゴブリン族を背後から斬る。首筋を狙って薙いだ。軽い。紙を切る感触がある。切れ味もいい。脇から悲鳴が上がった。

左に振り向く気配があつた。即座に横撃がくる。飛びのいてかわし、のどに剣先を突きこむ。下手な口笛のような音が聞こえた。胸を蹴飛ばして剣を抜き取る。反動をつけて右。斬り込む。首はわずかにかわされた。しかし、肩に刃が入る。敵はひるみ、さらに輪が崩れていく。

ゴブリン族が二人、剣先を向けてきた。レオンは牽制しつつ、素早く視線を右に走らせる。

視界の端にマークが見えた。巧みに敵の斬撃をかわしつつ、ジエーガンに迫った。

「おい、助けに来てやったぜ」

「けっ、お前の俊足とやらもあてにならねえな」

恩着せがましい言葉のせいか、ジエーガンはぞんざいに答えた。

「茂みを越えるのに手間どつてな。まったく、可愛くないのは格好だけにしておけよ」

マークの軽口が効いたのか、肉厚の肩が少しだけ落ちた。斧槌の振りも静まった。

二人は背中を合わせて構え、死角を消そうとしていた。しかし、斧槌と短剣では均衡が取れない。逆に好機と見たか、敵が一斉に詰め寄ってきた。枯れ草を踏む音が、陰気に響く。

輪が、二人に殺到してきた。鎧がないだけ、軽快な動きとなる。

「危ない！」

レオンは前に跳んだ。二人向かってくる。挟撃だった。右に焦点を合わせ、剣を払う。首。一人倒れた。迫る左もまだ、視界に入っている。振り向きざまにすくい上げる。あばら骨で止まった。腕に手ごたえがある。締めつけるような声が出て、また一人倒れた。

声が効いたのか、敵が後方に飛びのいた。まだ多勢だが、ひとまず孔が開いた。殺到してくる前に、脱出するべきだった。

「二人ともこつちだ！」

レオンの呼びかけに、ジエーガンの悲痛な返事が返ってきた。

「おれは、足をやられて走れねえ。ここに置いていってくれ」

うるせえ、とマークは怒鳴った。体型に合わない、低い声になっている。

「てめえがくたばるには五十年は早ええ。アニキ、肩を貸してやってくれ。おれが背中を引き受けるぜ」

「お前の武器は短剣だぞ。囲まれたらどうするんだ」

「足で稼ぐ。それに、最後を守るのは、先祖代々おれの家の仕事だ。たった今決めたぜ」

迷っている余裕はなかった。レオンはジエーガンの左肩をとった。

「マーク、必ず戻ってこいよ」

「まかせて、まかされるぜ、アニキ」

追いつがろうとする敵をマークがさえぎる。斬撃を短剣で受け流し、膝に蹴りを飛ばした。不快な音がして、活きのいい肉が倒れた。敵はまた後ろに退いた。回り込む動きを見せる。

とにかく隙ができた。翼竜がいる方向へ足を速める。

苦しい。場所は頭に入っているが、走れない。敵との距離が近すぎて、罠に誘い込むことさえできない。敵は迷わず、こちらの背中を追ってくるだけだいいい。

背後では、まだ戦いが続いているようだった。ときおり悲鳴が上がり、倒れこむ音がある。それでも、追ってくる足音がある。敵は、二手に分かれているに違いなかった。

「ジエーガン、大丈夫か」

「浅手でさあ。気にしないでくださいよ」

「もうすぐセラのところだ。頑張れ」

広場に出た。一番奥のところに、翼竜らしき姿があった。

「伏せて！」

セラの鋭い声があがった。意味がわかった。ジエーガンともども、転ぶように身を伏せる。胸と膝に衝撃が走った。土ぼこりが口に入った。地面は夜露でかすかに湿っている。

弦がかすかに鳴った。鏃が尾を引いて、頭上を越えていった。速い。長い悲鳴が起こり、茂みが割れる音がした。二度三度と続くと、敵は大人しくなった。飛び出してきたら、即座に射抜かれるとわかったようだった。

レオンたちも、まったく動けなかった。動く、夜目の利かないセラに射抜かれるおそれがある。かといって、火矢は使わせられない。居場所を特定され、迂回攻撃を受けるおそれがある。囲まれて滑走できなくなれば、翼竜での脱出は難しくなる。

やむなく、ゆっくりと地面を這うように進んだ。ジエーガンも続いた。足の傷が痛むのか、ときおり短く切ったうめき声上がる。

ようやく、中間あたりにまでたどり着いた。これなら、同士討ちとなることはない。レオンは大きく息をついた。草と土の匂いがした。静寂が戻っていた。戦いは終わったらしい。

レオンは思い切って、大声を出してみた。

「マーク、無事か！」

大丈夫、とすぐさま返事があった。

「セラ、気にするな。おれは木の陰に隠れている。飛び出してくるのがいたら遠慮なく射抜け」

「はいっ！」

機転が利いていた。これでゴブリン族はつかつに出てこられない。完全な足止めとなった。

「いくぞ、ジエーガン」

肩を貸しながら走った。大きく左に回りこむ。弓手側と違って右

脇が引き締まる体勢は、セラの得意とする構えだった。距離からしてわずかの差だろうが、セラには助けになるはずだ。

茂みがざわついたが、敵が飛び出すようすはない。急いで翼竜の背中に乗り、二人で鞍にまたがった。視線を左右に走らせたが、マークも敵もどこにいるのかよくわからない。

「マーク、あとはお前だけだ！」

「了解。じゃあ、行くぜ」

続けて二回、石が広場に投げ込まれた。一拍待て、の合図だった。セラは軽くうなずき、長弓を構えた。出てきたゴ布林族に向かって、矢を放つ。悲痛な余韻を残して、男は倒れた。

ひるんだ空気を切り裂くように、右側から飛び出してくる人影があった。マークに違いなかった。緩やかに曲がりながら、翼竜の正面に向かってくる。

ゴ布林族たちも出てきた。雄叫びをあげ、殺到してくる。

セラの背中に叩きつけるように、レオンが叫んだ。  
「出せ！」

半瞬の後、翼竜は滑走を始めた。大きく翼が羽ばたき、強い風がレオンにかかる。傾いていた体が水平になり、速度が上がった。振動がなくなり、宙に浮く感じがした。

正面にいたマークの姿が大きくなった。一瞬でセラの肩に消える。押し付けられる感触があり、再び体が上方に傾いた。木立が林になり、森へと変わっていった。右手の山脈が、青白く輝いていた。

翼竜は滑空を始めた。気流を捉えたのか、体勢は安定し、全身を荒々しく揉んでいた風も消えた。ゴ布林族が地上であげているであろう憎悪の叫びは、全く聞こえない。セラの鋭い掛け声だけが耳に入ってくる。

「危ないところだったな。しかし、得るものも大きかった」

渴いた口に、湿った夜気が心地よい。レオンは一息ついて、考えをまとめ始めた。

マークとジエーガンの偵察によって、贖金造りには、ドワーフ族

とゴブリン族が絡んでいるのがわかった。仲の良し悪しはひとまず置いて考えてみると、協力は理にかなっている。

荷役を担うゴブリン族と、冶金技術に秀でたドワーフ族とが組めば、贖金を流通させることはたやすい。生活に必要な物資も、ゴブリン族が運び込んでくれる。ゴブリン族は、銅から銀を抜き、石炭を購入したぶんの残りを懐に入れる。信頼しあっていない状況でも、お互いに共通の利益があれば、手を握ることは十分にありえた。枢密院と元老院の関係を見ればわかる。

わざわざ質の悪い贖金を造る理由は、なんとなくだがわかった。銅鉱石や銅材なら、出所を疑われる。コロンブエ山脈一帯は領土がいりくんでいるから、新たな紛争の火種になりかねない。状況いかんでは、破却された集落のように、せつかく見つけた銅山を失うおそれがある。贖金として市場に出回るなら、たとえ存在が明らかになったとしても連邦政府の介入を誘えるから、領主たちもつかつに手出しができないわけだ。

現に財務省の代わりに、司法省が動いている。

問題は、連中の背後に何らかの人物がいるどうかだった。考えられるのは、やはり商工組合だろう。城壁の外の自由市場がないのであれば、フィルスの市場を通して取引をするしかない。手を汚さずに手数料を取れるのであれば、美味しい役回りだ。直接ではなくても何らかのかたちでヨルクが関与していてもおかしくはない。

しかし、組合長は何者かによって殺害され、店を焼かれている。贖金造りの口封じのために消された、との仮定が真実味を帯びてきた。

必然的に犯人は警備隊長のベックラーになるが、どうしても解せない。わざわざ自らの立場を不利にする必要があるのだろうか。定年後の身の振り方を考えねばならない齡であるのに、それを蹴つてまで、破滅につながる行為に手を染める利があるのだろうか。

誰が黒幕なのか、更なる調査が必要になった。

いまさらフィルスには戻れない。体勢を立て直す場所を探さねば

ならなかった。

「おおい、いい加減に降ろしてくれよ。あまり揺れないから、気持ち悪くはねえが、気分が悪いぜ。高いところにぶら下がっているのは、あまり愉快なものじゃねえからさ」

下を見ると、革鎧の両肩部分に、翼竜の爪が引っ掛かっているだけの不安定な姿勢だった。深く食い込んではいるものの、強風でもあれば落ちる危険もある。

レオンは、しおれているようすのマークに、つとめて明るい声を掛けた。

「マーク、翼竜に感謝しろよ。命の恩人なんだからな」

「ついでにセラにも感謝しておくぜ。そうすれば、世の中上には上がいる、ってことでオチまでついて丸く収まるってわけだ」

「なにを寸劇みたいなことを言ってるんだ。おれたちが見るはずの大団円には、まだまだ遠いぞ。セラ、どこか適当な空地を見つけて降りてくれ。マークを拾いなおすから」

はい、と返事があった。翼竜の体勢が傾き、旋回を始める。

心なしか、セラの掛け声が潤んでいるように、レオンには思えた。

## 第八章 鉾山の罠

### 第八章 鉾山の罠

蜜蝋燭を灯しても、上は暗いままだった。

闇に押し潰されそうになるほど、洞の天井は高い。十人の大人が手を繋いで届くかどうかのポポリの巨木である。伐採所の近くだが、あたりは暗闇に包まれていて、中で静かにしている限り、敵に見つかることはないはずだった。

ジェーガンは、洞の内壁にもたれかかりながら、さきほどの出来事を思い返していた。

冷静になれば、周囲に気を配ることもできたはずなのに、憤って失敗した。

小さい鍋のようだとジェーガンは自嘲した。すぐ熱くなって、かき回された。結果として、太腿に傷を負った。自分の過ちで、味方を死地に追いやった。明らかな失態だった。

「どうした、ジェーガン。そんなに痛むのか？」

酒瓶のふたを閉めながら、レオンが、心配そうな顔で言った。

「どうやら、傷口を洗ってくれたらしい。斬られただけでなく、先ほど地面を這いつくばってもいた。ついた泥や土で、膿むのは避けねばならない。」

「いいや、隊長。ちょっと傷口がしみただけでさあ」

本当はしみていなかった。もしかすると、心に吸われたのかもしれない。

今ごろになって、酒精の冷たさを感じる。

「卵があれば、白い膜を傷口に貼ることができるのですが」

「どうやらセラは、傷は浅いと励ましたらしい。泡が出るまで揉んだ薬草を腿に塗り、松明用の松脂を重ね、白い布を巻きつけてくれた。戦場で嗅ぎ慣れた青臭い匂いが、酒に混ざって微かにただよ

ってくる。

「増血作用のある薬草がありますが、煎じましょうか？」

ジェーガンは手で制した。

回復力には自信があった。病気も怪我も食べて治す先祖代々の風習のおかげだろう。険阻な山に住んでいると、医者にめぐり合う機会が少ない。

逆にセラのほう心配だった。休むことなく翼竜と飛び回っていたら、疲労がたまっていくはずだ。なにに突き動かされているのかはわからないが、自分を追い込むように頑張りすぎる。

「そんなに構わなくていいぜ。このぐらいの出血でくたばるほど、ドワーフ族の血は薄くねえ」

華奢な体が、一瞬固くなった気がした。なにやら誤解したようにも見えた。慌てて取り繕う。

「いや、違うんだ。おれたちは普段から高い山で暮らしているだろう。だから、血が濃く出来ていて、このぐらいの出血ぐらいじゃ氣息が上がらねってだけだ。決して、エルフ族の血が薄いおめえのことを悪く言っているわけじゃねえんだぜ」

「はい、わかっています」

返事ははつきりとしていたが、どことなくかすれて聞こえた。疲れのせいだろうが、傷ついたようにも聞こえてしまった。先ほどの失態で、引け目を覚えているからかもしれない。

マークがいれば、血の気の多さには自身があるもんな、と笑い話にしてくれるところだろうが、あいにく偵察に行ってしまったている。

ジェーガンは頭を掻いた。

どうも、よその女の扱い方は難しい。出稼ぎ仲間連中も、一緒に暮らすのなら同族の女が一番だ、と言っていたのを思い出した。

好んで不自由な高山に住みたがるよその女などいないので、負け惜しみだと思っていたが、なんとなく意味がわかってきた。出稼ぎに行きながらも、他の部族と血が交わっていかないのは、そのあたりに原因があるのだろう。

レオンが、あいだを取り持つように口を開いた。

「贖金造りの場所と犯人はだいたい特定できた。我々の任務はあくまでも贖金の調査だから、これで切り上げてもいいんだが」

「隊長。回りくどい言い方はなしにしましょうや。ドワーフ族が贖金造りに関わっていることは間違いない。だから、おれはどうしても理由が知りてえ。あいつらに直接会って詳しい事情を聞くまで、たとえ足を引きちぎられても、おれは帰りませんぜ」

レオンはしばらくこちらを見つめていたが、はつきりとうなずいた。

「わかった。では率直に聞こう。ドワーフ族が同族を監視していたのはなぜだ。なぜ、団結心に定評があるドワーフ族が、同じ部族を見張る必要がある？」

「それは考えるまでもねえ。交わした契約のためでさあ。契約書にそう書いてあれば、なにがなんでも従って行動する。それがドワーフ族なんで」

「となると、契約した相手は念を入れたんだな。もし、味方が監視しているのにドワーフ族が逃げたとしたら、部族全体の信用が失墜するわけだ。それほど契約は重いというわけか？」

「そういうことで。普通の人間が契約を結ぶのは、生活のためでしょう。商取引にしても、雇用にしても同じです。ですがドワーフ族は違います。おれたちが住んでいる高山は、契約していかなければ生きていけない土地なんで。つまり、生きるためでさあ」

「出稼ぎか。そうとう苛酷な生活をしているんだな」

端正な顔に影が差し込んだのは、炎の揺らめきではない気がした。「高山は何も恵んでくれやしません。水もほとんどねえし、空気ですら薄いですからね。だから外に働きに出て、手に職をつけて家族を養っていくしかねえ。しかし優れた技術を持っている人間は限られます。だから、大部分は荷役夫や傭兵として契約を結ぶわけです。あ」

二人のとも、無言で聞いてくれた。痩せた畑が水を吸い込むよう

だ、とジエーガンは感じた。

「一度契約を結んだら、途中どんなに辛くても苦しくても、逃げるわけにはいかねえ。納得したうえで結んだ契約を途中で破棄すると二度と雇ってもらえなくなりますからね。特に傭兵が厳しい。決して逃げねえ。負けていても逃げねえ。全滅しかかっても逃げねえ。死んでも逃げねえ。逃げたら信用を失って、仲間の家族が飢えることになつちまいますからね。だからこそ、傭兵として重宝されるともいえますが」

職人も傭兵も、自分で値段を決める。自分の値段で、仲間の価値が決まる。そう叩き込まれてきた。だから、炭も握った。煙たがられながらも、知識をひけらかしてきた。

「別の場所に移住しようとは思わなかったのか？」  
レオンの声は、沈んでいた。

宣教師や魔法使いたちの暗躍は、先祖代々の言い伝えで知っていた。しかし、仲間と同じく恨みには思わなかった。でなければ連邦政府で働くわけがない。先祖を追い立てた諜報部員になったのは、皮肉なめぐり合わせとしか言いようがないが。

木がなくては、鉱山では生きていけない。だから、木を独り占めしようとしたエルフ族との戦争を始めたのだ。いわば部族全体の意志だった。他人のせいにしては、先祖を穢すことになる。エルフ族とて同じことだろう。さもなければ、魔法使いを婿として受け入れたりはしない。

「なんだかんだ言っても、故郷ですからね。それに、誰も住みたがらないからこそ、土地を奪われることもないってわけなんで。高山なら盗賊の心配もねえですしね。家族や仲間と離れるのが、少し辛いくらいのもんでさあ」

セラがおずおずと口を挟んだ。

「必要としてくれる人間がいるから、頑張ることができるのですね」  
「そいつは違う。世の中に、もともと不要なものなど何ひとつありはしねえんだ、セラ。この木を見てみる」

ジェーガンは天井を指差した。

「材木商の娘ならわかるだろう。これほどの空洞があるから、伐られずにすんだ。それでおれたちが体を休めることが出来る。身を隠すことも出来た。不要と勝手に決めるのは、支配者ぶった人間の思いつき上がりだ。仲間もそうだ。欠けているものがあるからこそ、がちりと組み合わせることができる。組み合わせれば、元よりもはるかに強くなる。ゴンドランド連邦も、そうやって誕生したんじゃないか。そうは思わねえかい？」

ただの牡蠣殻でさえ、焼けば石灰として使える。銅と鉛と一緒に焼いて鉛だけを溶かし出し、石灰の上に流し込んで熱すると、鉛が下に落ちて銀だけが上に残る。あるいは、赤レンガのかけらと塩でもいい。

どちらも見してつまらないものだ。しかし、使いようによっては大変な価値を生み出す。人間とて例外ではないはずだった。

「そうですね。そうですね」

いきなり、セラの目が大きくなった。わが意を得た、といったふうに何度もうなずいている。

「そういうことだ」

なにをどうわかったのかよくわからないが、元気になるのはいいことだ、とジェーガンは思った。

それにしても、よその女の気持ちは、やっぱりよくわからない。

レオンが話題を戻した。

「任務の話に戻ろう。お前の話からすると、ドワーフ族と契約を交わした人物がいるということになるな。考えられるのは商工組合の組合長ヨルクと、警備隊長のベックラーだが、どちらだと思っ？」

「ヨルクだと思います。あくまでもおれの読みですがね」

ドワーフ族が契約を結ぶのは、自分が兵部省と契約を交わしたときのように、待遇に納得した場合に限られる。たとえ武人のベックラーがうまくいって契約を交わそうとしても、それを見抜くぬ仲間たちではない。武力で脅すのは無駄な行為だ。勝ち目がなく

ても闘うのは、傭兵たちが証明してくれている。徹底的に抵抗されて騒ぎが大きくなり、犯行が明るみに出るだけだ。

だいいち商売の素人が、商工組合を使わずに贖金を流通させることは不可能だった。

そう説明すると、レオンは何度もうなずいて賛意を示した。心のどこかで、ベックラーを信じたいという気持ちがあるのかもしれない。

「とにかく、まだ証拠が足りません。わかっているのは集落からなにかを運び出しているのと、贖金を造っているという事実だけですからね。だから山脈東側の伐採場に戻ってきたわけです。何かあるとしたら、ここしか考えられません。西側集落からの抜け道もあるでしょうし」

「向こう側に通じる坑道がある、と言いたいわけだな？」

「雨雲もあまり通さねえほど高さのある山です。西側から大量に贖金を運び込むためには、稜線を越えていたんじゃあ割にあわねえ。どこかに抜け道が掘られているに違いねえですよ」

「たしかに、ここらへんの山脈はくびれている。掘るなら、ここが一番楽だろうな」

「運搬について色々考えたんですがね、隊長。ポポリの巨木を運ぶときに中に贖金を詰めて運べば、誰にも知られずにすみますぜ。巨石と同じように荷車ではなく、丸太を敷いて運べば轍の深さから重さを測られることもありませんからね。運んだ後の木は、スが入っていたことにして、細かく切って石垣の土台にしちまえば何も残りませんし」

静かに、とセラが唇に指を当てた。

「誰か来ました」

ジェーガンは、斧槌を手にした。レオンも杖を手にとった。

立ち上がるうとしたとき、茂みが割れ、闇がマークのかたちに浮き上がった。

「おれだよ、アニキ」

「入口は見つかったか？」

「ああ、ジェーガンが言ったとおりだった。下草を刈った跡をたどると、洞窟の入口があったぜ。まさか、天然の洞窟が向こう側に通じているとは思われないよな。どうりで地図に載っていないわけだ」

「入口のようすはどうだった？」

「見張りがいた。しかめっ面をしたドワーフ族が二人だ。ひげを生やしてねえから、まだ少年だろうな。気が張っているばかりじゃ疲れるだろうから、おれが休ませてやったよ。まさかアニキ譲りの杖術を使うとは思わなかったけど、素手だとかえって手加減が出来ないからさ」

マークは瘤のある木の棒を見せつけた。身が締まっているポポリの枝は、細くても棍棒の役割ぐらいは果たせる。

「周囲はどうだった？ 誰かいたか？」

「いいや、不思議なぐらい静まりかえっていたな。不気味なぐらいだった。どうしてなのがよくわからないが」

首を振るマークの後ろから、重い声が聞こえてきた。

「ゴブリン族なら、おれが片付けた。不意を突けば簡単に倒せるものだな。枯れ葉をかけているから、すぐには見つからないだろう」

「誰だ！」

マークの誰何に添うかたちで茂みが割れ、大男が姿を表した。肩幅は広く、胸板も厚い。ドワーフ族をふたまわりほど大きくしたような体型だった。長めの外套をはおっていて、腰には剣を思わせるふくらみがあった。

「そのまま後をつけてもよかったが、中に見知った顔がいたのでな。つい声をかけた」

「グードか」

レオンが問いかけた。どうやらこの大男は、グードとかいう名前らしい。

「て、てめえ、いつの間に」

「貴様の特技が偵察なら、おれは追跡が専門だ。お互い背中に目は

ついていないのなら、先を歩く者の後をつけるのはたやすい。荷役夫の連中よりは難しかったが」

どうやらグードは、セラの言っていたゴ布林族の連中を追ってここまで来たようだった。それにしても、マークが背後を取られたのは驚きだった。巨体のくせに、動きが身軽らしい。

グードは、隙のない身のこなしで洞の前に立った。

穴の中から見上げているせいか巨体がより大きく見え、威圧されているような気分になる。口調は淡々としているが、襲撃者を思わせる冷酷な響きはなかった。とらえどころのない野郎だ、とジェーガンは思った。銅像が口を利くと、こういった感じになるのかもしれない。

「レオンよ。どうしてここに、は省こう。目的があつて、お互いここに来ていることだしな。どうだ、今まで見聞きしたことを教えあわないか？」

「殺そうとした人間のいうことを信じると言いたいのか？」

「殺そうとした人間がそばに来ているのにもかかわらず、仲間を守って身構えようとしなのは、おれが今置かれている立場を少しは理解している証拠ではないのか。違うのなら話すことなどないが」

二人はしばらくにらみ合ったあと、レオンが折れるかたちで口を開いた。

「いいだろう。ただし、等価交換だ。あんたの情報に応じて、こちらも話す」

「よかるう」

全員の簡単な紹介をすませたあとで、二人は言葉を交しあった。

ジェーガンには損な取引に思えた。ゴ布林族が犯行に関与しているかもしれないのは、とづくにわかっていることだった。荷役を奪われたとの話は、すでに仲間から聞いている。

ただ、幻惑草の話は初耳だった。ドワーフ族だけが栽培を許されている薬草のはずだ。空腹と疲労感を消し去る作用があり、山脈の稜線を延々と歩き回る成人の儀式には欠かせないものだ。

石灰とともに噛むとは知らなかった。幻惑草を精製できるというのも同様だ。内務省が動いているとは聞いていたが、それほどの効果はないはずと決めつけていた。

贖金同様、ドワーフ族が犯罪に関与しているのだろうか。ジェーガンは気が重くなった。

続いて、レオンが話す番になった。グードは黙って聞いていた。しかし、隊商が何やら荷物を持って出て行ったのを聞くと、手振りで話を止めた。

「それは、精製された幻惑草に違いなかるう。かさばらないうえに、高値で売れるからな。隊商も喜んで取引に応じるだろ。一度砂漠に入ってしまったら、追跡の手を容易にかわせる」

ジェーガンはかるうじてうめき声を上げるのを抑えた。

「おれたちが幻惑草を密売する犯人だと思っていいのかい？ 幻惑草の精製なんて方法は知らねえし、その必要もねえのによ」

「ジェーガンとかいったな。世の中には裏の面が存在するから、おれたちが活動しているのではないのか。確かにドワーフ族は契約を守る立派な部族だと評判を得ている。しかし、愚直で頑迷な連中と評価されているのもまた事実だ。契約書にそれなりの文言が記されていけば、従うより他にはないだろ。誰にでも弱点はあるものだ。仲間思いの貴様たちならわかるだろ」

「てめえ、真つ当に生きているおれたちに、なんの弱味があるってんだ！」

まあ待て、とレオンが間に割り込んだ。

「まだ運び出しているのが、精製された幻惑草だとは決まったわけではない。それよりも皆で早く洞窟に行こう。幻惑草であれ贖金であれ、新たな証拠が見つかるかもしれないからな。セラ、おまえは山脈の稜線上を巡回して、どちら側にも急行できるようにしておいてくれ。月と集落の位置関係を常に頭に入れておくんだ。月に翼竜の影が入ると、相手に意図を悟られる」

大事なことはわかりきったことでも、念を押しておく。特機隊の

習慣だった。セラも決してわかっていません、とは言わない。黙つてうなずいて、姿を消した。

「では、マーク。案内しろ」

「あいよ」

マークを先頭に、洞窟の入口へと向かった。下草が刈つてあるので、歩くのは楽だった。

洞窟が見えてきた。かがり火のそばに倒れている人影があった。マークの言ったドワーフ族の少年に違いない。右足は折り曲げられていて、親指を結んだひもが、後ろ手に縛り上げた手首につながっている。こうすると、どうあがいても逃げられなくなる。

口にもしつかりとひもがかまされ、舌を噛み切れないようになっていた。奥にも一人いて、同じような姿で横たわっている。

「怒るなよ、ジエーガン。こいつらも必死に剣を振り回していたから、棒で突き転がして縛り上げるしか方法はなかったんだ。逃げられて通報されるのも厄介だしな」

険しい表情になったのがわかったらしい。言いわけをするマークに無言で斧槌を押し付け、ジエーガンは手前の少年を抱え起こした。頬を強く張った。乾いた音がして、少年は壁に叩きつけられた。

続いてもう一人。同じく張り倒す。

マークが急いで前に回り込んできた。

「おい、なにをしゃがる。こいつらは同族で、しかも子供だろうが」

ジエーガンは静かに答えた。

「こいつらは殴られた理由がきちんとわかっている。おれたちが敵だったらどうする？ こいつらが死ぬだけじゃない。奇襲を受ければ、他の仲間まで犠牲になったことだろう。交わす契約には善悪の区別はねえ。ただ守るか守れないか、それだけだ。年齢は関係ねえ。相手が強くてかなわないと思っても突っ込む。武器がなければ、殴って噛みつく。それがおれたちの戦い方だ」

なにか思い当たるふしがあるのか、マークは、開きかけた口を閉

じた。

親指を結んでいたロープだけを解いて、少年たちを立たせた。引き結んだ口元は震えていて、目には涙がたまっている。しっかりと殴られた理由がわかっている。

ふと、口元に目をやった。唇がひび割れていた。殴られたせいではない。慌てて、手の指も見る。やはり、ひび割れがあつた。

「おめえらの役目は見張りだけじゃねえな。牡蠣殻も焼いてやがるだろう？」

少年らは無言だった。しかし、それ以外考えられなかった。

「年端もいかない少年がやる仕事じゃねえんだがな」

「なんだか、危険な作業のように聞こえたが」

レオンが、聞きとがめたように訊ねてきた。

「ええ、隊長は知らねえでしょうが、これほど厄介な仕事はありません。窯を使って貝殻などを焼くんですがね、そのときに重い毒気が出るんです。銅鉱石とはまた違う毒気ですがね。それを吸うと気を失って、焼けた窯に落ちることも珍しくありません」

「それは初耳だ。ファイルスで見かけなかったのは、危ない仕事だったからだな」

「まあ、燃料の薪が必要だったからともいえますがね。もつともそれだけじゃねえんです。出来上がったばかりの石灰は火を出しやすいで。だから水に漬けて大人しくさせねばならねえんだが、これがまた大変なんですね。いきなり入ると弾け飛んだりするんです。そういう仕事に従事していると、どうしても唇や指がひび割れちゃう。だから、一目見てわかりましたぜ」

なるほどそういうことか、とマークが思い出したようにつぶやいた。

「石灰を使った新兵器とやらを錬金術師から聞いたことがあるぜ。そいつに硫黄と精製した油を混ぜこんだものを筒に入れて水を注ぐと、巨大な火を吹くんだと。なんでも海賊対策の切り札にしようと思っていたらしい。魚くさい人造バター造りなんて、ふざけた研

究だと思っていたんだが、どうやら偽装だったみたいだぜ。まんまと釜焚き屋に騙されたな、アニキ」

「おれでさえ知らないことを、よく知っているな」

「上層部の悪態をつきながらカリカリしている連中がいたから、それとなく酒場に誘って聞き出したのさ。連中も陰の存在だから、自らの功績を認めてもらいたくはしようがないってわけ。ちよつとくすぐってやるだけで、嬉しそうにしゃべってくれたぜ。どうだい、単純な人間だと常に思わせておけば、こういった情報も聞き出せるんだぜ」

「思いのほかしつこい性格には、相手も迷惑しただろうがな」

マークはばつが悪そうに頭をかき、あらためて少年たちに向き直った。

「ひでえことをしやがるぜ。良心に苛まれるってことがねえのかな」  
マークが憤る気持ちは嬉しかった。しかし、契約書に記されていれば、ドワーフ族としては従うより他にない。

ジェーガンは改めて少年たちに視線を注いだ。収穫があった。集落には壮年の男性はいない。留守を預かって、危険な力仕事を任せられるのが、少年たちだけだったと推察できる。

「いいか、おめえら。契約ってのはな、ドワーフ族にとって鉄のようなものなんだ。固くて、冷たい。そう思うだろう。おれも父ちゃんに言われたときはそう思っていた。確かに、鎖のように動きを封じられる場合もある。だが、使いようによっては身を守る盾や鎧にもなるんだ。ちゃんとした契約を結べば、そいつがおれたちを守ってくれる。先祖のように騙されず、故郷を奪われることもなくなる。しっかりと、胸に刻んでおけよ。いつか必ず、役に立つときがくる」  
マークが口を添えた。

「ジェーガンの言うとおりだぜ。こいつは融通はきかねえが、背中を見せることができる得がたい人間なんだからよ」

少年は、ようやく口を開いた。

「それを言うために、私たちを襲ったわけではないでしょう?」

「もちろんだ。おれたちは贖金と幻惑草の調査に来ている。仲間の無実を晴らすためだ。おれはおめえらが、利を貪るためにしているとは思えねえ。なにか事情があるはずだ。それが知りてえただけだ」

顔を見合わせる少年たちの表情には、困惑の色が浮かんでいた。洞窟を守る任務は失敗していた。この上、口を割ったのでは重大な契約違反となる。そうした思惑が交差しているようだった。もつとも、なにも知らされずに立たされている事情も否定できない。

しかし、調査が入った以上、無実を晴らしたいに違いない。何をどうしたらいいのか、途方にくれているように思えた。

マークが、少年たちの肩を軽く叩いた。

「じゃあ、こうしようぜ。お前たちはここで寝ている。もし詰問されたらこう言うんだ。一人の育ちが悪くて乱暴なドワーフ族がやってきて、いきなり殴りつけられ縛り上げられたと。なにを訊かれても、後のことは覚えていないと主張するんだぜ。お前たちはドワーフ族を守る責任があるが、味方のドワーフ族だと思ったのなら仕方がないってわけだ。どうだいジエーガン、妙案だろう？」

「育ちが悪くて乱暴は余計だな」

木立がかすかにざわめいた。入口を吹きぬけた風が、暗澹としていた雰囲気を払ったようだった。

「おじさん！」

「おじさんじゃねえ、おれはまだ二十歳だ」

マークは笑いながら、ジエーガンの肩を叩いた。

「どつちでもいいじゃねえかよ。要するに、無実を晴らして欲しいってんだろう。おれたちに任しておけ。何とかいい具合にまとめるからよ、なあアニキ」

「安請け合いはできんが、最善は尽くすつもりだ」

ジエーガンは足元に転がっている剣を手を取った。見るからに切れ味が悪そうで、重心もどことなく握りからずれている気がした。素人が打ったものに違いなかった。それでも重くて振り回しにくい斧槌よりはましといえる。腰に差してから、少年たちに向き直った。

「わかった。こいつを契約料としよう。斧槌は署名入りの契約書代わりだ。無くすなよ。ドワーフ族にとって契約書は何よりも大事な物のなんだからな」

「ここでゆっくりと寝ておくといい。結果がどうであれ目が覚める頃には、全てが終わっているはずだ」

グードが穏やかな声で言った。気遣っているように聞こえたが、どことなくこちなさがある。

真摯な視線に送られながら、洞窟に足を踏み入れた。

無実ならば、絶対に疑いを晴らしてやらねばならない、とジェーガンは思った。

ドワーフ族全体の名誉がかかっていた。契約を交わした自分自身のためでもあった。

まるで呑み込まれたようだ、とレオンは思った。

冷え込んでいた外とは違い、洞窟は汗がにじむほどの熱気がある。地の熱のせいだろうが、洞窟そのものが生きているかのような錯覚を覚える。神話絵巻に出てくる蠱獣の体内も、こういったものに違いない。

頭上や首筋に滴り落ちてくる水滴は、生温かい唾液のようだった。牙のように垂れ下がった岩以外の箇所は滑らかで、松明の光を受けて天上で揺らめくさざ波模様が、ぬめった感じの岩肌に、貪婪な生命を吹き込んでいる。

しばらく歩き続けると、穴がひとまわり小さくなった。一目で坑道とわかった。無駄なく組まれた肋骨のような坑木が、奥まで延々と続いている。上への勾配ができ、ところどころに段差があった。急な出水の勢いをそぐために、わざと切られたものらしい。

足音が水音に変わるたびに、レオンは顔をしかめた。地面を伝って流れていく水が、やけに足にしみる。

坑道の両側には溝が掘られていて、坑道脇にあつらえた溜め池につながっている。池は自然の空洞を利用したものでそこその深さがあり、中には屑鉄が大量に沈められていた。坑道からしみ出た水には少なからぬ銅が含まれていて、鉄の働きによって取り出せるらしかつた。鉾山を知りつくしたドワーフ族の叡智といえた。

余分な水は、奥に続いている穴から流れ出る仕組みになっている。付近の樹木が枯れていないのは、地下に広がる石炭のせいかもしれない。炭には、水を清める働きがある。

そう指摘したジェーガンは、無言で先頭を歩いていた。歩幅を数え、決まった数になると立ち止まっては岩肌に手を当てている。ドワーフ族の間では、暗闇でも現在の場所が把握できるようにと、独自の模様を側面に彫りつけてあるとのことだった。

レオンはそのまま付き従うことにした。黙々と進んでいるのは、順調な証しといえる。

間ができたので、後ろを歩くグードに尋ねてみることにした。

「あんたが北門から馬で飛ばしてきたのは、幻惑草の解明を急がねばならない事情があつたからだろう？」

「ああ。おれにとってこれ以上ないほどの窮地だ。なにしろ、重要な証人が消されて、おれに嫌疑がかかってきたからな。だから、やむなく騎馬で北門を強行突破した」

「証人とは、組合長のヨルクだな」

「そうだ、とグードは即答した。」

「奴が経営する酒場に、吟遊詩人として潜り込もうとした。用心棒の空きはなさそうだったからな。試用の歌をうたっていたときに、下での騒動のせいで失敗してしまった」

右を歩くマークが振り返った。松明の光を浴びて、赤い髪が銅色に輝いている。

「悪かつたな。そいつはおれのせいだ」

「ずいぶんと正直に謝るものだな」

「なあに。嘘や駆け引きが、おれは大嫌いなだけさ。あつちもおれ

のことを嫌っているだろうぜ」

唇の端から、白い歯がのぞいた。しかし、目は笑っていない。傷を持つ人間なら、顔を背けたくなくなるような鋭い視線だった。嘘は許さない、とかすかに赤みを帯びた瞳は語っているようだ。

グードに動ずるようすがないのを見てとったのか、マークは前に視線を戻した。

段差の間隔が少しずつ広がり、勾配がゆるやかになってきた。中間地点に近づいているようだ。熱がこもっているせいか、肌がほてってきた。

「あんたが酒場を追い出された後、ヨルクが殺され、酒場に火がつけられた。おれたちが宿屋に着いて話し合っていたときだ」

「ああ、おれも宿屋に戻っていた。同僚と一緒に、善後策を立てようとしていたところだった」

「まったく、かわいそうになあ。常識的に考えれば、暗殺の首謀者は内務省だったのが、一番しつくりくるよなあ。なにせ、幻惑草密売の証拠と証人を消せたうえに、邪魔なあんたを犯人として始末できるんだ。内務省なら殺害の動機など、いくらでもでっち上げられるだろうぜ。こっちもいい迷惑だがな」

マークの言うとおりだ、とレオンは思った。なにしろ兵部省に依頼しておきながら、四人組ごとこちらを消し去ろうと考える連中だ。そのぐらいの芸当は、眉一つ動かさずにやってのけるだろう。

「おれたちは宿屋にこもったきりで、その後の事情は知らない。あんたはどうだ？」

「火事と聞いて宿屋を飛び出そうとしたら、東門からゴ布林族が積荷を載せた荷車を押しながら出て行くのが見えた。やつらが警備隊を無視してくれたおかげで、北門に脱出の際ができたのだから最悪の事態ではなくなったのだが」

「積荷？」

「そうだ。樽がいくつか積みまれていた。同僚とその部下たちが全力で追っているから、いずれ中身はわかるだろう。とにかく、おれは

断ち切られた糸をここで紡ぎ直さねばならん」

「なるほどな」

連絡手段がなければ、同僚や部下が証拠を押さえたかどうかかわからない。ここでファイルスに戻るのは冤罪の危険が伴う。一度捕まっつてしまえば、相手は抗弁する機会など与えはしないだろう。どうしても警備隊を説得できるだけの証拠を握りたいはずだ。

幻惑草と贖金。全く違う事件だが、手を握る余地はありそうだ。マークがわざとらしく背を伸ばした。

「ああやだやだ。色々な出来事が起こりすぎて、頭が混乱してきそうだぜ」

「断ち切るのも、一つの手だ。おれが言うのもなんだがな」

後ろにいるグードが、ぼつりと言った。体格にふさわしからぬ声量で、自分に言い聞かせているかのようにも聞き取れた。

レオンたちが立ち止まって振り返ると、今度ははつきりと言った。「得るものが多いと、かえって混乱することがある。さまざまな民族を受け入れているこの国のようにだ。逆に余計なものを削ぎ落としていけば、本質が見えてくる場合もある」

「絞り込めと言いたいのか、グード」

「そうだ。なにはともあれ、ファイルスで一番偉いのはベックラーだ。犯罪に関与していないとは考えられない。いかなる事態になっても責任が生じるのは自明だからな」

道理だった。それでも、ベックラーの関与は信じたくなかった。

「賄賂でヨルクに弱みを握られている、と教えてくれたぞ。言葉ではなかったが」

「それこそ変だとは思わないか。相手は、地元の商工組合の組合長だ。いわば警備隊司令部に出入りする業者だろう。だったら、露骨に金銭を渡さなくても、いくらでも経費を浮かせる手段があるはずだ。金銭の始末に気が回らない男は、清廉とはいわん」

「つまり、困窮していると見せかけるために、わざと賄賂を受取ったと解釈するのか」

「今のところ否定はできんだろう。ベックラーを信じきるなら、無実の論拠を固めることだ」

グードの突き放したような言い方に、マークは即座に反応した。「しかし、グード。一つ聞いておきたいが、正しいとか正しくないとか、どうやって考えて行動しているんだ。お前さんだって迷うことはあるだろうに」

「おれは迷わない。逡巡よりも即断のほうが、早く結果が出るだけでした。たとえ悪い結果だったとしても、立て直すだけの余裕が生まれるからな。それにおれは決断が正しかったから、今まで生きのびてこられたと割り切っている。だから、後悔もない」

淡々とした物言いだったが、心に響いた。常に生死の境界を渡り歩いている人間だけが持ちうる、深い含蓄があるように聞こえた。殉教を覚悟した宣教師たちの説教に似た導引力がある。

マークは、両手を首の後ろに回した。

「言っていることはわかるが、後の言葉だけは賛成できねえな。みんなを守るために犠牲になった、おれの親父とお袋の行動は、今でも間違つてねえと思っっているからな」

「逆に言えば、息子よりも仲間が大事だったと貴様の両親は思ったのかもしれない」

「言いすぎだろう、それはよ」

「少なくともおれの両親はそうだった。貴様の両親がどう考えて行動したのかは知らん。ただ、物事には必ず裏の面も存在する、と言いたただけだ。誇りを持つのは結構だが、他人との差別化をしているとは思わんか。ならば、傲慢と変わるまい」

マークは、両親の思い出を抱えている。一方のグードは、両親の思い出を捨ててきているようだった。どちらも両親を失っていることは同じなのに、交わることはなさそうだった。

レオンは、黙って聞くしかなかった。両親が生きている人間が口を挟むのは、僭越に思えた。魔法を追い求める自分に対しての戒めのようにも聞こえた。

会話が途絶えた。ただひたすら足を進める。

単調な行程も、とうに半分は過ぎていようだった。岩の質があまりに変わっているし、水抜きのための傾斜も奥に向かうようになっていいる。採掘現場に入ったのだろう。道がいくつにも分かれ、迷宮の体をなしてきていた。

「よしよし、どうやらおれの出番がきたみたいだぜ」

マークはわざとらしいあくびをして、レオンの松明を貰い受けた。点状している木箱を適当に開け、中に入っている銅鉱石を見やるにも飽きてきたようだ。

分かれ道に入り、すぐに出てきた。それほどの長さはないようだった。前方や後方から出てくることもあった。わざとらしく肩をすくめ、収穫がないことを知らせてくる。

たしなめるかと思ったジェーガンは、まだ前で岩肌を触りながら進んでいる。坑道が入りくみだしたためか、立ち止まる割合が増えていたが、足どりはしつかりとしていた。

グードが横に歩み寄ってきた。盛り上がった肩が、視界の隅に入ってくる。

「レオンよ。いま一度訊く。ベックラーはこの犯罪に関与していると思うか？」

「わからない。いや、正直言ってわかるうとしたくないのかもしれない。おれを信じて内情を明かしてくれたんだ。情を入れるのは間違っている、と頭ではわかっているのだが」

「ベックラーは、情実と理屈とどちらで貴様を説得してきたのだ？いきなり頭を殴られたような衝撃があった。グードがなにを言わんとしているのかが、わかったからだった。レオンは少し考えて答えた。」

「理屈だな。情に訴えているようでも、理のほうに重きを置いている気がする」

とくに贖金を出回らしている理由がそうだった。街と警備隊のためにはやむを得ず黙認する、といった雰囲気醸し出していたが、奥

底には自分の地位を守るための思惑もありそうだった。だから、銅山を探して欲しいとの依頼も、自然に受け止められたのかもしれない。

「つまり、ベックラーが幻惑草と贗金の黒幕だとすれば、理にかなう行動を取ると考えられないか。理とは、すなわち利だが」

「しかし、グード。どう考えても、贗金と幻惑草だけでは、現在の地位を投げ捨てるには釣り合わないと思うのだが」

「おれもそう思う。ならば他に何かがあるということにならないか？ 武人の良心とやらに釣り合うだけの何かがな」

レオンはうなずいた。幻惑草も贗金も富をもたらす。普通ならこれだけで十分のはずだ。足りないとするれば、名声だろうか。しかし、武人の名声は戦場での華々しい活躍から生ずるのであって、地道な警備業務からではない。年齢や国内事情から考えれば、もうその機会はないはずだ。

「アニキ、ちょっと来てくれ」

ささやき声にした方向にグードとともに足を運んだ。

坑道の突き当たりに、ドワーフ族の背丈に合わせたかのような、木製の小さなドアがあった。

「レオンよ。あまり期待しないほうがいいぞ」

グードは、壊された鍵をあごで示した。部屋の中に隠されているものは、鍵を掛けるていどには大切だが、見張りを立てるほど重要なものではない、と言いたいようだった。

くぐって、中に入った。部屋ではなく、倉庫だった。壁一面に板が打ちつけられていて、手前に素焼きの水がめがあり、奥に木箱と袋らしきものが整然と並んでいた。

床には木の屑が敷き詰められていて、なにやら白い粉状のものも振り撒かれている。

「ドワーフ族は無実だ、とジェーガンのように言いたいぜ、アニキ」  
マークが、床の粉を手にして言った。どうやら石灰のようだった。たしかに乾燥剤として用いるのは、用途の一つではある。

「逆にいえば、少年にわざわざ危険な作業を強制しなければいけないほど大事なものではない。そう言いたいんだろ、グード？」

「その調子だ、レオン。どのみちこれだけではドワーフ族の無実を証明出来ない。とにかくなにか証拠になるものを探そう」

三人で手分けして内部を調べた。

ついで木箱を開けていく。おそらく坑道で足止めをするために用意されたと思われる、組み合わされた古釘が詰まった木箱が一つだけあった。あとは銅鉱石と思われるレンガ色をした鉱石と、溜め池に入れる屑鉄が詰まったものがほとんどだった。集落に運ばれていたのか、ところどころに空き箱があった。

マークが袋の中から白い粉をつかみ出した。

「小麦粉だぜ。おそらく外から持ち込まれてきたものだろうけど」  
ぼやき声を聞きながら、レオンは水がめの蓋を開けた。中はきれいな水で満たされている。

「ああ。小麦はポーミラから運び込まれてきたものだろう。そうすると、やはり隊商が持ち込んできた品物が気になるな。石炭だとは思うのだが」

奥の木箱を開けようとしたグードが振り返った。

「たしかにポーミラでゴブリン族の連中が小麦を運んでいるのを見かけたし、ファイルスには水車小屋があつて、粉にするのはたやすい。しかし、なぜ外部からと断言できた？ 貴様の話だと、集落には畑があつたようだが」

「水がめの肉が薄い。それでいて焼き色にムラがないのは、土に混ぜ物をしていないからだ。すると粘り気のある土のみを使って焼いた、との結論を導き出せる。つまりむこうの土は、水はけが悪くて耕地には向かないのがわかる。畑はあつたが、荒れていた」

「かさばるつえに壊れやすい土器を隊商が持ち込むことはないが、ファイルスから持ち込まれた可能性は考えられるだろう。加えて疑問がある。土器は野焼きで作るはずだ。無人の集落跡地で煙が出たら、それこそ怪しまれる。隠れ住んでいながら、大っぴらに存在を誇示

するわけがあるまい。首謀者がなんらかの手段を講じていない限りだが」

的確な反論だったが、自分の推論に異議を唱えられているようで、あまりいい気分にはなれなかった。

グードはいかなる物証も、ベックラーに関連づけたいと考えているようだった。証人になりえるヨルクがいなくなったためだろうが、こつも露骨に言われると反発心を抑えられない。

こちらを見据える細く鋭い視線の先に、自分たちを信頼してくれた人がいる。

「それはない、と思う」

「根拠は？」

「水がめの内側が黒ずんでいた。これは草の汁か樹液を熱いうちに焼き付けて、耐水性と耐久性を上げたためだ。乾燥地帯の集落や遺跡などによく見られる技法だが、水と木が貴重な高山に住むドワーフ族が身につけていてもおかしくはない。なにしろ野焼きの長所は薪や炭が不要な点につきる。枯葉や枯れ草、それに畜糞で焼けるからな。生葉で覆えば大して煙も出ない。文献にも書いてある」

「博識だな。これなら十分歴史学者として通用するだろう」

それはどうも、とレオンは気のない返事をした。

歴史学者を目指していて得たことは、なにも知識ばかりではなかった。作業員として潜入するのにも役に立つ。

料理人と同じく、機会があれば身分が高い人間にも比較的容易に接触ができる。学問は疑問を持つことから始まるので、色々なことを尋ねても怪しい目で見られることはない。とくに歴史は、政治や経済とも関わりが深い。

「やっぱリアニキ。ろくなものがないぜ」

マークの声をよそに、グードが最後の木箱を開けた。中には乾燥させた葉が、きつちりと詰められていた。

「見る、幻惑草だぞ。干して乾燥させてあるが、なぜここに隠す必要がある？」

「きつい鉱山労働に必要なだからだろう。干せば体積を減らして長期間保存できる。逆に言うと、一般人には使用が禁止されている植物だからこそ、鍵を掛けて管理していたともとれる。栽培と使用はドワーフ族の権利として認められているから、問題にはならない」  
まあな、とグードは素っ気ない返事をした。細めた目には、ドワーフ族に対する疑念が宿ったようにも見受けられる。

疑う気持ちはレオンにもわかった。現にこうして坑道の中に幻惑草があり、精製するために必要な石灰を、ドワーフ族の少年たちが身を捧げるようにして焼いている。

しかし、入口で訴えてきた少年たちの目は、真っ直ぐ向けられていた。真相は別のところにあるはずだ。こちらを信じて道を明けてくれた、と思いたかった。

「なんだ、こりゃ。すげえ苦いぞ」

振り返って見ると、マークが別の袋に入っていた粉を舐めていた。よほど苦いらしく何度も床に唾を吐いた。それでも足りないらしく、何度も舌を指で拭っている。

「こいつも小麦粉だと思っていたのに、なんだってこんなに苦いんだ？」

「小麦粉のそばにおいてあったのであれば、ふくらし粉だろうな。以前、作戦会議室におれがパンを持ってきたことがあったろう」

少し首をかしげていたあと、マークは手を打った。

「ああ、あれか！ 中がスカスカのパンで、すげえ柔らかく焼きあがったやつだよな。しかし、ドワーフ族がふくらし粉を使うかねえ。ジェーガンは食べた気がしねえって、ぶつぶつ言ってたじゃないか。それに、腹持ちも良くなさそうっつさ」

「じゃあ、ゴ布林族が食べるのか？ こいつを？」

「そうさ。人間ってのは贅沢をしますと、きりがないぜ」

レオンは、バルラムとの会話を思い返した。

今回の事件には、やはり工芸省が関与しているのではないのだろうか。ふくらし粉はもともと、舎密開発局が発明したものだ。錬金

術師であれば、銅の精錬も、幻惑草の精製もたやすくこなせるに違いない。

レオンの考えを、グードは興味深そうに聞いた。

「確かに。しかも、工芸省は商工組合を統括できる立場にある。

ヨルクを消して証拠の隠滅を図る動機がある」

「早く集落に行つて、もつと証拠をつかもうぜ、アニキ。もう一押しなんらかの確証が欲しい」

元いた坑道に戻ると、ジェーガンが太い腕をこれみよがしに組んで待っていた。非難がましい視線を受けながら、レオンが倉庫でのいきさつを話すと、ジェーガンはあごヒゲを軽くひねった。

「小麦粉とふくらし粉は、おれたちのものじゃねえですぜ。言いたくねえが、こつちの主食はソバ粉ですからね」

「ソバは、痩せた土地でも育つからな」

「それに小麦粉と違って、ソバ粉は水で練っただけでも食べますからね。薪が貴重な岩山じゃあ、ありがてえ作物ですぜ。言うまでもなく鉱山の中でもですがね」

「ではなぜ、あそこにふくらし粉が置いてあつたのだろう。必要だから小麦粉のそばに置いてあつたはずだが」

「だから考えすぎだつて、アニキ。ドワーフ族のものでなければ、ゴ布林族のものに決まつてるじゃないか。あそこにあつたのは、ただ集落に運ぶのが面倒だからだろうぜ。フィルスにはパン屋もあつたし、なんの不思議もないさ」

「マークの言うとおりですぜ、隊長。どのみち贖金には関係のない話でしょう。それより土器のほうに気になりますぜ」

「やはり、ドワーフ族が焼いたと?」

「いや、器じゃなくて土のほうです。それほど粘り気があるのなら、炉を作るのに最適だと考えたまででさあ。まあ、先に進みましょう。出口は近いですぜ」

目を凝らして坑道の先を見ると、少し明るい点があった。微かな冷気がこちらに流れてくる。

「よし、お前が先に出て事情を説明しろ。ドワーフ族どうしなら話も通じやすい」

「まさか襲撃はされねえと思えますがね。ゴブリン族と違って、やましいことはしてねえんだから」

それでも、慎重にいきたかった。ジエーガンを先頭に立て、出口に向かった。

奇襲といえないこともなかった。

責任者を呼びやがれ、とのジエーガンの居丈高な問いに驚いたのか、二人の見張りは手斧を取り落としそうになりながら、集落に向かつて掛けていった。

レオンは目を凝らして、月明かりに浮かぶ集落を眺めた。

緩やかな傾斜の先に、建物が点在していた。二人の見張りは、鐘楼のある大きな建物を通り抜け、十字路の角に消えていった。

周囲を警戒しつつ、山肌に視線を向けた。細い山道があり、露出した礫岩を避けるように上へと伸びている。畑らしい敵があるようだが、暗くてよくわからなかった。

そのまま上空に視線を移した。まだ、星が瞬いている。セラの姿は見えない。しかし、松明で合図をすれば、すぐさま急降下してこちらを回収する手筈にはなっている。一度外に出れば、退路は確保できたも同然だった。

やがて、こちらを遠巻きにするかたちで、住人たちが集まり始めた。当然ながら子供はいない。素手だったが、表情は強張っていた。ただ、疑念以上の感情には思えなかった。あらかじめ連邦政府と言ったのが効いたのかも知れない。

人の山が別れ、一人の小柄な老人が出てきた。ひげは完全に白く、へその辺りまで伸びている。服は黒っぽく汚れていて、着古しているようなほつれが目立っていたが、恥じ入ることなく進み出てきた。

おそらくこの集落の長老に違いない。

老人はバズラ、と名乗った。ジエーガンが代表して話し始める。

「おれたちが来たんだから、おおよそは察しているだろう。面倒くせえ話は抜きだ。なにが起きて、なにをやらかして、なにをしようとしているのかが知りてえんだ」

「話すわけにはいかん。お主ならわかるだろう」

一度咳を払ってから、バズラは答えた。いずれこういつたときがくるのを知っていたかのように、やわらかく落ち着いた声色だった。ただ、態度は毅然としていた。心の中にまで踏み込ませまい、とするかのような頑なさがありそうだった。契約をあくまでも遵守するドワーフ族の掟が、老人の姿で現れたように思えた。

ジエーガンは続けた。

「言い方が悪かったかもしれないが、なにも責めようとしているわけじゃねえ。こつちもなんとか事態を打開したいと思っているんだ。贖金造りも幻惑草の密売も、おれたちドワーフ族には縁のねえ話だ。裏で操ろうとしている人間をあぶりだせればそれでいい。だから、あえて訊く。おめえたちと契約したのは商工組合長のヨルクか、それとも警備隊長のベックラーか？」

一人の男が口を開きかけたが、バズラが目で制した。年老いて朽ち果てていこうとする人間とは思えないぐらいの強い眼光だった。

「同じことを何度も言わせるな。契約を結んだ相手を明かせるものか」

「おいおい、とマークが口を挟んだ。

「どちらの犯罪も重罪だぞ。それでもかばおうっていうのかよ。どんな咎めが待っていると思う。鞭打ちぐらいじゃすまないぜ」

「よそ者にはわからんだろうが、ドワーフ族にとっての契約は絶対だ。わしらは契約書を読み、納得して署名した。破ったら、もう生きてはいけぬ。ゴンドランドのどの地でもな」

なるほど鉄に違いない、とレオンは思った。

契約が結ばれている限り、ドワーフ族はここに住むことができる、

とバズラは信じているようだった。鉄は剣として傷つけもするが、盾として身を守ってもくれる。洞窟の入口でジェーガンが苦惱混じりに言った言葉は、ここにきて真実味を帯びてきた。

グードが肩に手を乗せて、ささやきかけてきた。

「夜が明けると、こちらが不利になるぞ。ここで道義の議論をしている暇はない」

レオンはうなずいた。首謀者に、時間的な余裕を与えたくなかった。

「バズラさん。契約書には、捜査が及んだときに妨害せよ、と書いてありましたか？」

「内容を話すわけにはいかん」

「ならば、勝手に捜索させてもらいますよ。妨害されたければどうぞ。ただ、やましいところがなければ手を出されないほうがいいでしょう。みなさんの無実を晴らすためにも」

レオンたちが進み出ると、ドワーフ族たちはざわめきながらも素直に道を開けた。

「おれは、幻惑草の証拠を探す。またあとで会おう」

グードは素早い身のこなしで、闇に溶けていった。

「どうする、アニキ。おれはあのでかい建物を調べるべきだと思っぜ。鐘楼にまで見張りを置いたんだ。きっと何かがある」

「よし、ひとまず三人で行こう」

下り坂を通って、集会所に出た。長老を先頭に立てて、皆ついてきていた。グードを追うようすはない。となると、偵察に出たマークの言ったように、ドワーフ族にとって大事なものがあるに違いなかった。それとも、見られると困るようなものなのか。

両開きのドアを開けて、中に入った。

やはり鍛冶工房だった。中に柱がないせいか、外見より奥行きがあった。船底状に反らせた天井が、屋根の重さを支えている。床板をはがしたらしく下は赤い粘土質の土がむき出しになっていて、うっすらと積もった灰の上に金属の小塊が落ちている。

息を殺して、注意深く歩き回った。手前側に金床や鉄槌、それにふいごなどの道具が置かれている。奥に大きな釜があり、わきに泥の塊のような石炭が盛られた銅板張りの木箱と、銅鉱石がうずたかく積み重ねられている。壁に並んでいゝるなめし革の前掛けが、なにかを覆い隠していた。

めくってみると、雑多な農具だった。鋸などの伐採道具もある。松明の炎を映した農具は、作りたての銅らしい光沢があった。一方の鉄製の伐採道具には修繕したような痕跡があり、古びた木の柄は土のせいかな手垢のせいかな、黒光りをしている。

レオンは、警備隊司令部でベックラーとのやりとりを思い出していた。フィルスを開拓する意思があると言っていた。新品の農具は、そのために打たせたものなのか。だとすると、やはり街の将来を思つての行動となる。

しかし、司令部では集落のことは一言も口に出してはいない。商工組合に口止めされているからか。と、消極的だった商工組合が農具を作らせるのもおかしい。

時間が惜しかった。レオンは、心の片隅に留めておくことにした。今は、贖金の調査が優先する。グードと合流したときに、意見を交換すればいい。

「おおい、みんな来てくれ」  
手招きをしたジェーガンにつられて、奥へと歩いた。次いで見上げる。そこそこ太い金属の管が上に据えつけられていた。途中で下に向かって曲がっていて、また上に伸びている姿は、大きな金管楽器と表現しても差し支えない。

「こいつは鐘楼じゃねえ。煙突だ。ここで銅鉱石を焼いて、毒気を外に逃がしていったってわけだ」  
マークが納得のいかないようすで訊ねた。

「しかし、確かに上には人がいたんだぜ。毒気でやられるだろうよ」  
「二人とも地面を見な。じつとりと濡れているだろう。これは上から水滴が落ちてきたからだ。となると、あの管の中に水を入れて、

毒気を抜いているに違えねえ。なるほど楽器作りのように、溶かした鉛を金属の管に流し込んで固めてから、ひん曲げたってわけだな。無駄がなくて結構なこった」

レオンは煙突の内部を再び見上げた。

「水煙草と同じ原理か。煙がまるやかになるがいささか物足りない、と親父が言っていたが」

レンガ張りの内壁には、掃除をした痕跡があった。丹念に掃除をしたようだが、目地に入り込んだ黒い煤までは落とせてはいない。

枯れた木が見当たらなかつたのは、煙突内部の構造で説明できる。しかし、まだ疑問が残っていた。良質な石炭を使わなければ銅や鉄は溶かせないはずだ。なのに、ここには泥のような石炭しかない。

大釜の中をのぞきこんだジェーガンが驚きの声をあげた。

「おい、こいつは油だぜ。なんで油がここに入っているんだ？」

「答えは下にあるようだが、ジェーガン」

マークを挟み込むようにして、大釜の下をのぞきこむ。焼きレンガの窓から、石炭がのぞいていた。盛られている石炭と同じ色だが、乾いていて軽い。

「どうやら油は、石炭から水気を取るためのものらしいぜ。熱した油の中に入れば、水気は飛ぶからよ」

「なあるほどな。そうすれば火力は上がって、銅や鉄を溶かせるか。考えたもんだぜ」

マークは、とげのありそうな視線をジェーガンに向けた。

「お前、さつきから感心してばかりだけど、全然知らなかつたのかよ？」

「おれたちの生活に、山で荷物になる油なんかねえよ。せいぜい灯火に使うぐらいだ。水気を飛ばせるなど思いもしなかつたぜ」

「そうなるも隊商の知恵かもしれないな。食品でも何でも、水気を抜いて乾燥させれば、持ち運びには便利だし、保存が利くからな。

なあ、アニキ」

「舎密開発局の連中かもな。火炎放射器の研究で、油を精製する必

要があつただろう。そこから応用したのかもしれない。とにかくこれで、隊商から石炭を買い入れているわけではない、とわかったわけだ。じゃあ、何を手に入れてるのだろうか？」

レオンは細長い息をついて、考えをめぐらせた。

大陸を横断してまで、無償で物を与えにくるわけがないし、もし来たとしても、わざわざ価値の無いものに群がる隊商などいるわけがない。運び出すのが精製された幻惑草だとすれば、持ち込んでくるものは何だろうか。

石炭の仕組みはわかった。あとここで必要なものといえば、食料と鉛ぐらいただが、どれもフィルスで調達できるものだった。それに、運び出されたものに釣り合うだけの価値はない。

「まだ、調べ足りないようだ。他の建物を回ってみよう」

「おれもそう思いますぜ、隊長」

「そうだな、アニキの言うとおりだ」

三人で手分けして、他の建物を回った。ドワーフ族たちは相変わらずこちらのやり方を見ている。ときおりひそひそ声が起るが、水面に落ちる水滴のようには広がらず、すぐに消えた。

建物は湿気を取るためか高床式になっていて、ほとんどが住居だった。幼い子供と老婆が中で寝息を立てている。柱に鼠を返す板が張られていたのは食糧庫で、ジェーガンの言うとおりわずかながらソバの実が入った袋があつた。

やがて、二人ともくたびれた顔で戻ってきた。どうやら何も見つからなかったらしい。

「駄目だな、なにもありはしねえ」

「どうも変だぜ、とマークが頭をかいた。

「偵察でのぞいた小屋に行ってみたんだが、贗金の鑄型はなかったぜ。だとすると、おれが見たものは一体なんだったんだ？」

「だから、おれを連れて行けつて言つたじゃねえか。それをおめえは、なんだかんだ言つて邪魔しやがつて」

「それこそ面倒になつたらうぜ。だいたい事情を複雑にしているの

はお前たちのほうだ。さつさと契約書を見せればこういうことにはならないんだからよ」

とうとう契約書は、見つからなかった。当然ではある。遵守するドワーフ族にとって、何よりも大事なものだろう。

バズラを責めて吐かせるわけにはいかない。口を出そうとした人物をひと睨みで黙らせる威厳がある。下手をするとドワーフ族が騒ぎ出して、手負いで気が立っているはずのゴブリン族を招きかねない。

レオンが考えあぐねているうちに、グードが戻ってきた。疲れを知らないのか、歩み寄る足運びは軽かった。こちらが訊ねる前に口を開いた。

「ゴブリン族の見張り小屋のまで行ってみたが、警戒が厳重でたいして近づけなかった。うめき声が聞こえたところを見ると、貴様たちの襲撃が利いたようだな」

「応戦、と言ってもらいたい」

「無駄な殺傷をしないのは、兵部省の方針か。たしかに、殺すより傷つけたほうが、救護に人員を割くぶんだけ戦力は落ちる。うめき声が上がれば、士気にも響くか」

「否定はしない。それより小屋の周囲の様子は？ 重罪を犯しているとかわかっていいるならば、襲撃があった以上、証拠を隠滅するに決まっている。こちらの集落に向かってこないのは、大したものがないとわかっているからだ。逆に見られては困るものがある。あちらの小屋に置いてあるに違いあるまい」

レオンの問いに、微かにグードがうなずいた。

「ああ、幻惑草の青臭い匂いが漂っていた。おそらく夜遅くまで精製していたに違いない。三ヶ所はそうだった。残りの、山脈に一番近い場所だけが、熱気はあったが何も匂わなかった。あるいは、鼻がしびれたのかもしれないが」

「そこで贖金を造っているというのだろうか？」

「おそらくそれだけじゃねえですぜ、隊長」

ジェーガンは、近くまで来ていたバズラに顔を向けた。

「長老。銅から銀を抜く秘法は、ドワーフ族だけが代々受け継いできたものだ。ゴブリン族に漏らさなければならぬほど、苦しい生活を強いられているのはわかった。生きるためなら、誰も責める資格などありはしないさ」

バズラは黙って答えなかった。伏せぎみになった目が、かすかに震えている。

「奪われた荷役の代わりに大人たちはみな働きに行ったわけだろう。ところがこの不景気では商工組合とてろくな仕事を紹介できるわけがねえ。自分の食いつ持を守るのが精一杯で、ここの子供と年寄りまでには手が回らねえ。といって、ここを捨ててバラバラになるわけにもいかねえのもわかる。だが、あんな少年たちに貝殻を焼かせるとは、酷過ぎやしないかい。まかり間違えば命を失うんだぜ。おれたちに契約者を教えてくれれば、悪いようにはしねえよ」

バズラは、ようやく口を開いた。

「放っておいてくれ、言っただけだ。おぬしもヒゲを生やした成人なら、契約の重さを知っているはずだ。それに憐れまれる筋合いはない。いまは食料を連中に頼っているが、家畜を買って女子供でも畑を耕せるようになれば、こちらも高い金を払ったうえに言いなりになる必要がなくなるのだ。たとえ身が傷つこうとも、こうして生きていく。契約さえ守っていれば、この地で生き抜いていける」

激しく咳きこみながらも、言葉をつなぐ。

「無理やり連れてこられたのではない。自ら決めて来たのだ。集落を見てわかったろうが、わしらは法を犯すようなことはしておらんどこに間違いがあるというのだ」

「それじゃあ問題は解決しねえって言ってるんだぜ、おれは」

「わしらが現実から逃げているとも言つのか？ 冗談じゃない。わしらは厳しくても現実に向き合っている。そして、ここで生きていく。そう決めたのだ。だれにも邪魔はさせんぞ」

ジェーガンは言葉に詰まった。洞窟入口で少年たちを諭した言葉

を、そのまま蒸し返されているようなものだ。

しおれた声に、悲痛な響きがあった。生きるではなく、生き抜くと言った。魔法使いとして、諜報部員として生きていくことを選んだ自分とは、覚悟が違っている気がした。

待てよ、とレオンは心の中でつぶやいた。

軽いめまいを覚えた。なにかがずれている、そう思えた。長老の言葉ではなく、今までの行動に。頭の中で、フィルスから集落までの出来事を並べ直してみる。

一つの仮定が浮かんだ。一つ、また一つと目撃した物証が頭の中でつながっていく。

やがて、結論に達した。間違いはなさそうだった。喉が鳴った。

「まあまあ、アニキ。そんなに怖い顔しなくてもいいじゃないか。このジイさん、頑固そうだけど悪気もなさそうだしさ」

「それより、集会所に行くぞ。ぜひとも確かめておきたいものがある」

レオンは三人を引き連れて、集会所に戻った。せわしく扉を開いた。壁際に歩み寄り、前掛けを払って農具を手取る。

「なんだよ、アニキ。それがどうしたい？」

「これが、問題なんだ」

レオンは柄の部分で撫でていった。微かに段差がある。やはり、と思った。両手に力を込める。すると、さほど抵抗なく柄の部分が伸びた。松明の光で禍々しく輝く鋼が姿を見せる。

研ぎは入っていないが、暗器だとわかった。切先が長いうえに、根元に重心が寄っているのは、刺突用として打たれたためだろう。

「まさか柄の中に武器が隠されているとは思わなかったぜ。研ぎ出してみないと、槍か剣かはよくわからないけどな」

「いいや、マーク。こいつは槍の穂先に違いねえ」

「なぜわかるんだよ？」

ジーガンは、別な農具から暗器を抜き出した。

「ムラがない木炭に比べて、石炭で武器を鍛えると刃こぼれがしや

すいからだ。だから剣をこしらえるわけがねえ」

暗器に目をやりながら、グードが訊ねた。

「レオンよ。なぜ見抜けた？」

「ここにはこれほどの農具を必要としないからだ。むろんフィルスにも」

レオンは、三人に順を追って説明した。

大勢の大人がいれば、壁に掛けられている多くの農具は畑仕事に役に立つだろう。しかし、ここにいるのは体力のない老人と女子供だけだ。ましてや雑草で覆われていたとしても、畑はすでに作られている。これほどの農具は不自然だった。そもそもここには耕す家畜もない。

森の街フィルスに持ち込むのも無理がある。向こうで畑を作るのなら、必要なのは農具ではなく、当面は鋸や斧を使って木を切るところから始めるはずだった。焼畑は不可能、とすでに聞いている。

暗器を仕込むのであれば、柄が古い伐採道具よりも新しい農具のほうが見つかりにくい。

おそらく小屋でマークが見たのは、農具に見せかける先端部分を鋳型に溶かし込んでいるところだったのだろう。偽装ならば打って鍛える必要はなく、鋳型に流し込むだけでことたりる。

ジェーガンが、鍬を手にとった。

「そういえば、仲間が嘆いてましたぜ。鍛冶の中でも、農鍛冶が一番難しいって」

「おれが聞いたなかじゃあ、斧鍛冶が一番難しいって話だったけど、そいつは武器に限った場合だろうぜ、マーク。肉や骨は、人でも何でも大体同じだ。だが、農具は違う。土や草の質を考えてこさえなければならねえ。よおく考えりゃあ、いくら技術があっても、新しく住み着いたこいつらに、まともな農具を打てるわけがねえ」

「そう言えば、おれの村の鍛冶屋もよく自慢していた。気は小さかったが、いい男だった」

グードが、ぼつりと言葉を漏らした。鎌の刃に目を落とす姿が、

レオンにはどことなく寂しげに見えた。

ジェーガンは柄を引き抜いた。やはり暗器がのぞいた。指先で切れ味を確かめつつ、話を続けた。松明の火を孕んだ茶褐色の瞳が、強い輝きを放っている。

「もう一つ、石灰の使い道がありましたぜ、隊長。これに比べれば賈金も幻惑草も目くらましにすぎねえ」

「暗器に関するものか」

「ええ。古釘や鉄屑から鋼を作り出す、これが一番の目的でしょうぜ」

レオンたちは顔を見合わせた。意外な発言だった。これまでの話でも石灰の用途は広いと思っていたのに、さらに本当の使い道があり、それが主な目的になっていたとは思わなかった。

取り巻くドワーフ族からも、驚きの声が聞こえてきた。ざわめくほど驚嘆したようすがないのは、いずれジェーガンに見抜かれると思っていたからかもしれない。

「ジェーガン、おれたちにもわかるように言ってくれ」

「鉄鍋の底が抜けるのは、火によって炭の気が抜けて、鉄そのものがもろくなるからさあ。逆に炭の気を加えれば強くなるって理屈なんで。ただ、鉄の表面は滑らかですから、そのままじゃあ炭の気が入っていかねえ。だから、粉を水に溶かしたものを塗って、表面を崩してやる必要があるんでさあ。それにしても考えやがった。小さな古釘や鉄屑なら、表面はおろか、中まで炭の気が入っていきますからねえ。砂鉄や鉄鉱石からできる生娘のような鋼にはかなわねえが、量産する武器ならこれで十分だと思いますぜ。身持ちが固くないぶんだけ加工が容易ってわけで」

「やはりドワーフ族の秘法なのか？」

「なあに、こんなのは町の鍛冶屋でも知ってますぜ。ただおれたちは水に海の塩も加えますがね。その配合が秘伝ってわけで。塩つてのは鉄を錆びさせる性質がありますから、一緒に溶かして使えばより容易に炭の気を入れられませあね。すまねえ、隊長。石炭が悪い

と思っていたから、鉄にまで頭が回りませんでしたぜ」

「気にするな、とレオンは慰めた。そもそも銅を溶かすほど石炭の質が良くないと先の先入観があった。油を使って水気を抜く方法を知らなければ、思い至らないのは当然だ。」

「それがポーミラから、海藻を運んでいた理由か」

横を見ると、グードの顔つきが険しいものに変わっていた。

そういえば、とレオンは洞窟の入口での情報交換を思い返した。

潤滑材としても、塩としても使えるのであれば、運び込むゴブリン族にとっても、鉄を打つドワーフ族にとっても無駄のない品物となる。大量に運び込んでいる説明もついた。

大して役に立たない情報だと思っていたが、意外な成果をもたらしてくれた。

ジエーガンが、少年と交換した剣の鞘を払った。

「暗器は、ドワーフ族のものじゃないですけど、隊長。こんな切れない剣を見張りに持たせているんですからね」

「わかつている。信じたくないが、ここまでくれば嫌でもわかる。依頼者はベックラーだろう」

「おれもそう思うぜ、アニキ。正規兵は暗器など使わない。武装していたゴブリン族でもない。とすると、戦闘に慣れていてほとんど手ぶらだったオーク族のためのものだろうぜ」

「それに、鋼を研ぐには大量の水が要りますからね。おそらくフィルスで仕上げているはずですけど、隊長」

「そうだな。長い槍は、重装歩兵の得物になりうる」

「おあつらえ向きに、フィルスは直線が多くて槍が使いやすい街だしな。問題は柄だぜ。普通は粘りがあるトネリコかリングゴを使うはずだが」

「あるいは斧槌にも使っている、裂けても折れねえヒツコリーだ。」

しかし、硬いポポリだって悪くはないかもしれねえ」

グードは、手にしていた鎌をようやく壁に戻した。

「レオンよ。ベックラーがドワーフ族に武器を造らせる動機は何だ

と思う？」

「フィリスの独立、と言いたいところだが、用心深いベックラーのことだ。そこまで大それた野心は抱いていないだろう。せいぜい政府を揺さぶりつつ、自治領主並の地位の確立か、元老院議員への推挙を要請するといったところかな」

「しかし、隊長。あいつはケチな犯罪組織の首魁じゃねえ。直轄都市の警備隊長ですぜ。もし、贖金を造っていることが明るみに出たら、威信を丸つぶれにされた連邦政府が迅速に介入してきますぜ。そんな危険を冒せませうかねえ」

普通はな、とレオンは首を振った。

「買収していれば別だ。現に財務省は動いていない。おれの考えでは、まず、銅から抜いて作った銀で、周辺の自治領主たちを買収して力を蓄える。相手とて他の領主と銅山の所有権をめぐって血を流すよりも、ただで銀塊をもらっていたほうがいいに決まっているからな」

「たしかに、もともと反抗的な土地柄ですからね。政府に対する忠誠心は持っていないと考えるのが自然でしょうぜ」

「その通りだ、ジェーガン。そして今度は枢密院や元老院議員、それに政府要人たちを順に買収していく。全員が共犯なら、罪を追求されずにすむ。ものごとには常に裏がある、とグードが言っていた意味がようやくわかった気がする」

むろん、議員や役人連中とて愚かではない。ただ、油断しているに違いなかった。

いざとなれば港町ポーミラを押さえれば、食糧を自給できないフィリスはすぐに自滅すると思っ込んでいるのだろう。そうなれば、罪をベックラー個人に被せて知らん顔を決め込む。金を貰っただけ得というわけだ。あとは、堂々と銅山の国有を宣言すればいい。

しかし、山脈を通り抜ける坑道があったらどうなるか。金さえ出せば、食糧は隊商や領主たちがいくらでも持ってきてくれる。

腹の探り合いは、どうやらベックラーに分がありそうだった。

「少しは成長したようだな、レオンよ」

グードは特に嬉しそうな顔もせずにつぶやいた。

「するとアニキ。司法省がこちらに依頼してきたのも？」

「ああ。微妙で手に負えそうにもない問題だからだろう。兵部省の上層部と同じ見解だと思う。駄目でもともと。最悪の場合でも、責任をこちらの失態として押し付けることもできるからな。だが、汚れ仕事を受けたからといって、結末まで思惑に従ってやる理由はない」

「とにかくこの将来は、おれたちが決めるってわけだ。面白くなつてきだぜ」

「ついでに、この国の未来も決めてみたいものだがな」

レオンは松明を天に向けてゆっくりと回した。

月明かりに、翼竜の姿が浮かんだ。影が大きくなり、集会場前で交差する道を滑走して降り立った。

驚いて逃げふためくドワーフ族のあいだをすり抜けて、レオンはバズラの前に立った。

「バズラさん。あなたがたは契約を立派に守っただけだ。だから、これからのことは我らに任してください。何があっても、あなたはあずかり知らぬこと。いいですね？」

バズラの目に、悲しげな光が宿っている気がした。上に立っている者として、思っていることを口に出せない辛さがあるに違いない。やがて、肩を落とした。うつむいた顔からは表情は読み取れない。微かに唇が動いたようだが、何を言っているかはわからなかった。

周囲も、静かだった。どうやら、交わした契約書には契約者を守る、とは書かれていないようだった。それで充分だった。

誇りを持ちながらも満足に生きていけない人間の気持ちは、魔法使いとして生きてきた自分にはよくわかる。本当なら、誰にも頼ることなく生きたかったに違いない。

駆け寄ってくるセラの姿が、はっきりと見えた。

「すぐに作戦会議を始める。目的はベックラーの拘束。疲れている

だろうが、あとひと頑張りしてくれ」

レオンは、いつの間にかベックラーを呼び捨てにしている自分に気づいた。

## 第九章 霧の中

### 第九章 霧の中

「贖金を追っているうちに、意外な展開になってしまったな。特機隊の隊長として自らの不明を恥じる以外にないが、一個人としては面白くなってきたと思っている。おれたちの活躍の場ができたわけだからな」

レオンの発言に、ジェーガンは力強くうなずいた。

「幻惑草も贖金も、野心を隠すための下準備だったってわけですからねえ。まったく、とんだ道化を演じるところでしたぜ」

「幻惑草は内務省。贖金は財務省と司法省。反乱は兵部省が取り締まりの管轄になります。さらに困ったことに商工組合は、工芸省の指揮監督下にあります。市議会が機能しないときに、警備隊長として全てを統括する立場になったのを巧妙に利用したわけですね。各省の要人と両議員の皆さんが責任のなすりつけあいをしている間に、支配者としての既成事実を積み上げてしまえば、口出しできなくなると考えたのかもしれませんが」

セラは悔しそうに言った。ちぐはぐな色合いの容姿が暗闇に沈み降り注ぐ月明かりが髪に銀色の輝きを与え、彩がないぶんだけ調和のとれた顔かたちを浮き立たせている。

「いまの執政官府は、睨みが利かねえようだからな。そのおかげで、おれたちドワーフ族が苦しまなければならねえ。それでベックラーみてえなのがのさばってくるなんざあ、まったくもってふざけた話だ。そうでしょう、隊長」

「ああ。都市は一個人の私物ではない。ましてや独立など許しがたいことだ。執政官府の統制力が弱まるときに独立騒動が公になると、多くの罪なき人の血が流れることになるかもしれない。分裂、内戦となれば、連邦政府が誕生したとき以上の犠牲が払われる

のは明らかだ」

「しかし、隊長。微妙な情勢だからこそ、慎重に動く必要があるかと思えます。せめてドワーフ族の皆さんの協力が得られれば、すぐにでも踏み込めるのですが」

レオンは、腕を軽く組んだ。

「さて、そこだ。こちらには司令部に踏み込むだけの証拠が欠けている。しかも、その証拠となる武器は、ベックラーの手の内にありそうな状態だ。思考が堂々巡りになりそうだが、この悪意ある鎖をどう断ち切るか」

「契約で縛られているからなあ。これじゃあ証言も期待できねえ。まったく、無関係だと証明できれば、助かるつてのによお」

「早く決める、レオン。もうすぐ夜が明けるぞ」

グードは苛立たしげに言った。細い目がよりいっそう細められ、針のようになっている。

「証拠がなければ、うかつに動けないだろう。それとも何かいい考えでもあるのか？」

「おれには次善の策がある。ベックラーを捕まえられなければ、ゴブリン族を幻惑草密売の犯人として告発するだけのことだ。もつともその場合、ドワーフ族にも罪が及ぶかもしれないが、捜査に非協力的なでは仕方がなからう。ファイルスが注目されるようになれば、ベックラーの不穏な動きも封じられる。つまり、痛み分けた」

取り囲んでいたドワーフ族のざわめきが大きくなった。顔つきが険しくなり、こちらを睨んでくるのもいた。

「ここでそんなことをぬかさなんざあ、おめえ、命が惜しくねえのか？」

「おれをこの場で消しても、すぐに同僚が嗅ぎつけるぞ」

やめる、とレオンはジェーガンを制した。

「ここで逡巡しても仕方があるまい。よし、おれが全責任を取る。ベックラーの確保に全力を挙げることにする。人質にとって証拠を要求すれば、司令部のようすからして、部下は言うことを聞くはず

だ。確たる証拠はないが、時間がないのはもつと確実だ」

「やむを得ませんね。こちらは少人数ですし、明るくならないうちに決行するべきでしょう」

セラも同意した。ジェーガンは、グードを睨みつけている。熱い視線と冷たい眼光が交錯しているようだった。

「我らの隊長が全責任を取ると言ったんだ。門外漢のおめえは手を出すなよ。幻惑草の密売より、反乱の予防鎮圧が優先するのは当然だ」

「構わん。どのみちおれは休暇中だし、目的は幻惑草の密売組織の撲滅にある。首謀者と思われるヨルクとベックラーがいなくなれば、目的を果たせる。ただしおれも同行させる。協力は約束出来ないが、援護ぐらいはしてやる」

「してやるとは大した言いぐさだな。いいところ取りのつもりでいやがるのか？」

「ファイルスにはおれの同僚とその部下がいる。貴様たちとて、利用しない手はなかるう」

グードは危険を分散させたいのだろう、とレオンは思った。

もし贋金造りや武装などの物証があがらなかつたら、追求の線が途切れる。好機を逃さぬように、二本目の矢を放つつもりなのだろう。ゴブリン族がいる見張り小屋で、動かぬ証拠を握ったのかもしれない。

「いいだろう。おれたちだって手柄欲しさにしているわけじゃないからな。それより早く作戦会議に入るぞ」

「ああ、アニキ。ちょうど描き終わったぜ」

先ほどまで無心に小枝を動かしていたマークが、顔を上げた。

地面にはファイルスの俯瞰図が描かれていた。大きく描いた正方形の街を、南側から包み込むようにして川の線を引いている。川のなな北側と港町ポリアにつながる東側とに街道を意味する二重線が入っていた。落ちた橋を示すバツ印は、西側と南側に記されている。「みんなも回ったからわかってるだろうが、いちおう確認してお

くぜ。街はほぼ正方形だ。道も格子状に引かれていて袋小路はない。表通りは広いから、滑走路がある翼竜を突っ込ませるには好都合だ。目印を確認しないと迷う可能性もあるが、この街は中央に灯台があるから楽だぜ」

レオンが一同を見回して言った。

「作戦の目的は、ベックラーの身柄拘束。できる限り流血を避ける方針で臨みたい。急襲で警備隊を散らしつつ、司令部に踏み込むつもりだ。灯台下の建物にあると思われる証拠も同時に押さえておきたい。だが、敵はこちらが兵部省の人間だと知っている。当然ながら、翼竜による強行突入に対しての備えはしてくるだろう」

セラのしなやかな指が、街の中央に向けられた。

「こちらは人数が少ないぶんだけ、戦力の集中が必要になります。ベックラー警備隊長が用心深い性格だとすれば、身を守るために人員を警備隊司令部に集中配置していることでしょう。はじめに散らしたとしても、再び囲まれるとこちらが不利になりますね」

レオンはうなずいた。ヨルクが殺害されて放火されたのなら、犯人であろうがなかるうがベックラーは警戒し、対策を講じているに違いなかった。

相手の失策を前提に、作戦を立てるわけにはいかない。

「炎放射器が使えるれば楽になるかも知れないが、あいにく作っている時間がなさすぎる。分量もよくわからないし、効果もいまひとつわからない。ここはどうしても奇襲しかなさそうだが」

マークが手についた砂ぼこりを払って立ち上がった。心もち胸を反らし、薄い赤目をレオンに向けた。

「おれはまず地上から仕掛けて、護衛を引っぺがしたほうがいいと思う。人数が少ないから、二手以上には分けられない。地上で騒ぎを起こす班と、司令部を急襲する班とに別れて行動するってのはどうだい？」

持ってきた地図に目を向けていたジェーガンが首を振った。

「発想はいいが、人数が少なすぎるぜ、マーク。こっちは城門を

ぶち抜く戦力はねえ。唯一西側の石垣が崩れているが、城門付近には、傭兵として駆り出されたオーク族が配備されている可能性がある。気づかれて騒がれたら厄介だ。朝とはいえ、まだあのあたりは暗い。夜襲で守備側が城門から出てくることはありえねえ。かえって守りを固められるだけじゃねえのか」

「だれが外側からだと言ったよ。もともと城壁を直したのは夜盗対策なんだろう。だったら、内側でそれらしく暴れてやろう。街の人間には悪いが、少しだけ騒ぎに付き合ってもらおうとしようぜ。市内を歩き回ったときに、空き工房を見つけておいた。解体寸前だったから遠慮なく燃やせるぜ」

「場所はどこだ？」

「ちょうどいい具合に南門近くだぜ、アニキ。ここなら、西側を守っているはずのオーク族が異変に気づいても、司令部を横切るかたちで加勢してくる気遣いはねえよ。まさか、橋が落ちている南側から仕掛けてくるとは思わないだろう。これなら、おれ一人で騒ぎを起こせるし、建物の陰や暗闇にまぎれて追跡をかわせる。まだ石垣は穴だらけだし、警戒していても隙間に短剣を差し込めば、おれなら容易に乗り越えられるぜ」

妙案に思えた。いままで警備隊が役目をおろそかにしていたのを逆に利用している。

不景気でありながら、ファイルスがそれなりにやっていけたのは、組合長であるヨルクの功績だと住民は思っているに違いなかった。功労者が殺されて店に火をつけられたうえに、翌朝に夜盗の襲撃があれば、警備隊は司令部から出動せざるを得ない。さもないと街の人間の不安が、統治者に対する不信に変わる。今の段階でベックラ―が、完全に人望を失うような態度は採れないはずだ。

「単純なおめえにしては、なかなかいい作戦を立てるじゃねえか」  
「戦術の基本は、包囲と突破しかない。そのうえおれたちは少人数だから、突破だけを考えていけばいいってわけだ。敵の構えを崩すのは、格闘術に通じるものがあるしな。今回のようなやり方はあま

り好きじゃないが、急ごしらえじゃあ仕方がない」

マークが苦々しげな顔をしている気持ちはわかる。こういう裏門から忍び込むような作戦は、性分として不本意に違いない。

レオンはふと、試されているような気になった。騙されたから、騙し返すのか。それはない、と自分にいい聞かせた。騙されたのは自分が甘かったからだ。騙すのは相手が多勢だからにすぎない。だから、別のものだ。

全てを知っていたはずのヨルクがいなくなっただいま、警備隊司令部を急襲するしか、ドワーフ族を救うすべはない。

「一度出火すると、明るくなった場所が目印になりますから、より正確に司令部を狙えますね」

セラも賛意を示した。決定しようと思ったとき、ジエーガンが地図から顔を上げた。

「隊長。気がかりな点が一つあるんですが、いいですかい？」

「何だ？」

「いや、なにね。これだけ広大な森をつくれるほど、雨雲ができれば土地柄ってえこってす。しかも川も流れていますしね。つまり、ここいらの湿った空気と、明け方の冷たい空気が混ざるってえと」

霧か、とレオンは唇を軽く噛んだ。手を挙げたセラが、言葉を継いだ。

「しかも、周辺は森に囲まれていますから、風通しが悪いはずですよ。ですから、いちど深い霧が出ると、すぐには晴れなくなるでしょう。視界が悪くなりますと、近づくのは容易になりますが、今度は弓が使えなくなりますね」

「まあ、考えようだぜ、セラ。相手だって飛び道具が使えないんだ。突っ込むときに、矢で幕なんかを張られたんじゃないやあ、翼竜もかわいそうだ」

「おい、マーク。おめえもいっちょまえに、翼竜を気遣う気持ちが生まれたか」

「うるせえぞ、ジエーガン。言うておくが、そうならお前の頭

にある地図が絶対必要になるんだからな。軽口を叩いている暇なんかないぜ」

「わかってる。おめえが尻尾でうなっていたときから、ずっと頭の中に叩き込んである。いま地図を見ているのは単なる確認作業だ」  
レオンが結論を下した。

「よし、作戦は決まったな。では、マーク。お前が先に街に潜入して陽動しろ。それからおれたちが突っ込む手順でいく。ところで、セラ。郊外に翼竜を下ろす場所はあるか？」

「はい。川の上流にわずかながら空地がありました。飛び上がるほどの広さはないので、翼竜を降ろせはしませんが、羽ばたくことでしばらく宙にとどまることぐらいは出来ます」

「ああ、十分だぜ。それなら酔っ前に降りられそうだ」

「と、いうわけだ。何か言いたいことはあるか、グード？」

グードは作戦自体には、関心を持っていないようだった。

「いや。貴様たちの決定に干渉するつもりはない。それより早く出撃したほうがいい」

見上げると、中天が少し青みがかってきた。東側は山が邪魔をしているが、夜明けが近いのは明らかだった。もう、一刻の猶予もならない。

レオンは、バズラに向き直った。

「お別れです。出来れば、納得のいくまで話し合いたかったのですが、残念です。時間がないので、これで失礼します」

暗いので、表情まではわからない。しかし、顔はこちらを真っすぐにとらえている。

ややあつて、顔が振られた。

「誰か、全員の分のサンダルを」

すぐさまサンダルが届けられ、レオンに手渡された。

「坑道の中を通ってきたのなら、履き替えたほうがよい。濡れたままだと、悪い水で足を痛めるからの」

足を痛めるほどの毒水ということは、サンダルが傷んでいること

は十分ありえる。不覚を取るな、と遠まわしに言われている気がした。

サンダルは革製だった。おそらく、なけなしの金で手に入れたのだろう。新品は二足だけで、他は履き古されたものだった。

グードが無言で、真っ先に新品のサンダルを取った。履き古されたほうが、すぐ足になじんで動きやすいと考えたのだろう。もう一足は、セラが遠慮がちに履いた。

レオンは全員履き替えたのを確認した。

バズラに別れを告げたが、際立った反応は返ってこなかった。それでもこちらの意志は伝わったようだった。静かに囲みが解け、道ができた。

急いで翼竜のところまで行き、全員いつもの位置に乗り込んだ。

グードはレオンの後ろに座った。

羽ばたきが少しずつ大きくなり、地面からの衝撃が消えた。もう、後戻りは出来ない。

マークの悲鳴に似た叫びの間から、レオンはグードに問いかけた。

「まさか後で功を譲った、とか言い出すんじゃないかな」

「それこそまさかだ。貴様らがただの物乞いじゃないことぐらい、とつくにわかつている」

つまらぬ冗談だ、と言わんばかりにグードは舌打ちをした。

皮肉とも取れる言い方だったが、腹は立たなかった。おそらく地位や名声に関しての恬淡さを感じられるからだろう。削ぎ落としているのは、なにも主義や心情ばかりではなさそうだ。

ジーガンが指示する位置で、かすめるようにして稜線を越えた。水平線が白くなって、海も本来の色をとり戻しつつあった。

ふいに体が沈む感じがした。気流が、山の斜面を下っているからだろう。我慢していたはずのマークが叫びだし、ジーガンの叱咤する声が重なる。

セラが振り返った。銀色だった髪の色が夜空で薄れ、くすんだ絹糸となって首に巻きついている。

「やはり霧です、隊長。街はおるか、森すらも見えません」

肩越しに見やると、確かに霧がかかっていた。脂を抜いた羊毛が、森全体に敷き詰められているかのようだ。虫食いを思わせる点々が、かろうじて木々の突端だとわかるぐらいに濃い。

「喜ぶべきなのだろうな。警備隊もこちらを発見できないだろうから」

横のジューガンは、ぶつぶつと数を数えている。おそらく頭の中の地図と、翼竜のいる高さや速度から位置を割り出しているのだろう。不意に叫んだ。

「近いぜ、マークを降ろすところだ！」

指差した位置に、巻貝を逆さにしたような螺旋を描いて降下していく。乳白色の海から、土が見えてきた。羽ばたくと、土ぼこりが舞った。

「よし、じゃあ行ってくるぜ」

マークは、転がるように飛び降りると、すぐに姿を消した。細い道を見つければ、後は一本道だ。橋は落ちているが、水が引いているのであれば、なんとか渡れるはずだった。

再び羽ばたいて、上空に昇る。ジューガンの指図どおりに、フィルス近辺で旋回を続けた。

東の空が一段と明るくなった。水平線から中天まで、虹をさかさまにしたような色合いに変わり、海と空とがきっぱりと別れ始めている。

隊長、とセラが、困惑した顔を向けてきた。

「この子、さうとう疲れているようです。無理をさせすぎました」  
気がつくのと、鞍が熱くなっていた。羽ばたく力も弱くなってきている。考えてみればこの数日、食事を減らしたうえに、ろくに休ませないで酷使し続けてきていた。

下向きの気流では、乗っかって体力を温存するわけにはいかない。このままだと、力尽きて墜落するおそれもある。

静かなままの街を見下ろしながら、レオンは、ただちに決断した。

「やむをえん。ジェーガン。セラに警備隊司令部のおおよその位置を示せ。強行突入を図る」

「しかし、それじゃあ警備隊の真ん中に突っ込みますぜ」

「落ちるよりはましだ。おれたちがいなければ、マークが捕まってしまう公算が大きい。避けるにはこちらが先に突っ込むしかない。」

中心での異変に気づけば、マークも追っ付け駆けつけてくるだろう。あるいは、城門の守備隊を片付けるなり、誘導するなりして、退路を開く算段をするはずだった。そのぐらいの機知は期待できる。

わかりやした、とジェーガンは節くれだった指を下に向けた。

セラが、たずなを引いて、張りのある声を出す。翼竜が羽ばたくのを止め、前傾姿勢をとった。下降が始まった。羽根を縮めると、速度がより増した。顔に、冷たい風が当たり、涙がにじんできた。手の甲で拭い、視界を確保する。

「では、行きます。皆さん、気をつけて」

灯台らしき突端が見えた。突っ込む。翼竜の上体が起きた。翼竜は、二回大きな羽ばたきをした。弱い左側に傾く。石の格子模様が浮かんだ。地面は近い。

「おれは、灯台に行く」

降り立ったグードが走った。速い。レオンも続く。背後からジェーガンのくぐもった声が聞こえた。振り返ると転がり落ちていた。持っていた剣が音を立てて滑ってきた。手渡したとき、短い悲鳴が聞こえた。他人の声だ。警備隊に達しない。グードの姿が、霧に溶け込んでいく。

翼竜は飛び去った。街道のどこかで、少しでも体を冷やさねばなるまい。

「敵の奇襲だ！」

警備隊の声は大きかったが、慌てふためいたようすではなかった。敵、とも言った。やはり備えをしていた、とレオンは思った。ベックラーはこちらが仕掛けて来るのを読んでいた。ならば、容疑がさらに濃くなる。

「よし、おれは反対にベックラーの元に行く。できるだけ警備隊を引きつけておいてくれ」

グードの向かった灯台から、司令部の見当をつけた。踏み出す。玄関が見えた。淡い緑色をした鎖状の鎧が浮かんだ。二体。敵意がある。右側を杖で打つ。盾で受けられた。横撃がくる。飛び退ってかわした。右に飛んでもう一度横撃を誘う。ぎりぎりでかわす。隙が出来た。石突きをあごの下に突きこんだ。手ごたえがある。何かを吐いて、倒れた。

紋章が迫ってきた。より大きな盾で上体を守っている。同じ手は無理だった。また、誘うしかない。鎧に差がある。こちらは革鎧だった。機敏さは、こちらが上だ。得物の杖も少しだけ長い。斬撃。ななめから来た。かわしつつ杖で応じる。肘に打撃が入った。突き抜けるように思いつき踏み込む。剣を巻き込むかたちになった。剣先が下に向いた。体をねじる。一回転して、脇腹を突いた。折れ曲がって倒れた。詰まった声に、兜の金属音が混ざる。

「ジューガン、生きてるか!」

「もちろんでさあ!」

近くで返ってきた。元気がある。にらみ合っているらしく、音はしない。遠くの金属音は、グードのものだろう。悲鳴が上がり、慌しい足音が交錯している。

「おれが踏み込む。お前は玄関を死守しろ!」

「わかりやした、玄関ですわね!」

返事は、間が開いていた。言った意味を考えたのだろう。大声で了解したなら、安心して仕掛けられる。

両開きのドアを開けて、片側だけ勢いよく閉じた。鎖が慌しく鳴った。警備隊。誘い出しにかかった。

身をかがめて待った。姿が浮き出る。また二体。駆けているので、盾が横向きになっている。左ののを突く。入った。痰を切ったような音がした。崩れ落ちる。右がひるんだ。飛び上がって体当たりを食らわせる。固い。左肩がしびれた。ふっ飛んで倒れたところで、

兜に杖を叩き込んだ。強い衝撃が伝わってきた。音が鳴り響く。体が跳ね、動かなくなった。気を失ったようだ。

これで、敵は容易に踏み込めないはずだった。視界が悪いのが幸いした。

レオンは、音を立てずに玄関をすり抜けた。壁に体を寄せながら、階段を上がる。

慌てる必要はない。ベックラーの居場所はわかっている。あとは決着をつけるだけだった。

天が味方してくれたのだろう、とジエーガンは思った。

神は信じないが、天は信じられた。山に住んでいると、恵んでもくれない神よりも、陽光だけでもしっかり注いでくれる天に祈りを捧げるのは当然だった。

恵みを恵みとして感じられないのは、生まれながらに持っている罪のせいだと、宣教師は諭したらしい。だから、布教に失敗したのだろう。

人間が神の子であるなら、どうして初めから罪をこちらに背負わせようとするのか。仲間や家族にはできる限り良くしてやるべきではないのか、との長老の反論に、他の仲間が同調した。鉱山で培われた仲間意識の前には、神の入り込む余地はなかった。

濃い霧は、天恵に思えた。いくら訓練を積んでも、こつも視界が悪くては戦いようがない。二の腕に赤い紐を結んでいるのは、同士討ちを避ける工夫なのだろうが、視界が悪すぎて役に立っていない。この地勢なら、霧は珍しくないはずだ。つまり、警備隊の連中はオーク族と同様この街に慣れていない。ベックラーが自分の悪事を知りうる人間を、意図的に遠ざけたのかもしれない。

夢の中のようだった。綿や羊毛に包まれているようでありながら、からみつく手ごたえがまるでない。しかし、まだ雲の中よりはまし

だ。大地が加勢してくれる気がする。

注意深くあたりを見回した。ベックラーを拘束するまで、樂觀で  
きない状況にある。

壁に背をつけて死角をなくしたいが、距離が離れすぎていた。ま  
た、こちらの気配を残しておく必要がある。消すと、敵は司令部に  
殺到するに違いない。

警備隊員が見えた。右側。驚く顔があった。お互い飛びすさった。  
また霧に溶ける。すり足で、反対側に逃げた。やれやれ、とため息  
が出る。舌打ちも出た。粗末すぎる剣では斬りあえない。しかし、  
契約は契約だ。手放すわけにもいかない。

悲鳴が上がった。灯台とは違う方角だった。正門あたりと見当を  
つけた。鈍い、殴りつけるような音がして、何かが倒れたようだっ  
た。攻撃の仕方からして、マークに違いない。

「こつちだ！」  
おう、と反応があった。駆けつける音がある。赤毛は、濃い霧の  
中でも目立つ。やがて短剣を手に身構えながらすり足で進んでくる  
姿が見えた。

「豚野郎どもを巻くのに苦労したが、どうやら間に合ったようだな。  
火をつけないうちに騒ぎが起こったから、なんとなく事情はわかっ  
たけどよ。それにしてもずいぶんとまた慌しいこつた」

「わかっているなら、いちいち聞くんじゃねえ。隊長が司令部に突  
入したぞ」

「よし、アニキなら大丈夫だろう。廊下なら囲まれることはないか  
らな」

翼竜の鳴き声が出た。複数の怒声も聞こえる。街の西側からだっ  
た。オーク族がいて、こちらに向かってくるはずだった。セラが援  
護してくれているらしい。長い絶叫も起こった。直線が多い街路で  
は、弓を使いやすい。

「翼竜のやつ、やるじゃねえか。お前が囲まれたときもそうすりゃ  
あよかったのにな」

警備隊が背中から飛んできた。二人がよけた間を、すり抜けて倒れる。悶絶していた。

「なんなんだ、こいつは？」

「殴り飛ばされたに決まってる。消去法でいけば、やったのは一人しかいねえ」

すぐに霧の中から、巨大な輪郭が浮かび上がった。グードだった。身にまとった外套には、いくつかの切れ込みが入っている。左腕を押さえている指が、少し赤く染まっていた。囲まれてかわしきれなかったといったところか。

「灯台下の建物をのぞいてきた。これからベックラーの元に行く」

「何かあったのか？」

ああ、とグードは素っ気なく答えた。

「守る連中はあらかた片付けたから、見たければ見に行くがいい。ひとまずそこをどけ。おれはどうしてもベックラーに会わねばならん。決着をつけるためにもな」

細められた目は、鋭くもあり、醒めているようでもあった。ただ、落ち着き払った声には、決然とした意思が感じられた。灯台の下に、複雑な気持ちにさせる何かがあるようだった。

嫌な予感がする。この大男は、目的のためなら手段を選ばない苛烈さを持っている。功績を独り占めするような卑劣漢ではなさそうだが、手柄を横からさらうぐらいはやるだろう。もし、幻惑草にこだわるようならば、状況証拠次第でドワーフ族が冤罪を被りかねない。

とにかく灯台に行ってみるしかない。見れば、全てがわかるはずだ。

黙って脇に寄るマークを見やりながら、ジエーガンは口を開いた。「おい、グード。約束を忘れるなよ。今回の作戦は、おれたちの領分だ。隊長の責任がかかっているんだからな」

「くどいな。おれは、嘘はつかん」

やむを得ず譲ると、グードは音もなくドアの向こうに消えていっ

た。

「聞いたろう、マーク。おれは灯台に行ってくる。おめえはここを守ってくれ」

「まかしとけて。ただ、戻ってくるときは合言葉を使えよ。間違えて殴つちまうかもしれないぜ」

「なんだよ、合言葉って。そんなのいつ決めやがったんだ？」

「たった今だ。そうだなあ。契約と頑固ジジイでいいだろう。どっちも固くて食えないし」

「好きにしろ、まったく」

歩き出すと、腿が痛みはじめた。痺れもきている。酒と薬草の効果がきれたのか、あるいは片方だけが効いているのかよくわからない。しかし、立ち止まるつもりはなかった。傷口が開いても、死ぬほどの深手ではない。

灯台に向かう石畳の上に、多くの警備兵が倒れていた。苦悶の表情が浮かんでいないのは、すぐに気絶したことを意味している。視界の悪い状況下で、正確に急所を打てる人間は、そうはいない。

教えられてできるものじゃない。おそらく、実戦で鍛え上げられたものだろう。隊長と同じだ、とジェーガンは思った。

逆境が人を鍛え上げる。ドワーフ族が行う苛酷極まりない成人の儀式もそうだった。世の中に対する怒りや恨みがあるからこそ、いかなる逆境にも耐えられる。強くなったのは、単なる結果にすぎないのではないか。

灯台の真下についた。ドアが半開きになっている。

中に入り、あたりを見回す。結構な広さがあった。高さもある。採光用の小窓から、弱々しい光が差し込んでいて、焼いたレンガにくすんだ赤みを与えていた。

広い室内に埃が舞っていた。それでいて、床にくつきりとした足跡がない。おそらく、この建物が何らかの目的で使われ続けていたのを示している。

奥へと歩み寄る。やはり、灯台と思っていたのは煙突だった。灯

台につながっている壁には、石炭を燃やしたような煤がついている。息を止めて煙突を見上げると、何かを取り外したような痕跡があった。場所からいって、集落で見た毒気を抜く金属管に違いなかった。煙突の汚れ具合からして、我らドワーフ族の仕業ではない。バズラならもつと丁寧に掃除するはずだ。

武器や贖金の証拠はなかった。鋳型も、炉もない。おそらく異変に気づいて運び出したのだろう。森の中、水車小屋、石垣の土台など、隠す場所はいくらでもある。

隅のほうに、大きな布袋が倒れていた。あたりには銀貨らしきものが散らばっている。

近づいてよく見ると、やはり銀貨だった。ひとつ手に取って見ると、きちんとした刻印が入っている。ゴンドランド連邦の正貨に違いなかった。

やはり何かをしていたのに違いない、とジーガンは察した。これ見よがしに銀貨を置いているのは、偽装のためだと思われた。これなら、警備兵が厳重に監視していた言い訳となる。

物証は出なかった。賭けに負けた。そう思うと、急に足と体が重くなった。

建物を出て、マークの元に戻った。あたりは静寂が、支配していた。

「おい、合言葉は？」

「ふざけんな。おれだ」

力の抜けた口調で、事情を察したらしい。色白の顔がこわばり、眉根が寄せられた。

「見つからなかったのか？」

「ああ。確かに何かを鑄ていたような形跡があった。だが、それだけでは拘束する理由にはならねえ。ところでマーク。忍び込んだときに、オーク族の武器を見なかったか？」

「あの霧じゃあ見えねえよ。むやみに近づくわけにもいかねえし。ただ、一人だけ出くわしたが、そいつは丸腰だったぜ。なんでも、

役立たずに持たせる武器はねえ、とか言われたんだと。まあ、逃げ出す途中だったから、余計な荷物がなくていいかもしれないが」「とにかく、手遅れにならないうちに隊長の後を追え。おれはこの足だ」

そのとき、なにやら集団で駆けつけてくる足音がした。雑多な鎖の音がする。増援か。しかし、オーク族ではなさそうだった。走り方になにやら秩序らしきものが感じられた。

一直線はこちらに向かってきた。

「よおし、その場を動くな。武器を地面に置け。我らは内務省のものだ」

身構えようとしたが、機先を制された。警備隊員も同じ立場らしい。石畳に金属がぶつかる音がした。

ジェーガンは、マークとともに剣を地面に置いた。どのみち切れない剣では、多勢を迎え撃つことはできない。内務省というからは、グードのいう同僚だろう。

「おい、ジェーガン。ひよっとしたら、賭けに勝ったかも知れないぜ」

「だといいがな」

「どういう意味だ？」

「あそこで証拠が見つからなかったのは、グードも同じだ。そうなのとやはり次善の策として、ゴブリン族に罪をかぶせてくるかもしれないねえ。結果的にドワーフ族が巻き添えを食っちゃまう」

「飛び立つ前にアイツと約束しただろう。だったらそれを剣のように振りかざせよ。諦めるなんて、生粋のドワーフ族のお前らしくないぜ」

「おいおい。武器は、捨ててくれたまえよ」

正面からきざっぽい声が掛けられた。足音が近づいてくる。マークは、こちらをかばうように身構えた。

「だれだ、てめえ」

霧の中から、一人の男が姿を表した。口ひげを優雅な素振りでい

じりながら、足音を立てることなく近づいてくる。グードが集落で言っていた、同僚とはきつとこの男だろう。

それにしても派手な男だ、とジエーガンは思った。

「おれは、ゴンドランド連邦内務省所属のフリーデルという者だ。ただいまより巡視官の権限で、フィルスの警備隊司令部を搜索する。舞踏会は終わった。見苦しい抵抗はやめたまえ」

ジエーガンは黙って両手を挙げた。マークもそれに倣った。

「結構。神殿で祈る乙女には及ばないが、神妙な態度は実に麗しい。護衛がそれぞれ二人ずつ、両脇についた。

「ところでおめえさん、どっち側の人間なんだ？」

「おれかい？ おれは常に美しいものの味方でありたいと思っっている者だよ、ヒゲもじゃ君。少し早いけど、これから警備隊長室で行われる後夜祭に招待されてもらおうかな」

護衛にうながされて、建物の中に入った。ゆっくりと階段を上りながら、ジエーガンは考えをめぐらせた。太ももはあいかかわらず痛いけど、かえって頭が冴えてくるようだ。

言動を見る限りフリーデルは、堂々と決着をつけるつもりらしい。ならば、こちらにも言い分はあった。

贖金を見破れなかったのは残念だが、罪はここで騒ぎを起こしたぐらいのものだ。ドワーフ族による幻惑草の栽培は、公に認められている。精製と密売の証拠は、集落にはなかった。全て、ベックラーとゴ布林族が組んでやったことだと主張できる。

灯台下の建物に置かれていた銀貨は、確証はないが幻惑草の密売によるものだと思われた。ドワーフ族から奪うほど、ゴ布林族は荷役にこだわっていたはずだった。したがって、密輸に関わっている確証はどうしてもつかめないはずだ。

懸念はある。生じた問題は初めからなかったことにするのが、内務省の基本方針となっていることだ。しかし、ドワーフ族に罪はないはずだから、集落そのものをなくすことで落着するはずだ。追い立てられるバズラたちの無念さには心が痛むが、再起の望みはあ

た。

とにかく、やることだけはやった。あとは、隊長に託すしかない。ジェーガンは、上に昇る階段に足を掛けた。

建物の中は静かだった。

摺り足で進みながら、レオンは耳を済ませた。警備兵が襲ってくる様子は無い。

外も、静かになっていった。剣戟の音がまったくしない。いずれにしても争いは終わったようだった。決着をつけるにふさわしい荘厳さが満ちてくる気がした。

警備隊司令室のドアを開けた。木窓の外は霧で満たされているが、差し込む白い光はそこそこ明るく、部屋全体をぼんやりと照らし出している。

ベックラーは執務机に座り、書類に目を通していった。淡々と走らせる羽根ペンの動きには、動揺したようすは見られなかった。

「おはよう、レオンさん。慌てて駆けつけられたのであれば、銅山が見つかつたようですね」

書類とペンを置き、ベックラーは顔を上げた。細い顔に、とりすましたような微笑が浮かんでいる。

「ええ、ついでに興味深いものも見つけましたよ。警備隊長どの」「ほほう。それはなんですかね？」

「それは後ほどゆっくりと。他にも聞かせたい人間がおりますので、ここに到着した以上、焦る必要はなかった。

グードが現れた。毀れかけた、といった姿になっていた。傷ついた腕をかばいながら間髪入れずに乗り込んでくるとは、大胆な行動といえた。もつとも護衛が倒れていないのだから、待ち伏せの可能性はない、と察したのかもしれない。

「なにか言っておくことはあるか？」

「いいや、おれは後でいい。貴様が先に言え」  
グードは壁に背を預けて、目を閉じた。息が心もち荒くなっている。

しばし遅れて、マークとジエーガンがやってきた。二人とも、沈うつな表情をしている。

もう一人、派手すぎる格好をした男が部屋に入ってきた。フリーデルと名乗った。心配そうな顔で、グードにささやきかけているところを見ると、内務省の同僚らしかった。

沈黙に耐えかねたようすで、マークが口火を切った。

「残念だが、アニキ。何も証拠は出なかったそうだが。おれたちの負けになるのかな」

「いいや、おれたちの勝ちだ。しかも完勝だ」

わざとらしく明るい声を出す。反応はそれぞれ違っていた。マークは首をかしげ、ジエーガンは目を瞠っている。グードとフリーデルは、こちらに目をくれずささやきを交し合っていて、ベックラーはしきりにまばたきをしていた。

レオンは執務機の先に視線を戻した。

「ベックラー警備隊長どの。書類を見せていただきたいのですが」  
「なんの書類ですか？」

「あなたがドワーフ族との間に交わした契約書です。暗器が見つかったのですから、よもや、集落での所業を知らぬとは言いますまい」  
一瞬、部屋中に疑問符が満ちたようだった。

「ちよつと待つてくだせえよ、隊長。ここに契約書があるとは思えませんぜ」

「ジエーガンの言うとおりだぜ、アニキ。用心深いコイツが、犯罪の証拠になる契約書を手元に置くわけがない。どこかに隠しているに決まっているぜ。もし置いていたとしたら」

「ああ、とマークは口を開けたまま固まった。どうやら、言ったことを理解したらしい。」

「そうだ、マーク。おれが欲しかったのは、彼の身柄だけじゃない。」

最も大事なものは、ドワーフ族との間に交わした契約書だ」

「おれにもわかるように順序だてて説明してくだせえよ、隊長」  
レオンはうなずいた。

「全ては、お前が洞窟の前で少年たちを諭した言葉からだ。契約書は鉄のようなもので、使いようによっては身を守る盾となる、とな。そこからおれは、ヨルクを捕らえて尋問できない以上、契約書を利用した作戦を立てられないものか、と考えた。ドワーフ族が悪意を持った未知の第三者との契約に合意して署名していたとしたら、贋金造りや幻惑草の精製、それに密売を行っているはずだ。しかし、集落からはその痕跡は見つからなかった。言われたことを忠実に行って報酬を得るはずのドワーフ族が、犯罪に手を染めていないのはおかしい。つまり、契約書に犯罪を示唆する文言が記載されていないことになる。それならドワーフ族の無実を間接的に証明できる。ここまでではわかるな？」

「ええ。よくわかります。農具に擬した暗器は、こいつに命じられてやむなくこしらえたってことですよ。弱みを握られているからこそ、銀を抜く秘法をも漏らしたわけですからね」

「そういうことだ。暗器の発見によって、首謀者がベックラーと断定できた。あとは契約書を押さえるだけだった。ドワーフ族の無実を証明しつつ、こつちを弾劾できる証拠となるからな」

ジーガンが頭をかきむしった。

「そこです。隊長。こいつの性格からいって、犯行を示唆するような書類に署名するわけがねえ。なんでそんな契約書が必要になるんですかい？」

「そりゃあ逆だぜ。示唆するような文言がないからこそ、契約書の価値があるんだ」

「マークの言うとおりだ。契約書を押さえたのは、事件の真相を知る長老のバズラたちに証言をさせるためだ。ベックラーを拘束するためには、証拠と証人が必要になる。大罪であればなおさらだ。しかし、ただで証言をするはずがない。一連の事件に関して、ドワー

フ族の関与はまったくない、と証明できるものが必要だったのだ。

確信はあったが、確証も必要だった」

「確信つて、隊長。ドワーフ族が無実だと思っていたんですかい？」  
「そうだ。長老がおまえに、この地で生きていくつもりだ、と訴えた言葉からだ。生きる意志があるのであれば、わざわざ犯罪に手を染めるような書類に署名するわけがないからな」

レオンは、部屋の隅にある書類棚を指さした。

「通常契約書には、後で改ざんを防ぐために二通作成して、割り印を押ししてあるはずだ。それを探せ」

「あいよっ。お安い御用だぜ」

マークは勇んで書類棚を開け、書類を調べ始めた。隠したようすはなく、すぐに見つかった。

「あつたぜ、アニキ。確かに、ドワーフ族との契約を記したものだ」  
受取った書面に目を落とす。契約書には、指定された場所に居住を認めること、そして、指示された品物を製作し、要請があつたときただちに供出すること、さらに、フィルスの街の利益を不当に侵さないこと、の三項目だけが記載されている。

漠然とした内容だが、逆にこれでドワーフ族の無実が証明できた。用心深いベックラーならば、犯罪につながる自分の利益についてわざわざ記すわけがない、との読みが当たった。市議会が閉鎖され、警備隊長がこの街の最高権力者である限り、ベックラー自身とフィルスの街の利益は、契約書がここに置かれている限り一致しているからだ。

しかし、こちらの手に契約書が落ちれば事情が異なってくる。

ジエーガンは、体がしぼむほどの大きなため息をついた。

「書かれていなければ、証拠がない以上、ドワーフ族を追求しようがねえつてわけですかい。老人と子供では、あれほどの数の暗器はいらないですからね。仕上げの研ぎが入ってなければ、武器を造っていたともいえねえし。それなら、バズラたちも気が楽になりますぜ。しかし、隊長。契約書が見つからなかったらどうしたんですか

い？」

「いつこうに構わない。すぐバスラを集落から連れてきて、証言をさせればすむことだ。ベックラーの身柄を確保したうえに、間接的ながらも無実が証明されているのだから、バスラが遠慮する理由はなくなる。だいいち何らかの不都合があるからこそ隠すわけであつて、あとから見つかりましたと言いつけさせるわけがない」

精製された幻惑草の密売には、連邦政府も頭を痛めている。犯罪を暴いたとなれば、その功績からいって、居住権ぐらゐは得られるはずだ。もし元老院が居住権を否決するようであれば、政府に協力する人間は、誰一人としていなくなる。

つまり、初めから負ける要素のない賭けだった。首謀者のベックラーを押さえた時点で、こちらの勝利は揺るぎようもなくなった。そう説明すると、二人は感心とも放心ともつかぬため息をもらした。

「人が悪いぜ、アニキ」

「本当だぜ、隊長。もう終わりだと思つたんですぜ」

レオンは二人に向かつて、素直にわびた。

「ああ、悪かつた。しかし、最初からこちら側の勝ちしかないと言え、お前たちは慢心するだろう。慢心は負傷や死につながる。とくに敵地に強襲をかける場合はな。だから、危険な賭けをしたように見せかけた。それに、もう一つ大事な理由がある」

「どういふことだい、アニキ？」

内通者だ、とレオンは机を見据えて言った。

「長老のバスラに初めて会つたときに、おれたちに何か告げようとする男を目で制したのを覚えているだろう。そこから内通者の存在が疑われた。彼は話さないから、人数も正体も把握できない。困つた問題になつた。おれたちが勝利を確信した顔をすれば、事情を察して、バスラなどの証人になりそうな人間に危害を加えるおそれがあつた。それだけは断じて避けなければならぬ」

ベックラーの顔が、青みがかつてきたような気がした。

「レオンさん。単なる仮定でわたしを責めるおつもりですか？  
道義的にみて、あまり感心できる言動ではないと思いますか？」

「謀略と思われるも結構です。我々は作業員ですから」  
洞窟の入口で、こちらをすぎるように見る少年たちの顔が浮かんだ。

彼らに、安住の地を与えたかった。山を知りつくしたドワーフ族なら、銅鉾山を立派に運営していける。結果、国も豊かになる。親父が言っている誠実さのある謀略とは、助けを求めている人間の期待に応え、国益との両立を図ることではないのか。

レオンは説明を続けた。

「とはいえ、勝算がないと思わせているのに、強引に出撃するわけにもいかなかった。そうすれば、勘のいいおまえたちのことだ。何か変だと思うに違いない。秘策があるのだろうと顔に出されては、内通者に見抜かれる可能性があった。つまり、こちら側にほとんど勝算がないうえに、強引に出撃しなければならぬ状況を作り出さねばならなかったわけだ。難問だった。しかし、グードが背中を押してくれたおかげで、最後の壁を乗り越えることができた」

向けた顔につられたのか、皆の視線もグードに集まった。いつの間にか、腕に白い布が巻かれている。

「すまんな、グード。どうやら、道化にしてみましたようだ」

くつきりとして意志の強そうな眉が、少しだけゆがんだ。しかし、すぐに戻った。

「気にするな。立場が逆だったら、やはりおれも同じことを言う」

「それで気が楽になったよ」

それは良かった、とグードはつぶやいて、ベックラーの横に回りこんだ。同僚のフリーデルも挟むように歩み寄る。

不安がよぎった。二人の動きには、ためらいがない。こちらとは違うなんらかの結論を導き出したような気がした。

「では、ひとまず首都までご足労願いましょうか、ベックラー警備隊長殿。コロンブエ山脈中央部の集落で行われていた、ドワーフ族

による幻惑草の精製及び密売事件の証人としてです」

木窓から、小鳥のさえずりが聞こえてきた。誰もが発言を理解していないようだった。

沈黙を破ったのは、ジエーガンだった。

「こいつめ。言うにこと欠きやがって！」

「よせ、ジエーガン。やめろって」

マークに腕を回されながら、ジエーガンはわめいた。

「おめえ、隊長と約束したろうが！ ベックラーの拘束はこっちの領分だぜ」

「もちろんだ。だから、レオンの発言が終わるまで、おれたちは待っていたのだ。最善の策が潰えたのであれば、次善の策を用いるしかあるまい」

レオンはいぶかしんだ。次善の策とは、ゴ布林族の捕捉であるはずだった。なのになぜ、ドワーフ族に焦点を合わせてきたのだろうか。

そういえばグードは、集落にいたときに単独行動をしていた。そのときになにか証拠でも見つけたのだろうか。

「次善とはなんだ。そもそもドワーフ族には、幻惑草の栽培が認められているはずだぜ！」

栽培はな、とグードはあっさりと認めた。針のように細めた目を、ジエーガンに向ける。

「ジエーガンよ。では改めて訊こう。集落を遠巻きに警戒していたのが、どうしてゴ布林族だとわかる。どうやって、ドワーフ族が扮したものでないと証明できるのだ？」

「なんだと！」

「貴様は大勢で襲われていながら、足にそこそこの傷を負っただけだ。なぜか。彼らが同族だったからではないのか。同じような赤銅色の肌だ。ヒゲをそり、墨を入れれば区別はつきにくい。しかも襲撃されたのは夜だった。月明かりだけで、なぜ、ゴ布林族だと明確に言い切れるのだ？」

背中に冷たいものが走った。確かに理はあった。集落にいたドワーフ族は老人と子供だけであり、一方のゴブリン族は壮年だけだった。合わせれば、歯車のように全てかみ合う。警戒線が外側に向けられていた理由も説明できる。

夜でもあった。こちらはジェーガンを救出するのに必死で、顔はよく見てなかったし、夜目が利かないセラでは証人にならない。

あれはゴブリン族だ、と断言したかった。壮年の人間がいるのに、わざわざ少年たちに、危険なはずの貝殻を焼く作業をさせるとは思えない。しかし、欺瞞だと主張されればそれまでだった。焼いているところをじかに目撃したわけでもない。

一同をゆっくりと見渡してから、グードは言葉を継いだ。

「とにかく、ドワーフ族の幻惑草への関与は濃厚だ。だから、ベックラー警備隊長を弾劾する証言は、採用されない。法廷の弁護人だつて、そう主張するに決まっている。したがって先に言ったように、次善の策をとることにする。幻惑草の精製と密売を根絶するのがおれたちの役割だ。こちらは約束を守ったのだ。もはや邪魔はさせんぞ」

「では、ベックラー警備隊長。これから首都に同行していただきませう。公用ですので、窮屈な思いをなされるでしょうが、武骨者ゆえご容赦のほどを」

フリーデルが優雅な振る舞いで起立を促すと、ベックラーはやれやれといったふうに立ち上がった。こちらに顔を向ける。目に険しい光が宿っていた。やっと本性が出せた、といった感じだった。

「ところで、グード君とやら。この無礼な魔法使いどもはどうするのだね。清廉潔白なわたしを、さんざん侮辱したのだぞ」

「彼らの努力で、ドワーフ族の犯罪が明らかになりました。処分は兵部省に委ねて、妥協したらどうですか」

「妥協とはどういうことだね？」

「妥協とは、双方の合意によって成り立つものです。これまで商工組合と妥協してきた、とレオンに言っていた貴殿が、まさか知らぬ

わけではありませんまい」

グードの目は、黙って手を打て、と言っているようだった。忌々しげな表情を見せながらも、ベックラーは口を閉ざした。黙っていたほうが得だと判断したようだった。やはり圧迫するだけの何かを知っている、とレオンは察した。

「本当に証人としてここを出立するのだな？」

「わたしは嘘を言いません。彼らも知っています」

三人が出て行こうとしたとき、ジエーガンが声をあげた。

「覚えてるよ、グード。おれたちを利用するだけ利用しやがって。生きている限り、おれは絶対、おめえを許さねえぜ」

グードは顔だけ、レオンに振り向けた。幅のある体が、ドアをふさぐかたちになった。

「レオンよ、このわからず屋にゴンドランド連邦がどんな国であるか、帰り道にゆっくりと教えてやるのだな。ドワーフ族だけの理想郷など、単なる夢のたぐいにすぎん。魔法使いが魔法を求めるようなものだとな」

いきなり、頭を殴られた気がした。意味はわかった。現実を見据えろ、と言っている。

ゴンドランド連邦は、多くの少数民族がさまざまな土地で暮らしている。国をまとめていくために民族の混成を進めようとしているのに、ドワーフ族だけ特別扱いさせるわけにはいかない。例外を認めれば、収拾がつかなくなるおそれがある。

「悪いな、魔法使いさんたち。贖金はたしかに醜いが、人は死なないからな」

「フリーデルの言ったとおりだ。すまん、レオン。貴様も道化にしてしまったようだ」

レオンは二人に向かって怒鳴ろうとしたが、かろうじて思いとどまった。

裏に、何かがある。

グードは、他人を嘲って喜ぶ男ではない。手柄を独り占めするよ

うな男でもない。剣を首筋に当てられたときにそう感じていた。だとすると、何のために我々を遠ざけたのか。ベックラーから切り離れたのか。

幻惑草の密売組織を根絶させる、と言ったはずだ。ヨルクが消え、ベックラーが根だとわかっているはずなのに、なぜここまでかばうのか。

レオンには、まったくわからなかった。

## 第十章 赤銅がもたらすもの

### 第十章 赤銅がもたらすもの

恨まれることにも、蔑まされるのと同じぐらいに慣れていた。

過去は無に返せる。しかし、絶対に消すことはできない。だから、重罪を犯したベックラーに、同情してやる理由はなかった。

「おい、君。こいつは一体どういふつもりなんだ。わたしを重罪人扱いするつもりか！」

グードが部屋に入ると同時に、ベックラーの怒声が投げつけられた。

港町ポーミラの宿屋に着くなり、ベックラーは無言を言わず重い手枷をはめられたのだ。怒らないほうがどうかしている。

しかし、どことなく芝居がかった気もする。顔は赤らめてはいるものの、声に変に上ずれている。日頃から怒鳴りなれていない人間が、無理をして虚勢を張っているような感じがした。経験を積んだ軍人なら、そういったことはありえない。戦場や練兵場では、どうしても声が大きくなるはずだ。

叩き上げてきた人間は、保守的で頑固な性格の持ち主と、上官の媚を売るのに専念した者もつ世間ずれした食わせ者とに大別できる。レオンとのやり取りを聞けば、ベックラーは後者のたぐいの人間だと、レオンとのやり取りでわかった。

こういった手合いを取り調べるときは、柔らかい布でゆっくりと締め上げていくようにするのがいい。一気にいくと、するりとかわして逃げるか、逆襲してくるはずだ。どちらにしても手間がかかる。「勘違いするな。重罪人扱いしているのではない。重罪人として貴様を扱っているのだ」

「なるほど。弁解の余地がないほどの罪を負ったというわけかね」  
強く結んだ唇の端が、かすかに吊り上がったようだった。反抗的な

心の中に、どことなく余裕を忍ばせている。嫌悪の感情を振り払おうとしているのか、心のうちを読まれまいとしてかは、よくわからない。

テーブルを挟んで、向かい側に腰を下ろした。目を細めて、睨みつける。

「物事には道理と同じぐらい順序が大切だ。これからおれが話すことをよく聞いて、決断しろ。貴様は、いま非常に難しい立場に置かれている」

ベックラーは天井に顔を向けた。白目でこちらを睨んでいるようでもある。

「レオンの言うとおり、用心深い男のようだな。狡猾といつてもいい。罪状を他人に押し付けてきたわけだからな。減点がなければよしとする官僚制度は、さぞかし便利だったろうな」

「地道な努力の結果だよ」

「笑わせるな。フィルスに来るまでに、警備隊長である貴様の前歴を、おれが調べないとでも思っていたのか。幻惑草の密売が組織的な犯行なら、警備の責任者を徹底して洗うのが当然だ。貴様が、コロンブエ山脈近くの自治領主に仕える騎士だったのはわかっていて、巡回の際にでも、あの山脈に銅の鉱脈があることを知ったのだろう」

ベックラーは鼻を鳴らしたただけだった。視線はまだ天井を向いている。

「銅山は、宝の山だった。しかし、そこには住民が住み着き始めていた。そうなるといずれ、銅の鉱脈も発見されてしまう。だから貴様は周辺の領主を焚きつけて、住民たちを追い出した。そして、一番近いフィルスの警備隊長を志願した。辺境の都市などに好んで志願する軍人はいないから、騎士としての経験があれば、すぐに希望は入れられただろう」

「それで？」

「貴様はまず、商工組合に目をつけた。不景気で困窮していたヨルクは、実直であっても誘惑に勝てなかった。むしろ、みんなの生活

を考えていたからこそ、誘いに乗ったとも言える。それほど、銅山は魅力的だった」

「なぜ実直だとわかる？」

「目が寄っていて、背中がところもち丸まっているのは、長い間机仕事を続けてきたからだ。そのうえ、絵画や陶磁器などの贅沢品にも関心を払っていなかった。続けるぞ。内諾を得た貴様はゴブリン族に接触して、ファイルスへと通じる道の荷役をドワーフ族から奪わせた。賃金は商工組合が決めるから、蹴落とすのは容易だ。次に職を失ったドワーフ族を呼び、採鉱を始めさせた。洞窟を掘り抜かせれば、こちら側で目立たずに精錬できるからな。仕事を奪われて困窮していたドワーフ族は、やむなく誘いに乗らざるを得なかった。

むろん、相手にも誇りはある。だから、初めは質の悪い銀を含んだ贋金を、欲深な領主たちから身を守るためにも、自分たちの手で作らざるを得なかった。灯台に模した工房で、連邦政府が持つ贋金調査権の陰に隠れてな。余剰の贋金は粗銅になって、造船所に運ばれて売られるから、他所の都市には出回ることはない」

「なぜ銅を溶かしたとわかるのだね？」

「灯台に見せかけた煙突の内部に、大量の煤がついていた。掃除ぐらいはしないと、ドワーフ族に笑われるぞ」

「石炭を燃やして暖をとることもあるさ。痩せた体にはこたえるのでね」

とがった鼻を鳴らして笑うベックラーを無視して、グードは追及を続けた。

「粗銅は利益が薄い。そこで、貴様はドワーフ族が栽培していた幻惑草に着目した。警備責任者だから、当然幻惑草が巨額の富を生み出すのはわかっているはずだ。舎密開発局の人間を買収して精製方法を入手し、ゴブリン族を利用して製造した。売り渡す値段はいくらでも良かったはずだ。幻惑草はただの罠に過ぎず、狙いは別のところにあつたのだからな。大々的に売りさばく必要はない。値崩れもするし、大事になりかねない。だから、隊商には持ち込んできた

だけのふくらし粉と引き換えに、精製した幻惑草を渡すだけにとどめた」

「わたしが幻惑草に関与している証拠でもあるのかね？」

グードは机の上に、銀貨を置いた。二度打刻された真正の銀貨だった。

「これは、灯台下の建物で見つかったものだ。何を意味するかわかるか？」

「銀貨など、わたしは知らんよ」

「そう言わざるを得ないだろう。さもなければ銀貨についた白い粉が、精製された幻惑草の正体だと知っていることになるからな」

ベックラーの目は、こちらを見据えたままだった。瞳の奥に、軽蔑の光が宿っているようだ。唇の端が、かすかに動いた。

「これはまた面白い冗談だ。もう少し経験を積めば、どっかの舞台に出られるだろう」

「なにしろ道化だからな。笑いを誘う失敗もするさ」

銀貨には、白い粉はついていない。動揺を誘ってみただけだった。しかし、態度には不遜とも取れる優越感がにじみ出ている。絶対的な自信があるに違いなかった。変化が無いのも、貴重な手がかりになる。ただ、そのもとがわからない。

グードは歯を強く噛みしめた。

銀貨の正体は一体なんなのか。官営造船所に運び込んだ粗銅の代金だとすると、金貨でなくてはおかしい。戦略物資は、金貨で決済するのが常識だ。

幻惑草の代金でもないとすると、残るは銅鉱石から抜き出した銀から贋銀貨を造り出すしかない。しかし、銀貨は真正のもので、きちんと二度打刻されている。

どうやら、こちらの知らない事情がまだ潜んでいそうだった。

「自ら道化と認めるか。レオンが言ったのを気にしているのかな？」

「道化と呼ばれているのは事実だから、反論をするつもりはない。

続けるぞ。貴様はドワーフ族を幻惑草密売の共犯に仕立て上げて弱

みを握り、銅鉱石から銀を抜き出す秘法を手に入れた。ゴブリン族を使って得た銀を、今度は政府要人にばら撒いた。共犯者を拡散させれば、罪を逃れられるとの思惑からだ」

「ほほう、集落にはゴブリン族がいたのかね。すると、君はレオンたちに嘘をついたようだね」

「嘘はお互いさまだろう？」

「いいや、わたしは真実しか語っていない。ただ、あの世間知らずで甘ちゃんの魔法使いには、針の先ほどの事実がラクダの頭ほどにも聞こえたかもしれないがね。尻尾があつて、獰猛な性格で鋭い牙を持つ。しかし、翼があつて空を飛べることがわからなければ、人は翼竜とは思わず、単なる肉食獣だと思うだろう。それだけのことだよ、君」

「たいした毒舌だな」

「わたしは信念を持って生きていこうとする人間が嫌いだね。頭が固くて融通が利かない。しかもそれをこちらに押し付けようとしてくる。そう信じ、行動することが己にとって快適だからそうしているに過ぎないくせにね」

「よくしゃべるな。まるで痛いところを突かれたみたいだぞ」

不機嫌そうに押し黙るのを見て、グードは再び追撃をしかけた。

「貴様がドワーフ族に内通者を置いたように、おれはゴブリン族に内通者を忍ばせておいた。内務省には、好んで老人になりすます人間もいる。それに比べればたいした労力ではない」

「そうかもしれないな。わたしにはよくわからないが」

じきにわかる、とグードはつぶやき、身を乗り出した。

「残りの銀塊で周辺領主を籠絡し、集落跡の土地をひそかに手に入れた。ここに、大々的に犯行が行われる素地が生まれたわけだ。あとは、古釘や屑鉄から武器を作らせ、脱走兵だったオーク族を集めて傭兵とした。着々と準備は進んだ。別に独立など考えなくてもいい。元老院議員にもなる必要もない。この土地を完全に支配下に治めることができれば、連邦議会に縛られる自治領主よりも気楽な立

場でいられるからな。終身の警備隊長という職も、上がいなければ悪くはあるまい」

「冗談がますます面白くなってきたね。手枷があるので、拍手が出来ないのが残念だよ」

「気にしなくていい。手枷はすぐに外してやる」

ベックラーの眉根がかすかに動いた。視線の中に潜んでいた優越感が消え、代わって警戒感が浮かび上がってきたようだった。

グードは机に一枚の紙を置いた。コシの強い紙で、滑りも良かった。

商工組合の組合長、ヨルクの署名が黒々と書かれた自白供述書だった。レオンたちが鉾山で披露した推理そのままの内容が書かれている。

「このとおりヨルクは、貴様が首謀者だとすべて白状したぞ」

目を落としたベックラーの顔が、一瞬のあいだ強張った。細く枯れたのが軽く上下に動いたようだった。

「どうせ、脅して書かせたのだろう。そのあとで、殺して火をつけた」

「だったらそれを丸めて飲み込んでみるか。望むのなら、口の中に入れてやるう。おれは少しも困らない。困るのは貴様と、書き直しをするヨルクだけだ」

何かを言おうと開いた唇が、そのまま止まった。ヨルクは生きている、と悟ったようだ。薄くなった眉が、血の気の引いた額の下でひくついている。

ベックラーは、体を強く揉まれたときのような、声にならない声を漏らした。

「どうやって捕らえたのだ？」

「もう少し考えて発言したほうがいい。ヨルクは捕らえられたのではない。捕らえてもらいたかったのだ。あの男は進んで樽の中に入ってくれた。あれだけ下で巨漢のオーク族がたむろしていれば、空き樽にはこと欠かない。フィルスの街ならばゴブリン族の荷役夫に

は不自由しない。ましてや貴様と意思が通じていれば、味方に扮して街の外に運び出すことなどわけはない」

「ほう、酒樽にね。安酒の匂いで、気分が悪くなってなければいいが」

ベックラーは、軽口で舌鋒をかわそうとしている。そう思えた。まわりついてくる八工を鼻先で追い払うような態度だった。顔ごと天井に視線を反らせて、口をもぐもぐとさせている。

かまわず、追及を続けた。

「ヨルクは、自分の命が危ないと感じていた。計画が成功すれば、知りすぎた人間として消される。といって失敗しても、やはり共犯として処刑されるだろう。酒場の下にオーク族が集まってきたのを見て、決行の時期が近いと察して酒に逃避した。貴様が雇ったオーク族が用心棒としてはべるようになれば、嫌でもわかる」

「なぜ、おれがオーク族を雇ったとわかるんだ？」

いつの間にか、ベックラーの言葉がぞんざいなものにならなくなっていった。理性に隠されていた本性が出てきているようだった。

騎士として長い間、我を抑えつけて生きてきたせいだろう、とグードは読み取った。

「用心棒の態度だ。本物なら主人に恥をかかせないように、他人の前では丁重な物腰になるものだ。なのにおれが挑発すると、すぐ攻撃を仕掛けてきた。そうなると第三者の指示に従っていると考えるのが自然だ。あの地で立場が上なのは、貴様しかいない」

もういいだろう、とグードは銀貨と自白供述書を片付けた。

「とにかく、ヨルクは生きてままだ。こちらの手に落ちている。あとは貴様が自白するだけだ。このように証拠も証言もある。おとなしく従ったほうが身のためだぞ」

ベックラーは鼻を鳴らし、不敵そうに唇をつりあげた。

「見事だな。しかし、自白書があったとしても、おれを処罰することはできないぞ」

「まだ、なにか言い足りないのか？」

「死人や幽霊は、証人にはならないからな。どうせ法廷には出られない」

なるほど狡猾な男だ、とグードは思った。確かに匂わせたとおり、ヨルクを証人として協力させることはできない。

危地を救うために、殺害したことにして助け出したが、贖金の共犯者であることは動かしがたい事実だった。動機が善意であっても、重罪になることは避けられない。終生監獄暮らしでは、無に戻り、生まれ変わって人生をやり直す意味がない。

それに、本来の目的は、ベックラーを処断することではなかった。ここで時間がかかると、腐敗した上層部にヨルクの隠し場所をつきとめられるおそれもある。こちらの命を狙ってくるぐらいだ、相当な焦りを抱いているに違いなかった。

強気ではぐらかしてくる態度は、こちらの意図を読んでいるからに違いない。

「わかった。仕方がない。ならば新たな証人を呼ぶしかないな」

「バズラの老いぼれに、長旅は酷だろうに」

「そうだ。だから若いのにした」

出番だぞ、とグードがドアに声をかけると、一人の大柄な男が入ってきた。炭当てをしたしわ一つない亜麻布のシャツをはおり、首には黒い絹布を丁寧に巻いている。顔はいかめしいが、貫禄だけなら両替商の支配人といっても差しさわりはなさそうだ。

「待ちくたびれましたぜ、ダンナ」

ゼニー口だった。わざとらしく気だるそうに肩をゆすつて、隣に座った。

「絞首台に乗るかどうかの境目じゃあ仕方ねえけど、それにしてもたいした悪あがきだ。まあ、小悪党らしいといえばそれまでだよ」

「人を誹謗できる立場かね。昔の仲間を捨ててこちらに入り、今度は内通者としてグードの味方をしているじゃないか。まさか裏切りと裏切りとを掛け合わせれば、誠実な行いになるとか思ってたやせん

か？」

ゼニー口は顎を引き、ゆっくりと黄ばんだ乱杭歯をむき出した。刺青の海獣を思わせる獰猛さがあった。

「ふざけるんじゃないぞ、老いぼれ。裏切り者つてのは、道義に背を向けた人間のことを言うんだぜ。てめえみてえな下種がそんなことをぬかす資格はねえだろう」

気圧されたように頭を引くベックラーを横目に、グードは自白供述書を手渡した。

「間違いはないか？」

ふんふん、とゼニー口は目を通し、手の甲で軽く叩いた。

「だいたい合ってますぜ」

「だいたいとは？ 他にヨルクが隠していることでもあるのか？」

「いやあ、知らねえだけでしよう。錆漬して銅材に戻した贋金は、戦略物資として北の大陸に横流ししていたんです。ついでに精製した幻惑草もです。なにしろ禁止薬物に指定されるぐらいだ。眠気覚ましと戦意高揚には持つてこいです。それから集落で作っていた銅の武器も忘れちゃいけません。銅はともかく武器と幻惑草の値段なんて、あつてないようなものですから、儲け放題でしたでしょうね。灯台下の銀貨は、利益の分け前のほんの一部つてわけです。」

議員どもの大邸宅には、金貨の山が眠っているでしょうよ。もちろんこの野郎の金庫にもね」

「金庫？ しかし警備隊長室のはほとんど空だったが？」

「こいつは失礼。ファイルにある両替商のですよ。どこまでヨルクに責任をなすりつけるつもりなんだか。まったく清廉が聞いてあきれますぜ」

なるほどな、とグードは心の中でつぶやいた。ベックラーがあくまで強気な理由がわかった。

枢密院と元老院の連中に賄賂を贈っただけでなく、銅材と武器と幻惑草の密輸の共犯者に仕立て上げたわけだ。連邦司法院での裁判で事件が公になれば、一辺境の問題ではなくなる。

議員連中も愚かではない。一連の行為は、愛国的な衝動に駆られてのもの、と主張することすらやってのけるだろう。北方大陸からの脅威を取り除くためには、お互いを争わせていたほうがいい。だからあえて、国禁を犯して武器と幻惑草を輸出したと言えば、追求はそこで止まる。いや、止めざるを得ない。金貨は没収されるかもしれないが、地位を失うまでには至らないだろう。

ゴンドランド連邦政府の決定は常に正しいという意識が、多民族国家の求心力になっている。汚職事件を摘発するのは正しい行為だろうが、ここまで広がってしまうとうかつに手を出せない。ではなぜ放置したのだ、と逆に追及されるのは必至だった。

「密輸の手口は？」

「新造船は空船だから不安定でしょう。だから普通、重しとして安い塩樽を船底に積むんです。それをちよいとすり替えれば誰にも気づかれずに運べるってわけで。途中の港町で積み替えたのもおれたちの仲間だったことを忘れてやがるんですよ、この野郎は」

ベックラーの顔に赤みがさした。

「なにを偉そうなことを言っているんだ。小物ふぜいが」

「そうだ、おれたちは取るにたらねえ小物だよ。だから、人の血を吸って私腹を肥やすような真似ができるわけがねえわな。幻惑草で何人の人間が苦しんでいやがるか、ためえにはわからねえだろう。

北の人間ならどうなってもかまわねえってか。まったく大した野郎だよ」

ゼニーロは、グードに向き直った。

「おれが見た限り、こいつが一番の悪ですぜ。さっさと首都まで運んで、一気にけりをつけてやりましょうよ。見ているだけでも胸がむかむかしてきやがる」

ベックラーはせせら笑った。

「なんのために金をばら撒いてきたと思っているんだ。首都の連中の弱みを握っているほど、強いものはないんだ。偽善もほどほどにしておけ、二人とも」

「ダンナ。ちょっとこいつを締め上げましょうか？」

待て、とグードは、立ち上がりかけたゼー口を抑えた。諦めの悪さは、諸刃の剣のようなものだ。使い方によっては、こちらにとって強力な武器になりえる。

ベックラーは、辺境領主の騎士として人生の大半を過ごし、ほぼ孤立した街の警備隊長として余生を送ろうとした。性根は真っ直ぐではなかったようだが、ともかく武人として生き抜こうとしている。だから、知らない。

役人や議員が貪欲かつ狡猾で、利を貪るためには手段を選ばない、怪物のような存在であることを。

官庁や議会が、国益のためなら手段を選ばぬ、魔宮のような存在であることを。

「どうやら世間知らずは一生直らなそうだな、ベックラーよ。おれは最初に言っただけだぞ。貴様は、いま非常に難しい状況下に置かれていると」

「おれを殺すつもりか？」

グードは声を立てずに笑った。

「いいや。むしろ同情しているぐらいだ。中央の連中が弱みを握られているのは間違いない。しかし、操れると思つのは大きな間違いだ。ましてや、ここには貴様が引つ張つてきた従卒上がりの警備隊はいない。どうやって刺客から身を守るのだ？」

開きかけたままの唇から、赤みの薄い舌がのぞいた。どうやらこちらが言っただけの意味を理解したらしい。

ベックラーもまた知りすぎた。しかも丸裸では、自分に降りかかってくる災難を逃れるすべはない。レオンに詭弁を弄してまでも、ファイルスから単独で連れ出して甲斐があった。

賈金から攻めても、腐敗した上層部は困らない。すでに最高行政会議で、政府の不介入が決められている。相手はベックラーを尻尾に見立てて、切り捨てるだけがいい。

賈金では人は死なない、とのフリーデルの発言は、また違った意

味を持っている。

「死人は証言者にはなれない、とはよく言ったものだな、ベックラ  
ー」

「ちょっと待て。おれが死ぬと、警護役のお前らの責任になるだろ  
う」

「普通ならな。しかし、自然死なら別だ。おれのいつている意味が  
わかるか？」

「自殺に見せかけた事故は、自然死とは言わんぞ。真っ先にお前が  
疑われる」

むろんだ、とグードは鷹揚にうなずいた。

「ひとつ、いいことを教えてやろう。灯台に見せかけた煙突につい  
ていた煤は、なんだと思う？」

「知るものか」

「だろうな。知らないからこそ、放っておいたのだろろうからな。あ  
れこそが、貴様たちがあそこで、ドワーフ族の協力を得られずに銅  
を焼いていた証拠になるものだというのに。無知とは本当に恐ろし  
いものだ」

「なにが言いたい！ はつきり言え！」

グードは、ベックラーの顔に近づいた。目が細くなるのが、自分  
でもわかった。ドアの外に聞こえないように、声を落として説明す  
る。

「では、言ってやろう。あれはな、ヒ素だ。銅鉱石を焼くと出る毒  
だ。味がなく、匂いがない。おまけに水によく溶ける。だから、暗  
殺によく使われる。内務省では知らぬものはない有名な毒物だ。む  
ろんドワーフ族も知っているから、念入りに煙突を掃除していたの  
だ。それを知らないとはこの先の航海が思いやられるな。その瘦身  
では、飲まず食わずの生活はつらからう」

ベックラーの唇から、小刻みに舌先が出入りしている。

「連邦政府の連中が毒殺するというのか？」

「陸ならともかく、海では水葬になる。検死もされない」

「かばって恩を売るつもりか？」

「貴様が彼らにとつては用済みの存在であり、おれたちにとって有用な人物だというのは事実だ。ここまで言えば、意味がわかるな。だから、初めに断った。貴様はまったく手を汚さずに、最大の利益をあげようとした。何ひとつ失わずに、全てを得ようとした。その結果、全てを失うことになったわけだ。実に寓話的な話だな」

ベックラーは天井を見上げた。懸命に涙をこらえているかのよう  
に、何度も瞬きを繰り返した。

長い息が漏れ、頭と肩とが、同時に落ちた。

「おれを笑うつもりか、グード。お前も、あの臆病なくせに頑迷で貪欲な領主に仕えていれば、同じ気持ちになったはずだ。わずかな失態でも従者は鞭打たれ、いくら精勤して手柄を立てても功績は、血縁親族に横取りされる現実があった。執政官から兵卒まで、血の貴賤ではなく、実力の有無によって地位を決める。これがゴンドラ  
ンド連邦の正しい姿ではないのか？」

「確かにその通りだが、貴様には野心にふさわしい才能と人望に欠けていた。道義心と責任感もな。ただ、それだけのことだ」

グードは一枚の紙を取り出して、机の上に置いた。ペンも添えた。  
「悪いようにはしない、ベックラー。おれの言うことを信じて、供述書に署名すれば助けてやろう。司令部で約束したとおり、証人と  
して遇してやる」

「優しいダンナに感謝するんだな。ゴ布林族を嘲った報いを、嫌  
つてほど食らわせてやるところだったんだぜ」

手枷を外したが、ベックラーは放心したように身じろぎしなかつ  
た。

二呼吸ほどの沈黙ののち、ようやく口を開いた。

「供述書を手に入れて、何をしようとしているのだ？」

「ただの後片付けだ。貴様は人を利用し続けてきた。たまには利用  
される立場になるのも悪くなくろう。おれたちは外の空気を吸って  
くる。戻ってくるまでに、文案を考えておけ」

ゼー口を伴って宿屋の外に出ると、フリーデルが所在なさに立っていた。部下たちはそれぞれの持ち場に散ったようだった。一部の人間は、フィルスの後始末に戻っているはずだった。

声をかけると、慌てて振り向いた。どうやらこれからのことを考えていたようだった。

「済んだ」

「そうか、よかったな」

暮れなずむ街に、喧騒が戻りつつあった。フィルスでの異変を知らないのだろう。市場から荷物を積んだ荷車が、次々と森へ続く街道に向かっていく。

「おい、ゼー口。まさかお前さんが内通者だとは思わなかったな。まったくたいした演技力だ。少年をいたぶる態度など、なかなかの悪役ぶりだったぞ」

「そりゃあ、坊やには悪いことをしたと思ってますけどね。街道の掟を破られたんじゃないやあ、止めに入るわけにもいきませんやね。少しでも疑われたんじゃないやあやべえ。それこそあの麦わら野郎に首を狩られちまう。ダンナたちが片付けてくれて、正直ほっとしましたぜ」

ゼー口はすまなそうにこちらを見た。ものはずみでゲール族だと言ったことに後悔しているようすだった。

「気にする必要はない、とグードは右手で示した。」

親方が内通者だとはふつうは思わないだろうが、後から加わったとなれば別だった。ドワーフ族は契約書で動くが、ゴブリン族は身内の掟で動く。見抜かれればただではすまない。だからこちらも、あしざまに言わざるを得なかった。ただ、それだけのことだ。

ゼー口は首筋の傷跡を小気味よく叩いた。

「ちょっとした悪さをした後に、瀉血と思え、とグードのダンナに言われたのを覚えてますぜ。なあるほど、凝り固まった悪い血が抜けた気がしたものです。きつとヨルクの野郎も、新天地で人生をやり直す気になるでしょうよ」

「ところで、兄弟。これからどうするんだい？」

「首都で飛脚屋の差配をやってくれって話が来ているんで、そつちに行こうかと。あそこの足の速い野郎も一緒です。これから重宝しますぜ」

マメ跡だらけの手の先に、愛想のいい小男がいた。つい先日、口数が多いとゼニー口に張り飛ばされた男だった。たしかに伐採所近くの小屋から、フィルスの宿屋まで一気に駆け抜ける健脚を持っている。

「そいつはちよつとした出世だな」

「なあに、口の堅さと我慢強さがあれば、地位が放っておきませんやね。あつちの商売なら、ここらへんのドワーフ族とかち合うこともないでしょうし。他の部族との協調路線は、上の総意でもあるんで」

「なるほどね」

フリーデルは皮肉そうに唇をゆがめた。どうやら内務省ではなく、ゴ布林族の長老たちから派遣されて潜入した、と理解したようだった。

「お前さんにとっては、あまり愉快な仕事じゃなかったらうからな。同族がやられるのを見たらなおさらだろう」

「冗談じゃありませんぜ。いずれ掟にしたがつて、処断してやろうと思っていたところだったんですぜ。逆にあのでかぶつ野郎を片付けてくれてありがたいくらいでしたね。お礼というわけじゃありませんが、いつか飛脚屋を使うときは声をかけてください。はぐれ者のお二方には、法律などクソ喰らえのおれたちが役に立つときもあるでしょうから」

そろそろ船の時間なんで、とゼニー口は、手下ともども自信に満ちた足どりで港に向かって行った。

誘われるままに、向かいにある喫湯店に腰を下ろした。湯で割った葡萄酒が、錫引きの杯に注がれて出てきた。フリーデルの注文で、蜂蜜と花びらが入れられている。

「切り札が二枚手に入ったが、ここからが難しくなるな」

いつの間にか、国家保衛局の任務からはかけ離れてしまった。内務省全体の範疇でもなくなった。

レオンたちを追い払った以上、反乱準備罪としては告発できない。といって直接関与している内務省には渡せない。さらに工芸省と商工組合を絡めた贈収賄として扱うには、いささか効果が薄いと思われた。賄賂などの破廉恥罪は政争の材料として、日常的に使われている。

「まあ、まかせておけよ。きれい好きには心当たりがある。もっとも、心の中まではわかったものじゃないがな」

「相手は誰だ？」

「おいおい、無粋なことを訊くものじゃない。それよりお前は休暇中なんだから、忙しくなる前にゆっくりと休んでくれよ。おれのぶんまで」

杯を勧められ、グードは葡萄酒のお湯割りをすすった。まだ、仕事が終わったわけでもないのに、ほどよい温かさや甘みのある葡萄酒が心地よく感じられた。

足された蜂蜜のせいだと気がついたのは、鼻に抜ける葡萄酒の香りをかいでからだった。底に沈んでいた花が、ほんのりと赤く染まっている。

フリーデルの意味ありげな発言からして、会うのは女性だとわかった。杯の底の、淡い葡萄酒色に染まった花びらが、これからの行動を暗示しているかのように見えた。

「美しい女性は首都に多いみたいだからな。たしかに大変な仕事のようにだな」

「全員を相手にしていたらさすがのおれも体が持たない。だから一番おれ好みの美人に絞るつもりだ。間男というのはおれの流儀じゃないんだが、場合が場合だからな。人に陰で笑われながらも、媚を買い続けてきた甲斐があるってものさ」

フリーデルは、ごく自然な振る舞いで片目をつむってみせた。

どうやら政府高官の一人に有力な伝があるらしい。

肉体関係を結ばない限り、連中は愛人と付き合ってくれる口の堅い人間を好む。家庭を壊されて名誉を失うぐらいなら、代わりに無聊を慰めてやって欲しいと思うからだ。

とくに聖職者や司法官といった謹厳実直を旨とする役職は、女性からの醜聞を嫌う。おそらく後者だろう、とグードは見当をつけた。

ならばレオンたちの行動は、それほど咎められまい。木の洞の前で情報を交換し合ったとき、それとなく司法省からの依頼を匂わせていた。

騒動を起こしても結果的に手柄となれば、レオンたちの功績を無視するわけにはいかない。表立った賞賛はされなくとも、それなりの評価はするはずだ。

「貴様なら間違いは犯すまい」

「どつちの？ 仕事かい、それとも」

小憎らしく笑うフリーデルに、グードは舌打ちで返した。

「両方だ」

「おうおう、嬉しいねえ。掃除役とは優雅じゃないが、そう言われたなら張り切って口説かないとな。しかし、お前は損な性格だな。いくら汚職役人を根絶やしにしたいからといって、好き好んで魔法使いさんたちの恨みを買うこともないだろうに」

「おれには善も悪もない。だから、人から何を言われようとも、一向に構わない。たとえ死ぬまで食屍鬼と蔑まれようともな」

言つてから、グードは顔をしかめた。失言だった。ただ黙つて、死ぬまで腐りきった人間を喰らい尽くしていけばいいはずだった。

飲み物はまだ冷めていないはずなのに、フリーデルはそ知らぬ顔で、杯に手に取ろうとした。熱い、とあわてて耳たぶをつまむ。

「しかしまあ、なんとなくわかったぞ。道化のグードと呼ばれる理由が。今回は観客として舞台の隅々から裏まで見たから、なおさらかもしれないが」

「貴様までおれをからかうのか？」

「いやいや。褒めているのさ。人には媚びない。権力者にも怯えな  
い。ただ、自分の身を削って、人を喜ばせる。それでいて見返りは  
あまりにも少ない報酬のみ。これが道化でなくてなんなんだ、ええ  
？」

「利いたふうなことを言うな」

「おや、反応するとはおかしいな。お前は人の評判など、気にする  
男じゃないだろうに」

「こいつめ」

フリーデルは杯を一口すすったあと、厨房に向かって軽い料理を  
注文した。もうこれ以上仕事の話をする気はないらしい。

「まあ、いいさ。用事が済んだら、たまには二人で飲みにいこう。  
首都でいい店を見つけたんだ。料理も酒もうまくて、接客もいい。  
なによりも、かわいい女の子がいるのがたまらない。おれの口説き  
方をよく見て参考にしろよ。いい女は、人生を変えてくれるぞ」

グードは苦笑した。良くなる、と断言しないところが、この男の  
誠実さかもしれない。

「いや、酒の匂いは嫌というほど嗅いだ。しばらくは遠慮したい」  
「では、魚釣りはどうだ。フィルスほどではないが、首都近くの支  
流に静かな場所があるんだ。水はきれいだし、花も緑も一杯だ。物  
思いにふけりながら、釣り糸をたらすのも悪くないぞ」

「ああ、そのうちな」

「楽しみにしてるぞ。魔法使いさんたちとの話を聞く限り、お前は  
約束を守る男らしいからな」

約束か、とグードは心の中でつぶやいた。別に守るために動いた  
わけではない。結果としてそうなったただけだ。まだ、革袋の借りが  
残っていた。返さないと、動きが鈍くなる。

杯を手に取りろうとした。何かに反射したのか、錫引きの杯に夕陽  
が当たった。

思わず目をつぶった。一瞬だけ、まぶたに少年の姿が浮かび、す  
ぐに消えた。残光だけが視界に焼きついていて。だから、どうい

表情をしていたのかまではわからない。わかっても仕方がない、とも思えた。すでに変えられない過去のものになりつつある。

ひとつ借りを返すだけだ、と考えることにした。これなら、一言で片付けられる。相手は少年か、レオンたち魔法使いか、それともゴンドランド連邦か、よくわからなかった。

しかしそれでいい、とグードは思った。

三〇日の謹慎期間を、レオンは官舎で過ごした。

官舎といつても、うらぶれた料理屋の二階である。とくにやることもなかったので、覚えたい料理のいくつかを調理場で習得した。酢漬けの野菜を細かく切って冷たいスープに混ぜたものは、自信作のひとつになりそうだった。

謹慎とはいえ、外出ができないぐらいのもので、実際は休暇と変わらなかった。体が少しなまってしまったのが罰といえるぐらいで、訓練をし直せば、すぐに活力は戻る程度のものだ。

謹慎が解かれたので、さっそく兵部省に出頭した。

兵部省は落ち着いていた。首飾りを渡す衛視の態度も、練兵場の掛け声も、いつもとなんら変わらない。

不安はなかった。懲罰を知らせる公文書は届いていない。親父の政治力の賜物だろう、とレオンは解釈している。

ただ、焦りはあった。フィルスや集落がどうなったのか、誰も教えてくれない。知らされていないのか、知らせるほどのことではなかったのか。あるいは、誰かが握りつぶしたのか。とにかく結果を早く知りたかった。

「よくやったな、レオン。たぶん上出来の成果だ」

扉を開けるとすぐ、バルラムの声がかけられた。以前の意趣返しのつもりだろうが、心に引く掛かる言い回しだった。

「開口一番ねぎらいの言葉とはありがたいね。さっそく出た賽の目

を聞かせてくれ」

「そう焦るな。さきほど依頼主の司法省職員が訪ねてきて、口頭で結果を教えてくれたよ。後日、正式な文書を届けるそうだ。そう、きちんとした公式文書だ」

司法省の仕事は贋金や幻惑草の密売事件を裁くだけではない。居住権の認定などの、新しい法律の制定もある。まだ、どちらを伝えるにきたのかはわからない。

「いい目だったとは言い切れないが、まあこんなところだろう」

言葉とは裏腹に、バルラムの顔は沈んでいた。組んだ指に向かつて吐き出す息が太い。レオンは、生殺しにされているような気持ちになった。

「早く内容を聞かせてくれよ、親父」

「コロンブエ鉱山は、正式に連邦政府の直営鉱山となる。もともとベックラーが周辺の領主たちから購入した土地だったから、交渉はすんなりとまとまった。無用な混乱を回避できたのは、ベックラーの功績ともいえるな」

「銅山の採掘権は？」

「あの銅山については、ドワーフ族に委託することになった。一定量の銅地金を納めれば、自治権が認められる。採鉱の専門家だから、独立採算制にしたほうが結局収入が増えるだろうとの見解だった。

鉱山の私有化は認められていたことだしな。ジェーガンが見立てたように、鉱脈は卵形ではなく枝のように走っているから、山の寿命は長そうだ。政府としても末永く繁栄してもらえればありがたい」

「しかしそれじゃあ、公正を国是とする連邦政府の意向に反するだろう？ ドワーフ族は犯罪に手を染めていないとはいえ、見過ごしたとも解釈できるぞ。領主たちへの見せしめを兼ねて、集落を焼き払って更地にし、新たな入植者を入れることぐらいのしてもおかしくはないが」

バルラムは、肉厚の手を目の前にかざしてきた。

「最後まで聞け、レオン。鉱山まで食糧を運び込むのも大変だから、

開拓民を入植させることになった。つまり、ドワーフ族と開拓民との共同統治になるわけだ。連邦政府から行政官が派遣されてくるが、あくまでも監督であって、政治の全ては彼らに委ねられるわけだ。前例のないことだが、成功すれば模範都市として広がっていくかもしれないな」

「あのあたりは湿地帯だから、開拓するにはまず水を抜くことから始めないと。大工事になりそうだなぞ」

「それについては連邦政府が予算を出す。近日中に工芸省の水利開発局から技師が派遣されることになっている。もっとも連中は凶面を引くだけで、実際の工事はドワーフ族が請け負うだろうがな。ともかく金が落ちれば、彼らの生活も少しは楽になるだろう。それにファイルス・コロンブエ間を結ぶ街道工事も近いうちに始まるらしい。完成すれば、広大な後背地ができるポーミラも活気づくはずだ。むろん、中継地としてファイルスも発展するだろう」

「銅鉱石から抜いた銀をあてがうにしても、ずいぶんと派手にはうまくものだな。財政難だというのに」

「連邦政府はそれほど甘くないぞ、レオン。新しくできる開拓地は、畑としてだけでなく牧草地としても利用していくそうさ。土があまり良くないそうだからな」

「放牧をするのか。背後は山だし、いい考えかもしれないな。鉱石を運ぶ去勢牛の供出も可能になる。肉や乳製品が生産できれば、港町で売れそうさ」

「それは表向きの話だ。もっと視野を広める。実際は隊商を新しい街に引き込むための計画だ。どうだ、妙案だろう？」

レオンは黙ってうなずいた。意味ありげに光る黒い瞳が、政略の存在を匂わせている。

隊商は定住しないので、いままで税金を徴収できず、財務省の頭を痛める原因になっていた。しかし、駄獣を連れて街に立ち寄れば、いくらからでも金を落としていく。税金につながれば、長期的には有効な先行投資といえるだろう。

しかも連中が集まってくるだけで、領主たちは脅威に感じるはずだ。今まで築いてきた交易路が廃れるおそれがある。

さらに、隊商から話を聞きだすことにより、諜報活動の一助にもなる。べつに実施しなくても、それとなく匂わせるだけで、牽制の効果は十分にある。

「ああ、まったくだ。えぐいぐらいに妙案だな、親父。背筋が寒くなるぐらいだ」

ドワーフ族と民間人との共同統治の発想が秀逸だった。民族の融和の美名もさることながら、執政官府が自由に都市を建設できる前例を作ったことにもなる。領主の地位に固執する枢密院議員たちにとっては脅威だろう。

情理だけで連邦政府が動くわけがないと思っていたが、利で動いているだけにかえって信用できる。

「とにかくよかった。これで、彼らも無事に暮らしていける」

満揚げにうなずこうとしたまま、レオンは固まった。

ドワーフ族に有利な裁定となると、警備隊司令部でのグードの発言がわからなくなる。確か幻惑草の密売は、ゴ布林族になりすましたドワーフ族の犯行だと断言していたはずだ。

「ということは、やっぱりドワーフ族は無実だったのか？」

「聞いてみたが、相手は黙って肩をすくめただけだった。起訴されないのであれば結果的に無罪と同じ、ということだろうな。問題が初めから無かったことにしたい、と双方が思ったなら、わざわざ公にする理由はなかるう」

バルラムはわざとらしくゆっくりと葉巻に火をつけ、こちらの反応を楽しむかのように甘ったるい煙を細長く吐き出した。あるいは、考えさせる時間を与えようとしているのかもしれない。

長老のバズラの頑なな姿を思い返した。ドワーフ族の連中は、ただ静かに暮らしていきただけだろう。他の人間たちが入り込んでくるのは迷惑だろうが、もともと他人の土地だから嫌だとは言えない。山麓の集落に住む権利はベックラーと交わしたものであり、犯

罪者として検挙された以上、契約は無効だところが宣告すれば、あっさり消し飛ばたくいものだ。

司法省は、わざと見逃したのかもしれない。ドワーフ族に契約無効という負い目を負わせることで、自治に制約を加えられる。彼ら自分たちの土地を購入し、なおかつ自活できるようにするまでは少し時間がかかるだろう。陰ながら発言権を手に入れた司法省にしてみれば、損な取引ではない。人道的な理由さえあれば、解釈権の拡大につながられる前例ができたからだ。

レオンは、気になってきた点を訊ねた。

「証人であるはずのベックラーは双方にとって邪魔になるが、結局どうなったんだ？」

「首都に向かう途中で、消息不明になったとのことだった。もつとも闇を知りすぎた人間の生存確率は、単純な方程式で求められる。

彼を匿おうとする人間と、消そうとする人間の差に人徳という変数を掛けるだけだ。とにかく、彼とともに問題そのものが解消された」  
煙とともに吐き出された言葉は、歯切れが悪かった。手柄を立て損ねた、といったような苦々しい表情になっている。

闇という言葉が、一つの省庁を暗示している気がした。

「今回の任務は内務省の功績になるのかい？」

「いや、誰の功績でもない。ドワーフ族への対応も、開拓民の移住計画も、政府要人と枢密院と元老院の有志が協議した上で連邦議会に提出されたことになっている。特定の誰かが言い出したことではない。利もないのに動くとするれば、彼らはただ弱みを握られて利用されただけだろうな」

ああ、そうそう、とバルラムは言葉を足した。

「コロンブエに建設資材を納入する件だが、連邦政府の指名で、ゴブリン族が一手に引き受けることになった。今回の事件で得をした彼らが、陰でなんらかの働きをしたのかもしれないな」

レオンは両手で机を強く叩いた。

「ちょっと待ってくれよ、親父。ゴブリン族は首謀者とまではいえ

ないが、今回の事件の当事者だぞ。どうして処罰もされずに利権にありつけるんだ」

「連邦政府がお前の言う怪物だとすれば、我々とは違う考え方をしているも不思議ではあるまい。それにしても政府に注文をつけさせるとは、ゴブリン族の政治力もそれに劣らずしたたかなものだ」

レオンは発言の裏に、グードの影を感じた。表立って動く男ではない。おそらく何らかの証拠を突きつけて、要人たちを動かしたのかもしれない。彼らも弱みがある以上、要請を聞かないわけにはいかないだろう。

バルラムは一枚の書類を手に取った。

「それよりも、時期外れの省庁人事があった。市民にはさほど感心のない出来事で、話題にもならないものだがな」

レオンはすぐに意味を察した。時期外れなら、懲罰人事に決まっている。

「もちろん、事件と関係があるんだな？」

「そうなる。内務省と司法省、それに財務省の課長級の人事異動があつて、それぞれが退官していった。もっとも、連中は関連する組合にそれなりの役職で移籍していっただけなのだが」

「見事なまでの責任逃れだな」

「それから工芸省の舎密開発局の技官が退任したそうさ。おそらく捜査の手が迫ってくると思つたのだろう。噂によると、染料に使われていた漿果の果汁とふくらし粉などで、幻惑草の精製ができるのだそうさ」

レオンは鉱山の中にあつた倉庫を思い出した。

「幻惑草なら、内務省の管轄だろう。四人組の処断を依頼してきたのも内務省の人間だった。そいつはどうなつた？」

「急病で死んだそうさ。もっとも内務省が発表する死因ほど、あてにならない資料はないが」

消されたか、自決したか。それとも逃亡したか。どうやら追及をかわしきれなかつたらしい。とにかくもうひとつの問題も解消した。

グードも少しは楽になれるだろう。

バルラムはしばらく葉巻をふかしたあと、灰皿に押し付けた。

「兵部省の人事もあつた。人事局の連中が一度に退任した」

「ベックラーを任命した責任をとつたな」

「そうだ。彼らも反抗的な辺境領主の元部下だったと知っていたはずなのに、賄賂に目がくらんで任命した罪は重いというわけだ。上に広い空き部屋ができたからどうだと、新しい上層部の連中が気味の悪いことを言っているが、ここを動く必要はないだろう」

「まあな。一階なら資料室にも近いし、上はなんとなく空気が悪そうだし」

レオンは、天井にたゆたう煙を見ながらつぶやいた。

「そういうことだ。とにかく嫌がらせをする人間が減つたぶんだけ、我々の仕事もやりやすくなるだろうな。謹慎はあつたが、あながち失敗とはいえない。だから、たぶんとつけたのだ。わかつたか、レオン」

バルラムの言葉を、レオンはうわの空で聞いていた。グードたちは、フィルスやドワーフ族だけではなく、国全体の掃除をしてくれたのだ。自分よりはるかに先のことを考えている。

未来を見透かして動くには、まだまだ経験が足りないらしい。

完敗だ、とレオンはつぶやいて天井を見た。斬りあつたとき以上に、歴然とした差が存在している。読みが当たっていたとしても、こちらは父親の政治力を使おうとした。

感謝はすまい。グードも迷惑がるだろう。借りが一つできた、そう思うことにした。

ふと、頭をかすめるものがあつた。今回の任務の、本当の依頼者がわかつた気がした。

今回の事件でなにひとつ損をせず、それどころか格段に影響力を増している官庁があつた。

国全体の掃除にかこつけて、元老院と枢密院の弱みを握り、人事権を行使して官庁への発言力を浸透させ、なおかつ新しい鉷山から

の収入さえも確保した存在があった。

「真の依頼者は、執政官府ではないのか。」

司法省はただの飾りで、執政官府から指令が出されたのかもしれない。内務省もそうかもしれない。贖金と幻惑草の事件を知っているながら、わざと不介入を決め込むことで黒幕たちを油断させつつ、こちらとグールドたちを操ったのではないのか。

事件を隠密に処理することで、各省庁と議員たちの弱みを確実に握ったのではないのか。

三十日間の謹慎も、かたちを変えた慰労休暇ではないのか。

あるいは証拠を完全に消すための、時間稼ぎではないのか。

「なあ、親父。今回の真の依頼者は、もしかすると」

言うな、とレオンの視線をさえぎるように、バルラムの手がかざされた。肉厚の手に覆われる前の顔に、一瞬だけ影が差したように見えた。あるいは、この部屋に入ってきたときからの表情からして、とっくに見抜いていたのかもしれない。

「成功した謀略は、決して表には出てこない。それに、世の中には知らないほうがいいこともある。あちらが利用したと思っているのであれば、こちらに借りを作ったことになるだろう。いざというときに、最大限活用してやるさ」

「世界は星空のように、きれいごとばかりでは回っていかないってわけか」

バルラムは重々しくうなずいた。

「人間の視界にも知性にも限度がある。真つすぐよりも多少ゆがめて見たほうが、かえって世界全体をとらえることができるかもしれないぞ。ちよつと、水晶の中をのぞきこむように」

「数学好きの親父のことだ、理性こそ絶対かと思っていたがな」

「それはない。もしそうであるなら、逆説など存在できるわけがない。思考が完全なものだとすれば、流れる川の水はよんで腐るし、走り回る鶏は絶対に捕まえられない。だが、実際には水車小屋では今も小麦が挽かれ、お前の鶏料理は年々上達してきている」

たしかに、とレオンはうなずいた。

今回の事件は、執政官府の一人勝ちだろう。とはいえ、まだまだ元老院も枢密院も支配をされるほどには弱っていない。いびつにねじれていた政府機構が、少しだけ元に戻したようなものだ。

「今回は知力に頼りすぎたな、レオン。武力で勝てなかった引け目が、奇策という手段をとらせたのだろう。だから詭弁で返された。グードがこちら側の人間だったからよかったようなものの、決して誉められたものではないぞ。これからは心して活動しろ」

「とにかく今回の件で、誠実さのある謀略という意味が嫌というほどわかったよ、親父」

「わかればいい。さてと、それじゃあ行こうかレオン」

バルラムは立ち上がって、ゆるめのローブをはおった。連絡は済んだはずなのに、表情はまだ苦いままだった。というよりも、酸味まで加わっているようにも見える。

「ああ、そういえば母さんと一緒に食事に行く約束だったな。ひさびさの豪華な夕食だろうに、なんでさつきから苦い顔をしているんだ、親父？」

「外での食事は中止だ。お前は一度官舎に戻って、私服で我が家に来い」

「どうして？ 約束が違うじゃないか」

「それはこっちが言いたいことだ。お前が頑張りすぎたのがいけないのだ。予想外の行動をしておっからに」

「ちゃんと説明してくれよ。褒めたと思えばけなしたりして」

バルラムの太い指が、顔の前に振り出された。

「言い渡した任務は、贖金の調査をするだけだったはずだ。それなのに、銅山まで手に入れおっ。おかげで相場は大混乱になって、結局外食する金を儲けそくなってしまっただろうが。だからお前は、実家に帰って母さんの手料理を食べ尽くす義務がある」

レオンの頭の中に、一抱えもある大鍋が浮かんだ。

「無理を言っなよ。だいたい相場を張ったのはそっちの勝手だろう。」

それに敵地での行動を決めるのは隊長の権限だし、前もって勝手に動くって言ったあつたはず」

負けじと言い返そうとするレオンの肩に、分厚い手のひらが置かれた。甘い葉巻の残り香が鼻をくすぐる。

「愛する息子が久しぶりに帰ってきてくるといので、母さんは朝から大張り切りでな。大鍋一杯の煮込み料理を作っている。とても、わたし一人で食べきれるものではない」

そう言うと、バルラムは初めてしてやったりといった感じの笑顔を見せた。しわがなく、血色のいい丸顔が、まるで子供のように輝いている。

「長い謹慎のあとに、これまた長い食休みをさせる気かい？」

「お前は今回、なにを学んだのだ。人が状況を読み間違えるのは、ものごとを表面でしかとらえていないからだ。母さんの手料理の場合、分子だけではなく分母まで考慮すれば、おのずと違った結論が導き出される」

レオンは抗弁を止めた。

黒く柔らかく光る瞳は、謹慎しているみんなを呼べ、と語っていた。いまだ結果を知らされずに、所在なさに部屋にいるみんなを、とくにジェーガンは、少年との約束を果たせずに、悶々としたときを過ごしているに違いない。

さっそく呼びに行こう、とレオンは思った。マークもジェーガンもセラも、みんな暇を持って余していることだろう。大鍋を囲んで、いきさつを話してやるとしよう。

それなら料理も全て食べきれるに違いない。もし、余ったのなら、マークに持たせればいい。ピグという居候が増えて、食費が増えたところぼしていたことだ。

そうだ、そうしよう。

肩にバルラムの手のぬくもりを感じつつ、レオンはひとりごちた。

(完)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9494g/>

---

水晶のむこうがわ - 赤銅がもたらすもの -

2010年10月8日15時00分発行